

ライヒ選集

THE ORANUR EXPERIMENT
最初のレポート（1947年-1951年）

ウィルヘルム・ライヒ博士著

published by

ウィルヘルム・ライヒ財団

Orgonon, Rangeley, Maine, U. S. A.

著作権、1951、オルゴン研究所、Orgonon、メイン州。

出版者から許可を得て書く以外評論家による一部の要約と引用以外、は、どんな複写形式でも米国で、この本を印刷する全ての権利は他にない。

ウィルヘルム・ライヒ博士による最初のレポート（1947---1951）

『ORANUR EXPEXIMJLNT は、1951年10月、オーゴン・エネルギー速報 pp. 185-344 から再版された、。

内容の重要性と広がり、は、別々の本としての出版を必要にした。

速報形式の ORANUR 実験は、現在の加入者だけが利用できる。

Price, 価格（4.00 ドル）

THE WORK AND KNOWLEDGE THEY ARE LOVE,
WELL-SPRINGS OF OUR LIFE.
SHOULD ALSO GOVERN IT.

仕事と知識は、愛であり

我々の人生の源泉であり、

また、それを支配しなければなりません。

オーゴン学会出版局によって印刷され配布された

ウィルヘルム・ライヒ財団

オルゴノン Rangeley, Maine（私書箱）Box 153,

目次

1 序説と概説

2 オーゴン・エネルギー視覚的機能の統合

青みがかった色

空中の「粒子」

3. 宇宙オーゴン・エネルギーの GEIGER-MOLLER 効果

オーゴンエネルギーの回転反応の発見

4. オーゴン・エネルギーは、真空管(VACOR をチャージした

高い cpm 出力の原因。

非生命体のシステムの中のオーゴン・エネルギー脈。

ラジオの中の生きているアンテナ-グリッドワイヤー。

ガス・イオンなし Orgonotic なガイガー・アクション。

オルゴンエネルギー・フィールドの測定方法。

5. 原子力エネルギー (NR) 対オーゴン・エネルギー (OR) -----ORANUR

Oranur プロジェクトの基本計画序説。

.出来事の状況

オーゴン・エネルギーは、怒り狂う(DOR)

「Oranur 病気」。

特有な生物学的反応

Oranur の大気の連鎖反応。

マウスへの Oranur の現れ。

病気にかかった労働者の治療と避難。

1 人の医者 of 生命の危機

Oranur 実験の中断。

X線効果と Oranur 病気。

1951 年 4 月 12 日- 4 月 30 日の記録から。

6. 展望

率直な議論。

APPENDIX.付録

Oranur 実験の技術的過程。

Oranur.に関する情報の歴史の記録

オーゴン・エネルギーの研究の参考文献。

1. イントロダクションと概説

この本は、ORANUR 実験 (No.XXX (1)) についての最初のレポートです。

1950 年 12 月、この実験のレイアウトは、最初オーゴン・エネルギー非常事態会報で発表された。

このレポートは、事前の予備的なものです；

結果は主題と概念の更なる仕上げへと変化可能です。

しかしこの時点で、獲得された基本的考え方で、出版を正当化するのに十分に見える。

平和な状況下では、結果を発表するのに、非常に慎重であることを私は好む。

しかし、原子力エネルギー (NR) のオーゴン・エネルギー (OR) への影響を避けられない現在の社会的状況の緊急性は、これらの最初の結果の公表をした。

本来の Oranur experinient の最初の一続きの実験は、1950 年 12 月と 1951 年 5 月の中旬に、達成された。

このレポートの最初の 3 つは、純粋に自然の物理的な側面をテーマとしている；

これらは、OR エネルギーの、本来の Oranur 実験の基本理解にとって必須である物理的研究またはエネルギー現象だけを扱う。

OR エネルギーのガイガー・ミュラー反応と、高度に真空の中での OR 現象に関する 2 つの作品は、1942 年から 1950 年までの 4 年の実験期間から成る。

これらの 2 つのレポートに含まれる結果はシステムティックでない多くの付帯的な観察の後にできた、そして、SAPA bions (1939 年) の、OR エネルギーの発見の時期から、1947 年の初夏の大気中の OR エネルギーの物理的な量子力学的特性の組織的調査までの間に実験が、始まった。

これらの結果は、国際性経済とオーゴン研究ジャーナルと、そして、とオーゴン・エネルギー速報の中に、不規則な間隔で短い通信で発表された。

オルゴンエネルギーの物理的機能は、185 ページ*以前の内容と非常に密接に関係する。この ORANUR 実験の記録はオーゴン・エネルギー速報、第 3 巻、No.4、pp. 185-344 に載せたものを*ページ番号を含めて正確に、ここで再版したものである。

186

バイオエネルギー的オルゴン機能の特性。

実は、生きた有機体の中の OR エネルギーのバイオエネルギー的な機能は、大気圏の中と、宇宙の中の OR エネルギー機能の、単に詳細なバリエーションであるので、これらを分離することは、全く不可能で許されない。

1939 年に原子を最初に分割することに成功した 2、3 ヶ月前に、放射する bions に OR エネルギーが発見された。

自然研究の2つの成果は、最初は、互いに明瞭な関係もなしに平行に走っていた。
まもなく1940年12月の大気のORエネルギーの発見は原子物理学者にORの物理的側面の研究責任がかかってきた。

いくつかの試みは、宇宙エネルギーに対する責任を、豊かな資産がある権威あるアメリカの研究所に移した。

まず第一に、完全に核物理学の非常に基礎的部分の基本的変化なしにオルゴンの発見を引き継ぐには、準備されてないのを、私は知らねばならなかった。

オルゴンエネルギーそれ自体から、研究された。

1951のOranur実験の間の出来事は、初めて明白に読者にORとNR研究には別々の論理があることを納得させる。

物理学と天体物理学の基本的な疑問が生まれる。

物質の生成後の二次的エネルギーとしての、核エネルギーと、物質以前の初源的な、質量のない宇宙エネルギーとしての、ORエネルギーとの鋭い区別が、必要な手順となった。

私はそれに続くのを大きく渋ったにもかかわらず、後の発展がそれほど明らかになり、他のいかなるコースも可能ではなかった。

Oranur実験は、上に言及した区別なしではおそらく進むことができなかった。

オルゴンエネルギーとNRエネルギーは、自然の矛盾する機能だ。

これは、Oranur実験の最初の実験によって、完全に確かめられた。

簡潔にそれを要約する。:

原子力エネルギーは、初源的オーゴン・エネルギーから二次的に現れるバリエーションだ。

NRとORは、互いに「反発する」。

ORとNRの間の劇的な戦いの物語は、このレポートに部分的に関係する。

核エネルギーに関係する領域に適用される法則では宇宙的初源的機能であるORエネルギーは理解することができない。

初源的オルゴンエネルギーの機能法則は、核エネルギーの理論の、「不確定性」の原理の中での物質波または粒子の波の霧のような仮説や「ニュートリノ粒子」のような必要仮説とそれに類似した矛盾する理論では、その現象が不明確になる。

187

これは基礎物理学の長く複雑な問題で、その未発達段階で止めておいてください。

読者は、この点で困惑してはなりません。

しかし、それは、漠然としているが、自然の機能法則と核の理論が関係することを示すために言及されなければならなかった。

私はこの領域をより深く知りたいと思う読者を、オーゴン・エネルギー速報の中の、エーテル、神と悪魔、そして、(オーゴン学会(No.2)の年報)の中の「Orgonomic機能主義」の本に、任せなければなりません。

「低いところから高いところへむかう **Orgonomic** ポテンシャル」(「一般機能原則 (CFP) 思考とその他のバリエーション」) のように「機能的な方法の概念は過去 18 年にわたって賢い真剣な、**orgonomy** の研究者がこのレポートを発展させるのに十分な程度に念入りに作られた。

本来の **Oranur** 実験は (cf. p. 267.) 非常に実際的な質問から始まる :

OR エネルギーは、核エネルギーに影響することができるか？

生命システムへの核の破壊に対する特効薬は、**OR** エネルギーを見つけることができるか？
初めは予期されたより、事実の結果は、非常に複雑だった。

Oranur 実験の劇的な、致命的な危険な出来事は、シンプルでポジティブだった最終結果を暗いものにするかもしれない。

オルゴンエネルギーは核の病気、さらにおそらく免疫機能に関係する強力な機能を含む。
最初の否定的結果が明確にポジティブな方向に変わり始める境界線上のみに、このレポートは焦点をあてている。

この明確な方針は、このレポートの終わりまで追求できなかった。

、**NR** 効果に対する精巧な、根拠の十分な特効薬が見つかるかもしれないものは何でも試すために一連の第二の **Oranur** 実験を予定している。

激烈な性質に直面して事実の証拠の問題に関して単に考えただけのこのレポートの読者に、
事実の証拠の問題は口先だけでは審査できないと言うことは、厚かましい態度ではない。

どんな不合理な「批評家」も少なくとも必須条件は、彼の頭を **Oranur** での物質状態に目を向けることだ。

ウィルヘルム・ライヒ。

2.オルゴンエネルギーの機能の視覚的統合

概略

アプローチの方法。

客観的で主観的な証拠の調整。

全く心理的な研究の失敗。

初源的なオルゴンエネルギーの、霧が出てくる印象と、写真での確認。

自然の中と、プレートの青。

OR エネルギーの集中と分布。

稲妻。

稲光。

オルゴンルーム中での出現と変化。

オルゴンルーム中での稲妻。

バイオレットの、光を示す。

原子物理学において別々の「粒子」としてメカニカルにゆがめて伝えられているオルゴンエネルギーの1つ下層の異なる存在。

空気を漂う発光。

宇宙線-反転の「electroscopic な解釈

電気 energy-a は、OR エネルギーのマイナーな機能。

オルゴンエネルギー写真。

オルゴンエネルギーユニットの性質。

出生と死。

概要。

長年にわたって宇宙オーゴン・エネルギーで実際に働いた人々は、その現れた機能の広範囲の統一的理解の不足を強く感じた。

多数の観察は十年以上集められた、しかし、これらの観察の統合はいまだ完全ではなかった。

organomic な調査の慎重な研究者は、我々のプレゼンテーションの進展が非常にゆっくりである理由を理解した：

我々が扱っているエネルギーは、古典的物理学における電気機能とメカニカルなエネルギー理解とは共通部分がほとんどない。

人は、新しい宇宙オーゴン（OR）エネルギーの完全理解と相違の理論構造を構築することを急ぐのに躊躇する。

しかしいろいろな現象を統合するかのように見えるオーゴン・エネルギーの機能を試すこ

とは、必要かもしれない。

我々が不完全な理解のために忍び込む間違いを、訂正する準備ができている限り、我々が間違っても、それは少しも重要ではない。

間違いさえ新しい経路を示すかもしれない。

189

自然の中と、写真版での青

最初に視覚で確かめられるオーゴン現象の説明可能な統合へのアプローチ方法を考えよう。

すなわち、基本的に2つ観察方法がある、(1)は写真プレートです。それは客観的です。;

そして、(2)は直接、すなわち視覚的観察による。それは主観的である。

ここでは、客観的検査と主観的方法は、明らかに結合される。

視覚的なオルゴン現象の統合は、主に物理的、客観的観察と、心理的、主観的な観察との間で合意に至らなければならない。

視覚の OR 観察についての多くのレポートはオーゴン学会によって受け取られた。そして、その全てに1つの共通のものがあつた：

彼らは、視覚的印象の物理的、客観的な再生の基礎が不足し、したがって、疑わしかった。

これらは、視覚の現象の記述が大いに異なっていた；

これは、個々の知覚の能力の大きい差による。

現在の危険は、ここにあります：

我々がオルゴンエネルギー機能の物理的な観察から心理的な記述までを、ただ許すならば、理論上の混沌はすぐに起こるでしょう。

それは、ちょうど主観的な観察だけに頼るために理解されないのと同じように、質的な観察さえしない自然機能の単なる量的測定もまた無駄になります。

すべての視覚的印象を、物理的な再生と、すでに知られている理論上の統合で対応させて確かめようとするのは、したがって、賢明です。

これは、**orgonotic** な温度差 (T_0-T) で完全にうまくいった；

OR エネルギー・アキュムレーターの壁に感ずる熱を、量的に温度計で測った。

同じ手順の原則は、また、視覚機能の領域に適用されなければならない。

これらの視覚機能の一部において、物理的な観察と心理的なものの調整は、すでに完成されている：

1、完全に遮光性の、金属で覆われた部屋に、混乱していないオブザーバーの目に青が（黒くなく、灰色がかつた青が）現れる。

これは、最も信頼性が保証されている心理的な観察のうちの1つです。

この観察の物理的な類似を確かめ、支持する、写真プレートまたはフィルムを、オーゴンを非常に満たした部屋、またはオーゴン・アキュムレーターに、1日または1週間にわたってそのままにしておいた。乳剤は明らかに曇る。

「霧」のパターンは、我々が暗室で知覚したものと類似している。それは、波形の、うねるパターンを持つ。

我々が暗室で見る運動を除いて、主観的な知覚と客観的な再生について、「霧のかかった」宇宙オーゴン・エネルギーの性質に関して、同意可能となる。

2 我々は、青い灰色から濃い紫とバイオレットまで異なる青の濃さをもつ **organotic** な性質の **lumination** を見る。

190

視覚のオーゴン・エネルギー機能

理論的に自然の中で、いろいろな青い現象を取り出して **lumination** の共通機能原則とするなら、我々が観測から、理論上の原則を得たことになる。

オーゴン・エネルギーの自然色を確立するとき、青い灰色から青いバイオレットまで異なっているが、青であるという原則は、十分確定される。

まとめよう：

およそ 150 マイルの高度で、空は濃い「空色」だ。

パイロットの成層圏で観察によれば、地球の激しい青いオーゴン膜を越えたスペースは黒い。そして、完全に **lumination** が不足する。

空気の青は、地球の表面に近づくにしたがって、強度と **変化** において淡い色の方に、失われる。

他方、我々が空気の高い層をのぼると、青は純度と強度が増加する。

また、これまでに高い山を登った誰にも有名なように、「紫外線」は増加する。

高い高度で青がより激しい理由に関する問題は、未解決のままだ。

観察と実験と理論上の抽象が自発的に答えを生むまで、我々は根気よく待たなければならない。

雷雲は、また濃い青色です。

雲は **organotically** に非常に満たされた水蒸気なので、大気のオーゴン・エネルギーで雲の青はずっと激しく見える。

雷雲から放出される稲妻は、そのような雲に発生する莫大な **チャージ** の証人だ。

全体に広範囲にひろがる雲は、飛んで、大きな濃縮を示さず、通常音を出さず、めったに雷音を立てたり発光を発展させない。

さらに、しばしば青は、オーロラの色です。

この点から見ていくにはオーロラは、あまりに複雑な機能だ。

海はまた青く、そして、深い山の湖もそうだ。

晴れた、陽がさんさんと降り注ぐ日に、山は青い「かすみ」によって囲まれる；

また高い山の青は、どんなかすみがなくても、現れる。

雨の直前に、山の青は、消える；

これらは、すぐ近くでは、はっきりした連続的な天気の場合のように、見えなくなる。オーゴン・エネルギーが雷雲をつくることで高い高度に引き込むと仮定するならば、雨の始まるの前の地球表面の近くの青の消滅は理解可能になる。

これは、また、オーゴン・アキュムレーターの温度差 (To-T) とテレスコープでの急速な消滅が一致する。

(参照。太陽黒点と現実のハリケーンは、またダークブルーだ。

ガン BIOPATHY, 1945, pp. 97-111。)

We should G

我々は、そうしなければなりません

191

たとえ我々が太陽黒点の「青」が視覚的印象だけであると一部の科学者が言ったとしても、この明らかに確認される青を無視しないでください。

葉の緑、日没の若干の赤み、子供の顔の微笑、その他と、完全に暗い金属オーゴン・エネルギー室の中の青っぽい光の印象。これらは、完全に宇宙 OR エネルギーの一般的な青い特徴に一致する。

大気の **organomic** な異なる多様な機能と複合体は、また、必然的に、これら全てを支配する若干の共通機能原則に従う。

空と暗い金属室で OR エネルギーを観察する際に、我々が OR の部屋の外と、内で見ることが互いに関連するかもしれない方法に関する問題に、人はとまどう

ゆっくりこの関係の可能な解決まで進もう。

通常、稲妻は、大気圏で正と負の電気チャージの同等化で、説明する。

まだ、誰も電気が実際にあることを確認していない。

Orgonomy は、電気と磁気がプリミティブな宇宙 OR エネルギーから派生した様々な機能の一つと仮定する。

しかし、すでに述べた古典的なアプローチの中の矛盾が、多くの状況にある：

イオンのない空気は何億ボルトもの稲妻の閃光が突然現れることがどのようにして可能なのか？

このパズルの答えは、空気はイオンから自由だが、大気が OR エネルギーでいっぱいということだ。

クリアな、穏やかな空気では、OR エネルギーは、空の全部の領域にわたって、ほぼ均一に分布する。

雷雨が発達する時オルゴンエネルギーは、クリアなスペースから引きよせられて、将来雲が現れる場所に集中する。

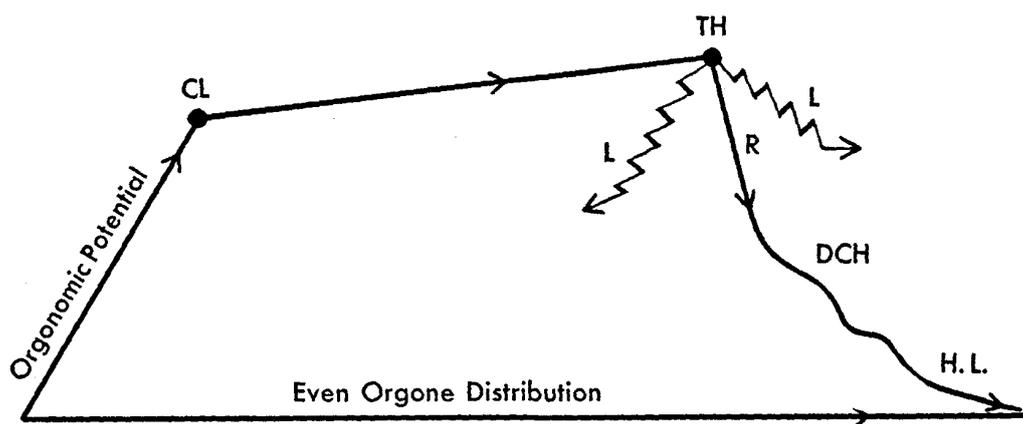
この過程は、いわゆる **organomic** なポテンシャルの流れによって、すなわちより低いものから高いものへ、または、弱いものから強いものへチャージする初源的エネルギーの流れがうまれる。

雲の容量特が定のレベルに達すると、レベル以上に蓄えられたオルゴンエネルギーの量は水滴を集め、雨になり、そして、稲妻が起こる。

言い換えると：OR エネルギーは、これによって再び水蒸気と分離し、普通の分布状態に戻る。

すなわち、この「稲妻」は放出によって起こる。稲妻はこのように非常に小さい地域に集中した莫大な OR エネルギーの総量の放出を表す。

-192



- CL Cloud formation through Orgonomic Potential
- TH Thundercloud
- L.L. Lightnings
- R Rain
- DCH Separation of Energy and Water: Discharge
- H.L. Heat Lightning

Fig. 1. Charge and Discharge in Thunderstorm

稲妻のこの高いポテンシャルの放出で、再び普通のレベルになります。

視覚のオーゴン・エネルギー機能

Orgonomic ポテンシャルを通して曇の形成。

図 1。

その雷雨の時間と場所で OR エネルギーの同等化のチャージと、放出の運動が振動の形で生まれる。

長く激しい雷雨と雨の後、大気の中に雲もなく、完全に晴れた空で、よく、いわゆる稲光または「幕電光」が始まる時がある。

これらの稲光は、雷を伴わない。

「幕」稲妻は、空の広い領域で起こる。

それは、明らかに振動性の性質をもつ。

継続的に、それも近隣の広い地域に **luminations** を誘発する。

稲光のフラッシュの慎重な観察から、近隣の最も近い地域が連続して **lumination** で興奮することが、よくある。

大部分は非常に暖かい、夏の日の方おそく、事前の雷雨なしに稲光が起こる。

稲光は、大気のオーゴン・エネルギーの均衡化されていない集中の放出で、特別な種類の同等化で **luminating** すると仮定できると考えます。

大気の中の若干の地域は、他より集中するようになる。

これが今修正されているのです。

稲光は、また青っぽい、緑がかった色です。

多くの **orgonotic** な **luminations** の現象（例えば北極光と聖エルモの火）の美しさは感情を震わせませす。

オーゴンユニットの出生と死

193

我々は、上のような、独特なオルゴンエネルギーの機能をみた：

均一の分布から非常に集中された状態への変化は、再び、非常に集中されたエネルギーからほとんど平均して水平な分布状態に戻る。

同じ現象が、金属の暗いオルゴンルームで観察することができる。

まず最初に、灰色がかった、青っぽい「蒸気」または「霧」の遅い動きがあり、そして、波打って、あちこちに、ゆっくり集中して、再びゆっくりと散らばる。

長く **OR** エネルギー室に座ると大きい変化が起きる。

我々は、**OR** ルームに多くの人々を座らせることで、または電氣的なコイル・システムで単純に火花を発生させると **OR** エネルギーが励起し、この変化スピードを上げることができる。

それから、**OR** エネルギーの均等な分布が **bluishly** な **luminating** する「鮮明な糸の、長い線に取り替わることを知ることができる。」集中はますます増加する；

とても長く待つか、とても強く **OR** エネルギーを起こすと、白っぽい、急速な、ちいさな稲妻が現れ、四方八方に部屋を横切る。

武装した一部の人々は、この現象に不安に反応する。

ほかの **orgonotic** システムか、小さな電氣的な放出で、**OR** エネルギーを興奮させると、本当に大気中の稲妻の生成との類似は一層明らかになる。そして、均等な分布は高い集中に取り替わる。

この集中は、長く続くことができず、稲妻と連続的な稲光が起こるちょうどその時、再び周囲の環境またはエネルギーの海に向けて放射されなければならない。

（弱いものから強いシステムへいくという確かな原則によって、均一に分布した低いエネルギーから、高く **orgonomic** ポテンシャルをチャージした方への遅い集中の動きは、閃光の形で放出され、まだ未定義の「容量レベル」である低いポテンシャルに再び戻って均衡

を再建する、そして、「-高いところから低いところへいくメカニカルなポテンシャルの原則に従ってポテンシャルの同等化がおきる、この **orgonotic** な代謝は、大気のオルゴンエネルギー機能は生命有機体そのままに、目でみて識別できる。

オルゴンエネルギー代謝は、生命と非生命の領域に共通である。

この法則は、深い重要性を持つ。

しばしば長く、暗室現象を観察すると、さらに別の機能に衝撃をうける：

より興奮した、**OR** エネルギーは暗室でチラチラし、紫か深いすみれ色の点が現れ、異なる場所に消える斑点が、たくさん現れる。

もっと長く待つと（非常にチャージされた空気に耐えることができるならば）、数えきれない小さな、深いバイオレット色の点の飛行が、現れ、至る所で消える。

この点で金属の天井にそって見ることは重要です。

194

それは、通常の壁より明るく見える。

背景は、ゆっくり動く青っぽい灰色でさえある。

この背景に対して、小さい明るい何百万もの点が、現れては、消える。

包括的にこれらの機能を示すことは、むしろ難しい。

人は、実際に繰り返しこれらを見なければならない。

私は長年、これらを提示することを躊躇してきた。

しかし、私が前に言ったように、我々がこれらの機能を理解することで行き詰まりを突破しなければならず、我々が陥るかもしれないどんな錯誤も改良するために、あらかじめ提示しなければならない。

仮の事前の仮定が、これです：

ほかの **orgonotic** なシステムによって、または電氣的な放出によって、強く励起したとき、オーゴン・エネルギーは多くの異なる種類に変化する。

それは、物質の多様な「粒子」ではなく、全く同一のエネルギーの低い状態と、異なる存在ではない。

これらの異なる状態は、低い状態から現れ、最初の霧のような均等な分布状態に戻る。

原子物理学において観察され、写真を撮られた非常に多い異なる種類の「粒子」は、たぶん全く同一の基本的で、初源的な宇宙エネルギーの単に凍った状態だけのように見えます。

観察されて、原子物理学において写真を撮られた多数の「粒子」が異なる種類の全く同一の基本的、原始の宇宙エネルギーの単に凍った状態だけであることは、最適に見えます。

我々はまた、物質の前と、そして、物質の後の、宇宙エネルギーを明確に区別しなければなりません。

前者は、初源の、質量のないオーゴン・エネルギーに、観測可能な形で見られる；

後者は、有名な中性子、中間子その他の多様な「粒子」による放射線、アルファ、ベータとガンマ線に見られる。

すべては、依然として理解されないままです。

しかし、思考と研究方法の混乱を避けようとするならば、物質の前後の宇宙エネルギーの鋭い区別は最高に重要です。

生命物質に対する影響も、異なることは、異なる前後関係で示される。

初源のエネルギーとの対比で、二番目の「物質になった後の」放射は、生命に危険です。

この違いを記述するために精神的な比喩を使うことは、許されるかもしれない。

二次放射線-X線、ガンマ線、中性子、その他の物質は、いわば、「ひどく」「悪意があり」崩壊することから脱出しようとして、「息苦しく」なっている。;

刑務所から抜け出している野生の動物のようだ (参照。p. 267ff.)。

他方、初源のオーゴン・エネルギーは、生命肯定で「穏やか」で「フィット」する。

もう一つの比喩は、二次的な放射は憎しみに満ち、自由な動きへのフラストレーションからくるサディズムにたとえられる。

自由に動く生物エネルギーは、柔らかく、穏やかで、生産的で、ある。

もどろろ :

全体的な見解は、普遍的な宇宙オーゴン・エネルギーの低い状態から、集中されたオーゴン・エネルギーユニットに立って、ルミネートしつつ、再び無数の個の低い状態に戻ることを示すようだ。

これらは、再びこれらの基質とユニットから分離します。

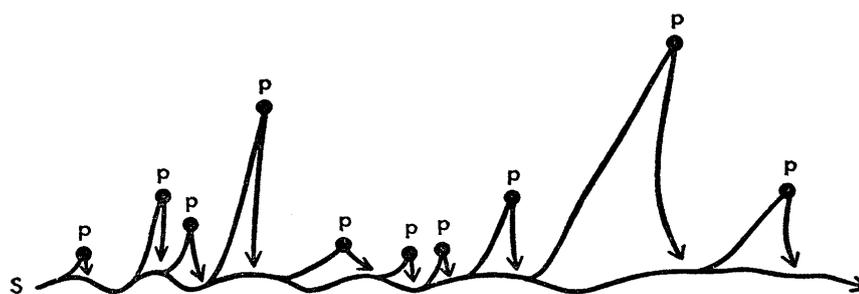
空中の「粒子」

195

この機能を激しい風の影響を受けて波打つ海の波に、比較することができる。そして、白い、とがった頂点が生じる。

海の波は起こり、それ自身のやり方で、各々生き、後ろに退き、再び共通の基底層に消える。

このように、各々の単位は、異なった個性と、出生、個別存在のピークと、低下と死を示す。



S substratum of primordial cosmic energy
P points or peaks, luminating

Fig. 2. Birth and Death of Orgone Units

図 2

S 初源の宇宙エネルギーの下層

P、ピーク点、または発光、

Orgone Units の出生と死、

一般的な宇宙エネルギーの下層から起きて、戻る、個々のオーゴン・エネルギーユニットの低下と死をあらわしている。

銀河、惑星、有機体、雲には、原始の宇宙エネルギーの上昇と下降の共通の機能原理がある。

ガイガー-マラー・カウンターは、集中したオーゴン・エネルギーユニットのピークのインパルスの作動の現れを、正確に表す。そして、大気のオーゴン・エネルギーのコンディションで、異なる時間単位ごとの総計がことなる。

「宇宙オーゴン・エネルギーのガイガー-マラー影響」(p. 201ff.) の論文は、これらオーゴン・エネルギー機能の物理的な発現を述べた。

空中の中「粒子」の **luminating** は、4つの方法で大気圏で観察することができる。

1.焦点があっていない目で、ちょっと遠い距離の空を見ると、**luminating** する点が浮き、四方八方にゆっくり動くのを見る。

2.暗い部屋の上の部分を見ることによって。

197

宇宙線が大気の **OR** エネルギー機能ならば、宇宙から、これらが我々に降り注ぐことはなく、(どこから??)、惑星の **OR** エネルギー膜の肛門のような部分からのものといえましょう。これらは、最も高いところでは、濃度は高くなく、低い高度では高い、以後我々は、**electroscopic** な放出の解釈を逆にしなければならない：

高い高度での速い放出は、宇宙エネルギーとしてのオレゴンエネルギーの低い集中を示しており、オルゴンエネルギーの強い集中領域の問題である原子物理学のものではない。

大気エネルギーの諸機能は電気法則に反しており、

宇宙線を慎重に正確に測定し観察をチェックすることは、賢明で、

これらの宇宙線を、オーゴン物理学の結果と比較すると、天体周辺の最も濃厚な宇宙エネルギーの海の機能とは違うことがわかる。

マイクロボルト・または **electronvolts** 単位での電気測定は、実際のエネルギーの最小量を明かにするだけなので、慎重に仕事をしなければなりません。

静電単位 (300 ボルト)、と、マイクロボルトは宇宙エネルギーの領域の適当な測定単位ではない。

電気エネルギーは、宇宙エネルギーのたんなるマイナーな、小さな顕れだ。

皮膚表面のチャージは検電器で測ると、10 から 50 ミリボルトまでだが、実際の **OR** エネル

ギーでいえば、ボルト計での何千ボルトにも相当する。

この技術的な詳細は、最高に重要だ。

静電気の古い機械は、宇宙エネルギーの領域でその価値を復活する。

.「ファラデーポテンシャルはワイヤーの中を磁場が動くことで作り出される第二機能です。」

我々は、ゆっくりこれらの変化に慣れる。

我々は相当なエネルギー量を扱っており、それは 110 ボルト、あるいは、5000 ボルトのテンションさえ取るに足りならないものになる。

これまで、我々の視覚機能が見たものを理解するために造った理論は、オルゴンルームの暗闇で簡単に観測できる明るい点と、光の線と、確実に関係する。

この理論を、客観的、物理的な観察で強化できるか？

1949 年 7 月、オーゴン・エネルギーの研究誌の事前の発表記事で、オルゴンエネルギーの光機能の 2 つの写真を発表した。

写真は、ここに再掲載する。

これは、人間の 2 つの手の間の OR エネルギー・フィールドを表す；

これは、興奮したオルゴンエネルギー・フィールドの中を、X線光線が通ることによって生じている。

それは、まるで、手の間に少しむらになった密度の物質が置かれたかのように、感光剤が暗くなる、波形のパターンを示す。

-198

VISUAL ORGONE ENERGY FUNCTIONS

視覚のオーゴン・エネルギー機能

また、指と間でこの先端まで放射状に、進むパターンは、簡単に識別できる。

我々が暗室で「霧がかかり」「波形の」運動として見る重要な特徴は、このX線画像と、一致する。

同じことが、アルコール炎のX線画像でも真実です(参照。写真 1 と 3 (pp. 198a-198b))。

二番目の写真は、オルゴンエネルギー放射が単純な写真プレートに対して影響することを示している



Photo 1. Xray photograph of the excited OR energy field between the palms

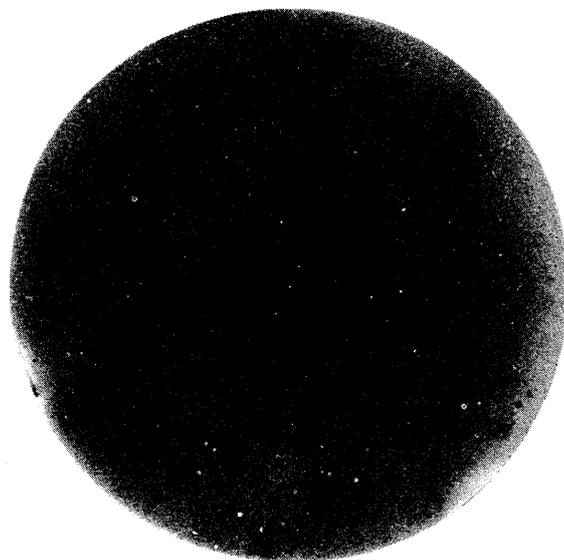


Photo 2. Photographic effect of OR energy from earth bions

写真上。

手のひらの間の興奮したエネルギー・フィールドのX線写真 (『..

写真下

土の bions のオルゴンエネルギーの効果の写真

もとは、古い **bionous** な土の光線でした。(参照前ページ写真下、)。

完全な暗闇でプレートに照射した、2、3日後、1秒間の1/10の光は、プレートに影響を与えた。

今までに、この方法だけが、**OR** エネルギー効果を、写真で見えるようにした。

この方法はX線を使うのとは異なる。これは、オーゴン・エネルギーが感光剤に影響するのに、電磁波は、写真プレートに影響しないのと同じだ。

影響を受けた領域は、白いコピー・プリントの中で黒くなる；

最初、**OR** エネルギーが影響したところで、普通の光は影響しない；

また、**OR** フィールドは、X線の侵入を妨げる。

この反応は、光で生じる反応と正確に正反対だ。

このように **OR** エネルギーと光は写真プレートで正反対に反応する。

完全に暗い部屋に光を見られるなら、光とオーゴン・エネルギーの間に密接な関係が、存在しなければならない。

光はオルゴンエネルギーと関連して現在の大きな問題です。

OR エネルギーの海が全ての空間を満たし、光に関連する振動のキャリアー-----媒介と仮定される。

しかし、関係は非常に近いものにみえる。

OR エネルギーユニットが発達し、**OR** 海の中に削減して沈むとき、光を発する、

全ての期間の間、ピークは最も強く、鋭く、上り坂の終わりは最も弱い。

1 写真 2 (198a ページ) に写っている点を慎重に調査すると、とても面白いデテールが現れる。大部分の点は黒い。普通の光の効果の白いところがほとんどない。

2. すべての1つ1つの黒い点はシャープな「中心、または核があり」、周辺は、中心より鋭くなく、「フィールド」がある

3. 一つ一つの点の大きさと強度は、大きく異なっている。

4. 白い点は、鋭い輪郭で区切られた中心をみせる。

すぐにこれらの全てのデテールを解釈しないことは、賢明です。

現在大きな間違いをすると、正しい説明を何十年も危うくする。

198a

198b

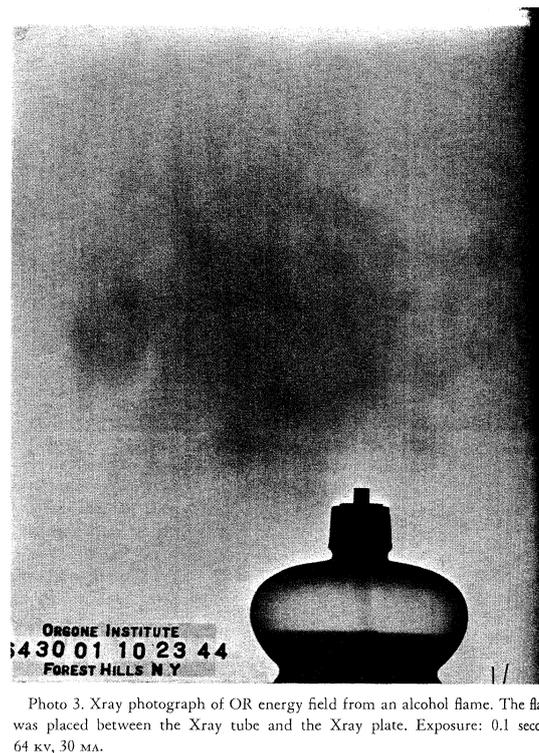


Photo 3. Xray photograph of OR energy field from an alcohol flame. The flask was placed between the Xray tube and the Xray plate. Exposure: 0.1 second, 64 kv, 30 ma.

N 1 写真 3。

OR energy フィールドの X 線写真は、アルコールの炎を凍らせた。果物のフランを、X 線の網状の薄い膜と X 線プレートの上に置いた。露出 : 0.1 secot 64 xv, 30 ran.

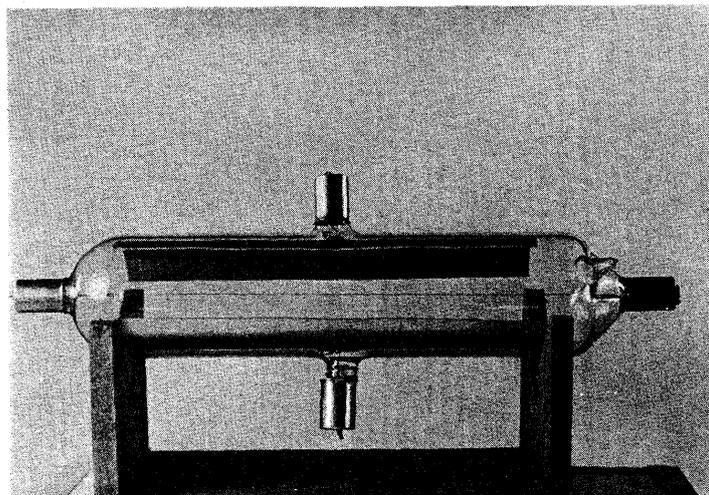


写真 4。

Photo 4. A 3-electrode, 2-plate vacuum tube (cf. Ch. 4)

3 つの電極と、2 つの plate の真空管を用意します
(参照 Ch. 4 1984)



写真 5.

5. ミクロン圧力の真空の中のオルゴンエネルギーのルミネーション

KARLBERGGRAV

チューブ (参照 Ch. 4)

Photo 5. OR energy luminating in an 0.5 micron pressure vacuum tube (cf. Ch. 4)

199

すでに知っているオルゴンエネルギー機能の、確かな特徴を定義することができる：

1. OR エネルギーのユニットは、厳密に同じではない。
2つのユニットは、必ずしも大きさも強度も同じではない。
2. 各々の点の「芯」と「周辺」では、常に前者は後者より激しい。

3. 黒い点のまわりの白いフィールドの領域はオルゴンエネルギーユニットのまわりの Luminating する部分だ。

これは、正確に暗室で目で見えるものだ：

luminating している中心に、もっと小さな強度で luminating する「オーラ」がある。

心理的な観察と物理的観察の整合性は、研究に対して更なる確固とした根拠を築く。

写真の上に見える白黒の点は、宇宙のオルゴンエネルギーの機能を理解するための仮説と一致する。

我々が見るものは、たぶん、ユニットの1つのピークです。

よく出来たユニットのうちの1つを横に切断するなら、ロール T は、ほとんど発光していないフィールドに囲まれているのを簡単に見ることができる。



我々は、この点に注目したい。

更なる研究は、この最初の理論公式を多分拡大するだろう。

これまでの結果をまとめます

1. 我々の惑星システム全体で、原始の下層部分 (宇宙 OR の海) は地球より速く、西から東へうねる様式で特定の方向に動いている。
2. この波打つ下層から、きわめて様々な強度と拡張性をもつ、単一の波動に相当する、鋭

いピークである一つずつ数えきれない OR エネルギーの濃縮が、出ている。

3. OR エネルギー海と単一なオルゴンエネルギーユニットの luminate.

4. 一般的な下層の自然色は、空、原形質、海、bions その他、のブルーグレーか、ブルーグリーンの色です。;

集中したユニットのそれは、濃い紫またはバイオレットです。

他のタイプの OR 運動との対比で、白っぽい青い線の集中が、急速に現れる。

5. 一つ一つ異なったユニットの集中は、OR エネルギー海へのいろいろな方法の刺激のあとに続く:

他の orgonotic なシステムの存在、

電磁的な火花、金属的な障害、そして、一番先に、原子力エネルギー

200

6. 全てのこれらの現象は自然の機能の基本的特徴です。

メカニカルなもの、堅いものとは全く同一でない。

まだ、作業の共通機能 CFP が明らかにあり、全ての異なったユニットを支配する共通の法則がある』バリエーションは非常に様々かもしれない。

一つ一つのユニットには、鋭い「芯」と、鋭くない「周辺がある。」、これはあらゆる、生きている有機体のバイオエネルギー的な構造で、そのうえ、惑星システムと同じだ。

これらは、芯とオルゴンエネルギー的に弱い周辺から成る。

したがって、各々のユニットは、4つの典型的相を経験する。

1 原始のエネルギーの特定量の集中による出生。

2. 更なる集中を通してエネルギー・レベルの上昇:

3. 「成長。」

鋭く薄片になっているピークは、光の点と最も密接に連合した。

4. 低下と死;

ユニットは、下層で再び合併する。

シングルで機能する基本のオルゴンエネルギーユニットで、全ての生命と非生命の自然の共通機能である、出産と死、成長と低下が、このように、すでに**実行された。**

各々のユニットは、独特で、二度とない出来事です。

全てのオーゴン・エネルギーユニットは、共通に機能している法則に従う。

法則的であることと無限のバリエーションは、このように正反対で、相容れないものではない;

これらは、一般に、対になっている自然の共通の機能です。

May,1950

3.

ガイガー・ミュラー・カウンターとコスミックオルゴンエネルギー

~1947~ OUTLINE

宇宙~orgone エネルギー~1947~が概説する The ~seiger-Mu~er ~ect o~

Orgonomic な「逆転した」ポテンシャル。

オーゴン・エネルギーは電磁気またはメカニカルなエネルギーとは異なる。

オルゴンエネルギーの電気への移行。

ガイガー・マラー・カウンターと OR エネルギーに関する誤った仮定。

GM 計数器の中の回転反応またはエネルギーの発見。

生物物理学の現象での全体案内図の重要性。

2つの orgonotic なシステムの相互作用と、Orgonotic な「相互浸入」

OR エネルギーと著しく対照的な電磁エネルギー。

GM 計数器でのオルゴンエネルギーの測定。

OR エネルギーは GM 管をチャージする。

GM 計数器でのオルゴンエネルギー・アクションの範囲。

いわゆる宇宙放射の正しい表現は OR エネルギーである。

GM ガイガー・マラーのカウンターでのオルゴンエネルギーへの反応図。

1939年1月に、私が SAPA bions, でオーゴン放射を発見したとき、その仕事の初期に、解くことのできない若干の問題に直面した。

電気バッテリーは、放射している bions が保存された部屋で動かなくなった。

はさみとピンセットのような鉄でできている器具は、磁化された。

私が暗室に座わるとすぐに、手の腕時計の文字盤のラジウムのなめらかな、安定した白熱は、消え、ゆらめいている鮮明な青っぽい緑に取り替わった。

普通の電磁器具（例えば電流計とボルト計）のどれもが、私が感じ客観的に示すことができる強い放射に、すこしも反応しないことに特別な衝撃をうけた。

蛍光性の硫化亜鉛（ZnS）で、おおわれた紙のディスクはオルゴンエネルギーを吸収して曲がり、青っぽい緑色の強い光を発した。

新鮮な乾いた空気に換気されたとき、硫化亜鉛ディスクのこの反応は消えた。

また、アルゴンでいっぱいにされた真空管。

THE DISCOVERY OF THE ORGONE, VOL.

オーゴンの発見 (VOL.)

II, pp. 70-77, 1948.

2~~

宇宙 OR エネルギーのガイガー効果

または、有機体の OR エネルギーをチャージされているプラスチック・ロッドが隣に動かされたとき、ヘリウムは OR エネルギーを吸収して、光を発します。

OR エネルギーが大部分の物理学者によってかなり昔に発見されなかったのは奇妙なことで、1940 年から後には、私は土と大気に認めることができ、このエネルギーを見せることができた。

後になって、私はメカニカルな電気エネルギーの法則と大いに異なる法則に従って、オルゴンエネルギー機能に関する考えを公式化することができた。

オルゴンエネルギーの領域において、強いシステムは、弱いシステムを引きつける。

「エルゴノミクスポテンシャル」は、低いレベルまたは弱いシステムから高いレベルまたは強いシステムに向かう：

オルゴンエネルギーはアメーバから **bion** に流れないが、これに反して、アメーバは **bion** を引きつけ、そのエネルギーを引きよせる。

チャージされた電子範囲にその人の指で触れるとき、エネルギーは有機体から検電器に流れないが、これに反して、有機体（強い **orgonotic** なシステム）は弱いシステム（電子範囲）から、エネルギーを引きよせる：

the leaf collapses.

端子は、崩れます。

空中の強くチャージされた雲は小さい雲にそのエネルギーを放射しないが、これに反して、それは後者の小さい雲を引きつけ、アメーバが **bion** を引きつけて、取り入れるように、それを取り入れる。

OR エネルギー・アキュムレーターにおいて、熱の連続的ポテンシャルが、アキュムレーターの表面の高い温度と周囲の空気の低い温度との間に存在する。（閉じた部屋で= 0.1—1.5 F）、

内側が金属で外側が非金属材質の特別な配列は、空気の OR エネルギーを引きつけ、大気平均オルゴンエネルギーと比較して、それを運動させて集中し連続的により高いレベルに維持するのに十分だ。

これと多くの他の類似した事実は、電位差のメカニカルな法則だけが有効だという仮定と矛盾する。

OR エネルギーの発見は、ポテンシャルが「逆になった」ように見える自然の広大な領域を開いた；

エネルギーの流れ、またはポテンシャルの方向は、弱いものから強いシステムにむかうものがある。

これらの事実はメカニカルな物理学と矛盾するようだが、腸の中の食物材料の吸収のような、「引力」と、他の多くの基本的生物学的プロセスの機能と一致している。

エネルギー的に強い血流は、腸壁を通して内部からエネルギーを吸収する。

Cf この事実は、浸透のメカニカルな規則または、その他に基づいて説明されるはずはない。

Cf. ライヒ：

「宇宙オーゴン・エネルギーとエーテル」、オーゴン・エネルギー速報 4、1949、pp. 143-159。

「逆転した」 ORGONOMIC なポテンシャル 203

(C f. オーゴンの発見 (VOL.) II, pp. 307 ff.)

このように、2つの基本的に新しい事実は、数年の OR 研究の間に確認された。

orgonomic なポテンシャルは、弱いものから強いシステムの方へ、メカニカルなポテンシャルとは逆に機能する。

2. おそらくオルゴンエネルギーは基本的に電磁気のメカニカルエネルギーと著しく対照的である。

年が経て、これらの2つの事実は重要性を増した。

私の OR エネルギーの研究において、これらのことの承認なしで一つの処置も、とることができなかった。

1951 の最初の Oranur 実験に関連して、これらは、重要になった。

他方、OR エネルギーと電磁エネルギーの関係は、仮定で考える他なかった。

我々は基本的宇宙エネルギーを扱っていると仮定しなければならなかった、そして、電気と磁気はこの最初のエネルギーの二番目の機能となった;

したがって、それは特別な電磁機能との自然の一般的で基本的エネルギー・プロセスの間の CFP (共通に機能している原理) による「関連づけ」を捜すことが必要でした。

長年、この問題は私の前にあった、しかし、私はそれについて言うことはなかった。

多くの異なる実験でも、宇宙エネルギー機能から電氣的メカニカルなエネルギー機能への移行のルートは少しも明らかになりませんでした。

にもかかわらず、単純な電気バッテリーがオルゴンエネルギーから電磁気エネルギーへの変換によって機能していると仮定できることは確実でした。

私が:「オルゴンエネルギーは電気ではなく」、そして、「オルゴンから電気への移行が、なければならぬ」という二つのことを確認したとしても、5年以上(1942-1947)の間、私の仕事は許されない怠慢の犠牲になった。

あたかも過度の偏見をもっていたように、オルゴンエネルギーが既知の種類エネルギー放射と同一かどうか確認するために、ガイガー・マラー装置を購入することに躊躇した。

私は、このように長い間、それほど怠慢だったことを残念に思う。

弁解にはなっていないが、私はガイガー・マラー装置が数百ドルかかる事実を言及する。

私は多くのお金、または研究費用をすでに使っており、電磁エネルギーのために設計された装置ではオルゴンエネルギーを操作できないことを多分再び証明するだけになる装置に、多くのお金を使うことをためらった。

204

私の主な議論は、この装置がその存在を示すことができるならば、ガイガー・マラー・カウンターのよって、電磁放射の言葉で考える物理学者がずいぶん昔に確実に宇宙 OR エネルギー

ギーを発見しただろうということだった。

原子物理学者によってそのような発見はされなかったことを私は知っていた。

さらに、論文で「宇宙放射」について、特にミリカンの本で、学んだ時、OR エネルギーの事実にも適合しないことを知ったので、私はガイガー・マラー・カウンターがとりわけ必要にしませんでした。

宇宙線理論は、光線が「宇宙から」地球に来ていると主張した；

他方、私自身の観察は、私にオルゴンエネルギーが「宇宙から来てはいず」て、我々の惑星のちょうどここで機能していると教えた。

さらに、宇宙放射線理論はインチまたは 1 平方センチメートルにつき、光線がほんの少しだけ存在すると主張したのに対して、私の視覚的な観察では、金属を張ったオルゴンエネルギーの暗室でのスクリーンで毎秒 1 平方インチイーチで、何百もの輝く光線を見た。

1 点だけうなずけるところが、あった：

他の種類の放射線、たとえばラジウム線または gays と比較しても、含まれたエネルギーは、相当なものでした。

したがって、ガイガー・マラー・カウンターには何の測定結果も出てこないという仮説は、正しかった。

しかし、私の良心は、休まなかった。

1947 年の春、私はフィラデルフィアの電子メーカー「Herbach and Rademan」に 2 つのガイガー・ミュラーカウンターを注文した：

(モデル GLP-215) は、バッテリーで作動し持ち歩き可能なように設計されていた；

もう一つの、(電磁放射のより正確な研究のために設計された) CMB-3 A モデルは、線をつないだ電圧によって作動した。

私の主な目的は、これらの装置が OR エネルギーに反応するかどうか、そして宇宙放射と、反応が違うかどうかを知ることでした。

ガイガー・マフラー・カウンターでのオルゴンエネルギー回

転動反応の発見

ガイカウンターフィールド・セット (モデル GLP-215) が 5 月 22 日急送された、

そして 1947 年、5 月 31 日にフィラデルフィアの工場から、私のメイン Orgonon の研究所に到着した。

私は、到着すると装置をすぐ組み立てた。

研究所で 1 時間以上チャージされた装置を使っていないことは、重要だった。

以前からの観察によると、真空管でも他のガス入りの装置でも、空のスペースの中の金属部分は最も速く OR エネルギーを吸収し、したがって、予想されたのとは異なる反応がで

ることを私に教えた。

MOTOR REACTION OF OR ENERGY 205

私は、最初、宇宙線と X 線を測定するその装置の本来の機能でテストしたかった。

私は研究所に小さなレントゲン管を持っているが、これまで、火花効果その他を除いて、あまり放射性物質を完全に研究してこなかった。

その装置を研究所の長さ 70 フィートと幅 30 フィートの主ホールで、持ち歩くことからテストを始めた。

このホールに (20×18 フィートの広さの薄鋼板が貼り付けられた。) 特別に造られた「オーゴン・エネルギー室」が隣接している。

イヤホンで、1 分につきおよそ 1 回から 2 回のクリックを聞くことができた。、OR ルームの金属壁に接近したとき、または金属シリンダーのそばに置いたとき、----それは、2-基の対抗管または 20 層のオルゴンアキュムレーターを含む-----、を置いたとき、クリックの増加は、なかった

したがって、その時、ガイガー・マラーをフィールドの測定を用意してもオルゴン研究に役に立たないことを私は確信した。

長年、アキュムレーターとコントロール装置の間の温度差はポジティブでした。そして、摂氏(To-T) の温度差は天気によって異なった。

疑問はなかった、金属室は大気の OR エネルギーで、非常に活発でした。(エネルギー現象の直接の観察のために暗闇に造られた特別なスクリーンで見ることができた)

この強力で多量のエネルギーは、ガイガー・マラー・カウンターのような繊細な電子装置で観測できないことは、独特である。

それは、オルゴンエネルギーが電磁エネルギーでなく、したがって、オルゴンエネルギーは電磁装置で測定できないという私の見方を確認するかのようだった。

2 日目 2 時間 15 分だけだが私が再び装置をテストしたときインパルスはさらに少なくなった。

次の 10 日間、どんなインパルスも、まったく聞こえなかった。

装置は完全に「死んでいた。」、X 線の小さな源の近くできえ反応はなかった。

2、3 日後、私は、決められたフィールドオルゴン測定で役に立たないことを伝えて、前回頼んだより大きいガイガー・マラー装置のキャンセル命令をだすようメーカーに手紙を書くことに決めた。

私は、大きいホールのテーブルに、フィールドをセットした (OR ルームからおよそ 15 フ

ート外、)。

私は、ふつうに測定実験することをあきらめた。

しかし、何かが変わっていないか見るために、毎週頃あいを見て二度バッテリーをオンにした。

ガイガー-マラーの測定カウンターは3週間以上静かなままだった。

この部屋は最初の Oranur 実験の後、1951年3月に、分解しなければならなかった

206

円筒形の金属容器から測定管は取り出さなかった。

測定管の近くでも、いかなる特別なオルゴンアキュムレーター装置の内側でも、測定できなかった。

装置が役に立たない事が確定したことを私自身確認した。

それから、1947年8月8日午後4時ころ、測定器が置いてあるテーブルのそばを通った；通る際に、私はバッテリーをオンにした。

インパルス・レコーダー（サイクロトロン）のポインターは、すぐに最大の速さで、およそ1秒で1回転・完全に回り始めた。

私は、完全に装置が役に立たないことを納得し、そういう偏見を私がおもっていたのでポインターの回転に注意を多く払わなかった、。

私には独特なインジケーターの回転の極端な速度は、2ヵ月以上にわたる反応測定の失敗と共に、何かで装置が狂ったと思ったほど衝撃でした。

ポインターの回転はおそらく接続が不安定になったバッテリーの直接の作動によるとおもった。

もちろん、私はすぐに問題を考えすぎたとわかったが、これは間違った考えでした。

私の偏見は、その日それについて全て忘れたほど、強かった。

翌朝私の研究所に再び入るまで、それについて考えなかった。

私は再び電圧をオンにした、再びインパルス・レコーダーは反応し毎秒100インパルスに一致して、およそ完全に1回転した。

私は、それをまったく理解できなかった。

私は、インパルスレコーダーのX線または宇宙線への普通の反応は、毎分12から20-25のインパルスまでの、極めて少ないものであることを知っていた、

近所に原子炉はありませんでしたし、もしもあったとしても、信じられないような、反応であった。

段々に、これが私に大きな発見（おそらくオルゴンエネルギーの作動力のあらわれ）であることが、わかり始めた。

私は、基本的間違いがなければ、急速な白っぽい光線だけがポインターの速い回転を説明できることを感じた。（私は暗室のスクリーンでよくそれを観察していた）

そして、私は同じエラーが発生したと思いたかった。

同じその朝、およそ毎分 6000 のカウントを記録した、その翌日、1947 年 8 月 10 日、私は 15 秒で 2000 ぐらいのインパルスを数えた。

私は、8 月 11 日に 6 時から午前 9 時 30 分の間、装置をテストし続けた。

カウントは、毎秒 125 から 134 に増加し、ときに 162 までになり、または 10,000 エルグまでになった。

私は前日、特別な外層がロックウール、中間層が鋼のウール、内部の第二層のロックウールと一番奥の薄鋼板からなるシリンダーの、円筒形のエネルギー・アキュムレーターを造った

207

コントロールの範囲を広げようとしたが、私は現象がなくなり、再び見るができなくなることを怖れた。

したがって、私は、更に実験を進めてこの特別な反応が無くなる前に、出来事の法的記録文書を作成することに決めた。

私のオフィスから、数マイル離れたメイン州、ファーミントン、44 のミルズアンドミルズの弁護士オフィスに電話をした。

1947 年 8 月 11 日の午後 2 時から 6 時の間に、私はセオドア P. Volfe 博士、トム・ロス氏、Orgonon の管理人でもある、弁護士ピーターミルズと私のアシスタント（ミス、イルゼ・オルレンドルフ）に記録計の針の回転を見せた。

4 つの文書は、作成されて次の日に提出され、数人の人々とオフィスに預けられた。

OR エネルギーで実験する際、人は普通でない反応に遭遇する用意ができていないにちがいない。

人が学んだメカニカルな物理学または天文学の中には、そのような現象は何も、ない。

最も安全に進む方法は、それ自体生物物理学の現象と一致させ、適応することです。

たとえば、人が瞬間的に反応スイッチをオン／オフすると考えるなら、通常間違っている。

人が 1 日、または 1 週間、根気よく待つなら、満足な結果を得るかもしれない。

こういうわけで、メカニスティックな科学者の操作による「制御実験」を私は警告する。

彼らは、典型的な OR エネルギーの機能タイプに慣れていない。

メカニスティックに考える原子物理学者はアキュムレーターの近くで、対抗管をはめ込んだガイガー-Miiller フィールドのスイッチをオンにした。そして、ちょっとした突然の反応を予想していた。

私は、同じようにした；

しかし、私は organotic なプロセスが全て遅鈍であることを知っていた、したがって、私は装置で 2 ヶ月以上テストし続けた

ところが、反応がすぐに起きなかったとき、(多分電子的機能を扱う) メカニカルな物理学

者は中止した。

最初測定管が適切にオーゴン・エネルギーでいっぱいチャージされる

近くでオーゴンを示すことが可能になる。

アルゴン・ガス・チューブは、研究所に持ってこられた直後は **lumination** しません。

しかし、人がこの同じガス・チューブを2、3週間、金属を張ったエネルギー室に置いておけば、遅かれ早かれ、一般的な大気状況で、強い **lumination** とともに化学反応します。4Cf

1949年1月オーゴン・エネルギー速報、p. 8、

髪からのオルゴンエネルギーでチャージされたプラスチック・ロッドは、ゆっくりチューブのうえで動かされた。

208

『コスミックオルゴンエネルギーのガイガー効果』

もう一つの重要な点は、これです：

「ポジティブ」と、「ネガティブ」にチャージされた電気的理論でオルゴン物理の実験をしようとするとうまく失敗し、これに対して「2つの **orgonotics** な相互作用に固執するならば、成功する。

これには同じ種類の、無極性チャージ以外はなく、対立した極性にはチャージされない。

しかし、『反応がおきるなら、2つのオルゴンティックなシステムが、なければならぬ：

非常に重要なもう一つの点は、ポテンシャルの反転です：

高いチャージは、弱いチャージを引きつける。

ガイガー・マラー・カウンターでの、仕事が進んだので、このエネルギー原則が証明された。

orgonotic な作動力の発見に適用された考えの原則をまとめよう。

1、2つの「**orgonotic** なシステムの相互作用での **OR** エネルギーは、プラスとマイナスのチャージの原則に従わない。」

2、**OR** エネルギー・プロセスでは、強いシステムは、弱いシステムを引きつける』、あるいは、違う表現で言うと、ポテンシャルは低いものから高いチャージに向かう：

3. オルゴンエネルギーは基本的に電磁エネルギーと異なる。

最初の原則は、全ての生物物理学の機能では有効にみえた。

第3の原理には、すべてに広がる宇宙エネルギーの存在が **orgonotic** な現象を基礎で支えているという仮説が、必要でした。

第二の原理は、ミクロの領域での観察と、電磁気的な現象に基づくものだったが、その証明は、不完全だった。

この原理から論理的に後に続く問題は、以下の通りでした

ポテンシャルがエネルギーの低いものから高いレベルに向かうならば、エネルギー・レベルの増加に対する制限はあるのか？

チャージしていくプロセスは、終わりなく続くのか？

もしそうでなければ、どんな種類の機能が、充電過程を制限するのか仮定が必要ではないか？

生きている有機体は、周囲の環境より機能するエネルギーレベルを高く保つのは、本当です。

そのエネルギーが高く上がることは無限に続かない。

それは、機能の平坦なレベル、いわば（高原）を示す。

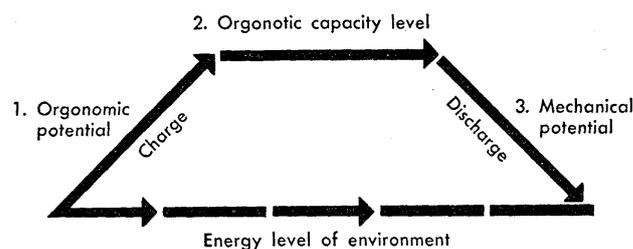
したがって、それはエネルギーの流れの方向または放出は、高いところから低レベルへ向かうのと、すなわち古典的なメカニカルなポテンシャルで、高いものから低いものへ向かうのとは、対立的な **orgonotic** な機能がどこにも、存在すると仮定できる。

この問題の機能的思考での解決モデルは、次のようなものである。

209

MOTOR REACTION OF OR ENERGY

209



参照 図 3

生命の **orgonotic** なシステムと非生命のシステムから引き出された反転され転換されるオルゴンティックなポテンシャルの図示。

- 1 オルゴノミックなポテンシャル
2. **Orgonotic** な容量のレベル
- 3 メカニカルなポテンシャル

4 環境のポテンシャル

orgonotic なポテンシャルは、低いものから高いレベルに、A——B) の方向に動く。

一定エネルギー・レベル、高原 B——C) で生命を維持する。

異なる orgonotic なシステムで、平らな A——D と高原 B——C の高さを比較すると、異なるが、その基本的原理は、同じものだ：

間違いなく静的でない、orgo-notic なダイナミックなシステムの特有な性質。

低から一高への方向へポテンシャルの流れの向きが、高い方向から低い方への反転が、C で起こり、C~D へ機能が変化する。

この部分はポテンシャルが上から下へ、または、強いものから弱いシステムに放出するという、有名な物理学の原則である。

このように、OR エネルギーの代謝は、OR アクкумуляターの場合と同様に、生きている有機体の中、または他のどのタイプの orgonotic なシステムの中にも存在する。

このエネルギー代謝は、自然の機能です、

すなわち、バリエーションの特定の限度の範囲内で周囲の空気より上にエネルギー内容を絶えず移して、特定のレベルで警告音を鳴らしている。

オルゴンエネルギーは、エネルギー代謝の共通機能原則 (CFP) の 2 つのバリエーションである、チャージと、放出で構成される。

$$A \begin{matrix} \nearrow A_1 \\ \nwarrow A_2 \end{matrix}$$

バイオエネルギー的機能で、オルガスムの機能においてローから高いところへのチャージと、高いところからローへの放出の状況に遭遇した。

この基本的バイオエネルギー的な機能は、その後全ての orgonomic な調査でのガイドラインとしてまた、これからの研究のガイドラインとして長い間残された。

-210

生物学の中で、こうした状況は痙攣を通してのチャージ放出です。放出の前、エネルギーの人為的供給がないチャージの原則は、メカニカルなエネルギー機能では知られていない。

それは生命機能だけでなく、自然の非生命の領域の中での多くの機能の本質的な特徴です。惑星または恒星も、連続的にそのエネルギー・レベルを環境より高く保つ。

10 ヶ月後に orgonotic なモーター力が実際にモーター・システムをセットし運動させるまで orgonotic エネルギーのポテンシャル、または、反転の問題は、実際に解決されなかった。

電磁気エネルギーとオルゴンエネルギーの関係は、全く不明瞭でした；

私は、その時まったくそれを理解しませんでした。

その最終的な解決は、技術的な潜在性の広大なフィールドを開けた。

すぐに測定器から 2、3 フィート離れている強くチャージされた金属で覆われたエネルギー

室での、実験 A に戻ろう。

私の計画は、テストをする前に、大気の OR エネルギーの集中のいかなる準備もされなかった建物で、OR エネルギー室の近くで、最初に現象をテストすることだった。

私は、3 日間インパルス記録でポインターの回転を観察した。

それから、私はメーカーに電話をし、フィラデルフィアの Rademan 氏に基本的な事実を話して、放射能のガイガー - ミュラー計数管の測定の上でこれまで提供されたなかで最も速い率は何か尋ねた。

Rademan 氏は、最大速度は、毎秒 50 インパルスまたは毎秒半回転 (= 3000crM) の周辺より手前だと話した。

私の研究所の中の平均は、毎秒およそ 1.15 回転、または 6-8000 crM でした。

2 つの事実は、どんな疑いでも越えて確定されなければなりませんでした

1. エラーが起きたのか？

測定装置の、調子が狂ったか？

この質問に完全に答えるために、同じ会社により正確な 2 個目の、ガイガー・マラー・カウンター、「モデル CMB-3 A」を注文した。

2. 完全に *orgonotic* な性質のメカニズムでインパルス・レコーダーは、およそ毎秒 120 のインパルスの割合で回るのか、その運動力は、装置の中で作動中の電磁エネルギーと関係するのか？

実験の中で、オルゴンエネルギーが、電磁エネルギーに変わり、さらに機械的エネルギーに変えられたと仮定することはかなり確実でした。

しかし：

対抗管の中の OR エネルギーと、周囲の空気が、それ自体を回したのか、あるいは電子管の中の励起した電磁エネルギーだけがこのように車輪を回したのか、？

211

その時これらの質問に、答えることはできなかった。

1947 年 8 月 14 日に、私は金属シリンダーから、対抗管を取り出すことで対抗管の反応を「殺す」ことに決めた。

私は、以下の事実を見つけた。

1 明らかに、OR エネルギー・アキュムレーターの働きをしていた金属的シリンダーの外側に、対抗管があると、回転反応は現れなかった。

インパルス計数器は、反応を示さなかった。

これは、同じ結果が、常に繰り返された。

2. 対抗管が金属的容器に挿入されるか、円筒形の *accumulator* に裸におかれると、再び反応がすぐに現れた。

3. 対抗管のハンドルに手または指でそれにさわった時、または接近したとき、ハミングする雑音が聞こえ始めた。体のオルゴンエネルギーの放出は対抗管の作動に関する

この観察は、後で、生物エネルギーの中の量子力学的な行動の問題の鍵であることがわかった。

4. 私が OR アキュムレーター壁の近くに、または私の体に裸の対抗管を持ってきたとき、ポインターの回転がすぐに始まった。

対抗管をアキュムレーターから取り外し、特定の距離およそ 2 フィート離れたとき、反応はすぐに止まった。

私の体は OR アキュムレーターと同じ方法で反応を起こした。そして、対抗管を興奮させた。

生命と非生命の間のオルゴン機能の機能特性は、私になじみがあった。

前に私は、他の器具でしばしばそれを見た。

影響を「殺し」、自由にそれを回復できて満足だった。

1947 年 8 月 19 日に、私はホールから OR エネルギー室の内部に、器具を移した。

基本的に現象は、(わずかに強いが) 外部と同じものだった。

ポインターは、ちょっと速く動いた。

それがテーブルに載せてあったときは、裸の対抗管はインパルスカウンターへリアクションを与えなかった。

しかし、同じテーブルで、OR エネルギー・アキュムレーターの近くに持って来たとき、あるいは、有機体の近くに持って来たとき、すぐに反応した。

研究所にいた他の数人の人に、同じ反応が、起きた。

8 月 21 日に、私が対抗管のハンドルにさわったとき、ショックを受けた。

バッテリーは、オンにしてなかった。

私は、それを理解できなかった。

このことを、**orgonotic** な行動を特別な GM 計数器のメカニズムで説明しようとしても、役に立たない。

エネルギー・アクションに関する用語で、機械主義者は、理解しよう；

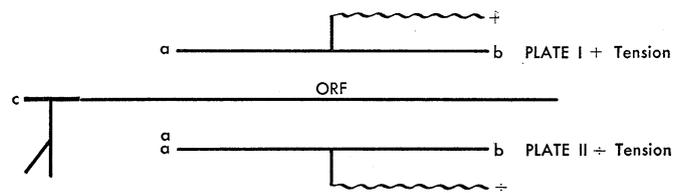
しかし、我々はこれでは、まったく何もわからない。

212

したがって、オルゴンエネルギーから電磁力学への橋が出来るまで、GM の議論を先送りしなければならない。

私は、雨の始まりの前は、インパルスカウンター計量装置の反応は弱いことを観察した。；ポインターはゆっくりとやっと動いた。

この事実は、他の有名な **orgonotic** な現象 (例えば、温度差が小さくなること、悪天候の中



で **electroscopic** な放出が速まることと) と一致していた。

オーゴン・エネルギーが雲から解放されるために雨がやむとすぐに、明らかに反応は再び、速くなった。

私は、更に重要な観察をすることに成功した：

私は、一晩を含む約 24 時間、裸の対抗管を新鮮な外気にさらすことで反応を弱めることができ、それを消すことさえできた。

私は、対抗管をオーゴン・アキュムレーターに戻すことで反応を強化することができた。

水が **OR** エネルギーの全ての影響を取り去ることができるので、私は対抗管の表面に、水を走らせた。

これは、強く減少させる効果を持った。

対抗管の大部分の感度を消した後、金属室で再びチャージさせて、完全な暗闇で観察をした。

暗室での作業は、最も重要です。

それを視覚的観察によって発見するのが最も納得のいくオルゴン研究の生産的な方法です。

私は、**GM counter** を金属室の内部へ動かした。

他の何人かの目撃者の前で、夕方何回か、いくつかの重要な疑問に答えることとなる暗闇での観察が、なされた。

私は、およそ 2 時間オーゴン金属室に座ることに慣れている。

その時間がたつと、**OR** エネルギーは、私が部屋を出なければならぬほど、興奮したようになる。

最初の晩、**GM** 計数器がオーゴンの部屋にあったとき、私は 20 分後に観察を中断しなければなりませんでした。

空気は非常に「重く」、「圧力がかかり」オルゴンエネルギーの集中と呼ぶのに慣れている状態は耐えられなかった。

私に、ブルーグレーで **luminating** する「雲」の運動が普段より非常に速いことを明確に知るのに十分な時間があった。

稲妻の小さい閃光の様に、火花は速く動いていた。そして、部屋に、現れて消えた。

これらは、**OR** エネルギーの強い励起を示した。

翌晩、謎は解決した。

今度は、我々はなんとかかほぼ 1 時間半、

金属で覆われた部屋に座ることができ、そして、我々は重要な観察を確保することができた。

オルゴンエネルギーは電気ではない。

213

私は、ガイガー-Miiller 測定器の電圧を 45 分後までオンにしませんでした。

前の夕方にガイガーミュラーカウンターを使用する前、日中長い時間 OR の部屋で働きました：

私が誘導コイルを再び動かすとすぐに、高い電気 voltage の刺激的な要因が生まれ、前の晩、私を困惑させたのと同じ現象が、現れた：

orgonotic な雲の運動は、速くなった；

これらの orgonotic な雲には、狭い幅で、強く lumi-nating する線を作る傾向が、あった。

OR 雲の幅広斑点は、いつもより速く集中した。

最終的に、強い、稲妻のような速い火花は四方八方に部屋を横切った。そして、空気は非常に重くなった、そして、我々はすぐにその後で部屋を出なければならなかった。

私は、電気エネルギーが OR エネルギーを興奮させ、それが以前の雲の斑点領域を白っぽい速い光線へと変化させる原因となるというオルゴンエネルギーの機能の新しい非常に重要な事実を学んだ。

その時まで、私は大気のオルゴンエネルギーが 3 つの明確に異なる種類から成ると思った：非常に遅い、雲のような動きのブルーグレーの、霧のかかった斑点；

スピンウェーブに似た、カーブに沿って動く、濃いブルーバイオレットの明るい点；

そして、3 番目に、明るい白っぽい火花、または稲妻の小さな閃光は organoscope のスクリーン上に、小さい花火として確かに現れ、非常に薄暗い緑の光で動いているようだ。

．その時のそれは異なる状況によってその出演と調子を変える OR エネルギーのいたずら坊主だけが最も考えられた。

ここに非常にはっきりしたことが残った。

それは、電磁気エネルギーは、OR エネルギーと著しく対照的でまるで対立するかのようだったという事実が問題なく確立された。

これら 2 つは、互いを否定するか、消すか、興奮させる。

稼働中のガス入りの測定管の中での、高い電気テンションの相互作用と、オーゴン・エネルギーを集中したときを理解しようとするとき、この観察は大きな価値がある。

大気の OR エネルギーの興奮した状態に関する特定の現象、例えば、混濁のない幕電光、稲妻による雷雨と、暗い金属室の中の現象との間で、我々は、機能特性を確立することができる。

この観察が orgonotic なモーター力の発見に案内するガイドラインのうちの 1 本になったこ

とは、後で示す。

そして、最後に、これらの事前の観察に照らしてみると激しい ORANUR 反応（参照 p. 278ff.）は、理解可能になる。

214

我々の実験の更なる発展に戻ろう。

2、3 日後、私がオレゴンルームの外、野外に設置し、再びそれをホールに置いた。

私は、測定管を引き離して、ベランダに置き、新鮮な外気にさらした。

24 時間の外気にさらした後のテストは、運動がほとんどないことを示した。

連続的にポインターを回すことはできず、ほんの少しインパルスが、あるだけだった。

私は、より大きな測定器が到着直後にテストを始め、新しい測定管自体を OR エネルギーでいっぱいに浸す前にその機能を確認めた。

私は、新鮮な外気のある外に、新しい測定管を置いた。

OR エネルギー室の壁の外 15 フィート離れた、木のテーブルの上に新しい装置を置いた。

最初の私の腕時計のラジウムでのテストは、42crrz を中で与え、小さい X 線チューブ 36 crrz、1 立方フィートのオルゴンアキュムレーターの中の裸の測定管は 20 crrz でした。

3 回の全てのテストの閾値電圧は、750 ボルトでした。

昼過ぎ、新しい測定管のホールの中の空気への反応は、700 ボルトの閾値電圧で、すでに 25 cpm、数時間後には 36cpm でした。

私の腕時計ダイヤルのラジウムは、反応を速めた。

だが、私の時計のラジウム・ダイヤルが長年 OR エネルギーの効果にさらされていたことを、覚えておかれなければならず、したがって、コントロールされていない放射線 (NR) と不確かな関係が存在する。

1947 年 8 月 29 日、午前 6 時、特別なオーゴンの集中状態から移動した、フリーの測定管の反応は 650 ボルトの閾値電圧で、およそ 30cpm でした。

テストの間、測定管は、研究所の外の、新鮮な外気を保持した。

同じ日午前 9 : 30、650 ボルトで速度は 24CPM でした。

650 ボルトから 25 ボルトずつジャンプして、全体で、250 ボルトの増加まで電圧は増加し、反応速度は著しく変化しませんでした。

同じ日午前 11 時 15 分に、私は新しいガイガー・マラー・カウンターを OR 金属室へ移した。測定管は、テストの間、建物の外に残した。

外部と同じようにオルゴンルーム内でおおよそ 25-30CPMM. の比率でまわった。

ポインターの回転傾向は、最高 1500 ボルトより高い電圧では観察できなかった。

したがって、心配性の一部の「批評家」が回転効果を観察して、もっともらしく OR エネルギーの GM 反応をわかった風に述べるが、これは高い電圧によらない。

オルゴンに浸透させる

同じ日 3 時 PM. で、725 ボルトでおよそ 48-50 CPM まで率は増加した。

回転傾向は、観察できなかった。

測定管は、回転を生じるために十分な程度に浸っていなかった。

しかし、およそ 50CPM の速度は、著しいものだった。

OR-に影響されたラジウム、X線、または「宇宙線は普通の反応より高かった。」建物がオーゴン・エネルギー・アキュムレーターまたはオーゴン金属室を含むとき、これらの放射源の信頼できるテストはできない点に留意する必要がある。

同じ日 4r.M. に、私は測定管をチャージプロセスの速度を上げるために 1 立方フィートの層を二倍にしたアキュムレーターの中に入れて、そこを去った。

同じ日午前 9 時に、24、32 と 48CPM を数えた。

それから、突然、短い休止の後、1 秒につき 60 インパルスまたはおよそ 3 秒間に 3600CPM の「爆発」があった。

ポインターは、ほぼ毎秒完全に 1 回転した。

それから、以前の毎秒 0.8 または 48CPM の回転率が、続いた。

明らかに測定管は、少量の蓄えられたオーゴン・エネルギーを放出した。

以下の表は、1947 年 8 月 30 日から 9 月 8 日までの測定結果だ。

およそ 1500CPM または毎秒 25 の連続的なゆっくりとした回転は、測定器の到着の 3 日後 8 月 31 日に初めて現れた、

1947 年のテストデータ No.

| No. tests | 1947 年 日付 | 時刻 | CPM | Volts | Thresholds and Optimum | コンデション |
|-----------|--------------|--------------|-----|-------|------------------------------|----------------------------------|
| 1 | 8 月 30 日 | 午前 6 時 | 33 | 700 | | |
| 2 | 8 月 30 日 | 午前 6 時 | 63 | 750 | | |
| 3 | 8 月 30 日 | 午前 6 時 | 60 | 850 | | |
| 4、 | 8 月 30 日 | 午前 12 時 | 33 | 700 | | |
| 5 | 8 月 30 日 | 午前 12 時 | 33 | 750 | | |
| 6 | 8 月 30 日 | 午前 12 時 | 33 | 775 | | |
| 7 | 8 月 30 日 | 午前 12 時 | 33 | 800 | | 曇った、雨の日の アキュムレーターの中 のチューブ) |
| 8 | 8 月 30 日 | 午前 12 時 | 50 | 800 | | |
| 9 | 8 月 30 日 | 午後 8 時 30 分 | 50 | 750 | | |
| 10 | 8 月 30 日 | 午後 10 時 30 分 | 60 | 800 | | |
| 11 | 8 月 30 日 | 午後 10 時 30 分 | 60 | 775 | | 晴れた日のアキュム |

| | | | | | | |
|----|--------|--------------|-------|------|---------|--------------------------------|
| | | | | | | レーターの中のチューブ) |
| 12 | 8月31日 | 午前10時30分 | 110 | 800 | M.O | |
| 13 | 8月.31日 | 午前10時30分 | 120 | 800 | | (オーゴンの金属の部屋から測定器のホールへ15フィート移転) |
| 14 | 8月31日 | 午後2時 | 60 | 700 | | |
| 15 | 8月31日 | 午後2時 | 60 | 750 | M.T | |
| 16 | 8月31日 | 午後2時 | 70 | 750 | | |
| 17 | 8月31日 | 午後2時 | 185 | 800 | | アキュムレーターの内部の測定管 |
| 18 | 8月31日 | 午後2時 | 250 | 850 | M.O | |
| 19 | 8月31日 | 午後2時30分 | 770 | 900 | | |
| 20 | 8月31日 | 午後3時30分 | 1450 | 1000 | R.T.!!! | 回転閾値 アキュムレーター中部の測定管 |
| 21 | 8月31日 | 午後3時30分 | 1500 | 1050 | | |
| 22 | 8月31日 | 午後3時30分 | 1500 | 1000 | | |
| 23 | 8月31日 | 午後3時30分 | 1500 | 900 | R.O | 最高回転 Volts |
| 24 | 8月31日 | 午後3時30分 | 45 | 750 | | |
| 25 | 8月31日 | 午後3時30分 | 140 | 800 | | |
| 26 | 8月31日 | 午後3時30分 | 1050 | 900 | | テーブルの上の裸の測定管 |
| 27 | 8月31日 | 午後3時30分 | 1830 | 1000 | R.O | 最高回転 |
| 28 | 8月31日 | 午後8時—8時30分 | 35 | 650 | M.T | |
| 29 | 8月31日 | 午後8時—8時30分 | 55 | 700 | | |
| 30 | 8月31日 | 午後8時—8時30分 | 46 | 700 | | |
| 31 | 9月1日 | 午後10時—11時30分 | 56 | 750 | | アキュムレーターの内部の測定管 |
| 32 | 9月1日 | 午後10時—11時30分 | 64 | 750 | M.O | アキュムレーターの外の測定管 |
| 33 | 9月1日 | 午後10時—11時30分 | 2000. | 1000 | | アキュムレーターの外の測定管 |

| | | | | | | |
|----|------|-------------|------|-----|-----|--------------------|
| 34 | 9月1日 | 午後10時—11時30 | 2000 | 900 | R.O | アキュムレーターの 外の測定管 |
|----|------|-------------|------|-----|-----|--------------------|

| | |
|-------|---|
| 注： | |
| M.T.- | 測定閾値 Measuring threshold |
| M.O. | 測定最適条件 Measuring optimum |
| R.T. | 回転閾値 ca.毎分 1500 インパルス Rotation threshold ca. 1500 impulses per minute |
| R.O | 最適回転（速度の減少する前の=ボルト。） Rotation optimum (=Voltage beyond which speed decreases.) |

OR 反応はメカニカルな性質でない

月日が過ぎ去ったので、読者に私の記録からの抜粋で測定値のゆっくりとした増加率を示すだけで十分かもしれない。

私は、チャージされた測定器のエネルギー出力を次の4週続けて毎日3時間測りました。1947年9月の末まで、1回の測定に1分かけて300回以上テストを連続しておこなった。私は、ゆっくりと、インパルス測定するのに必要な最小限の電圧と、インパルスレコーダーでポインターの連続的回転を生じるのに必要な最小限の電圧を区別することを学んだ。私は最初のを「測定閾値」(M.T.)と呼び(二番目を「回転閾値」(R.T.))と呼んだ。

インパルス記録計でのインジケータ針の「回転」は、オルゴンエネルギーの「インパルス」の効果が、スムーズな状況で生まれたもので、つまり、線形行動は、均一に配分されたインパルスから生まれている。

原子力エネルギーの場合のように、電圧の増加の間いわゆる「高原」は、なかった。電圧はばらつきはあってもおよそ25ボルトのステップで急速に増加したが、同じように、毎分の(cpm)インパルスの数は着実に増加した。閾値電圧は、天気とORエネルギー集中度によって、または測定管の場所によって、およ

そ 50 ボルトの上／下した。

測定閾値より上の、およそ 100 または 150 ボルトの出力に、通常インパルス of 急な上り坂が、あった。

回転速度の更なる安定した増加が、100 から 200 ボルトまでにあった。

しかし、950 から 1000 ボルトまで電圧がさらに増加したとき、回転速度は再び減少した（「詰まらせます」）。

「最適電圧」が、回転の測定のためにあった。

CMB-3 Aによる最適回転は通常ガイガー-マラー測定値でおよそ 950 ボルトでした。視覚測定ではおよそ 750 ボルトでした。

最初の回転の、または測定の、4 から 5 分までの間、毎分のインパルス出力率は、増加する；測定管の中の動き自体がオルゴンエネルギーインパルスの出力を強化する。

チャージするために狭いアキュムレーターの範囲内にガイガーカウンター・チューブを置かなければならないことは、さらに、明白になった。

これに反して、放出する測定管は、作動の間、アキュムレーターの外に置くことによって最高の結果を成し遂げた。

測定管それ自体が小さい OR アキュムレーターとなっていることで、これは説明できる。

それは、マイナスのテンションの「陰極」である円筒形の金属チューブと、外を保護している非金属のシリンダー（通常異なる（「感度」）のガラスまたは金属の厚みでおおわれている）から成る。

この構造は、大気の OR エネルギーの蓄積のために使われるものと同じものです。

それは、外部のオルゴンエネルギーと内側のオルゴンエネルギーとの間にそれ自体で逆にされたポテンシャルを確立するのに十分です。

218

したがって、測定管は、連続的に大気の OR エネルギーを吸収します。

その構成は非常に、より強い **orgonotic** なシステムを生み出し、したがって、周囲の空気からのエネルギーをひきつける。

それ自身がより高くチャージされると、周囲のエネルギーの吸収の働きは、より強くなるなければならない。

この機能は、エネルギーを吸収した 1、2 日後の、エネルギー出力の急増を説明する。

それも、測定値閾値より上の電圧のわずかな増加だけなのに、エネルギー出力が急に増加することを説明する。

アキュムレーターの外での、より速い動きについての以下の解釈が正しいかどうか決定するために、更なる研究に任せなければなりません。

測定管（GLC-11 型、Herbach と Rademan）で：

OR アキュムレーターの外で作動させると、CMB-3 Aの測定値がより高くなる。

私の印象は、これが測定管と大気の間でのより急速なポテンシャルまたはテンションの発

生によるというものでした。

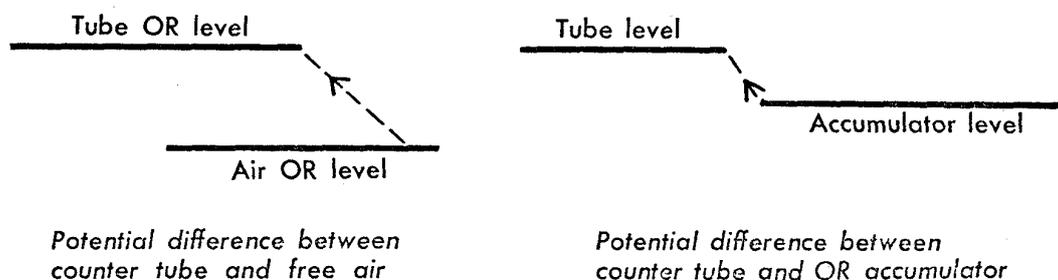
それは、

測定管の内部でのオルゴンの集中とアキュムレーターの内部の周囲の空気との違いがより小さかったことで、アキュムレーターの中でよりゆっくり働くようでした
測定管レベル・アキュムレーター・レベル、空気オルゴンレベルでポテンシャルが違い
測定管とフリーエアの間でポテンシャルが違う、言い換えると：

測定管と OR アキュムレーターの間でポテンシャルが違う

測定管は、アキュムレーターの範囲内でよくオルゴンに浸り、フリーエアでよく放出するように見えた。

だが、この説明は、測定フィールドにセットされた他の測定管 GLP-215 の作動によって否定される。



ここで、測定管は、その金属容器から取り除かれ、アキュムレーターまたは人体といった *orgonotic* なシステムから十分離してテーブル置くと回転の働きは、すぐに止まりました。なぜ、他測定管が機能を中止するとき、1本の測定管はフリーエアでその活動を増やしたのか？

私は、答えることができなかった。

このような新しい広大な分野にやって来る全ての質問にすぐに答える必要はありません。

だが、この矛盾は覚えておかなければならない。

その単純な答が、更なる実験の間に見つかるかもしれない。

それは、ラジオ真空管の中の増幅システムの構造と活動に違いうむ電圧供給の配線の特別な違いでしょう

両方の GM 装置の共通基本機能を空気のオルゴンエネルギーを **orgonotic** に高く集中させ、インパルスの平坦な状態をつくるのに十分な程度のエネルギーをもつまで浸らせ、で、インパルス測定装置の回転力を出させる。

CMB-3 A の測定器をオルゴンエネルギーに 10 日間浸らせ、うまれた最高回転率は 2000CPM でした。

他の測定器 GLP-215 で、電圧は調節できなかったが、オーゴン・エネルギーでチャージした 2 ヶ月後に、最適条件で、毎秒 130 インパルスまたは、およそ 8000CPM の回転率になった。

オーゴン・エネルギーの影響を受けた GM の活動の顕著な 2、3 の事項に言及したいがこれは更なる仕上げを必要とする。

通常の作動では、雨の直前にダウンする。。

雨が降るプロセスの間に、OR エネルギーが解放されるとすぐに、再び速くなる。

そのとき、1000 ボルトのあたりで回転最適条件になり、950 または 900 ボルトの電圧に機能が減少しても、まだ最適率を維持する。

電圧の縮小は、回転速度をさらに増加させるかもしれない。

9 月 2 日に、フリーエアの測定管で 800 ボルトで測定し 120cpm、、870 ボルトで 1000cpm、1000 ボルトで 1200 cpm、900 ボルトで 1500cpm となった。

| |
|----------------------|
| 800 ボルト 120CPM |
| 870 ボルト 1000 CPM |
| 1000 ボルト 1200 CPM |
| ただの 900 ボルト 1500 CPM |

この意味は、**orgonotic** な行動への電圧の刺激の関係は、メカニカルな性質の機能ではないと、我々は予想する。

閾値電圧はメカニカルなものではない。；

これらは、特定限度の範囲内で異なる。

この明瞭な「無法則性」は、全ての **orgonotic** な自然機能の重要な特徴です。

9 月 3 日に、6 分以内の測定で、(連続して 800 ボルトで、毎分、瞬間 145、235、453、380、400 と 363cpm だった)。

同じ日、私は 8 分以内の連続で 750 ボルトの最適条件で以下のインパルス出力を測定した：115、120、148、100、205、140、85 と 60。

管は、アキュムレーターの内部にあった。

9 月 7 日、2 分の予備実験の後、700 ボルトで 55 インパルス、750 ボルトで 45 のインパル

スを測定した;

1300, 1300, 1350 1300.

7分以内で回転電圧は、瞬間で 950 ボルトを確実に維持し、400、500、1150、1300、1300、1350、だった

220

すぐに後に 750 ボルトで 65crM を、2分連続的に測定した;

それから再び 950 ボルトで、700、850、1100、1100、700、900 1100crr2.で

これらの事実は、明白に OR エネルギー・アクションの機能のノンメカニカルな特徴を示すようだ。

9月8日に、私はフリーエアの測定管で2分間連続的に 950 ボルトで測定し 1350、1600、のインパルス測定した。

9月6日の例では、測定管の反応は、ほかの時はより安定し、よりメカニカルな行動に見える。

私はその日の 10 時 AM に、5 層の円筒形のオルゴンアキュムレーターの近くの測定管で 7 分間で 55cpm を測定した

| CPM | At VOLT |
|------|---------|
| 55 | 670 |
| 60 | 750 |
| 900 | 1000 |
| 1400 | 950 |
| 50 | 700 |
| 65 | 750 |
| 1400 | 950 |

9月8日4時 pm.で最適条件 950 ボルトで 1600 のインパルスの数値になったとき、研究所ホールの、テーブルの上の空中にフリーにつるされた測定管でおよそ毎秒 27 回転だった!)。核の「宇宙線」の物理的な面によれば、鉄を張ったり、厚い壁でシールドされると、測定管の活動は減少する。

測定管を厚さ 1 インチの鉄のシリンダーに入れ、そのまわりに厚さ 1 インチの鉛の板を置いた。

測定最適条件 750 ボルトで 9月9日と10日の間の測定値は、研究所ホールの中で前の 40 から 50 から、およそ 80 に増えた!):

9月11日、厚く巻かれたメタルシリンダーの内側のチューブで回転最適条件は、1500cr~t でした。

私は、レコーダーのポインターが均一に回転するためには測定管をオーゴンで十分に浸らせなければならないことを発見したことを確認するために、GLC-19 タイプの 2 本の新しい測定管を両方とも、フィラデルフィアの (Herbach と Rademan 社に注文した。

私は、以下の問題に答えなければならなかった。

1 (OR エネルギーに影響されない研究所の外のフリーエアの中の新しい測定管の反応率は、どうか？

221

2 インパルスが均一に続く回転率を生むのに、新しい測定管を、どれくらい、オルゴンに浸らせねばならないか？

3. OR 部屋を収容する建物を越えて、広がるエネルギー・フィールドが、何かあるのか？それが存在するならば、それはどれほどの広さに達するか？

4. 測定管はその環境に放射されているエネルギーを測るか、あるいは、それ自身の内部の、上に向かう浸されたエネルギーを測っているのか？

測定器が、外部オルゴンエネルギーの測定のために完全に使用できるかどうか
知ることが最も重要でした。

測定管がそれ自身の内部のエネルギーだけを測定するならば、不可能でしょう。

9 月 11 日午後 3 時に、2 本の新しい測定管は到着した。

すぐにこれらのうちの一つ (チューブ No.I) を、私は主な研究所ビルディングからおおよそ 50 フィート離れたところの小さな建物に、置いた。

この小さい木の建物は、オーゴン・エネルギーを蓄えることができるいかなる装置も含まない。

必要とした二つめの測定管 (チューブ No.II) を研究所ホールに持って来て GM-CMB 3 A の拡張アンプにすぐ付けて、測定し始めた。

まだ確かにオルゴンエネルギーに浸していない測定管 No.II の測定率は、研究所ホールの外でのオーゴンチャージに対する反応と考えられた。

さらに、回転は何日か浸らせた後の、チューブの内部のオルゴンエネルギーだけによらずれば 2 つの影響は、予想されていた：

1. 測定閾値の率は、チャージされた測定管よりコントロールされた測定管のほうが低い。
、数日間、鉄と鉛のシリンダーにオルゴンを閉じ込め蓄えると測定管 No.II の測定値は増加する。

2. ホールのアキュムレーターに測定管 No.II を、おくと、二、三日または 1 週間回転効果が増加すること示す。

建物の外に置かれた測定管 No.I は低率の測定値のままで、それは同じ期間内で回転効果を少しも示しません。

前の実験に基づいて作られた予測は正しいと理解されるべきで、疑問なく事実が確立された：

1. それ自体 *orgonotically* にチャージされてない時、ガイガーカウンター・チューブは周囲の放出されたオルゴンエネルギーを測定します。
2. 自身のチャージに、大気中のチャージをプラスした OR エネルギーを測定するとき、それは追加されたオルゴン放出を測定している。
3. ポインターの回転を引き起こす運動力は、自発的にそれ自体をオルゴンエネルギーでチャージした後の、測定管から始まる。

その到着の直後の研究所ホールの中の測定管 No.II による測定率は、以下のようでした：

222

| CPM | 電圧 Voltage |
|-----|------------|
| 30 | 650 |
| 35 | 700 |
| 40 | 750 |
| 55 | 950 |
| 90 | 1000 回転なし |
| 70 | 900 |
| 55 | 750 |

測定管 I は測定管 No.II より率は、低かった。

(回転効果はなく、ほんの少しの短い一回のクリックの「爆発」さえ、なかった。

その翌日 9 月 12 日、測定管 No.II による測定値は、10CPM でした

| CPM | Voltage |
|----------------|---------|
| 33 | 700 |
| 42 | 750 |
| 25 (?) | 800 |
| 45 | 850 |
| 55 | 900 |
| 85 一回の「爆発」で | 950 |

これはテーブルより 6 インチ上の空中に動くようにつるされたチューブで測定された。

安定した回転はないが、最初の日と比較すると率は不変でした。

9月13日の11時AMで3番目のコントロールは

| CPM | Voltage |
|-----|---------|
| 43 | 650 |
| 30 | 750 |
| 36 | 850 |
| 125 | 950 |

9月14日朝早く、その日は雨が降っていた

| CPM | Voltage |
|-----|----------|
| 35 | 650 |
| 35 | 750 |
| 35 | 900 |
| 70 | 950 |
| 145 | 1000 無回転 |

223

9月15日 11AM、

5日目、チャージ率は、

| | CPM | 電圧 | |
|---|-----|------|-------------------------------|
| 1 | 50 | 750 | |
| 2 | 55 | 900 | |
| 3 | 95 | 950 | |
| 4 | 250 | 1000 | |
| 5 | 400 | 1000 | |
| 6 | 650 | 1000 | |
| 7 | 670 | 1000 | |
| 8 | 700 | 1000 | 回転最適条件 (およそ毎秒 12 インパルス) |

回転効果は、5日後に初めて現れた。

雨天の9月16日の率は、1ビット少ないだけでほぼ同じでした。

1947年9月15日に、昼過ぎ、これまで常に木の建物の近くに置かれ、OR-チャージされた研究所ホールには、なく、たぶん充電されていない測定管 No.I によって研究所の近くの大気

圏の **orgonotic** な状況を測定しようとした。

私は、「宇宙放射」に対する普通の反応率すなわち、8-12 cpm を見ると予想した。

私は、間違っていた。

測定値は、私の研究所のポーチの上のオープンな新鮮な外気で以下の通りでした

| CPM | 電圧 | |
|-----|------|---------|
| 46 | 650 | |
| 60 | 1000 | (回転でない) |
| 53 | 750 | |
| 52 | 750 | |
| 42 | 750 | |
| 36 | 750 | |
| 46 | 750 | |
| 41 | 750 | |
| 50 | 750 | |
| 40 | 750 | |

予想通りに、測定管 No.II との対比で、000 ボルトで回転はありませんでした。

しかし、750 ボルトの測定率は、新しい測定管であることと、研究所から離れたことと、戸外での測定値であることを考慮すると、非常に高かった。

224

私は、概して高まった **OR** エネルギー室の **OR** エネルギーの放散が、建物の壁の範囲を越えて、遠くオープン空間に届くと思った。

私は、正しかった。

私が研究所の外の壁から、およそ 50 フィート離れたポーチの上に **GM** 計数器を置いたとき、建物の中とポーチでは、ほぼ同じ 750 ボルトでおよそ 60cpm の率を得た。

もちろん小さい木の建物にさえもオルゴンエネルギーがあり、測定管が吸収したという他の可能性があったが、自身のエネルギーチャージと測定される。

手元までケーブルでつなぎ、装置を研究所からさらに離して設置することは不可能でした。**OR** エネルギー研究所の近くにない、完全に新しいチューブの、チャージが何か、後まで確定できないままでした。

オルゴノンと、フォレストヒル (N.Y.) のすべての建築が少なくとも 1 つのオルゴンアキュムレーターがあるので、どこでオーゴン・エネルギーの仕事がされても、空気が **OR** エネルギー集中で「汚染されている」と予想された。

しかし、研究所から 50 フィート離れたところでの、60crM の高率はオーゴン研究の中で大きな発見だった!!。

雷雨の間、なぜ研究所が **luminare** するのか、そして、直接的な稲妻で打たれはしなかったが 1947 年 8 月の初期の特別の雷雨で、**OR** の部屋の中でなぜ強い放出を聞いたか、現在はよく理解できるようになった。

金属で覆われたエネルギー室は、どの場所も太いワイヤーで地上にアースされる。

これは、雷雨の間の、アキュムレーターのチャージに対して安全性を保障する。

同時に、金属室の中の高電圧で働く誰にも若干の危険がある。

この部屋の中の全ての仕事は、足の下に重い絶縁材料をおく。

これまでに到達した一般的な結論は、以下のとおりだ。:

1. 運動力の発生にとって強い金属のアキュムレーターを含む構造の存在が必須のようだ。
(すなわち **GM** 測定管の中のインパルス状況でさえ)
2. レコーダーに回転を生じるには、カウンターチューブが何日か、または何週間かの間、オルゴンエネルギーを吸収しなければならない。
3. それは、現れるが、金属で覆われたエネルギー室で、大気の **OR** エネルギーの効果的な集中を生じるには長期間機能させなければならないということはまだ確実に、確立されていない。
4. それ自体を造っているオーゴン研究所に、広くて、強い効果的オルゴンエネルギー・フィールドがあり、建物の戸外で 50 フィート離れた所に置いた新しい測定管の測定値率によって示された。
5. 6-8000 crM (毎秒 100-130 インパルス) の率は、決まった **GM** フィールドで 8 週間の露出の後成し遂げられ、新しい測定管を大気の **OR** エネルギーを集中したものへほぼ 3 週間、露出した後の、**GM** 測定装置、**CMB 3 A** では、再現されなかった。

225

ガイガーカウンター・チューブが **organotically** にチャージすることがありえ、保持することができ、自身のチャージとみなせるという私の知っている事実は、原子物理学に知られていない。

原子物理学によれば、ガイガーカウンター・チューブは、放射するような構造ではない。

測定管は、外部からの放射線が透過することで、ヒットすると仮定される。

インパルスを測定するために核放射線に関係する一部が測定管の近くになければならない。そのような核放射線源がないところで、測定管が放射線を記録すると、原子物理学は何でも「迷える放射」にする。

ちょうど検電器の自然発生的な放出を「自然リーク」として説明する時のように、「迷える放射」は、特定できるエネルギー源なしの測定管の作動を説明する。

それは「迷える放射」と呼ばれているが、「自然リーク」、「静電気」、「熱波」、「悪い視覚」は現代の物理学に知られていない大気のオルゴンエネルギーの明確な影響である。

器具の近くの、金属の堆積、単純な鉄、鋼のウール、その他が、大気の **OR** エネルギーま

たは同類を濃縮し「宇宙放射のいわゆる「背景」の測定値を変える。

宇宙放射の源はこれまで測定されなかった；

さらに、強力な大気の OR エネルギーが *electroscopic* な放出率で示された時、温度と、ガイガー・マラー・カウンターとの違いの問題が、必然的に起こる：

1.いわゆる宇宙線ではなく、単に大気の OR エネルギーの自然な普通の表れなのか？

OR エネルギーが我々の惑星に循環するエネルギー膜として、示されたとき、それは遠い宇宙に起源があるとすることは必要なのか？

2. ガイガー・マラー・カウンターの宇宙放射線の率はおおよそ **8-15cpm** に達し、これは、いわゆる「バックグラウンド測定値」といわれる。これはオーゴンが集中化してない大気の通常率ではありえなかった？

オーゴン物理学では、ガイガーカウンターの測定管の構造はミニチュアなオルゴンアキュムレーター（外側の非金属の物質と内側の金属シリンダー（陰極））に類似しているという事実と、非常に *orgonotic* に集中した空気中、十分オルゴンエネルギーに浸ったときのキャパシティが理解できるようになる。

我々は、以下の見解から測定管の動きを理解しなければなりません。

測定管が集中した OR エネルギーにさらされずに使われるとき、いわゆる「宇宙線」としていわれてきたもののおおよそ **8-15cpm** は、大気のオルゴン光線の通常自然率を測定すると仮定される。測定管を集中したエネルギー・フィールドの近く、又は中に、持つてくると、これまでの観察によれば、**40 と 60 cpm** の間の率を測定した。

226

チャージされてない測定管は周囲の空気からの放射線を測定するとある程度は推定できる。測定時、測定管は大気の OR エネルギーが集中しないように保たれるが空中の OR エネルギーが集中化した時の測定値では、特定限度の範囲内で変化し、測定閾値が **650 から 750 ボルト** から、**50 から 100 ボルト** 上にいくだけで、毎分 **60** の測定値は回らない。

950 または **1000** ボルトで、測定値は毎分 **80** または **90** インパルスまで上がるかもしれないが、ポインターの回転はレコーダーの中になく、速くもなく、連続的でもなくなる。

-オーゴンの集中した大気に測定管を続けて置いた時、同じ電圧で、始め、毎分 **40** のインパルスで、最高毎分 **80** を発生する。

それは測定管は、現在の放射線を測定するだけでなく、測定管それ自身のエネルギー含有量を加えて測定することを意味している。

電圧を増やすと、インパルスは総計で着実に多少増加する。

カウンターを特定の期間周囲の空気の高く集中したオルゴンエネルギーから、エネルギー

を吸収させた後、ペインターの多少迅速な回転は、始まり、おそらく 850 または 900 ボルトでインパルスの「爆発」から始まって、およそ毎秒 5 から 10 のインパルスから毎秒 30 から、40 以上のインパルスのむらのあるペインターの回転をゆっくり続ける。

およそ 900 から 1000 ボルトの電圧が、OR エネルギーがチャージされた測定管内部により長く作用すると、毎分の率がこれまで以上に上がり、電圧は同じか、50 または 100 ボルトの電圧が安定して減少する。

更なる電圧の増加は、増加させず、率を減少させる。

この点を強調したい：

30 から 50 の cP~の測定数値にたとえどんな解釈を適用したとしても、

インパルス記録器のペインターの回転の上昇は、測定管内部に非常に集中する OR エネルギー以外の、他のどんなエネルギー源でも説明することができない。

これは、全く異なる性質の実験によって、後で補強される。

大きい金属のオルゴン部屋が回転を生じるのに必要かどうかに関係なく、近所の OR アクキュムレーターが存在は、同じ効果を生じるのに十分かどうか、まだ決定されていない

227

全ての **orgonotic** な機能の場合のように、チャージされた測定管と生きている有機体の間の機能特性は、確定することができる。

戸外に置いた測定管で測定するとき、アクキュムレーターの中のとより、エネルギー出力がより速いようだったと、私は、始めに、報告した。

それはオルゴンエネルギーがアクキュムレーターの内部に吸収され、測定される間、放出されるのを示しているようだ。

生きている有機体は、まさに同じ方法で反応する。

温度（主観的な感覚）の上昇で見られるように、それは OR エネルギー・アクキュムレーターの内部の OR エネルギーが顔、その他を赤くさせチャージさせる；

それがチャージされたあと、戸外がより活発で元気な感じがします。

日なたのチャージと、水の中へのオルゴンエネルギーへの放出（水が OR を吸収するので）の原理から、有機体の入浴は、太陽と水のさわやかな効果と同じように関係する、と問題なくいえるだろう。

生きている有機体の中には連続的な交互にチャージと放出から成るオルゴンエネルギー代謝と呼ばれるものがあるかもしれない。

健康な有機体は、大気の OR エネルギーを多く吸収して、すべてのスポーツの場合のように、オルガスムの満足感をもって、後で大いに放出することができる。

弱いか、病気の有機体は、周囲の大気からのオーゴンで、自体を充電する低い能力を持ち、オルゴンエネルギーを放出する能力も減らされている。

言い換えると、それは低いオルゴンエネルギー代謝を持つ。

我々はどんな形であれ低いものから高いレベルに向かう、逆になったポテンシャルを仮定しないならば日光浴において有機体に生物エネルギーをチャージすることを説明することができない。

有機体またはガイガー・カウンターの内部のオルゴンエネルギー集中が周囲の空気と比較してきわめてわずかな違いでもより強いシステムであるチューブ測定管または有機体に、自動的に自動充電式プロセスを引き起こし、それによって空中からより一層オルゴンエネルギーを、集める。

そこにも、始めに、説明したように、自動制御原則は、オーゴンチャージ「容量」の安定したレベルがあることを意味し、周囲の空気への放出またはエネルギーを通して、そのレベルは維持される。

さもなければ、生きている有機体は、(測定管と同様に)最終的にオーゴンチャージで「いっぱいになる」。

いずれにせよ、ポテンシャルの高いものから低いレベルへ向かうメカニカルな法則では、測定管、または生きた有機体の自己管理機能を決して理解可能にならなかった。

電位差のメカニカルな法則では、高いチャージは、維持することは不可能だ；

それは、エネルギーを囲む低いレベルから、増大することはできない。

有機体は、常に、エネルギーを失わなければならない。

228

表 A (230 ページ) は、明らかにこの反応の機能的特徴を示す。

1947年8月31日2時30分から3時30分で、ORの部屋で3日間つからせた後の測定管 GLC-11 型、フィラデルフィアの Herbach と Rademan 社製) での1回の実験で電圧の中のチャージは、以下の率だった：、

| CPM | Voltage |
|------|---------|
| 60 | 700 |
| 60 | 750 |
| 70 | 750 |
| 185 | 800 |
| 250 | 850 |
| 770 | 900 |
| 1450 | 900 |
| 1100 | 1050 |
| 1500 | 1000 |
| 1500 | 900 |

| | |
|------|------|
| 1830 | 1000 |
|------|------|

表 B (231 ページ) は、宇宙放射線、原子力エネルギーと OR エネルギーの測定数値との違いを示す。

ガイガー-マラーでの核放射線の典型的反応と測定値に一致するカーブは、「バートン・ホーグの、「電子と核の物理学」 Barton HOag, ELECTRON AND NUCLEAR PHXSICS.からのものである。(ニューヨーク、1938 年、429 ページ。)

NR 核エネルギーの測定値は、OR エネルギーより高い閾値電圧を必要とする。

この仮定の一般的な正当性は、異なる測定実験によって、そして、チューブのいろいろな種類で確立されなければならない。

b. 核エネルギーの測定において、「高原状態」(p) は現れる。

高原状態は、OR エネルギーではない。

電圧の数値は多少急速に増加する。

ホーグに従うと宇宙放射による「バックグラウンドカウント」は最大で毎分平均 4-8 を数え、電圧 1200 ボルトと同じくらいの高さの ca. 50 から 60 カウントである。

およそ 1150 ボルトで他の NR エネルギーの最大カウントは、およそ毎分 300 または毎秒 5 です。

閾値電圧で 700-750 ボルトでのオルゴンエネルギーの平均出力は (測定管 GLC-11 と GM CMB-3 A で) 合計 68 カウント (68 分) 75crM.であった

10 日にわたる 21 カウント (21 分) の電圧 800 と 850 ボルトの間の平均は 583cPNr で、した。

その日の同じ時、52 分間の (52 カウントの) 平均は、900 と 950 ボルトとの間で 1141cPNt でした。ca. 1000 ボルトで 1 203crM (15 カウントまたは、およそ毎秒 20) でした。

229

c. 図 C (232 ページ) は、950 ボルトの一定電圧で、連続的な 6 分以内の cpm の変化率を示す。

| | |
|----------|----------|
| 1 minute | 800 cpm |
| 2 minute | 850cpm |
| 3 minute | 1300 cpm |
| 4 minute | 1200 cpm |
| 5 minute | 1250 cpm |
| 6 minute | 1300 cpm |

.....

率は、2cm 離れるか 2 cm 以内に置かれた測定管で。1 立方フィートのオルゴンチャージャ.に 1 分以内おかれた鉄..

cPr 2分~

表 D (233 ページ) は、1947 年 9 月 9 日に制御チューブ No.I でのテスト結果を示す。それは研究所ビルディングの外およそ 50 フィート離れ、オーゴン金属室からおよそ 100 フィート離れていた。

(同じ方法で測定された) もう一つのコントロールチューブ (III) の 20 分の連続的測定値は、下である。

| CPM | Voltage | |
|-----------------------------|---------|------|
| 40, 45, 45, 30 | 700 | M.T. |
| 42, 40 | 750 | |
| 50, 40 | 800 | |
| 65, 45 | 850 | |
| 56, 62 | 900 | |
| 150,950,1350,1400,1350,1300 | 950 | |
| 妨げられた遅い反応 | 1000 | |
| 40 | 700 | |

コントロール管 No.III もまた、OR の部屋と、その研究所の建物の外の 100 フィートまでの OR エネルギーを吸収し、1 ヶ月後に、2、3 日測定管 II と比較した。

このチャージはおよそ毎秒 23 のインパルス率の、回転を生じるのに、十分だった。

この事実は、研究所ビルディングのまわりの少なくとも 100 フィートの幅の、強いエネルギー・フィールドを示している；

それは、Oranur 効果の理解にとって重要です。

e. 表 C と D で報告された、同じ電圧でのインパルス率の変化は、原子の連鎖反応で、おそらく、私を知る限り、未知のプロセスを示している。

これは、orgonotic な機能の中の自動チャージ方式の、自己規制する、上に向かって進む機能だ。

メカニカルなプロセスでは、人はより強い反応を成し遂げるためには、より高いかより強い刺激を適用しなければならない。

刺激と反応の関係は線形(入力と出力の関係が等式で関係付けられる)だったりそうでなかったりするが、最後の効果はいつも同じ刺激量によっている。

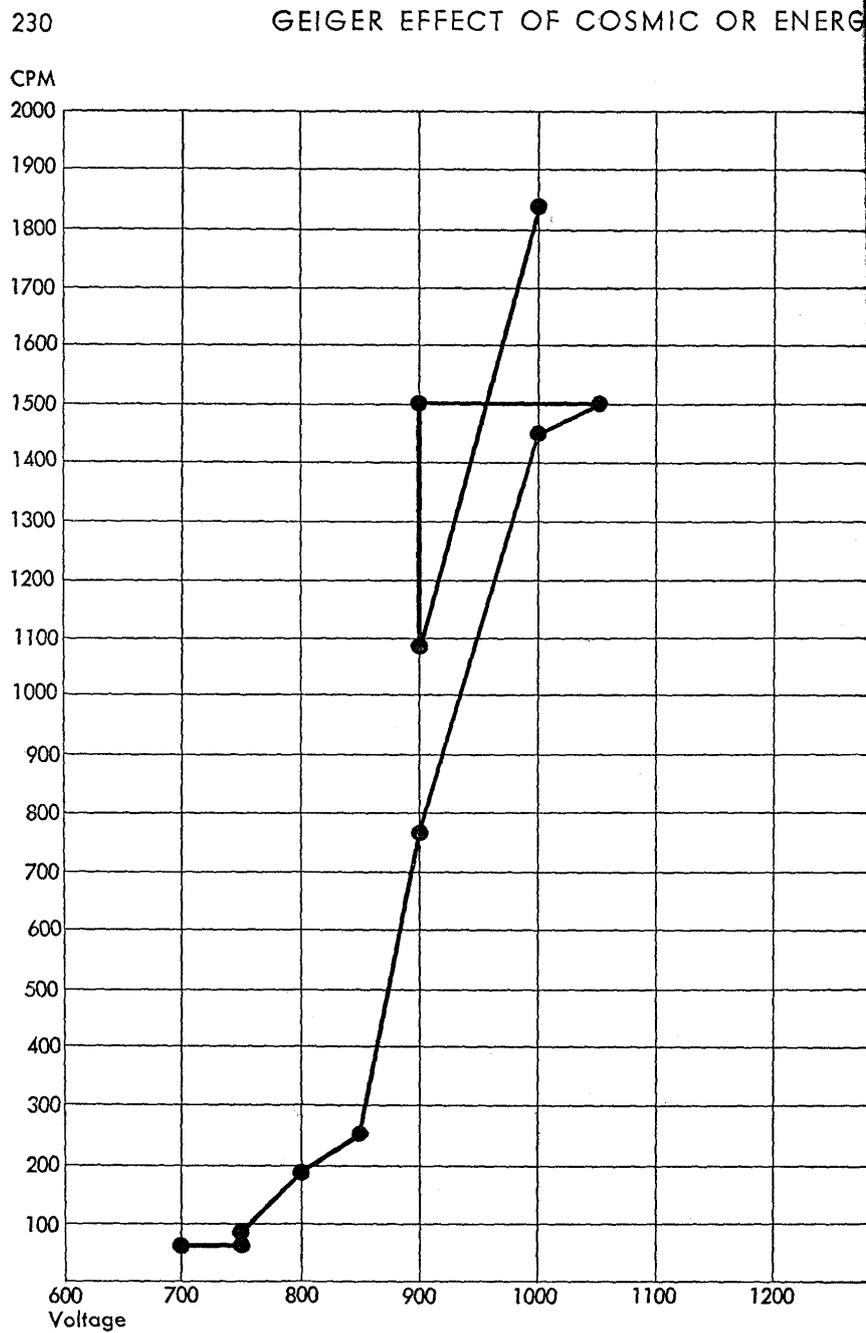


Chart A. CPM with GM Counter CMB-3A, Tube GLC-11, Aug. 31, 1947, 2:30-3 P.M.

☒

A.

1947年8月31日、午後2:30-3時 GM測定器 CMB-3 A、測定管 GLC-11、による cpm

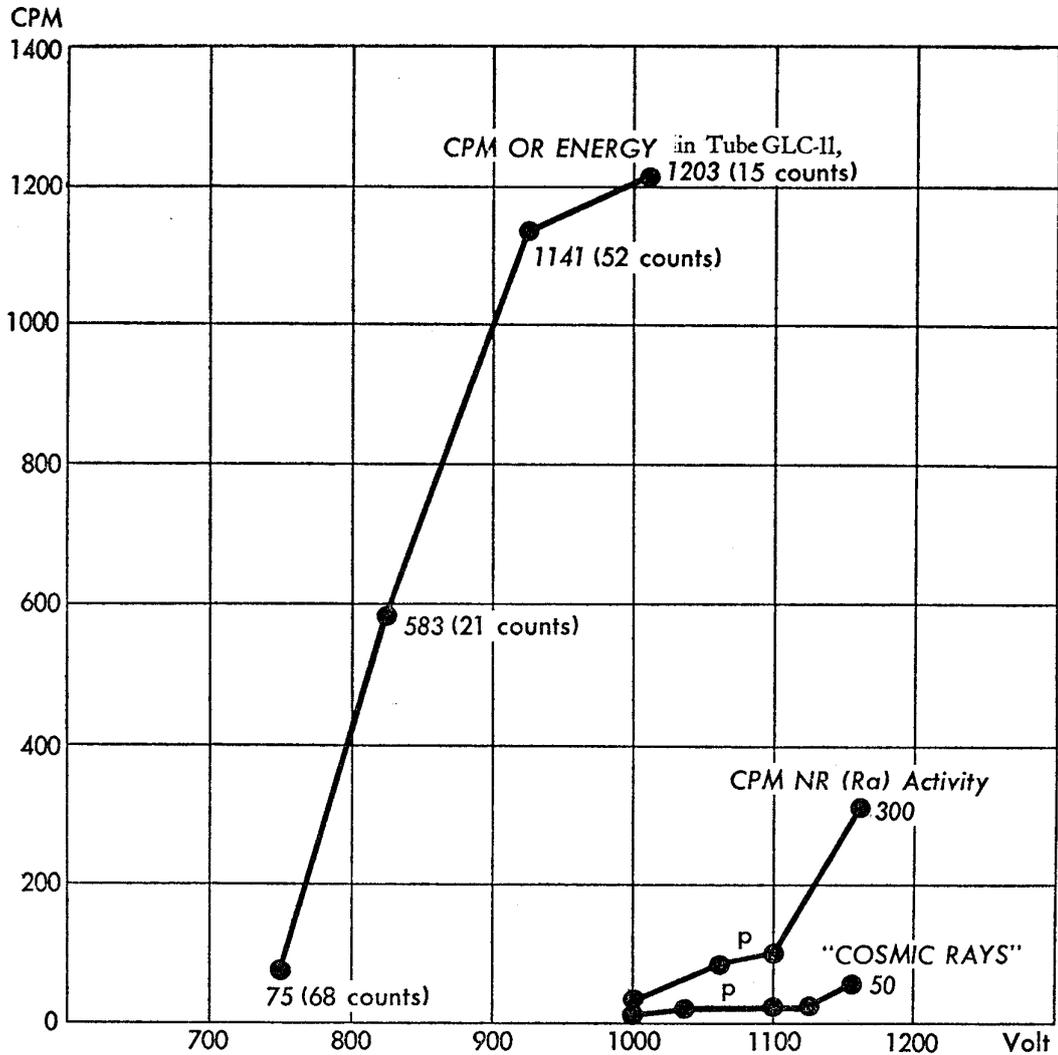


Chart B. TABLE OF COMPARISON

OR; NR; "COSMIC" RADIATION ("BACKGROUND") at approx. 1000 volts. Average CPM: 1203; 25; 10. (NR and COSMIC RA data according to Hoag.) Measurement of OR July 31-September 9, 1947 with GM Counter CMB-3A (Herbach & Rademan); GM-Tube GLC-11.

図 B 比較表

OR オルゴンと NR とコスミック放射線;

およそ 1000 ボルトでの (「バックグラウンド」の「宇宙」放射は平均 1203 : 25 : 10cpm. による (ホーグ Hoag に従った NR 放射線とコスミックな放射線の対比データ。)

1947 年 7 月 31 日から 9 月 9 日までの、GM 測定器は CMB-3 A (Herbach と Rademan 製) での OR の測定; GM 測定管は GLC-11。

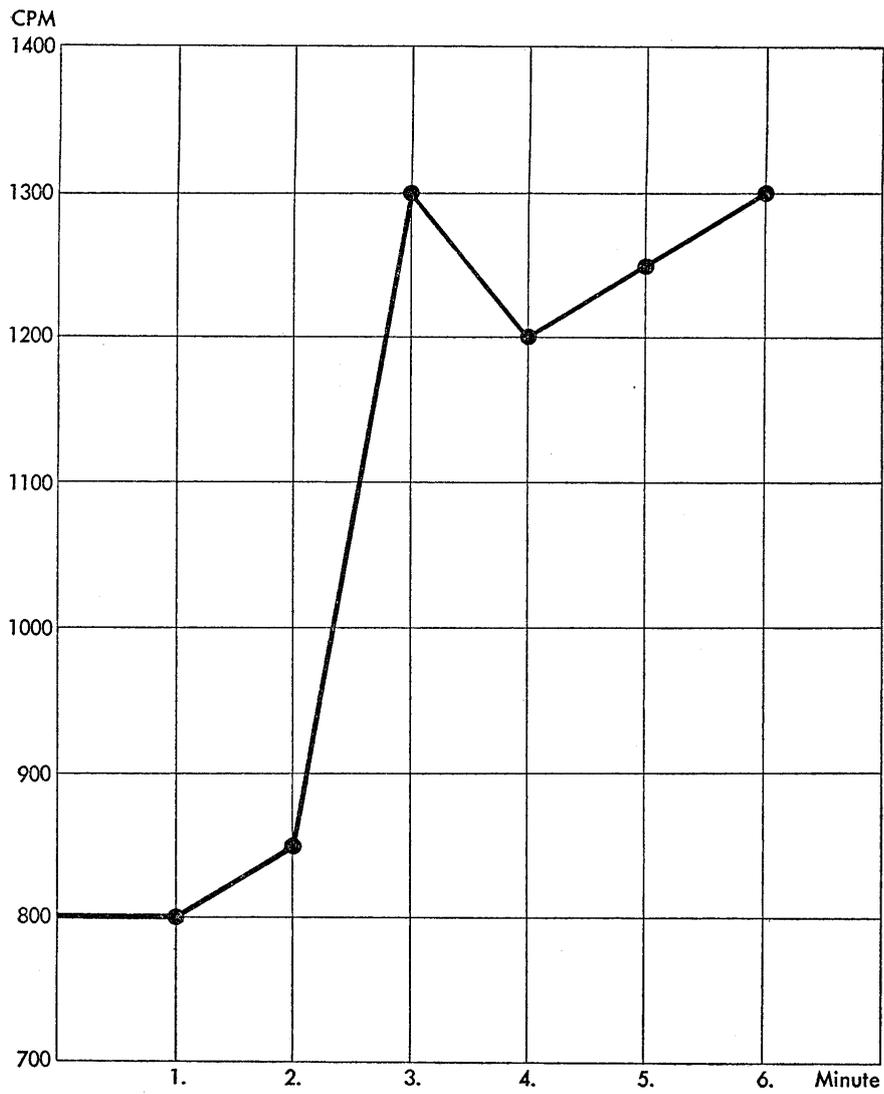


Chart C. SELF-CHARGE IN OR ENERGY

OR-charged GM Counter Tube (GLC-11) operating during six consecutive minutes (with GM Counter CMB-3A) at 950 volts, kept steady. Counts were made with tube placed within 1 cm. lead and $\frac{1}{4}$ cm. iron cylinder within a one cubic foot OR charger.

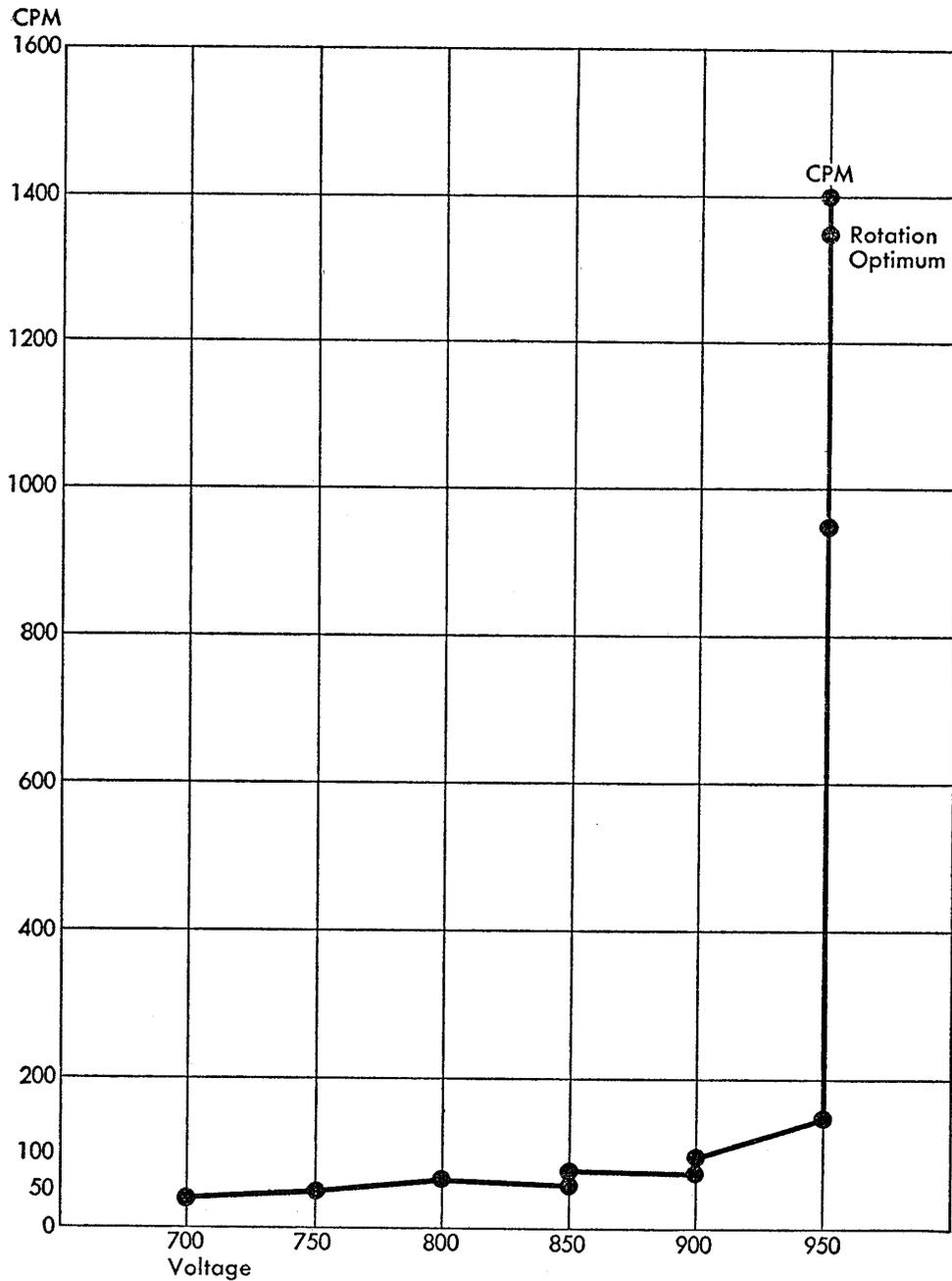


Chart D. CONTROL TUBE (1), kept OUTSIDE OR laboratory, after one month exposure to OR energy field of OR room, 100 ft. distance, has soaked up enough OR energy to yield rotary motor effect; measured during eleven consecutive minutes (Sept. 29, 1947).

これは、オーゴン物理学の中の法則ではない。

単にそれ自身の機能を通して、更なる外の刺激なしでも、感情の強度（生きている有機体の明確な **orgonotic** な機能）が増大するエモーショナルな反応がありえることを、我々の仕事で知っている。

セクシュアルな機能で、刺激は同じなのに、影響を与えることが終わってしまうかもしれない；

orgonotic な刺激は、単にそれ自身の内部の力学だけによって増加するかもしれない。

これはおそらく最も代表的な未発達な発展段階の **orgonotic** な機能でも同じように真実です；

、細胞分裂と発展への始めの刺激は、単に精子による卵子の侵入だけです。

しかし、この一つの刺激は、自励のプロセスを動かし、未発達な部分の強い発達と、**orgonotic** なポテンシャルのエネルギー・の増加プロセスにとって十分です。

さらに、アルゴン・ガス・チューブの **orgonotic** な **lumination** の場合でも同じです。

一定のままで動くオルゴンエネルギー・フィールドのそばで、我々はガス入り蛍光管を興奮させる；

もし **lumination** をより長く増やすと、同じように測定管に刺激を与える。 .

我々が自己規制する生きている機能を理解するならば、北極光として、たとえば、身体的で天文学的でさえあるエネルギー現象をよく研究することができると始めに、言った。

これも、GM 計数器の反応にあてはまる。

3 分間の 850 から 1300 へ測定値の上昇は、ますます OR エネルギー海から **orgonomic** なポテンシャルエネルギーを得て、非メカニカルな、自己規制する、機能処理をするエキサイトした、**orgonotic** なシステムの能力のためだ。

これは、多くのバイオエネルギー的な機能の理解のために重要です。

「有機体」と呼ばれているエネルギー・システムがすなわち、高いところから低い方へのメカニカルな電位差の法則だけならば、機能を維持することができなかつたのは現在全く明白なようです。

有機体は、そのエネルギーを失います；

それは、周囲の空気に必然的に消える。

それが絶えず環境より高いエネルギーレベルを保たないならば、有機体は速く溶解するでしょう。

有機体の中の **orgonotic** な波動が機能するのをやめるとき、実は、これが起こります。そのとき、「死」が起こります：

体の物質はその一貫性を失い、「ばらばらになる」；

Orgonomic なポテンシャルがゆっくり減少し、ついに機能するのをやめると、それは周囲のエネルギー・レベルまで低下し、そのオーゴン・エネルギーを失う。

「老化」は、したがって、**orgonomic** なポテンシャルのゆっくりとした減少と生物エネルギー

一の損失の表面への現れと考えられるかもしれません。

4. 真空でのオルゴンエネルギーのチャージ

(VACOR Tubes チューブ) (1948 年)

概略

高い cpm 出力の原因の追究。

GM 自動測定器.でのオルゴンエネルギーの特性

悪天候での効果の消失。

生命の中と、非生命システムの中の OR エネルギーパルス。

バイオシステムの **Orgonomic** な機能はパルゼーションで表れる。

生命システムでのパルス率の変動。

空気と地面の中での脈動機能。

ラジオの中の生きた **alive** アンテナ-グリッドワイヤー。

ラジオの機能についての単純な質問と「空气中細菌」的答え。

ガス・イオンがない状態での **Orgonotic** ガイガーの動き。

疑問と、実験と答え。

Vacor 真空のルミネーション

「イオン化」理論への反証。

「空間の物理的特性の問題。」習慣化された技術的方法を離れて。

Vacor 真空エネルギー・フィールドの測定方法。

電子スコープの目盛。

ORG.の定義。

Orgonotic な単位のインパルス発生領域。

高い cpm 出力の原因の追究

私は全ての実験の間、複雑でない装置 GM 測定装置 CMB-3 A と他の若干の種類 of 測定管で非常に高率のパルスが得ることができるという、印象を持った。

この問題のもつ重大な意味から、OR エネルギー出力の性質と量を発見するために可能なすべてを十分にテストしなければならなかった。

したがって、同じ会社に、単純な GM 装置 1 個 (GM モニターと GM 測定器 3 個) と測定スケール 32 の装置を注文した。

Herbach&Rademan 社の計数器 (モデル GL-532 C) は、1947 年 12 月 2 日に到着した。

この測定装置は、1 から、4、8、16 または 32 のインパルスだけを計ることが可能です。

この、インパルスレコーダーは、容量を越えた速度まで上げられない。

インパルス測定装置を通して届くインパルス数を増加させ、測定し、そして毎分の測定数 (cpm) を計算する。

-235

THE VACOR TUBES

真空管

我々のケースで、時間単位は、60 秒でした；

理論的に特別重要なカウントは 64 秒。

32 の測定装置による実験で確かめると、今まで使っていた GM 装置で得られた主な調査結果が、強調される。

回転最適条件がおおよそ 925 から 950 ボルトまでの、普通の非自己消去型の測定管を用いてそれは見つかった。

異なる測定管による異なる尺度での測定のコントロールは ca. 50 から、100cpm までの範囲の、正確な活動を明らかにした。

不確定なへりは大きくなく毎秒 40 から 50 インパルスのなかに含まれる。

、また、メカニカルな方法では、たとえば、機械的なホイールでは、オルゴンエネルギーが厳密に機能しないことを心にとめなければならない。

測定器で OR エネルギー・アクションの特性を研究することは、非常に簡単でした。

特定のグループの数が反復したことは、目をひいた；

特定のインパルス率のレベルは、規則的にみえた。

これらすべては、更なる詳細な仕上げを必要とする。

現在の重要なことを固守しよう。

普通のガス入りの蛍光管を使った、GM-測定器 (32) で毎秒 50 インパルスまたはおおよそ毎分 3000 の率を生じたように私には思われたのに、GM CMB-3 A では最高毎分 1800 の率を生じただけだった。

1947 年 12 月 2 日から、1947 年 12 月 22 日までの、フォレストヒルでの 20 日間にわたる測定値の結果が、ここにある：

201,957 インパルス；

4640 秒；

平均おおよそ毎秒 45 インパルスです；

毎秒の最高率 (50.6)

平均の測定値は、毎分 2814 (cpm) でした；

一回の最高カウント数は、毎分 3036 でした。

これらの測定において使われた測定管は非自己消去型 non-selfquenching のフィラデルフィアの Herbach と Rademan の GLC-10 型でした。

鉛のシリンダーの内側の測定管とテーブルの上では測定値は、同じであった。

自己消去する測定管でも、類似した結果だった。

最高割合 32 でさえインパルス速度を吸収するにはあまりに遅いことが分かった。したがって、(1947 年 8 月の本来の) 毎秒 100 インパルスの回転率を得るための、問題に対処するために、できれば、64 から 128 までの付加的な尺度を入れることを計画した。私はまだそれを得ていない。

しかし、以下の現象が、観察された：

インパルスレコーダーの回転効果は、作動の最初の数分間は (2-5 分) 遅かった。

それは、最高効率を得られる前に、測定管の中の OR エネルギーが「ウォーミングアップ」期間を必要とするかのようなようでした。

オーゴン・エネルギーパルス

237

したがって、率が特定の一定のレベルまで高く増加した時だけ、ガス入りチューブでの測定ドキュメンタリーは開始しなければならない。

ある日、激しく雨が降っていたとき、計数器は全て動くことがなかった。

良い天気では効果は、再び現れた。

この現象は、雨の日の **orgonotic** な温度の低下と違いと完全に関係する。

我々は、後で **orgone-charged** された真空管の中のインパルス率は気象状況に明確に依存してないことがわかるだろう。

2 から 3 週間にわたってオルゴンエネルギーを吸収した新しい測定管でおよそ 3000cpm の最高回転率を得ることができた。

古い、非常に使われてきた測定管は、低い率になる。

したがって、チューブの「年齢」は、OR 効果を説明しない。

出力の低下は線形でなく、たとえば、毎分 2600、毎分 1200 から 1300、毎分 600、などで特定の数値レベルに一致するようである。この動きの断続的性質は、依然として不明瞭である。

しかし、この現象の断続的な特性は、明らかに、宇宙オーゴン・エネルギーの機能可能な数値レベルの認識に関係しており重要です。

異なる前後関係で、特定の長さの振り子の動作に、類似した現象をみる。

それは、この仕事の過程に起こった多くの問題と錯誤は、読者を **orgonotic** なモーター機能の発展とワークショップに、適切に運ぶのに必要なものでしょう。

私は、真空 (「VACOR」) における、オーゴン・エネルギーの物理的な複雑な特性の詳細を、もっと良く確認する方法を考えられなかった。

生きているものと生命の無いシステムの中でのオーゴン・エネルギーパルス

私は、この新しい領域の具体的な機能に関して完全に無知であると前に言った。

私は OR 物理学で 10 年間以上の十二分な実験的観察をしてきた；

私はその時これらを理解しなかった、しかし、今、全く異なる前後関係で観察の一部分に、重要性がうまれた。

これらの経験をまとめよう：

私の作業仮説は、非生命の自然でのパルゼーションと生命体でのパルゼーションとの間に、基本的機能特性の違いがあることを仮定した。

生命有機体の中のパルゼーションは、簡単に観察することができたが、生命の無い自然に類似したパルゼーションを観察する事は、難しかった。

望遠鏡によって数年間、西から東への大気のオルゴンエネルギーの運動を私は観察したのは、本当です。

また、それが波だけでなく、望遠鏡によって脈動--パルスが観測できることは確かでした

-238

押し出されるような波のコースの変化リズムカルに繰り返される。

客観的にそれを確かめる装置が、なかった。

かって私は、自然の中のプランクの量子力学的な動きに大きな印象を受けた、しかし、量子力学的な動きの間を関係付ける橋がなかった：

6.55×10²⁷ h エルグ秒に相当するパルスを、大気圏で観察したと信じている。

「大気圏の中のパルス」についての考えは、私の心を刺激した；

まだ、私は実際のな、客観的な方法で、機能を確認する試みは無力だと感じていた。

日中の空の大気オルゴンエネルギーの運動の慎重な観察は、明確に不連続で、リズムカルに脈動する機能という印象を与えた。

他方、これらの観察と後の GM 装置でのオルゴンエネルギーパルスとの間のギャップは最初埋めることはできないようでした。

しかし、両方の事実が真実ならば、両方とも統一的に結びつけ理解できる特定の共通機能が存在しなければなりません。

1944年に、Du Mont オシログラフ（タイプ 208B（製造ナンバー1214））を得て、生きた生命システムにつないでセッティングしたとき、特定の活動中の脈拍数がかなり増加したのがわかった。

オシログラフの脈動作は 1 秒につき 2 拍子（毎分 120）の割合でセットされた。そして、それは正確に時報信号のビートと一致した。

座標系の X 軸だけが、使われた；

Y 軸の振幅表示・システム）は、切断された。

アースは、使用されなかった。

外部の信号は、1 つの一つのワイヤーによってオシログラフのグリッドシステムを拡大するようになっていた。

毎分当たり正確に 120 パルスの作動の、基底の完成の後、外部信号は、グリッド拡張ワイヤーに入れられ、100 に向けられた測定値で、同期回路のスイッチがオンにして、完全に同

期する。

数年間にわたるこれらの観察とパルス測定的基本的結果は、人間の総平均で毎分 160-200 パルスの間でした。

地面と大気の間平均ビート率は毎分 900-1100 脈の間でした。

これらの観察は、まだ完了していません。

異なる人は異なる脈拍数を生じるが、彼らは基本的な毎分 160-200 のパルス率より毎分 120 パルス前後基底より常に速かった。

機能特性と思えることが、OR エネルギー・フィールド・メーターの、このパルス現象と lumination 効果の間にあった：

生きている物質だけに、脈拍数の増加反応があった；

生きていない物質（例えば乾燥した木または興奮してないプラスチック物質）

は、オーゴン・エネルギーパルスを変えなかった

239

パルスレイト

脈拍数。

OR 脈拍数は、鼓動のメカニカルな脈拍数と一致しない。

心臓の鼓動以外の生きた有機体の中のパルゼーションは、私の知る限り、知られていなかった；

そして既知の生物物理学の機能では、少しも、この脈を調整する方法が、なかった。

異なる人によってチャージは異なっていたが、基本的にセットした装置の基本数値に比較して、それは毎分 120、または毎秒 2、常に高かった。

一連のテストは、子供たちが老人より速い率を持ったという一般的な印象を与えた；

感情的に鈍い個人は非常に生きている人より、率が遅い。

脈拍数も日々のムード、機敏さ、疲労、その他の変化に従って、全く同一の人間で変化した。したがって、メカニカルな鼓動によらない独特なパルゼーションで表される有機的 biosystem の機能を、ここで扱っていることが結果的に保証された。

私が異なる種類の材質と装置で、生命のない自然でのパルゼーションが明白に同かどうか決定するテストをしたとき、驚きは来た。

私がオシログラフ（X軸）のグリッドシステムと地面をつないだとき、パルスレイトはすぐに増加した。

延長コードを延ばすことで率は、増加した。

しかし、地面から持ち上げ、地面の上、およそ 10 フィートに固定して、ワイヤーにつないだとき、パルスレイトは増加した。

私は、それを理解できなかった。

空中と、地面の中の同じ反応は、生きている有機体の場合のようだった。

私は、ここで生命体と、環境のオルゴンエネルギー海での organotic なパルゼーションの基

本的機能を、扱っていると仮定しなければならなかった。

変な事実!!

しかし、長年にわたって、私はそのような「変な」ものに慣れるようになった。

それは、私には良く知られていた多くの他の有名な **orgo-nomic** な機能と一致していた。

私には、この波動が、起こったところがわかんなかった、あるいは、違って表現するので、何が脈動しているかわからなかった。

しかし、私は、パルゼーションがどこで現れるか、あるいは、何が脈動しているか

1944 年初期には、私は、パルゼーションがたぶん初源的な宇宙 **OR** エネルギーの基本的特徴であるとし、理解可能になるにはパルゼーション現象のために脈動していない物質、または基底材質が要求されるという結論に、まだ達していなかった。

後に、それは脈動している地面の材質、または空気ではなく、地面と大気圏の中の **OR** エネルギーそのものであることを示した。

手短に言うと：

オシログラフで明白にわかるように、

生きている有機体と、空気と、地面に、これまで未知の、脈動する機能が、存在した。

1946 年に、私はこの現象についてもっと知ろうとして研究所で風船とオシログラフに細いワイヤーで接続して — 空気を満たした風船を約 500 フィート上空に送った。

240

地面より上に約 6 フィート伸び、ワイヤーが同じ反応を与えたとして、結果が確定的でないとしても、パルスレイトの上でスピードが上昇した

有機体と周囲の自然の中の脈動(パルス)は、後で **GM** カウンターで完全に確かめられた。

ラジオの中の生きているアンテナ-グリッドワイヤー

もう一つの観察は前年にされ、それは、プリミティブでおおまかな **orgonotic** なモーター力の探求の後で、大きな重要性を確かに占めるようになった。:

私は可能な場合はいつでも **orgonomic** な機能を決定するためにありとあらゆる材料と装置をテストした。

ほとんどの場合、私は独特な反応を見つけた、それは古典的物理学の中で言及された「説明」、と全くかけ離れており、まったくそれでは根拠にならなかった、この現象は「それ」と「これ」によってだけ説明されるものだった。他の技術的な問題についての私の知識は制限されていた;

したがって、私は少しの独立した意見も形成することができなかつたし、物理的技術者に逆らうことも全くできなかつた。

私は、数人の物理学者とラジオ技術者に、オシログラフでのパルスレイトのスピードアップを示した。

事例への反応は、各々で異なつた：

それは「これ」または「それ」だけでした。それは「単に静電気だ」か「キャパシティの影響だ」でした。すでに「非常に有名だ」とか「全て何ごともない」でした。私はこれらの回避的な答えと、私が数年前に他の領域で bions を発見したとき聞いたことと関係させるのに非常に時間がかかった。

それは「たんに空気細菌」（「たんにブドウ状球菌」）だ、または「たんに光の屈折」、あるいは、「たんに分厚い顆粒だ！」でした。

私の心は、これらの物理学者とラジオ技術者が明らかにまわりにあることを、単に知らなかったという事実を受け入れるのを拒否した；

おそらく日常の仕事の間、彼らはしばしば、これらの現象を理解しないまま遭遇し、どんな形であれ、これらを統合することができず、「これ」または「それ」として捨てた、しかし「これ」と、「それ」は後で宇宙 OR エネルギーの基本的な顕示であることがわかった。「これ」、そして、「それ」が感覚、または機械装置に現れようとも、私の非常に嫌われてきた強情な追求と対象となった。

1940 の初期、大気の中のオルゴンエネルギーの発見のあと、私は一生懸命にラジオの機能を理解しようとした。

ラジオ技術者にとって、すでにすべてはかなり理解されていたようだった：

241

ロサンゼルスで歌手は、マイクに歌い、電磁波は彼の歌をニューヨークのラジオ真空管のグリッドへ運び、そして、若干不思議な方法でラジオ真空管の「電子」はリスナーのために歌を複製します。

メカニカルな物理学者には少しの神秘的な心も、ない。

ラジオ管は、受動的なだけのレシーバーで、

「電磁波」は、特定の速度と特定の波長で「真空のスペース」を移動すると、メカニカル技術者は、完全に満足していた。

波の媒体は、必要ではなくなり、これ以後、複雑で、巧妙な、理解できないような、方程式は「エーテルを廃止した。」

我々は、音楽を聞く機能がまったく理解されないと主張しなければなりません

「もちろん、それは複雑な耳の構造の中の音を聞く複雑なシステムです。」、それはものごとを説明していないしなにも言ってはいない。

世界は謎でいっぱい、これらの謎を消す際に疑問を続けて持つ技術的「専門家」以外は、間違った既製のスローガンに満足している。

後になって、我々は全てのそのような空想的認識を「空気中の細菌」という一つの表題の下に包含した。

機械に強い技術者がラジオ機能を見る方法は私には奇妙でした、しかし、私には改良すべき何もありませんでした。

しかし、観察に基づく研究者として、私はこれらの技術者が好奇心と重大な質問のセンスが足りないのを感じた。

彼らは、理解したと思ったもので満たされ、どんな質問もしない。

場合によっては、無知は、傲慢によってすっかり覆われる。

私の指でアンテナにさわったとき、音量は増加した。

時々、独特な雑音が、あった。

運転中のラジオのアンテナ・ワイヤーの、金属にちょっと触れたとき、暗闇に慣れた私の目は、青っぽい強い火花を見た。

この現象がどのように説明されるか、有名なラジオ会社の物理学者に尋ねた。

彼は、これまで注意を払わなかった

彼は、しばらく困ったようだったが言った：

「ああ、これは何でもない；

これらは、(きっと『静電的な) チャージだ。』」再び「空気細菌」である！

私は物理の技術者から情報を得ることをあきらめた、しかし、特定の疑問が私の心を刺激した：

「なぜ金属部分にさわると、アンテナ・ワイヤーに火花がでるのか？

電子管の内部から来る若干の仕事エネルギーがなければなりません。、長年、私には答えがなかった。

私が知る限り、アンテナは、大気から電子管のチャージされたプレートと輝くフィラメントの間のグリッドに電磁波を送るだけだと仮定される。

それは、外部にエネルギーを放つようになっていない。

理論によれば、電子は真空管の「熱い」フィラメントからグリッドのテンションの変化の影響を受けたチャージされたプレートの陽極に移動することで、数千マイル離れても声を複製する。

-242

こういうことは非常にわかっていないが、ラジオは動いている。

しかし、多くの疑問は、未解決のままだ。

ガイガー・マラー・カウンターで、生命エネルギー的な反応を発見したときこれらの質問の重要性は再び、上昇した。

おそらく電子管は、「受動的には波を拾うことができない」；

それは、真空管内で、きわめてアクティブな *orgonotic* なエネルギー・システムでなければならない。

ラジオの音を大きく聞こえさせるとき、生きた有機体もアクティブな・レシーバーの働きをしている。

人は雷雨の間、稼働中のラジオに強い放出を聞く。

彼らは、「静的干渉」といわれている、増大する短いクリックです。そのとき、すぐ近くに

大気への放出がある。

これらは、大気圏での **orgonotic** な放出へのラジオ管の反応です。

これらは、雲だけでなく管の中の、エネルギー機能だ。

いったいなぜ、稲妻が襲ってるところから数マイル離れたラジオの中で、または、起こっている稲妻なしで音をたてる現象が現れるのか？

もう一つの観察：

車で高圧電線を通るとき、車のラジオは音をたてるか、クリックし始める。

私はこの独特な事実の説明に関して、いかなることも知らない。

なにか、ワイヤーの中の電気チャージは、ラジオ管で **OR** エネルギーを反映したという感じは、持続していた。

このことは、1940年代初期から非常に不明瞭であったが、1951の **Oranur** 実験の最中にその単純な解答を見つけた。

これは、**Oranur** 実験で大きな経験をした多数のオブザーバーの1人に観察された。

私の心の背後のこれらの印象をもってガイガー-ミラーカウンターでの実験にアプローチした。

しかし、**GM** 実験の最初の短い月日の間、これらは不可欠な役割を演じなかった。

これらは、いわば仕事の背景に、蓄えられた沈黙の経験として残っていた。

これらは終わりまで **orgonotic** なパルスアクションの機能と関係した、そしてこれらは重要なオルゴンエネルギー機能を整理するのに非常に有効だった。

私は、現在ガイガー-マラー測定管での測定を中断したところに戻ることを提案する：

オルゴン活動とルミネーション。

他の有名な **orgonotic** な現象に従って **GM** 測定管が機能することは、すでに確立された。

長年にわたって、晴れた、日が照っている天気で測定値は増加した；

これらは、雨、雪または雷雨が近づくと減少した。

これらは、好天の中では低い閾値電圧で作動することができたが、悪天候の中ではより高い作動電圧を必要とした。

ORGONOTIC ガイガー行動

243

天気がとても悪いとき、これらは全く動くのをやめた。

(1947年の) クリスマスの時に始まった猛烈な吹雪の後、新しく購入した測定管は、**OR** エネルギー室でまったくチャージしておかなかった。

1948年の間、悪意のある原子物理学者が私の **GM** 実験を「支配」しようとしたなら、彼は確かに私の実験が「全て間違っただけ」であったとし、測定管は核放射線による刺激なしには反応しないと、全て私の空想であったという結論に達しただろう；

「これ」または「それ」だけは「すでに知られていた。」

1947年12月の嵐のあと、およそ8から10日後 **Orgonotically** に通常どおり測定管が動き

始めたが 6 つのうちの 1 つの測定管だけは、2 3 日のチャージでなく 10 週間のチャージの後、非常に低いレベルで動き始めた、

私にとって暗室の中の測定管にオーゴンでチャージしたプラスチック棒を接近し、アルゴンガスの電球のように **luminated** するかどうか、知ることは、重要でした。

観察は、この主張を確かめた。

GM 装置と接合した それらの測定管は核放射線の影響から、自発的に活発で、また、**lumination**. した

他方、GM 測定器で「死んでいた」ものは、暗室で **lumination** しなかった。

したがって、結論は機能的にこれらの機能がどうも同一で OR エネルギーインパルスと **lumination** の活動が一緒だということが保証された;

暗室でオーゴンチャージされた測定管の粒状の **lumination** は、4 倍速から、8 倍速へスピードを速めて現れたと強調されなければならない。

GM チューブのいくつかが OR でチャージされた理由に関する問題とその他のことがありましたが、今日まで謎のままだ。

ガス・イオン無しの **Orgonotic** なガイガーカウンターの動き

新しい疑問が、やって来た :

電磁システムのインパルスレコーダーを起動させるように、大気のオルゴンエネルギーインパルスは GM 測定管で測定されるのだろうか？

または、放射線物理学が断言するようにインパルスレコーダーを作動させるエネルギーは、測定管のインパルスにまったく由来しないのだろうか？

原子物理学の出版物を通してと、同じぐらいよく数人の電子物理学者と私は、この問題をよく議論した、そのとき

原子物理学はガイガーカウンターでは、外側の放射能は、単に「ガス・イオン」の上で引き金のようなふりをするだけ全く確信していることを私は、知った。

244

VACOR TUBES チューブ

したがって、GM レコーディング・システムを起動させるエネルギーは、線で電子管（フィラメントとプレート電圧）まで来る電気に、その源を持つ。

測定管の中の各々の「イオン化現象」で、電磁エネルギー流が活性化すると即座に陽極と陰極の間の抵抗は、低下する。

この見解では、ラジウム光線は、装置の出力端でインパルスを全く何も記録しない。

何年も前、私の仕事の間彼らがちょうど現れた時、私は故意にこれらの疑問をプリミティブな方法で公式化した。

私は、このプリミティブな点を謝罪したい。

現象は、原子のものとは全く異なる見解から精細に調べられるべきだ。

この手順での最終結果は、思考と言語のアプローチが単純になる。

繰り返します：

GM の活動の放射性理論は、入射光が直接レコーダーを作動させ、インパルスが発生するのではないと主張する。

核の理論の仮定によれば GM 装置のグリッドシステムに接続する測定管の「陽極ワイヤー」に、検電器が付けられたならば、反応はないと予想する。

その付属品は電子アンプへの入力の前に、位置している。すなわち、GM 装置の電磁・メカニズムを作動させる拡張アンプのグリッドの前である。

1. 質問：

GM 管の「陽極」ワイヤーをとおして、GM グリッドシステムに付けられた検電器は、OR チャージに反応するか？

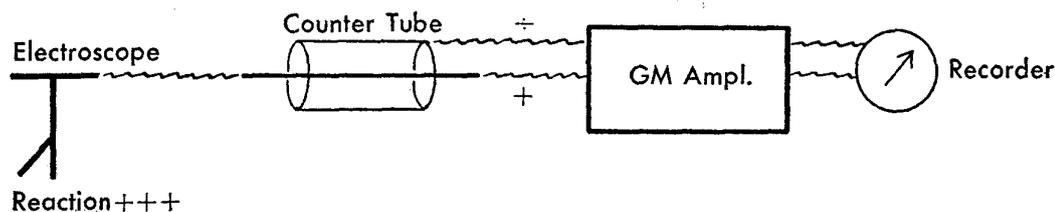


Fig. 4

検電器 Counter Tube 測定管 GM Ampl Recorder

反応+++

図 4

図. 4

この実験結果は GM 管を動かすインパルスは測定管の「イオン化現象」のたんなる引き金だという理論に疑問を呈した。

検電器のリーフ端子は、測定管の各々のインパルスで高くジャンプする。

すなわち、インパルスの連続がおよそ毎分 2000 インパルスの近辺にあり、十分に速ければ、検電器の金属ロッドからリーフ端子は絶えず遠ざけられている。

検電器での一つ一つのインパルスのエネルギーは

100-200 静電ボルトの範囲に、達する！)、すなわち、リーフ端子の作動を成し遂げるのに必要な電磁圧の量である。

速いインパルス持続の等価物は、検電器で 3000-4000 cpm より若干高く 500e.s.ボルトの近くでした。

これらは、信じられない相当な反応でした。

理論的に表される電子のマイクロボルトの、最小の総計に少しも合っていない

この大きなエネルギー量は、イオン化が、グリッドシステムをプラスに増幅する測定管の動作に関係するという理論を否定した

実験の次のステップは、最初から論理的に続けた：

2. 質問：

電子を増幅するシステムを起動するインパルスはアンプから現れるインパルスと同じ種類のものなのか

実験：

我々は、測定管の陽極ワイヤだけに 1 本のワイヤーで、目盛の決められたアルミニウムまたは金のリーフ端子検電器をとり付ける（すなわち GM アンプのグリッド）、そして、二番目の検電器と二本の線がついたレコーダーのジャッキとつなぐ。すなわち、レコーダーを取り替えることである。

アンプから出るインパルスが、入る前と同じならば、検電器の反応も、同じでなければならない。

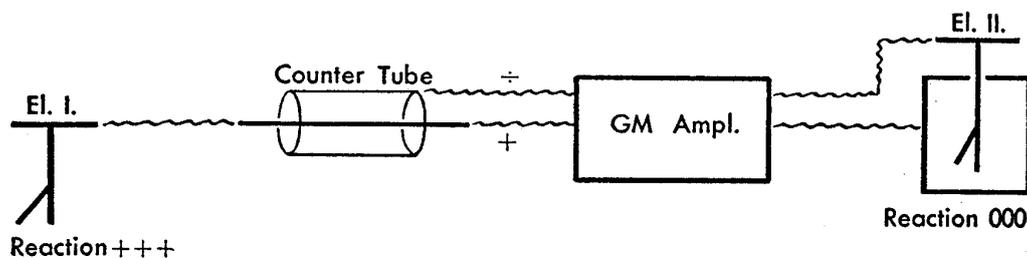


Fig. 5

リアクション+++

測定管

CM AMPL

反応 000

図 5

答え：

第二の増幅の後の検電器は、不活発で、最初の増幅の前の検電器は各々のインパルスに強く反応する。

したがって、電子システムに入っているエネルギーは、それから出ていくエネルギーと違う。

A で検電器と電圧電流計は、両方、反応します（参照図 6）。

出て行くエネルギーは、約 8-10 ボルトで、1 つのインパルスにつき 0.005 アンペアの数値を示す。

早い 2-3000 cpm に達するインパルスの連続にともなって（電圧電流計の中の電圧数値は 50 から 75 ボルトまで達する。

出力は、安定している。

より大きな（固定した）インパルス出力、すなわち（線形行動により近い）、エネルギー流だ。

インパルスの行動の不連続な特徴は、ほとんど完全に消える；

それは、線形の、安定した、連続的行動と取り替わる。

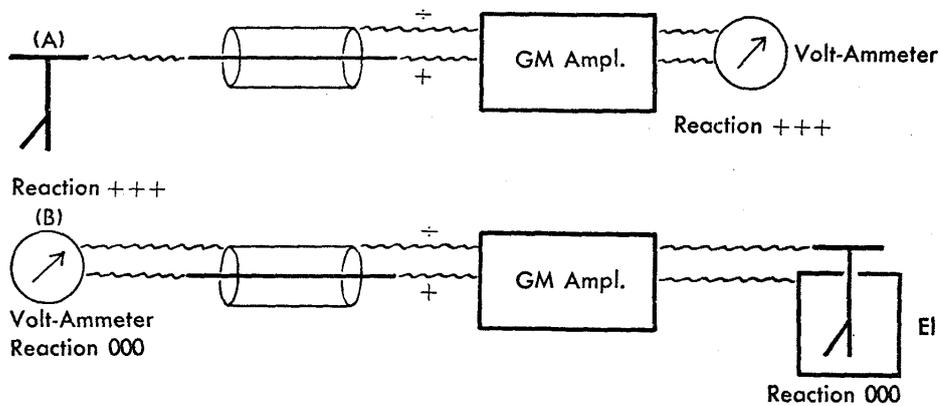


Fig. 6

| | | |
|--------|--------|-----------|
| (A) | GMAMPL | 電圧電流計 |
| 反応+++ | | 反応+++ |
| (B) | | |
| +電圧電流計 | GMAMPL | |
| 反応 000 | | 反応 000 EI |

図 6

これに対して、B 中の電圧電流計を検電器に取り替えた。

現在、両方とも完全に反応できるわけではありません。

我々は、以下の一般的な結論を出したいと思います：

入って来るエネルギーは、出て行くエネルギーと異なる種類だ。

最初は、オルゴンエネルギー（「静的な」）で、二番目は誘導電流である、電磁エネルギーで

す。

まだ不明な方法で最初のエネルギーの二番目のエネルギーへの変質が、電子管システムの内部で起こっている。

全ての発電機で動く電気装置が、地面からマイナス電圧を引き出す必要があることが、不可解だったことは、理論物理学者に知られている。

(性・経済およびオーゴン研究国際ジャーナル 1944 年 3 月,) の、「**Orgonotic** パルゼーション」で議論したように、「静」電気とガルバニック電気とは、基本的性質から区別する必要がある。

我々は、最終的な理論的結論を出す際に慎重だった。

OR パルスを装置へもたらし、電磁エネルギーをそれから取り出すという大事にしてきた我々の予想と、結論は肯定的に一致する。

247

オルゴンエネルギーの電磁エネルギーへの変換という大きい問題は、それによって解かれるようだ。

我々がしなければならない全ては、モーターをレコーダーのジャッキに付けて、「宇宙的なオルゴンエネルギーでモーターを動かすことだった。」

実のところ、この結論は、間違っていることが証明され、1947 年 8 月から、1948 年 7 月まで (**orgonotic** な回転力の、正しい答えを見つけるために、困難な思考と多くの実験を必要とすることになった。

私は、今上記の結論の重要な否定的事実を提示しよう。

No.3 の質問にたいする答え (245 ページ) は、もちろん、不満足でした。

それは、**OR** エネルギー・システムの全部の構造を単純化することが必要なように見えた。

私は、エネルギーインパルスの連続的な出力が素材装置によってどうも制限されたという印象を持った。

不必要な素材装置を除去する方法を発見するのは、簡単ではなかった。

理想は、全ての電子管の完全な除去で、どんな仲介と拡大なしで、直接大気 of **OR** エネルギーを機械的回転力に変える技術的な装置を見つけることだった。

それは、以下のことに答えるにはとても重要なことだった：

4. 質問：

測定管で始まるインパルスは、「イオン化現象」によるのか？

測定管のガス充填材は、エネルギーを集め、測定可能なインパルスを発生するのに必要なのか？

実験：

測定管は、今まで使われたものと同じデザインによって造られた：

円筒形の陰極は、直径 1cm、中心に陽極ワイヤー。

しかしこれらは、ガスで満たされていない。

これらは、数週間チャージするために OR エネルギー室に入れた。

答え：

ガスで満たされていない測定管は、GM 装置で測定可能なインパルスが発生しない。

これは、測定管でのガス-イオン化現象によるインパルスという電子理論を確認したようだった；

これらは確立した **orgonomic** な事実を否定したが、オルゴンエネルギーはすべてのものを透過する、したがって、真空の範囲内にも必然的に存在する。

他のどんな仮定も、調査結果とその発展過程の中で、これほど一致するものはなかった。

248

5. 質問：

OR エネルギーは、蓄えられ、高度な真空で見ることができるか？

実験：

この重要な問題を決定するために、原子物理学で使われる GM 測定管装置を完全に断念しなければならなかった；

インパルスの「イオン化現象」か、OR 効果かどうかに関係なく、**orgonotic** な機能に一致した装置だけが、謎を解決できる。

したがって、真空管を、真空に互いを反対側にして、4-6 cm 離して平行に挿入されたアルミニウム金属プレートで造る。

一種の「真空の中のオルゴンエネルギー・アキュムレーターは、このように構築された：

「真空管」

真空管の 0.5 ミクロン

電極 1

プレート 16x4cm.

Y プレート II. 16x4cm を（タングステンの線）で配線してください。

パイレックス耐熱を検電器エレクトロスコープに

電極 2

プレート電極：

長さ 16cm 広さ 4cm (64cm.2) ,aluminum で 4-6 cm.隔てる：

真空：

『I、中心のミクロン圧、タングステンの配線

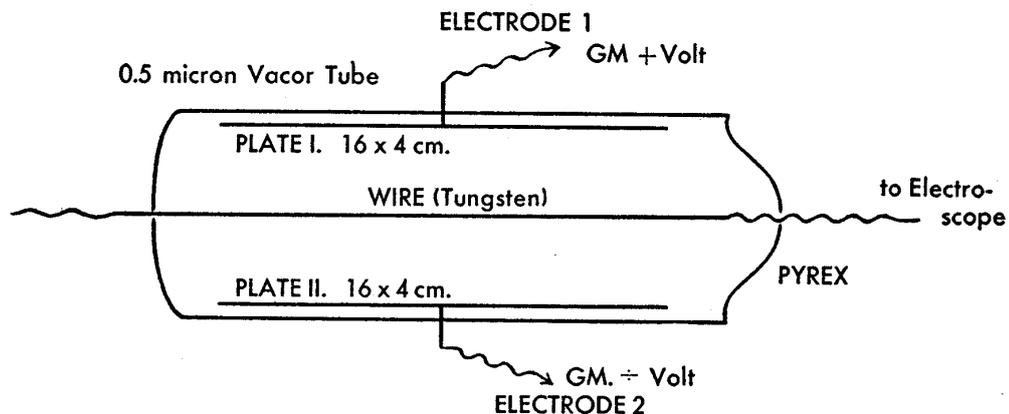


Plate electrodes: 16 cm. long, 4 cm. wide (64 cm.²), aluminum

Distance: 4-6 cm.

Vacuum: ½ micron pressure

Central wire: tungsten

Fig. 7. 3-electrode, 2-plate VACOR TUBE

図 7。

2枚の金属プレートを一対に平行に置くと、*orgonotic* な温度差 $T_o - T$ がすぐに明らかになる

したがって、オルゴンエネルギー効果が、GM装置で現れると予想された。

しかし、真空管は最初「動かなかった」。そして、まったく反応がなかった。

全ての実験をあきらめる誘惑は大きかった。そのとき、2、3週後に、OR-でチャージされたプラスチック・ロッドで、刺激した *vacor* チューブに *lumination* を観察することができた。

lumination の色は、(すなわち *orgonotic*.な) 濃い青でした

249

ルミネーションは、真空管に沿ってオルゴンチャージされたプラスチックの棒を規則正しく繰り返し通過させる普通の方法で、得られた。

1949年7月の速報、pp. 97-99 にのせた「真空ルミネーションの更なる特徴」に関する記事を、ここに完全に再版する。

1949年9月の速報で報告したように、これらを十分にオーゴンエネルギーでチャージさせて、移動し、オルゴンエネルギー・フィールドのまわりの100から1000ボルトの起電力によって真空管(0.5ミクロン圧)を興奮させたならば、青っぽい *lumination* がおきる。[cf 写真5 (198d ページ)]

真空での *orgonotic* な *lumination* 機能の以下の特徴は、特別なチューブで確認された

1. 2本の約15cm間隔をあけた電極で(表面の領域ca. 2cm.x2)、電圧が増やされ、luminationは両方の電極で始まって、両方の終わりに他方へむかって広がる。

2 つの luminating するフィールドは、お互いに接触している;

それから、マイナスの電極のフィールドは、さらにエキサイトする;

陽極によっている他のフィールドは全く消えるまで、退いていく。

それが他のフィールドを「押しのける」のは、マイナスの電極フィールドのほうがより強いようにみえる。

電極の lumination の消滅の後、電圧がおおよそ 800 から 1000 ts まで更に増加して全部のチューブに強く青っぽいバイオレット色の luminates がうまれる。

それが日光の白っぽい色を示すまで、電圧が更に増加し、lumination はより明るくなる。

2. 静電検電器と1つのワイヤーだけでプレートから真空管の陽極までつなげる、または真空管内部の3番目の接続していない線につなぐ、そして lumination 効果は、チャージのプロセスと一致することをためしてください。

チャージ度に依存して2つの電極の間で、非常に明るい光の、白っぽい、急速にきらめきの形で放出する。

安定した lumination の間、検電器の端子はそれる;

それは、より高い刺激でより多くをそれ、そしてわずかに一つのフラッシュで崩れ、消えると再びそれる。

したがって、— 安定した organotic な lumination がチャージ過程を表し、フラッシュが放出をあらわすと、仮定することができる。

すなわちそれは lumination. の間、ポテンシャルをチャージすることが確立された。

我々が安定した lumination を増やさないとしても、フラッシュは、特定の空虚時間の後、起こる。

3. これらの真空現象を観察するとき、印象を逃れられないことは、ここで夜明けの光の展開のプロセスを目撃するかのようだ。

これらの色とプロセスの類似は、最も印象的だ。

しかし我々の惑星の大気での実験は、電磁電圧だけの刺激の「引き金を引く」ことで、真空の lumination を、出すか現すことができる。

我々の仮定では「光」は、organotic な lumination 効果の局所的機能ということだ。

-250

光の現象が OR エネルギーの lumination. を誘発する刺激から切り離さなければならない。

我々は、多くの種類のそのような引き金機能が、あることを、仮定しなければなりません

例えば毎秒動くオルゴンエネルギー・フィールドのように、電極面積の電磁テンションに依存する引き金効果がある。2つの64cmのプレートでは引き金機能のために、各々100から200ボルトまでが必要である

白い放出は、非常に低い電圧でより頻繁だ；

まだ定義不可能な、太陽から来る刺激、は青っぽいバイオレットな地球のオーゴン膜において最終的に白っぽい発光の引き金となるので、それが太陽から伝達される電磁波であることに、私は、同意しない。

我々は、この謎を解決するために急いではならず、根気よく更なる実験的な発表を待たねばならない。

我々は、そのような発表を雲と雷雨構造の慎重な観察に期待することができる。

4. 真空管の中の **orgonotic** な **lumination** は、電極に近づくと輝度をあげ白くなる、電極から遠ざかると、青いバイオレットの方へ影の強度が連続的スケールで変化する。

私の 1949、No.1 コミュニケーション速報、で述べたように、クリスマス（1947）にすごい吹雪の前に **OR** エネルギーにさらし **OR** を集中させたものは、全ての **vacor** チューブはガイガー-マラー・カウンターに反応した。

ガイガー-Miiller カウンターの毎秒 18000 以上の高速インパルス出力の青い **lumination** でこれらの真空管の全ては、依然として機能している。

、しかし、前記のコミュニケーションにおいて述べたように、新しい真空管は 1947 年 12 月の末から何も現象を示さなかった。

1948 年中、0.5 ミクロン圧力真空管は、静かなままであるか、最小の **orgonotic** な影響だけを示した。』、この事実を説明することは、難しい。

orgonotic な回転力の 1948 の真空管のチャージ不足の、驚くべき不可解な事実の新聞発表を控え、事前情報だけを発表し、プリント・セーブ準備をする決定責任が私にあった。

1948 のチューブの中の驚くべき原因不明な不可解な事実と、**orgonotic** なモーター力の新聞でのプリントのためにセーブし控えるために、強制し事前のコミュニケーションだけを発表する私の決定は、責任がありました。

1947 年が激しい太陽黒点の活動年であった事実によってチャージされたことはあり得る。その、真空の現象は、1947 年の太陽黒点活動によったというのは正しく、次の黒点周期がたしかに起こるまで我々は待たなければならない。

しかし、1948 のチューブがチャージされなかったのに対して、これらのチューブがチャージされた 事実はそのが、黒点周期に制限されるとしても真空におけるオーゴン現象の確認を構成する。

もう一つの解釈は、おそらく、いつでも現象を示すために良い真空管が考案されなければならないことを義務づける。

我々は{答えがわかるかもしれない} ものは何でも、諸機能をあとに続けることを強制される

1949 年 4 月 7 日 : 1 の注意

「古い無反応な」真空管のうちの 1 本は、**lumination** とともに最初の時に反応した。

彼らの性質が我々を案内する；

オーゴン研究において、大部分は普通でない、メカニカルでない反応が、常に予想される。

私は平行な 16x4cm のプレートを挿入した、他の真空管を 2、3 注文した。

(Cf. photo 4, p. 198c.)

使われた真空管のメーカーから与えられた製造記述：(参照写真 4、p. 198c.)

最初、ガラスはカリウムニクロム酸塩と硫黄の酸できれいにする。

それは完全に水できれいにして、アルコールでその後洗う。

それから、電極はアルミニウムで作り適当な寸法に切られ、カーボン tetrachloride で洗う。

タングステン金属は、ガラスの上の電極に封をするのに用いられる。

タングステンは、Nonex (特別なコーニング・ガラス) とともに、真空の密封シールを作る。

ウラン・ガラスを使うならば、隣接したガラスの膜の上の直接電極に封をすることができ
る；

我々が Nonex を使うならば、我々は Nonex とワイヤーの間に若干のウランを加えなければ
ならない。

それから、ポンプがつけられる。

散水油ポンプと拡散ポンプでバックアップされた Cenco Magavac ポンプが使われる。

チューブが空になるまで、20,000 ボルトのテンションは、金属とガラスの中に全ての封印
されたガスに作用する電極を横切って置かれる。

後になってチューブは、多少ポンプで『/2 ミクロン、揚げられ、放出は、もはや起こりま
せん。

.

それからチューブの、2mm. の不活性ガス (例えばネオン、アルゴンまたはヘリウム) が圧
力ポンプで吸い揚げられる。

再び、どんな残りのガスの成分も十分に熱され解放されるまで、20,000 ボルトのテンショ
ンが電極の間に置かれる。

それからチューブに残された全てのガスを排出するためにポンプが、開けられる。

チューブで放出が起こらないときまで、ガスはポンプに開放されたコック栓の外へポンプ
で吸い上げられる。

それは、ガスがチューブの中に残らないと保証するために 15 分間吸い上げる。

それは、開いたポンプの封をする。

チューブのガラスは、pyrex 耐熱ガラスです。

質問：

いつ、空気がイオン化しますか？

答え：

2-3 mm の圧力で

質問：

あなたがヘリウムまたはアルゴンで放出させたいならば、どれぐらい必要なのか？

答え：

1/10mm.の圧で、十分です。

質問：

あなたは 1/10mm でないことをどうやって知るか。

これらのチューブの中にヘリウム、その他があるのか？

答え：

放出が、20,000 ボルトで止まる原因だ。

2-プレート・チューブは、X線真空管を備えている。

20,000 ボルトは、放出しない。

真空管は！**orgonotic** な効果でないものを与える：

X線フィルムが、新しいとき

252

だがこれらをオルゴンエネルギーで数週チャージしたあと最初の **vacor** チューブと同じ方法で暗室の中の青っぽい **lumination** の反応を起こさせた。

これらは、高い真空の中の **OR** エネルギー効果の性質の解決のための重要な研究結果でした。

答え：

オルゴンエネルギーは高い真空に蓄えることができる。

真空中の **OR** エネルギーは、有機的で大気の **OR** エネルギーと同じ性質を持つ：

青い **lumination**、物質の貫通、電磁波へのインピーダンス（例えばX線）。

よくチャージした大気の **OR** エネルギーにさらされなかった普通の真空には、これらの特性がありません、または、これらの特性を何も明らかにしません。

6. 質問：

インパルス率は、ガス入りのガイガー・チューブの中では、真空より、多いのか少ないのか？

これらがより頻繁でないならば、イオン化は **GM** カウンターでエネルギー出力を強化する重要な要因です。

ガス分子または空気分子の物質の形は、宇宙のオルゴンエネルギーのエネルギー機能を妨げ、スペースでガスから自由であれば、オルゴンエネルギーが、最も強いのか「最も速い」という結論は、もしこれらの周波数が早ければ、確保される。

実験：

GM 増幅アンプのマイナス線は、1枚のプレートに付けられた。(プラスの線は別のほうに) 真空管の中心ワイヤーは、0.5 ミクロン圧力真空の 2枚のプレートの間のフィールド反応を観察可能にするために検電器に付けられた。

I0

EL プレート II。 +V

ORF GM 計数器に

プレート I -V

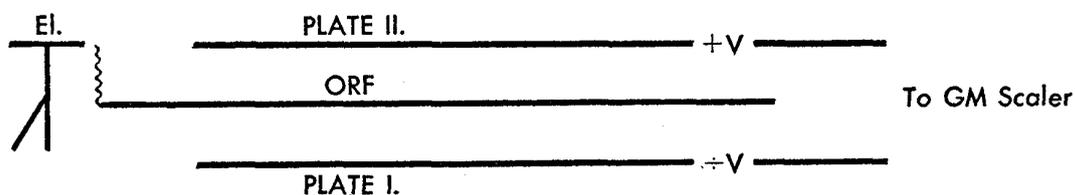
図 8。

高い真空の中の興奮したオルゴンエネルギー・フィールド (ORF) の測定装置。

検電器のリーフ端子は、OR エネルギー・フィールドの強さを示す：

答え

a. 普通の GM カウンターが 750-1000 ボルトを要求して、発生するテンションは重要です、



3 極真空管の、2 枚のプレートで 350-500 ボルト (!) で、何週かの OR エネルギーのチャージの後毎秒 1000 以上の非常に高いインパルスレイトが 1951.年に生まれた。

253

検電器は中心のワイヤーに付けられ、真空管の内部のチャージを示した；

それはプレートでの電圧の増加とともに増加した。

この機能は、真空管の内部での OR チャージの測定を可能にした。

GM 計数器の作動はプレートで、500 ボルトで始まり、(時々特に乾燥した良く晴れた日は 200 ボルトに変わった

真空での、オルゴンエネルギーの測定方法にすぐ戻ろう。

真空管の中の lumination の様子、ネオン管またはインパルス記録器のインパルス、そして、通常真空の範囲内での OR フィールドのテンションは 300-500volts、しかし、同時に、これは常にそうではない。

最も強くチャージされたガス入りの測定管が 32 の GM 計数器で毎分 3200 以上のインパルスを生じ、1947 年と 1948 年の冬の月に、ニューヨークで、プレートあたり 800-1000 ボルトぐらい、2 つのプレートまたはチューブで簡単に 10,000cpm を生じた。

新しい、充電してない真空管は、まったく lumination 反応をせず、エレクトロスコープによる反応と、GM計数管での反応をしませんでした。

c. 測定管のワイヤーの代わりにプレートの挿入は、電圧の増加を可能にした。

この事実は、エキサイトさせる電圧がおそらく、もっと多く減らすことができ、おそらく最終的に全く無くすことが出来るという予想を助長した。

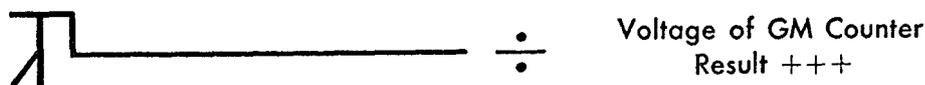
これらの基本的問題に対する実質的な解答に達するために、いくつかの毎日の疑問に、最初に答えられなければなりませんでした：

7. 質問：

正と負のボルトのテンションのための付属品は絶対必要ですか？

あるいは、エーテルの兆候だけで付属品の起電力が、真空管の内部で OR エネルギーを起こすのに十分か？

実験：



結果：

検電器のリーフ端子のそれは、マイナスの単極テンションだけで成し遂げられることができる。

ポジティブなテンションだけでは、electroscopic なチャージを与えない。

Kb. 真空管の中心ワイヤーの検電器；

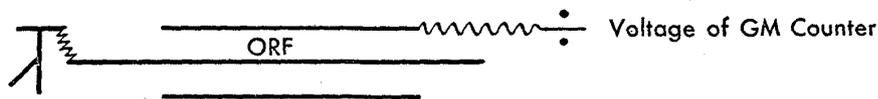
マイナスのテンションだけ遅れる

254

GM 計数器の電圧

254

THE VACOR TUBES



c. Electroscope again at central wire; negative tension split up into two branches each attached to one plate:

c.
中
心



ワイヤーで再び検電器;

ネガティブなテンションは2つの枝に分けられ各々1枚のORFプレートに付けられた、:

bとcのGM測定結果の電圧は、ポジティブでした。

陰極の起電力は、真空管を興奮させて、カウントを生むのに十分です。

d. 真空管のプレート的一方または両方への陽極のテンションは、結果が出なかった;

Luminationがなく、フィールド反応がないと測定値はない。

一般的な答え:

a. 真空管でつくられ、GMレコーダーで測定されるインパルスは、イオン化または電気両極性の機能さえ全くない。

b. 電気テンションは、引き金の役割を演ずるだけだ。

そこには高い周波数でパルゼーションしLUMINATIONする興奮したオルゴン、エネルギーがある。

Aのポイントは

ORエネルギーは電気ではなく、しかも、それは著しい対照をなすというOR物理学の古くからの仮定に同意する、。

点bは、論理的に点a.から自然に導かれます。

対応する事実は、ORエネルギーと電磁気の関係の研究の重要な踏み石でした。

私が私の善意の批判者(新型のエネルギーを持ち出さなくて、電子理論に基づいて新しい現象を説明する大部分は物理学者)の何人かの注意に従ったならば、これらの重要な関係は確実に見のがしたでしょう。

私は全く何も得られず、すべてを失い、失ったすべてを持った、といったところか。

したがって、核粒子の電子理論は初源的なORエネルギーの機能では役に立たないことは、再び指摘された。

そのまま原子物理学の領域の中で有効で役に立つ電子理論は、オーゴン物理学の中の終点です。

依然として、そこに、特定の定義可能な初源的な質量のないORエネルギーと第二のNR諸機能との間の関連をつなぐものが存在します。

この見解は、更なる観察と実験によって補強される。

「スペース」の物理的性質の全部の問題は

空気またはいかなる種類のガスも含まない、いわゆる真空に関係する。

そして、それは現代の天体物理学の全体の基礎です。。

これらは、非常に重要な問題です。

関係する領域は、大きい。

我々は、宇宙の完全に新しい視野を獲得しつつあります。

まとめると:

いわゆる、ネガティブテンションといわれる電気エネルギーの源は、引き金または「刺激

のような」刺激的な方法で、OR エネルギーにかかわる。

「ポジティブな」テンションは、無効です。

「地面」のエネルギーを引き込むための、線間電圧はバッテリー電圧と違う。

この点は、重要です：

電気工学は、電気機能のために「地面から電子を提供する」ために陰極を「アース」する。

我々は、正当な理由で「地面からの電子」は、自由に地球の皮の中を動いているオルゴンエネルギーユニットではないかと疑いをかける。

しかし、これは確認されなければならない。

8. 質問：

我々は、温度差 T_0-T に基づいて地面が大部分はバイオエネルギー的な機能と他の、OR エネルギーを含むと仮定します。

測定管の陽極ワイヤーに接続したならば、地面は、GM カウンターで測定されるか？

実験：

GM 測定器の測定管の陽極ワイヤーを地面につなぐ。

答え：

測定管に印加される電圧量は、地面からはいかなる数値も生みだしません。

これに反して：

インパルスは、地上にアースされた陽極のワイヤーに消える。

地面は、大気の集中した OR エネルギーと違った具合に反応するようだ。

この事実は、温度差と同様にオシログラフの地面のパルゼーションと地球生物個体での OR 現象といった既定の事実と矛盾する。

我々の結果は、したがって、疑わしい。

測定管または真空管に高電圧を適用すると機能が消えるとするなら、我々は理論的にどのような存在を仮定しなければならないか、？

9. 質問：

増幅システムから高電圧を最初分離しようとして、だんだんに完全に高電圧を除去していくと、インパルスはまだ現れるか？

実験：

我々は、2つの GM 計数器を使用します。

1 個目の GM I のマイナスの電圧は、「ワイヤーを分割する」やり方で真空管のプレートにつなげる。

真空管の中心のワイヤーは、プレートの中の OR エネルギー・フィールド (ORF) の強さを計るために検電器に接続している；

GM II の増幅システム単独で、同じワイヤー (W) につないで、高電圧をオフにする。

プレート I
 W ORF GM I の電圧に
 プレート II。 GM II
 グリッドに

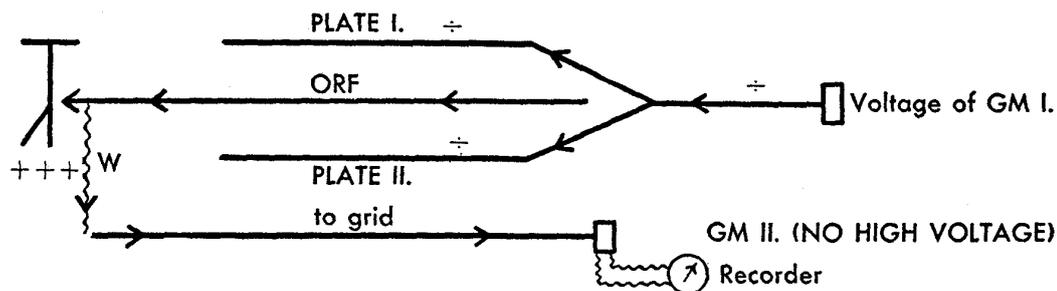


Fig. 9

図 9

答え：

測定管なしの、GM II の増幅システムだけで、OR エネルギー・フィールドのインパルスエネルギーの出力を測定し明らかにするのに十分です；

白熱したフィラメントだけを加えたプレートには、電圧が必要です。

しかし、真空管は、もっとエキサイトするように電気電圧を要求する。

我々は、伝達システム全体で不必要な装置を「きれいにしなければならない」。

そのために、我々は出て行くインパルスエネルギーの量とその性質についてもっと知らなければならない。

10. 質問：

GM II から現れるのは orgonotic なインパルスの増幅なのか、

電磁気なのか、または、少し違う他の性質のものなのか、あるいは、これらの性質の 2 つ以上の組合せのものなのか？

実験：

我々は、GM II の出力ジャッキとつなぎます：

- a. 電圧電流計。
- b. 電磁インパルスレコーダー (rec.)。
- c. 15 ボルトのテンションだけで白熱し始める普通の電球 (エル。電球)。
- d. 我々は、さらに平行にネオンのインジケータータにつなぐ。

実験 XXI-10

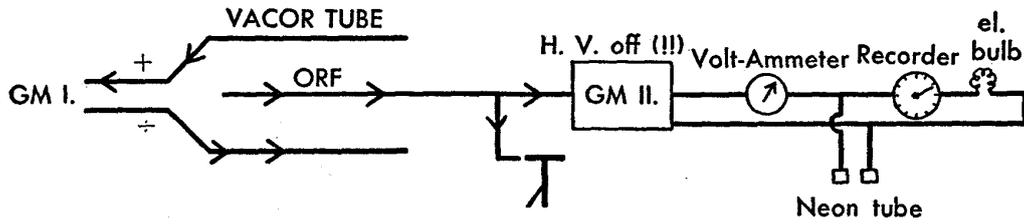


Fig. 10

図 10

257

答え：

a. 予想通り、電流計はインパルスごにつき 0.005 アンペア / per impulse、を示す；

1 回転 0.015 アンペア

率は 2000-3000 cpm

b. ボルト計は、インパルスにつき 8-10 ボルトを示す；

(すなわち回転率で) 2000-3000 cpm が 50-70 ボルトに相当する。

c. 電磁レコーダーは、ポインターのの速い回転を示す (およそ毎秒 2)。

d. 電球は 70 ボルトで白熱しない；

15 アンペア数はあまりに低いのか？ e。

ネオンのインジケーターは、鮮明なフラッシュとともに明らかに反応する。

この答えは、混乱させる：

電圧電流計のポジティブな反応とレコーダーの電磁気システムの活動の両方とも、出てくるインパルスは、ガルバニック電気のように、またはオルゴンのようなエネルギーである。

(「静電気のような」)

電球は光らず、ネオンのインジケーターは明らかに反応する。

OR 実験では、とても普通ではなく、混乱させる反応に遭遇する。

これらのいくつかは、電磁エネルギーの全ての確立した見方に反する。

実験者はアプローチが非常に柔軟にちがいない、いかなる確定した仮定も大事にしてはいけない。

彼は、どんな偏見もなしに、解決しなければならず、以前適切にされた全ての観察をもとに、適当な瞬間に適切な事実に応用することで一歩ずつ、働かなければならない。

エネルギーの既知の形を扱うならば、それは非常に単純でしょう。

この仕事の完全な暗闇では、過去の経験と鋭い感覚だけが助けるようです。

我々が成功したいならば、必ず習慣化された技術として伝わった方法を嫌悪しなければならない。;

我々は、普通でないものを避けるだけではなく、じゃまにしたりしてはいけない;

我々は、全くこれに反して、一貫して正確な事実と現象を見渡し調査しなければなりません。

私は、この必要条件に関連する事実をまとめたい:

精神医学は、一貫してオルガスム機能を避けた;

我々は、一貫してそれを調査しこの線の後、**biopathies** だけでなく、宇宙エネルギーのエネルギー源を発見した。

病理学は、自生伝染病を避け、ガンの退行性プロセスをとり逃がした;

我々は、この道をたどって、ガンの縮む病 **shrinking biopathy** が発達する有機体で、(腐敗する) 退行性のプロセスを見つけた。

258

. 我々は、主観的だとして避けられてきた光という主観的印象を追求し、暗室で大気エネルギー現象を発見した。

我々は続けて、検電器の「自然リーク」の機能または変動と、大気エネルギーの自然な **orgonotic** な現象を見つけた。

『我々は「熱波」と呼ばれている機能を追求した、そして、西から東へ循環するオルゴンの膜の運動を発見した。

我々は「視覚不良 **bad seeing**」として天文学者によって扱われてきた機能を研究した、そして、我々は大気オルゴンエネルギーの脈動する、光の屈折機能を見つけた。

我々は、終わりまで「静電気」を廃止し、**OR** エネルギーの特性を確立し、**OR** エネルギーがガイガー-マラー装置のレコーダーを回す機能をみた。

我々の感覚器と臓器感覚を信頼するこの原則に従い、-もしこれらが、信頼できるなら、役に立ちその可能性が豊富だということを証明した。我々は、まだまだ結果としてそれを使い続けなければならない。;

我々は、それで自然研究のコントロール可能なツールを作ろうとしなければならない。

我々は、観測者の;特に論理特性 **characterological** と知覚的機能を除外しないように注意しなければならない。

観察は自然機能そのものの表れです。そして、もう一つの自然を認識し、作用する。

一旦我々のこれらの感情が装甲を通した第二の動きと障害から自由だと完全に確信したならば、最後にもっとも合理的な人間感情を自然機能を認識するツールとしなければならない。

Orgonomic な理論は、有機体と宇宙 **OR** エネルギーの機能特性を仮定した。

また、論理的な結論は、パルゼーションを非生命の自然のものと考えた。
したがって、有機体と宇宙エネルギー機能がどこかで出会って、GM 装置で確かな方向に結
束すると予想された。
しかし、これらがどんな種類の機能に会うか、完全に予測することは不可能でした。
しかしこの可能な結果に注意を集中した。
異なる装置と、特に有機体による観測者の干渉が GM 装置のどのように OR エネルギー反
応に影響するか確認することは、実験に必要でした。
我々は始めに、生きている有機体が、バッテリーで動く装置と手で測定管を起動させたの
を覚えている。
これは、線間電圧によって操作されている GM 計数管のケースではなかった

259

我々の実験 (XXI-10 (256 ページ)) で、
二番目の GM 計数管は、最初の GM 計数管に付けられた真空管から届く
引き金に印加された最新の高電圧のインパルスに登録した。
二番目の GM 計数管の電圧回路は、実際にオンにされた電圧なしに入れられたとしても、
インパルスに登録することはできないか、止まった。
この意味は：
**B 10-エネルギーのガイガー反応は、700-1200 ボルトの高電圧と、ガスイオナイゼーショ
ンの理論を仮定したために混乱させられて理解されてきた。**
以下の図は、GM CMB-3 A のパルス形成と増幅セクションを表す；
高電圧システムは、除外される：

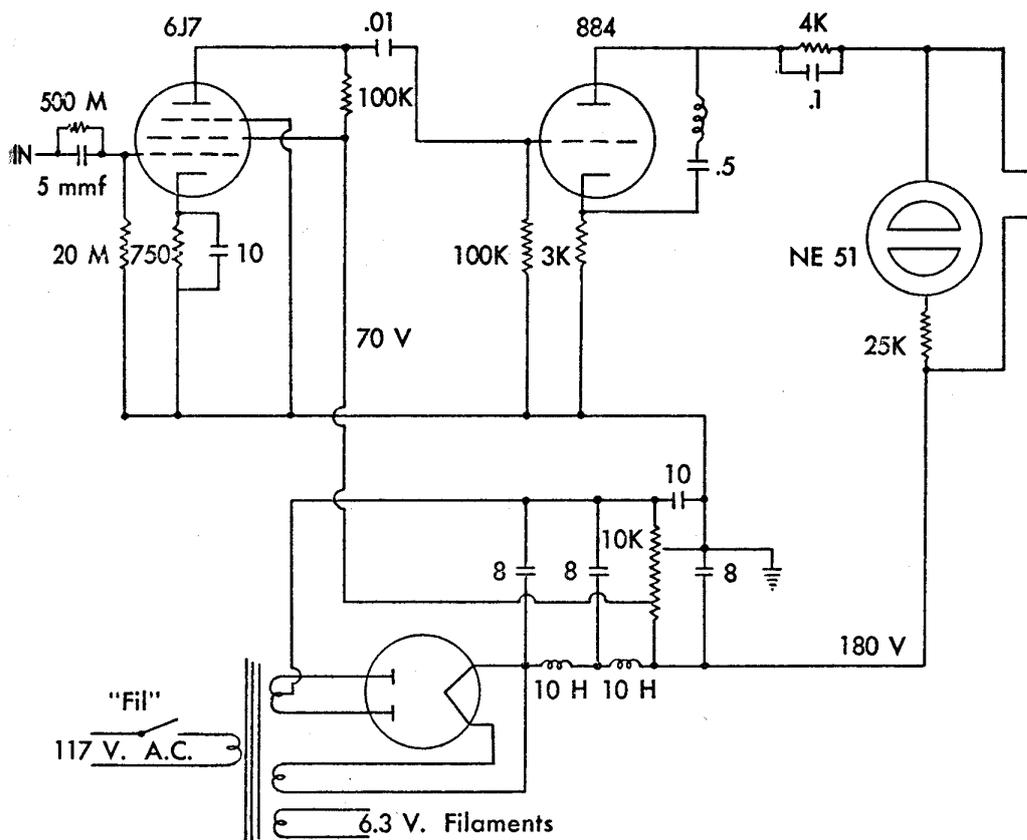


Fig. 11. Amplifier and "pulse circuit" of Geiger Counter, CMB-3A

11. Question: How does the body OR energy of the observer influence the reaction of the GM amplifying system?

図 11。

ガイガーカウンターCMB-3A 11のアンプと「パルス回路」。

質問：

どのように、観察者の体のオルゴンエネルギーは、GMの増幅システムの反応に影響するか？

答え：

指で拡張アンプのグリッドのさわることは、オーディオ・アンプに強い雑音をつくり、ネオンの光を起動させる。

ゴムによる手の絶縁は、効果を変化させない。

雑音は、よりうるさくはならず、その特徴のあるトーンを保持した。

-260

グリッドシステムの近くに手を持ってくると、同じ反応がでてくる。

陰極ワイヤーが繋がれると、雑音は消える。

電子オーディオ・アンプのグリッドワイヤーに触れさえすれば、反応は現れる。

12. 質問：

非生命の物質は、同じ反応を起こすか？

実験：

我々は、スイッチを入れたフィラメントと、GM 増幅アンプのグリッドワイヤーと、閉ざされた高電圧回路に木、プラスチック（充電してない）、ゴムと鉄（すれることなく）でさわる。

答え：

オーディオ・アンプの中の非生命のシステムに、何も反応はない。

13. 質問：

金属で、「電子」は自由に動けると思われる。

アンプのグリッドワイヤーの上で金属をこすると、反応が起きるか？

答え：

はい：

アンプのグリッドの金属をこすると、不規則なクリック音とネオン信号がでる。

14. 質問：

有機体の OR エネルギーは、インパルスレコーダーを作動させることができたか？

実験：

増幅アンプのグリッドとの隔離だけの目的で、乾電池バッテリーを付けて、手でバッテリーにさわってみる。

答え：

Yes:

はい：

我々が直接バッテリーまたはグリッドワイヤーにさわるとすぐに、レコーダー針は循環し始める。

インパルス率はおおよそ 3000cpm に達する。有機体が、電磁エネルギーではなく OR エネルギーを含むということを確認に知っている。

我々が実験で初めて行い、さらに、電磁システムのレコーダーが造られた時から、OR エネルギーは電磁エネルギーへ変換されていた。

高電圧は、印加されなかった。

15. 質問：

同じ状況下で高電圧装置なしで GM フィラメントシステムに、同じ反応を与える非生命物質が、あるか？

実験：

我々は、バッテリーに、金属、木、celotex、チャージされてないのとチャージされたプラスチックを付ける。

261

答え：

非生命の物質は、脈動する OR エネルギーも自由に動く OR エネルギーも含まない；それは、電磁システムを起動させない。

基本的な違いが、生命と非生命の物質の間にある。

第一は、脈動する；

第二は、脈動しない。

16. 質問：

非常にチャージされた非生命の物質は、電磁気システムを高圧で起動させるか？

実験：

我々は、バッテリーから 1000 ボルトの電気電圧をアンプのグリッドにかける。

反応：

何もない。

我々は、髪オルゴンエネルギーでプラスチック・ロッドをチャージして測定管の陽極ワイヤーまたは直接拡張アンプのグリッド線に接近する。

反応：

あり。肯定的；

クラックリングノイズ；

レコーダーは、動かされる；

ネオン光が、きらめく。

答え：

ガルバニックの電磁気エネルギーまたは、誘導電流は、GM 測定器を動かさない；

orgonotic なフィールド・エネルギーは、それを起動させる。

17. 質問：

摩擦「電気」、と励起した二次コイル・システムのエネルギー・フィールドと生命エネルギーの機能特性に関する我々の結論が正しいならば、活発な二次コイルフィールドはまた、高電圧の閉ざされたアンプを作動させるだろう。

実験：

我々は、ジヤテルミー装置のセカンダリーコイル・システムまたは Tesla-waves を出す単純なデモンストレーション装置を、GM 計数器から 2—5 メートルの近距離で『振動の強さを見ながら、作動させる。

答え：

ワイヤーの接続なしでGM計数管に高電圧の火花が起こるとき、レコーダーの針の回転はすぐに始まり、このような方法でいわゆる電磁振動または波が GM アンプを作動させるこ

とが、可能です。

18. 質問：

GM 計数器の拡張アンプ・チューブのグリッドに単純なアンテナを、付けたならば、人の手または指でグリッドワイヤーに触れるのと同じ結果を生むか？

そうすれば、大気圏の中と、生きている有機体の中の OR エネルギーの基本的機能特性は確実に確立されるだろう；

酸素、水素、炭素と窒素の 4 つの基本元素に関して、空気と生きている有機体の化学的特性は完全に似ている

262。

実験と答え：

(高電圧を印加せず測定管を使わず) GM 計数器のグリッドシステムにアンテナを付け GM 計数器を作動させ、ネオン回線を光らせ make neon lines flash、電磁レコーダーの針を回し、

特定のタイプのスピナー・モーターをつないで動かし、およそ 3000cpm の出力を常時生じ、およそ 10 ボルト流す、

(この出力が電氣的な性質かどうか不確実であったとしても、) 等価なものとして

我々の装置で一インパルスにつき、50 から 70 ボルトで、シーケンスごとにおよそ 3000cpm である。

動きは、アンテナの接続を断つことによってまたは指の除去によって簡単に止めることができる。

基本的結論：

有機体のエネルギー (生命エネルギー) が機能的に大気 (宇宙) OR エネルギーと同一であることは、これらの機能から明白です。

真空は、存在しない。

宇宙オルゴンエネルギーは全ての空間を満たす。

生命エネルギーの起源と同様に存在の証拠は覆すことが出来ないほど、多量です。

これまで確立されたこの基本的機能特性の要素は、以下のとおりです：

1. 環境と比較して 生きている有機体と OR エネルギー・アキュムレーターは絶えず温度が高い ((To-T)。
2. OR エネルギー代謝で、Orgonomic ポテンシャルは低いところから高いところへむかう。
3. 基本的化学構成物の特性：H.O.C.N.
4. 放出率の変動の形としての Electroscopic な反応。
5. 真空内でのオルゴンエネルギー・フィールドの動き。
6. パルゼーション。
7. GEIGER-MULLER 計数器の反応。

真空エネルギー・フィールドの測定方法

さらに進む前に、真空でオルゴンエネルギーを量子的 **quantitatively** に測る方法をまとめよう。

我々は、現在は、利用できる方法だけをまとめることができる；

オルゴン研究とどんな種類の測定がさらに発達するか、我々は知らないし、予測することができない。

我々は、宇宙 **OR** エネルギーで動いている全ての機能を決して見つけたわけではない。

VACOR エネルギー・フィールドの測定

263

a.

オルゴンエネルギーのチャージされた真空の範囲内での **OR** エネルギー・フィールドの強さの測定のために、2枚の平行した金属プレートとプレートの間に1つの金属的ワイヤーがある3電極真空管が必要である。

プレートは、励起した電気の引き金の電圧を提供するのに用いられる；

ワイヤーは、プレート間の **OR** エネルギー・フィールド (**ORF**) のチャージを拾うのに用いられる：

a 4

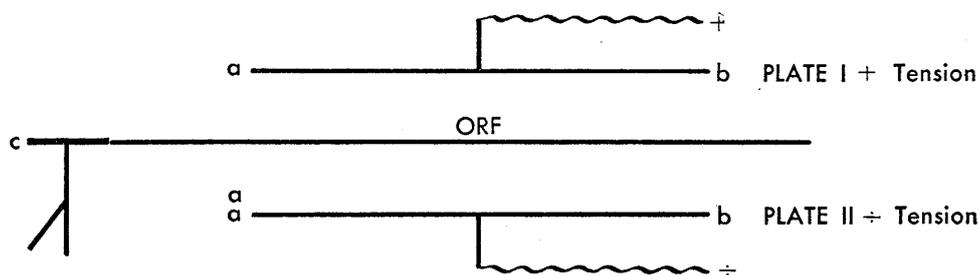
b プレート I のテンション

ORF

CT

a

b プレート II のテンション



真空の OR エネルギー場の強さの測定に關与する要因は、以下の通りです

- a. 2 枚のプレートの表面の領域。
- b. プレートの電圧。
- c. 中心のワイヤー (ORF) に付けられた目盛が決められている検電器。

実験は、電氣的な引き金のためには、小さい表面、または点より、幅広い表面がよいことを示す。

表面が広がると、必要な電圧量が降下する。

1948 年 7 月までに、電圧は普通の 800-1000 ボルトの量から、200-500 ボルトまで下げられた。

引き金電圧の更なる縮小は、更に続けられる実験に期待された。

充電されてない真空管は、印加される電圧の量に関係なく検電器でフィールド反応を示さない。

プレート間のギャップを埋めるのに電圧が十分高いならば (50,000 ボルトより高いと)、普通の X 線現象は起こる。

Lumination と互いに 4-6 cm 離れたプレートの間での、フィールドの反応

を達成するためには、真空の範囲内の高いオルゴンエネルギーの集中が、必要だ。(vAcoR) よくない大気の状態 (たくさんの雨、低いエネルギー集中、その他) のもとでは、真空の現象に必要な OR エネルギーの真空への集中のために多くの月日がかかる。

しかし、状況がたとえ何であっても、2 枚の平行したプレートの存在は重要で点または小さい表面の電極より好ましい。

264

プレート表面での、空気の希薄度の程度とプレートに印加される電圧と、空気の乾燥度にともない真空の organotic なフィールドの活性は増加する。

また、1 年の季節的変動または黒点周期のサイクルは、真空に対するまだ未定義な影響がいくらかある。

これらの測定において使われた検電器の目盛は、アルミニウムのリーフ端子を備えていて、10-分割目盛以下の数値を示した。(参照チャート E、265 ページ)

| DIVISION 分割 | 電圧 |
|----------------|-----|
| 1 | 200 |
| 2 | 440 |
| 3 | 580 |

| | |
|----|------|
| 4 | 720 |
| 5 | 860 |
| 6 | 1080 |
| 7 | 1320 |
| 8 | 1640 |
| 9 | 1800 |
| 10 | 2020 |

我々が量子力学的定義を最高に保つフレームワークの範囲内で我々の **orgonometric** 測定システム (**krx**) (システム) をためしてみる。

electroscopic な **orgonometry** についての私のレポート (性経済とオーゴン調査 (1944) の国際ジャーナル) で、私は **OR** エネルギーの単位 (1 オルグ) (すなわちリーフの特定の作動を得るのに必要な電圧) を 120 ボルトで表した。

ナンバー120 は、(**krx**) システムの範囲内にはない;

それは、また、**OR** エネルギーの単位を表すにはあまりに小さい。

Therefore, I changed the unit, setting ONE ORG equal to 256 44 volts.

したがって、私は単位を変えた。そして、1 オルグを 44 ボルトから 256 ボルトに設定した。検電器のリーフ端子をそらすのに必要なエネルギー量が分割システムによって異なるので、最初検電器を特定の区分線に設定して、チャージを増やしてリーフ端子を次の分割線まで上げていった。

この追加総量が 256 ボルトに近ければ、1 オルグの基準を得た。

それは大気の状態幅広い範囲の限度内で変わるので、これらの量は決してまだ正確ではない。

しかし、真空の中の場の強さの実際の量を、正確に決定することができ、リーフ端子の動きに必要な要求量を電圧で表すことができる。

このように特定のレベルの場の強さをインパルスの出力で測定することができる。

Under certain atmospheric conditions, the measure threshold will be, say, at
 特定の大気の下で、計測閾値がある

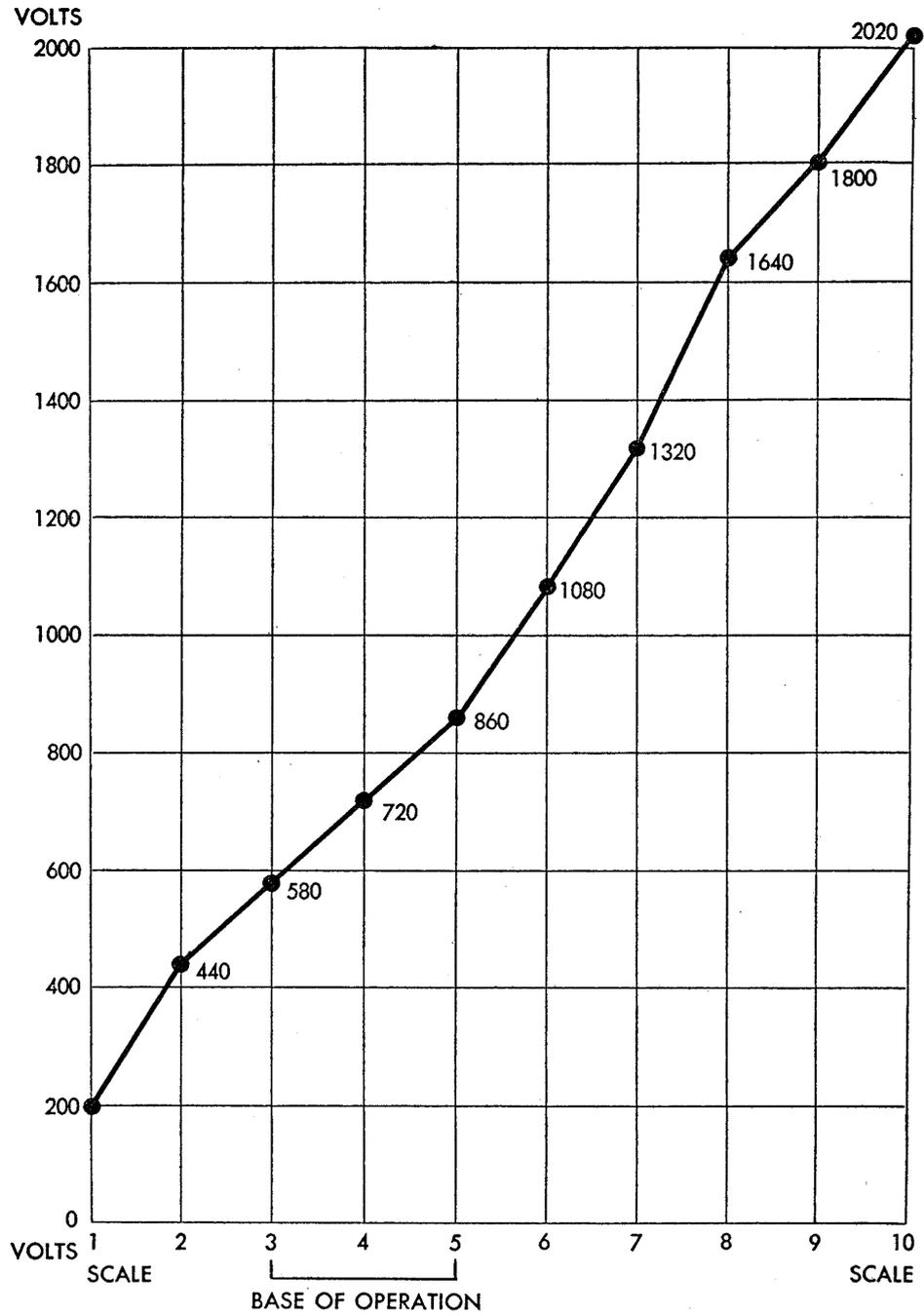


Chart E. Calibration of electroscopes, aluminum leaf. 1 ORG = 256 Volts.

作動の基礎

図 E 検電器の目盛 (アルミニウムのリーフ端子) 1 オルグ# 256 ボルト。

またはわずかに上の 1 オルグ 300 ボルト;

回転閾値は、750 ボルトまたはおよそ 3 オルグ必要とする。

異なる大気の下でも、計測閾値は回転閾値に非常に近く、およそ 300 ボルトまたは 1.15 オルグであった。

b.

Orgonotic なインパルス行動領域の単位

krx システムのフレームワークの範囲内にあるようにという指示で、

プレート表面は、そのような方法で選ばれた GM グリッドシステム(64 か 43 cm のどちらか、あるいは、 $2 \times 64\text{cm} = 128 \text{ cm}^2$ つ)にインパルスを放つ電圧で励起した平方センチメートルの数。

各々のプレートは、長さ 16cm と幅 4cm です。

b. Action Area In が krx システムのフレームワークの範囲内で残るためにプレート表面が電気電圧で興奮する、そして、GM グリッドシステムに対して刺激を放つ平方センチメートルの数が 64 か $43\text{cm} \times 2 \times 64\text{cm} = 128\text{cm}^2$ であるような方法において、各々のプレートの長さ 16cm と幅 4cm です。

表面の地域は「インパルス行動域と呼ぶ。」、その単位は $64\text{cm} \times 1$ インパルス行動域 (1 つの IA) が 2 つです。

このように、真空管は、長さ 32cm 幅 4cm のプレート 2 枚で
総行動面積 $2 \times 32 \times 4 = 256\text{cm}^2$ を持つ。

$2 \times 44\text{cm}^2 = 4 \text{ IA}$ (1 インパルス行動域 (IA) が 4 つ)

真空管の充填されたガスを取り去り、ワイヤーの代わりにプレートをインパルス行動域に
いれると、かなりインパルスのエネルギーの出力が増えた。

古典的なガス入り測定管による毎分の最高率は、1947 年の 6000cpm でした。

1948 年 7 月、0.5 ミクロン圧力の真空の中でプレートが使われたとき、32 スケールで毎分の
回転率はおよそ 200,000cpm でした。

毎分何百万ものインパルスは、より大きなインパルス変換の能力のシステムで期待された。
理論的には、「真空」では (すなわち完全に原子から自由な空間では) が時間単位につきパ
ルスが非常に高率で機能すると仮定されねばならない。

実際にこの率は、どれくらい高率か、まだ人は言うことができない。

しかし、これらのパルスまたはインパルスが惑星を回転させる運動力を構成する事実を考
慮すると非常に高いと、仮定されなければならない。

1948 年 8 月に、エレクトロニック 4096 自動測定器 (Tracerlab) による測定値は、4096
の尺度で、500 ボルトの引き金で 1 秒につき 1 万-1 万 2000 のインパルスを生んだ。

これは相当なエネルギーだ。1 インパルスにつき、10 ボルト、または 3000cpm につき 50-70
ボルト相当と考えられます。

現在、適当な大気の下で特定の真空管の中で、毎秒 2 万-2 万 5000 のカウントの出力がえられる。(1951)

25,000cps(=42×10cpm-- (1 オルグ分= 64 秒) の出力を a REICH-ORG と呼ぶことが提案された。

5. オルゴンエネルギー (OR) 対 (NR) ORANUR

原子力エネルギー

1950 年 10 月-1951 年 5 月)

序言と概説。

ORANUR プロジェクトの基本構想。

事件の状況。

実験に対する実際的準備。

怒り狂うオルゴンエネルギー (DOR): :

「ORANUR 病」明確な生物学的反応:

Oranur は、最大の弱点を攻撃する。

An 'immunization' effect in Oranur.

Oranur.での『イオン化』効果

大気の Oranur 連鎖反応。

Oranur.の長引く影響

Oranur での、マウスへの結果。

病気にかかった労働者の避難と健康処置。

1 人の医者の危機一髪。

Oranur 実験の中断。

公表するか、結果を発表しないかの考慮。

Oranur.の感情的疫病、誤用の危険

1951 年 3 月末の状況。

X線効果と Oranur 病。

驚くべき出来事:

安全に厚く保護された中の、ラジウムの GM 測定。

Oranur の進行過程

序言

特定の問題を解こうという目的で若干の研究プロジェクトを始め、実際の動きの方向が、完全に予想外に異なってしまうというのは、自然-科学の作業での共通経験である。、完全な先入観を持たないことと同時に慎重な警戒心を持つことは、重要な、予想外の結果を成し遂げる。

ピッチブレンドの放射能の発見はこのようになされ、そして、他の多くのことが、類似した方法で発見されたことが知られている。

1950 年末に開始した **Oranur** 実験の連続作業中に、この特性の素晴らしい合理性の真実が探求された。

最初の **ORANUR** リポート、は報告した（オーゴン・エネルギー非常事態速報、No.1、1950 年 12 月）。そして、大気のオーゴン（OR）エネルギーで放射線に対抗することが可能かどうかの研究を、その主要目的として、本来の **Oranur** 実験が行われた。

言い換えると、実験は核の（NR）放射線障害に対する強力な特効薬を見つける見込みで予定された。

-267

前からの長年の実験と観察に基づく思考は、宇宙オルゴンエネルギーに含まれる強力な力が NR 放射線の効力を消し、その影響を軽いものにするかと仮定した。

268 NR エネルギー対オルゴンエネルギー

「放射線障害」が生きた組織と血に作用する核放射線の影響であることは、大雑把にみて当然のことと思われた；

この仮定は、今日の放射線病理学の中に一般的に書かれていることに従った。

現在、意図された方向で、重要で有望な観察がなされたが、最初の一連の特別の **Oranur** 実験は、このゴールに完全には到達しなかった。

しかし、主な **Oranur** 実験の結果は、原子力の生物学的影響について知られている特徴と、多くが共通する一種の真の放射線障害の完全な顕れでした。

どんな合理的疑いでも越えてそれは、いわゆる放射線障害ではないことが見つかかり、これまで仮定してきた、生命組織の NR 放射の直接的な結果から NR 放射に対する有機体の OR エネルギーの厳しい反応の即時的現れである。

よく知られている治療用語で仰天するほどの結果を説明しよう：

表面的な理解では、膿瘍または炎症は、有機体への毒性バクテリアの侵入の直接的な結果と考えるかもしれない。

膿瘍、炎症、高温、その他が伝染性のバクテリアの侵入に対する有機体の強い防御反応であることは、生体病理学で有名だ。

ひどいケースでは侵入された領域へ血が集中し、中の白血球が、鋭く集中して、熱が上昇し高温になる動きは、伝染病の一番早い徴候だ。

この臨床例は、読者に我々が成し遂げた最初の結果の最初の考えを示すのに十分かもしれない。

アナロジー(類推)を続けよう：

膿瘍形成、炎症と高温の特定の要因となるのはバクテリアだという間違っただけの思い込みの影響を受けて、伝染性バクテリアに対する効果的薬品を見つけるという予想から始めた。

単に白血球を騒乱させる引き金となるものがあることや、伝染病での血液の集中行動と体温の一般的な上昇には、バクテリアが引きおこす原因以外にあること、を発見したとき、ものすごく驚いた。

有機体の一部のこの伝染病への反撥は、本来自己治癒力の表れだ。

しかし、健康な防御反応のプロセスが、特定の特定の状況下では、本物の殺人者になることが可能となる。

我々は、伝染病への免疫に似ている、有機体の反応を扱っている。

269

一時的な予想であるが：

放射線障害は、有機体のオルゴンエネルギー機能の特別な問題で NR 放射によるものではない。

後者は、放射線障害の特定の原因ではない。

放射線障害の症候群は、NR 放射なしに起こることができる。

吐き気、出血、点状出血、一般的な不快感、髪の毛の喪失、皮膚の硬化、血液機能の低下、疲労、貧血症、白血病と最終的な死は、放射線障害に特定の症候ではない。

これらの、複雑な症候群と単独の症候は過剰放射 **overirradiation** 被爆によって発生した病気ではないことに気づく。

これらの徴候に加えて、Oranur 実験の間に、我々が知る限り、NR 放射効果の観察者によっては報告されたことのない、他の徴候が観察された。

Oranur 実験は有名な NR 放射徴候の一部をつくりだし、それに加えて、徴候はオルゴンエネルギーの過剰放射に特別に関連していた。

このように、我々は、この最初の実験で、放射線障害の安全な解毒剤をまだ固定できなかったが、我々はこの病気の本当の力学を見つけ、それを他の病気と分かりやすく関係付けることができた。

これらの序言 **introductory remarks** は、現在具体的な事実と観察によって立証された。

本来の Oranur 実験は、全プロセスの明確な**絵**を作るには未解決なあまりに多くの疑問を残

した。

Oranur の予備実験についての前の3つのレポートよりコンパクトでなく組織的でないプレゼンテーションに、表した。

そのうちに、Oranur 実験自体が予備実験と同じ程度の明快さと整合性に達することが望まれる。

内容の緊急性は、出版の必要性を早め、より精緻でないものにした。

主なテーマに入る前に、私の心からの感謝と私の感謝を私のアシスタントに表明したい。

そして、その人は Oranur で実験の 5 ヶ月間を通して危険な仕事をするのを助けた。

彼らは、完全に作業に没頭した；

責任が重い仕事をするには優に何を意味するか知っている男性または女性の気持ちを、彼らは、時々厳しく批評した。

その時彼らは、日夜、休まずに働き、躊躇または不満なく危険と、死の可能性にさらした；そして、最後におろそかにできないのは、彼らはチームで親友として作業を通して全てを支持してくれたことだ。

私は、彼ら全員に非常に感謝して私の遺憾の意を表明したいと思う、これらの実験で、無意識に彼らの健康と命さえの危険な脅威の対象になった。

270

NR エネルギー対オルゴンエネルギー

Oranur プロジェクトの基本的前提

Oranur プロジェクトは、一般によく理解されているいくつかの有名な前提から開始された。

1. 原子力（原子力エネルギー（NR））は原子の崩壊を通して物質から解放される宇宙エネルギーを代表する。そして、それは古典的で量子物理学での宇宙の構成要素です。

それは、物質になった後のエネルギーです。

他方、オルゴンエネルギーは物質以前の、宇宙エネルギーを表す。（すなわち結合されず、固体に変わっていないエネルギー）

それは、いわゆるオルゴンエネルギーの膜として周囲にあり、すべてを透過し（我々の惑星とたぶん他のすべての天体（太陽のコロナ、土星のリング、その他に普遍的に存在する。生きている有機体の範囲内で自由に動く、宇宙 OR エネルギーは、生物エネルギーまたは有機体の OR エネルギーと呼ばれる。

2. 15 年以上の期間にわたる多くの観察から、オルゴンエネルギーと NR エネルギーが互いに敵対的であると推論される。

現在の見解によれば、NR エネルギーは、「放射線障害」の形で生きた機能に損害を与えひどいケースではそれに伴って死にいたる。

organomic な条件で、NR エネルギーは、生物エネルギーに影響を及ぼす。それをさまざまな程度で機能不全にする。

他方、オルゴンエネルギーの十分な集中と強さは NR 放射を打ち消すとみなされる。

NR エネルギーの放射線障害からの自発的回復が優勢な有機体では、OR エネルギーが原因であると考えるのが、最適にみえた。

3. 3 そして、世界が原子と OR エネルギーのこの関係をよりすぐに、詳細に、理解するために、人間の心に長年住み着いた概念で、古い精神的な言葉で言うと、「善 GOOD」「悪 EVIL」といった対立的で敵対的な機能と、同じ意味である、「神 GOD」と「悪魔 DEVIL」である。

(Cf. エーテル神と悪魔 ETHER, GOD AND DEVIL 1949)。

身体的な生命エネルギーは、全動物界でいわゆる「愛」の機能の追求結果のなかから発見された。

人間の心は、常に憎しみと破壊に愛によって対処することができると考えた。

また、憎しみが愛を殺すことができるのは常に明らかで、悪に対するその闘いで、愛は単なる挫折で憎しみに変わることができる。

Oranur プロジェクトの中の実験者において、対立的な OR エネルギーと NR エネルギーが我々の精神医学的な感情的な機能の知識と、深い生物物理学的感覚と真実物理的な機能として簡単に結合した。

271

これまでオルゴンエネルギーは生きた有機体の上で少しの弊害も示さなかった；

それは、高いバイオエネルギー的なレベルに、有機体をチャージすることで組織と血液退化のような病気に対処できることが示された。

これらの医学経験に基づいて、素人が「善 Good」とか「神」と呼んで、何を指していたかは、厳密に物理的な言葉で理解でき、それは「オルゴンエネルギー」または「生命エネルギー」とみなされた。

それは、生命物質を構成する BIONS またはオルゴンエネルギー小囊が認識され、さらに、パパ bions と T-bions として 2 つの互いに敵対的な形態があるのが見つかった。

P Abions は、T-細菌または死細菌を殺すことができる。

また、バイオエネルギー的に弱くなった組織で高く集中するか、活発な T-細菌が健康な組織を破壊するというのは本当だ。

これは、ガンの縮む病 biopathy で学習した。

(Cf. ライヒ・ガン BIOPATHY pp. 11-63)。

このように、顕微鏡診察で我々の背景にある一連の 2 つの互いに敵対的運動を見ると、身体的機能には、十二分に人間の神と悪魔という精神的イデオロギーに見られる機能が含まれている。

要約すると：

| | | |
|--------|--------|----------------|
| 善 GOOD | 悪 EVIL | Ethics エーテル |
| 神 | 悪魔 | 宗教 |

| | | |
|-----------------------------|--------------------------|---|
| 生命 | 死 | 生物学 |
| パパ・BIONS | T-BION | 生物エネルギー |
| オーゴン・エネルギー (OR) | 原子力エネルギー (NR) | 物理学 |
| 宇宙エネルギー COSMIC ENERGY | 宇宙エネルギー COSMIC ENERGY | 天体物理学と宇宙論 Astrophysics, Cosmology |
| 物質前 | 物質後 | |

未知の危険な暗い領域で役立つ思考概念はほとんどなく、安全作動のための完全な調整指針の基礎がなかった。

その人間と科学の普遍的な基礎は、来るべき展望に役立たせるのに十分広く堅固な信頼できるものだった。

さらに、過去 15 年間のガン問題に関する大きな作業で、これらの破壊的で悪魔的な力と生命機能の対抗力についてのいろいろな事実を豊かに収穫した。

生命システムの最初の腐敗と退化の診断に関する、安定した確認は T-細菌の死の発現因子の培養と顕微鏡診察、そしてライヒ血液検査のような処置を通して確立された (参照ガン BIOPATHY)

我々の最初のレポートは、一般的な概念を含む。 -272

1950 年 12 月の中頃ごろ育ち始め、ついに 1951 年 5 月の末に現在の、本来のオルゴンエネルギー対 NR エネルギーの現象へ我々に向きを変えさせた。

これらの出来事を端的に言うと、物理的な機能に関して

、そして、Oranur での特に重要な具体的な実験の進展に関して、厳しい破壊的な衝撃を多くの方向にあたえた：

これらの Oranur の最初の段階に加わったすべての労働者は、「Oranur 病」でさまざまな程度悩まされた；

実験用マウスは、死んだ；

そして、実験的な建物は何ヶ月の間機能は停止し回復する可能性も永久に破壊された。

プロジェクトを遂行するように慎重に設計された、全ての計画は永久に廃棄され、再設計されなければならなかった

物理的に重要な概念は、ぐらついた。

自由でオープンな、本当に科学的な心だけが、偏見または恐れなしにこのレポートを続けることができる。

出来事の状況

1950 年 8 月 30 日に、私は OR エネルギーが核に対抗する可能性を、ウィルヘルム・ライヒ財団の年次評議会で報告した。

(Cf.オーゴン・エネルギー速報、3/1、1951年1月、pp. 59-60。)

1950年12月の最初の1週間に、達成への進みを始めた。

教育的秘書 (Elsworth F.ベーカー博士) を通して我々の計画に関する情報を伝えられた、ニューヨークの医学的 *orgonomists* は待機態勢を取った。The medical *orgonomists*

我々はまず第一に、ガン *biopathy* で使う、OR エネルギーなどでない、現在の医師によく知られている生命体の機能低下の際の治療ではないことを、明白にした。

、これは、我々の肩に重い責任が当然降りかかった。

我々だけが発見可能だった、オルゴンエネルギーは放射線障害の治療に多くの希望を感じさせた。

USA は 1950 年 12 月の最初の日の危険な状況に直面した。そのとき、中国の共産主義者の凶悪な攻撃が韓国を襲った；

赤い独裁者とイギリスの同盟国はいつも取引し；彼らの後背地満州を USA の手で、爆撃しないという誓約をした；

彼らの力が韓国で行進する間、感情的な伝染病の最も洗練された方法を全て使用することで、はるかに優れていた赤いファシストの戦術に、無力に直面し、中国の侵略者の恐ろしい経験は国連右を通して USA の中央で宣伝した。

USA は、背後を持っていかれた。

273 イベントのシーケンス

私は普通の研究から進んで、重要な使命であるように思った理由を理解できるようにこれらの政治的出来事に言及する：

こうすることで、持てるものは何でも使って手伝おうとして、飛び込んだのだった。

私が最初実験に心を入れ始めた時、それは特別な達成目標でした。

以下の処置を、とった：

1. 12月15日に、20 ミリキュリーのリン P-32(リンの放射性同位元素) の取得申込みを発送した。

オークリッジの AEC (アイソトープ部門) に添付した手紙で、我々が放射性治療の追跡作業やいかなる陳腐な放射性物質の実験もしないことを、言った；

我々は、単に P-32 を注射したマウスでオーゴン・エネルギーの影響をテストするだけだ。添付の表は、80 匹のマウスの調査と特別な治療計画である。

主な答えるべき問題は以下の通りです

人工的に起こされた放射線障害をオルゴンエネルギーで治療できるか、防止できるか

2 調合剤は、Orgonon で放射性物質 P-32 の処分と保管のために作られ、

放射性物質 P-32 (2 週間でおよそ 4 ミリキュリー) は学生の主研究所の建物から約 50 フ

ート離れた木製の小さなキャビンに保存されることになっていた。

Orgonon はどんな居住域 (Rangeley からの 4 マイル) から数マイル離れているので、居住地域の、給水、その他の汚染に関する問題はないようでした。

我々は、実験で使った動物の死体を埋めるのに Orgonon. の研究所と他のビルディングからおおよそ 500 ヤード離れた深さ数フィートの地面の中を計画した。

注射とマウスの解剖は、他の時間には誰もいない、他から分離された、建物でされることになっていた。

保護装置を注文し、鉛のエプロンを所有し、鉛手袋と強いオルゴンエネルギーアキュムレーターの使用は、その時知られていたかぎりの人員の安全の保護について確保するのに十分な処置でした。

我々には、我々を待ち構えていた出来ごとの暗示はなかった。

実験が始まる前の 1950 年に、

我々が、これらの全ての処置が、おそらく働かないことを推測することができなかった。

だが、このような実験で核エネルギー対オルゴンを使用して、全てを保護する可能性を我々は発見した。

.3.

多様な機関と共同で医療サービスを提供していたニューヨークの我々の仲間の医者 1 人はこれらを取り扱う規則との相違点を発見することができた。

-274 OR ENERGY VERSUS NR ENERGY NR エネルギー対エネルギー

AEC またはアイソトープを取り扱う際の厳しい、厳格な必要条件是多くの商業的、科学的な研究所で、守られなかったと我々は聞いた。

274

我々は、それを取り扱う際、または、2 ミリキュリーの放射能のときは、鉛レンガの遮蔽が必要ないことをその場所で学んだ。

オーゴン物理学と古典的物理学との長年の接触で、多くのことは違っているので、正確な一般的な合意は、ひたすら正確さの要求の中から現れることを学んだ

たとえば、純粋な 1mg のラジウムの完全な毎分の測定比率 (cpm) といった最も基本的な疑問に対して、物理学の決まりきった教科書では、答えを見つけることができない。

これらの事実を述べることは重要です;

それは、知識の他の分岐点での、我々の同僚の労働の価値を下げたり、批判したり、することを意味しない。

4. 連絡をとり (参照 今までの歴史の記録、332 ページ)、申込書を送ったとき、私は、約 7 年から 12 年前からやっていた NR 放射能と OR エネルギーとの関係と非常に古くからの観察記録の要約に専念していた。

私はまた、作業の基礎を準備し始めていた。

まず第一に、将来、実験されることになる全ての場所の自然「放射能」がモニターされなければならない、器具を準備しなければならない、主な実験のための調整をしなければならない。

12月15日-27日、1950：これらの事前調査の結果が、ここにある、

| No. | 背景の cpm (NR は無しで) | Orgone- 処理された放射性硫化亜鉛 CPM | Orgone- 処理された 1 mcgr ラジウム CPM | 距離 |
|----------|-----------------------------|--------------------------------------|-------------------------------|-----------------|
| Day 日 | A | B | C | |
| 1 | 40 | 500 | 30,000 | 1cm. |
| 2 | 50-70 | 2-300 | 20-30,000 | 同上 |
| 3 | 40-60 | 3-400 | 30,000 | 同上 |
| 4 | 40-50 | 4-500 | 30,000 | 同上 |
| 5 | 40-50 | 2-3 00 | 2-3,000 | C からの距離 10cm |
| 6 | 60-70 (ORACC の内 側で)*※ | 1/4 鉛の中で 60-70 2-300 容器無し で | 3-4,000 | 同上 |
| 7 | 60-70 | 鉛の中で 200 300 容器無しで | 3-4,000 3-4,000 | 同上 同上 |

※オーゴン・エネルギー・アキュムレーター。

275

これらの事前の測定結果は、基礎としては十分かもしれない。

鉛の遮蔽は、これといって活動量を減らさなかった。

放射性物質が OR エネルギー・チャージャに入れられたとき、背景カウントが上がった。

我々が、GM 測定器に対する効果が大いに異なることを知った時も、この事実には注意は払われなかった。

後で主な実験が実行される予定の学生の研究所の中の背景の活動は、40-60 cpm の間を変化

していた。

T6C5 型のシリアル・ナンバーG-632 の測定管 (Tracerlab 社 (30mg./cm².の壁の厚み))
で測定された。

SU-5 ベータ・ガンマ測定メーターでの背景測定

1950 年 12 月 15 日から 1951 年 1 月 10 日まで、

| 日付 | Student Lab CPM | Mouse Observ CPM | Garage CPM | Observatory CPM | Shop CPM | Free Space CPM | 注意事項 |
|----------|-----------------|------------------|------------|-----------------|----------|----------------|-----------------------------|
| 12-15-50 | 30-50 | 30-50 | 30-50 | 30-50 | 30-50 | 30-50 | Normal for Organon |
| 12-16-50 | 30-50 | 30-50 | 30-50 | 30-50 | 30-50 | 30-50 | 同上 |
| 12-17-50 | 30-50 | 30-40 | 30-50 | 50-70* | 30-40 | 30-50 | 同上 |
| 12-18-50 | 30-50 | 30-50 | 30-40 | 50-60 | 30-50 | 30-50 | 同上 |
| 12-19-50 | 40-50 | 30-50 | 40-50 | 40-50 | 30-50 | 40-50 | 同上 *Preliminary |
| 12-20-50 | 30-40 | 30-40 | 30-40 | 30~60* | 30-40 | 30-40 | Oranur experiment |
| 12-27-50 | 30-40 | 30-40 | 30-40 | 50-70* | 30-40 | 30-40 | *同上 |
| 1-3-51 | 40-50 | 40-50 | 50-60 | 60* | 40-50 | 30-40 | *同上 |
| 1-10-51 | 30-40 | 80~90* | 30-50 | 90* | 40-50 | 30-40 | Oranur at work since 1-5-51 |

これらの例は、基本機能についての考えを提示するだけで、調査の完全な報告ではない
オルゴンが集中した空気では 40-70 cpm の高い背景カウントが常に観察された。

我々は、器具の比較の目的で Tracerlab に放射性・コバルト (CO-60) のサンプルを注文した。』、この源からの測定は、大いに変化し、我々の研究所で確立されなければならなかった。

276

我々は希望を抱いていたが、Tracerlab から測定した比率を得、その放射能が最初と大きく変化し始めたことを知った。

--276

源は、Orgonon で非常にチャージされたオーゴン・エネルギー空気に接した。

1950年10月28日、5.3年の半減期で 2.26×10 倍のミリキュリーの CO-60 が到着した。

この放射性物質は、よくチャージされた学生の研究所に触れさせることはできず、OR エネルギー天文台の中の場所に急がせた、そこでは2、3分の短い間に合理的にちいさな OR 効果が予想された。

20日の夜の、背景カウントは、まだ40-50でした。(すなわち標準の Orgonon の建物) r. ソースが真鍮製の容器の中から持ち出されると、70cpm となり、SU-5 測定器メーターによって 0.016mR/H (毎時 16 ミリ ntgens) が測定された。

調整された検電器のアルミニウム検針針に対するイオン化影響は1秒の10分割で900振れるほど急速でした。

ORG 時間の自然発生的な放出率は毎秒ごとにほぼ180でした。

このように、イオン化効果は、完全に現れた。

ソースを保護するために、それは『Aの厚さの鉛箔でしっかりと包んだ』。

その時、最初の驚きが、来た。

30日、23時から、3時間半後に私は再び源をテストした。

この時、集中した OR から遠く離し、観測所のコンクリート壁の外で、MR/H は 0.016 で、cpm は 150 に達した。

しかし、イオン化効果は、なくなっていた。

NR 源は、自然発生的な放出率を越えては、チャージされた検電器に全く影響を及ぼさなかった。

NR 源を OR に触れないよう、慎重にオルゴンアキュムレーターから遠ざけたので、この仰天する結果は鉛で遮蔽された OR 活動によって説明できるだけだった：

鉛は長年 OR エネルギー研究所に置いてあったもので、それ自体どんな数値も与えず、たぶんイオン化効果を除去した。

ソースをその真鍮製の容器から取り出し、検電器のプレートの上でむきだしにしたときも、イオン化結果は、次の3週間戻らなかった。

This, then, was a major first result in the direction of the expected OR-versus-NR effect.

このことは、NR 効果に対立する OR-の対抗力の期待した大きな最初の結果だった。

次の日の、12月29日、NR の electroscopic 検電器の放出率は、OR の放出率より非常に遅くさえあった：

(OR) の毎秒180に比較して (NR) の300。

1951年1月2日まで、真鍮のカプセルでシールドされたソースの cpm は、autoscaler の測定メーター (Tracerlab) で測られ200まで上がった。

それは、1つの測定値から次に大いに動いた：

150と250cpmの間で、比較して70以上動いた。

また、2日目に MR/H は最初の0.016から0.02と0.04まで上がった。

それは何日間もそのレベルにあった。そのエネルギー出力は二倍よりも、多くなった。

277

また、背景カウントは、2日目に 60cpm からゆっくり登り、3日目に、100 までなる **出来事のシーケンス**を持った。

すべてこういうことは、詳細に更に調査されないままだ。

私は4年間、背景カウントの活動が 40-70 cpm になり、高度な真空で周囲のオルゴンの活性度が毎秒 20,000 の高さになる大気圏を観察してきたので、背景の増大には動揺しなかった。

さらに、大気エネルギー・レベルの増加に対して、よくシールドされた小さな量の NR 活動がなく、OR の反応に責任があることは完全に明らかだった。

セメント、レンガ、その他どんな厚みの金属でも鉛などすべてを透過するその能力のために、NR 源を舌で取り扱ったとしても、鉛エプロンと同様に鉛手袋を使うような、健康の安全性を確保する必要条件の、予防措置は確立されていず、オルゴンの活動から身を守る方法と、明確な高さが、早期にはなかった。

私は進めて、高いオルゴンチャージの弊害をなくすことを望んだ。

NR 源への更なる OR 照射のために、CO-60 を、「放出器」に入れ、小さな 5 層 5x のオルゴン「シューター」に入れた。

私は 1951 年 1 月 4 日に、容器と遮蔽から NR 源を取り出し、2 つの GM 計数器で裸の NR 源を測定した。

自動測定器で雲母の窓から 1cm の距離で、5-6000 cpm だった。

その容器の内部の率は 200-250 cpm のあたりで、SU-5 の測定メーターで測定して 0-04 MR/H ほどだった。この率は毎日、かなり変化した。

活動は 1 月 8 日に 7000cpm で、12 日に 3000cpm に下がり、裸にして 15 日に 5000GPM でした。

時間単位ごとの数値は、一定ではなかった；

これらは、それほど大きく変化したので、恒常的な放射能はどうなっているか、問題が、出てきた。

核の放射能の量的問題は、**orgonomic** な調査の枠組みでは放射能測定器具の少量の目盛りで、一番最初の観察イオン化（例えば閃光など）(.etc.) を除いてはこれまで多くの場所を占めてこなかった。

ところが、OR が NR に影響する問題が鋭い焦点になったとき、NR 放射活動の恒常的な数値を決定することが重要になった。

残念なことに、有能な放射線に関する本の中では、どんな確答も発見できなかった。

放射性発光の物質（硫化亜鉛）の小びんは、小さな OR チャージャに長年入れてあった。

それは、ずいぶん昔にそのイオン化効果と、オルゴン効果を失っていた。

それは、まだ非常に強く **luminated** した。

218

私は **autoscaler** (自動測定器 4096) によって活動を測定した。

毎日の連続的結果は **245,760cpm** でほとんど一定だった。そして、時折 **307,200cpm** まで増加した。

これは、1 マイクログラム未満のラジウムのためで、**2.26** マイクログラムの **CO-60** による **5000cpm** と比較して高い測定値に見えた。

オルゴンエネルギーに浸した私の腕時計ラジウム・ダイヤルは、まったく恒常的測定方法で長年 **40,000** と **45,000cpm** の間であった。

私は長い間この腕時計をつけたが、これまでに手首に弊害は観察されなかった。

最小のラジウムの量で、ダイヤルのカウントは、相当だった。

OR 影響がかなり相当なものであることがすぐに分かった。

新しく買った、少しの時間もこれといった長さで **OR** 空気と接触していない腕時計のラジウム・ダイヤルは、**3-5000 cpm** だけだった。

我々は、腕時計ダイヤルのラジウムの塗布量がほぼ等しいことを確かめられず、推察するほかなかった。

私の腕時計ダイヤルは、新しく到着した腕時計の **10** 倍の数値を出した。

これは、驚きでした。

言うまでもなく非常に集中したオルゴンと接触している研究所に在宅していたもう一人の労働者の腕時計のダイヤルは、**5500** と **8000cpm** の間だった。

全ての測定は、同じ自動測定器 4096 (同じ **GM** 測定管) で、同じ **1cm** の、距離でなされた。

これらの結果は、**OR** の **NR** への当惑させる非常に強い影響を明らかにした。

多くの他のケースの場合のように、我々は新たに (ゼロから) 学ばなければならないと理解しなければならなかった。

Orgone Energy Runs Amok (DOR):"

オーゴン・エネルギーは、怒り狂う (DOR) 「Oranur 病気」

中で :

ラジウムでマウスの一部を放射線にさらすために、流体放射性同位元素を注射する代わりに、時間を節約するために純粋な **2** ミリグラムのラジウムを、注文した。

各々 **1/2** インチの鉛の容器の中 **2** つ別々に、**1** ミリグラムのラジウムのユニット (各々 **8.3R/H**) を入れたものが **1951** 年 **1** 月 **5** 日に到着した。

裸の NR 源は、1 センチメートル (cm) の距離で、すぐに測られ、245,760 cpm であった。』、
 処理されない 1mg. のラジウムは、コントロールされ表示された、
 他は、OR エネルギーで処理されることになっていた。
 一番目 (No.I) は、処理されないまま、丘の天文台の近くのガレージに入れられた；
 他のもう一つ (No.II) は 1 回包まれて、別の小さな OR チャージに入れられた。
 1951 年の初夏に、我々はラジウムの 3 個目のサンプル 1mg. を得、Orgonon に持ちこまれる
 前に、ニューヨークで測定された。
 ニューヨークでのカウントは、むき出しで 16,000 cpm だけで、『鉛 A の遮蔽の中が 7,000
 でした』。
 このことを、もちろん、我々は 1951 年 1 月に知らなかった。

279

1951 年 1 月 5 日 : 11 時に

30 日目.

このチャージャは 26 ゲージの薄鋼板が 20 層に張られたオルゴンエネルギー・アキュムレ
 ーターに置かれ、それは、18 フィート x 18 フィートのオルゴンエネルギー室にあった。
 図 12 で表されるように、OR エネルギー室を周囲 60×70 フィートの研究所の実験的なホ
 ールが囲んでいる。

Fig. 12.

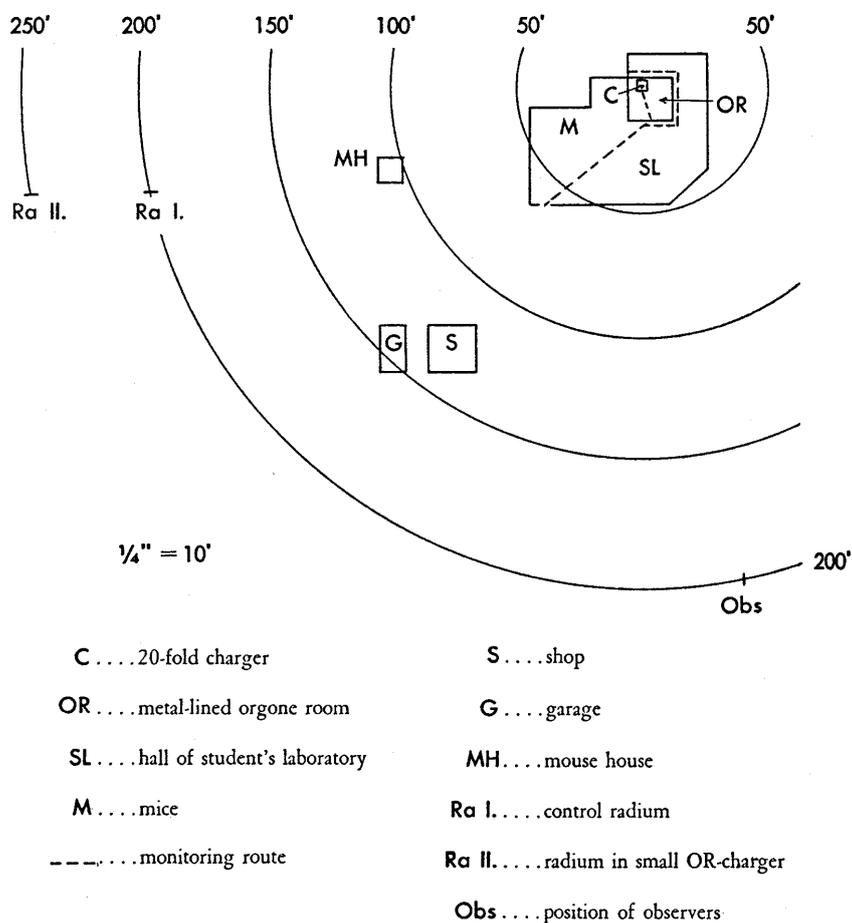


Fig. 12. Sketch showing distances of places in Students' Laboratory and surroundings from OR energy room and 20-fold charger.

C20 層のオルゴンチャージャ..

OR.金属で張られたオーゴン部屋

SL ... 研究棟のホール

M... マウスのモニタールート

S.... ショップ

G. . ガレージ

MH... マウスの部屋

M モニターしているマウス...

G.ガレージ...

MH 観察用マウス

Ra I ラジウム

Ra II.小さな OR-charger にラジウムを収納して観察する。

図 12 オブザーバーの位置。

スケッチは学生の研究所と OR エネルギー室のまわりと 20 層のチャージャの場所からの距離を示す。

.前に Ra の針がチャージャに入れられた直後、この建物の至る所で背景カウントは 40 から 50 cpm の間でした。(すなわち) この建物は普通でした。

280

その時、我々は最初の大きな間違いをした。それは同じ日に得た驚くべき結果と関係があった：

ラジウム針をチャージャに入れたあと、背景カウントを個人的に測定しておかなかった。

雨のときに私は非常に高いカウントを測定していた；

すぐにホールのチャージャーから Ra 針を取り出してしまい、Oranur 効果の全体を見のがした。

自動測定器と測定管で、ラジウムの活動を (.3mg/.2cm 厚み) 雲母窓) で前に測ったので、私は、実験開始直後に個人的に背景カウントを計らなかった、そして、裸の針から 1 メートルの距離で 2457cpm の数値だけ得た。

すなわち、針を入れたチャージャを置いた 20 層のアキュムレーターは、およそ水平で 5 フ

1 フィート正方形(およそ 1 メートルの正方形)と測定される。

20 層のアキュムレーターの外壁と OR エネルギー室の金属を敷き詰めた壁との間の距離は、両側に 6 から 7 フィートを加える。

これは、Ra の針が OR の部屋の壁の、2 つの側面からおおよそ 10 フィート離れ、3 番目の側面から、約 16 フィート離れていたことを意味する。

我々は、OR エネルギー室の金属面が若干の遮蔽を加えると考えていた。

実験的なホールから平均約 30 フィート (すなわちおよそ 10 メーター)、シールドされたラジウム針からかなり離れたところに仕事に従事する労働者がいた。

距離の表

| No | シンボル | 場所-建物 | OR 部屋の距離 フィートで | 学生研究所の建 物からの距離フ ィートで |
|----|-------|------------------|-------------------|----------------------------|
| 1 | M | mice マウス | 40 | |
| 2 | w | 労働者のデスク | 23 | |
| 3 | MH | マウス・ハウス | 105 | 50 |
| 4 | S | 店 | 130 | 75 |
| 5 | G | ガレージ | 145 | 85 |
| 6 | NR | コントロール ラジウム | 200 | 150 |
| 7 | NR+OR | チャージャの中 のラジウム | 250 | 200 |
| 8 | Ob | オブザーバーの 位置 | 200 | 160 |

280

研究所のホールの外が、ラジウムから離れているので安全だと感じる、二番目の間違いを犯した。

我々は、チャージャーの中におおよそ 30 日目の 16 時まで Ra の針を残しておいた：

30 日目の (すなわち、1 月 5 日の午後 5 時)。

シールドした場所に Ra を続けて置いておくつもりだった。

我々には、今話している出来事の暗示はなかった。

背景カウントは、技術的なアシスタントによって 13 時に測定された。

ホールの中は、70 から 80cpm と高かった。

アシスタントは、この高い背景カウントを報告しなかった。

30 日の 16 時、私が下の研究所に降りたとき、空気は粘着性で重かった。

Ra 針から 50 フィート離れた背景カウントは、80cpm にかげあがった、OR の部屋の壁の外では数百になろうとしていた。

労働者は、ホールからすぐに出るように命じられた。

OR ルームの内部は、耐えられないほどチャージされた。

Ra 針が置いてあるところから 10 から 16 フィートまで離れた、壁は「熱く」感じられた。

私が 20 層アキュムレーターに近づくと、ポータブルの GM 測定器のメーターは「動かなくなつた」。

数値を測定する分別は、その瞬間うまれなかった。

OR 反応を鎮めるには最初にチャージャから Ra の針を取り出すことだった。

妨害の原因は、測定メーターのバッテリーではなかった。

1947 年前の最初の GM 実験で (参照 p. 201ff.)、私が非常に充電した測定管を作動させたとき、類似した現象がおきたことを覚えていた。

GM メーターがしばらくして、再び動くなら、妨害は確かに空中の妨害物の活動による極端なエネルギー運動を通した新しいタイプの物だろう。

GM 測定メーターは新鮮な外気で 2、3 分後に修理なしで実際に回復した。そして、戸外での背景カウントは通常の 30-50cpm を測定した。

金属室からの約 150 フィート離れた、ガレージの小さいチャージャの内部にラジウムを、納めた。

すぐに建築を換気して、高いオルゴンチャージをす速く取り除こうとした。(そのかいもなく)

(1951 年 5 月の) この日は、まだ「活性化」していた。

それがガレージの外部へ運び出されたとき、ラジウムは上で記述された効果は何も生じなかった。

高まった OR エネルギーのある建物内で我々みんながすぐに体が頭痛と吐き気で圧迫され、苦痛で引きつるような空気の重さをあちこちで感じたのに対して、そのような感覚は外部ではラジウムから 1 フィートほど近さでも感じられなかった。

さらに、我々のものすごい驚きは、研究所ビルディングからの換気は圧迫するこの空気を除去しなかったことだ。

そして、ラジウムがだいぶ前に除去され、1 時間の換気の後でも、OR エネルギー室に入ることは不可能でした。

これは、新しい出来ごとでした。

通常新しい空気は、どんな不当な **orgonotic** な高い数値も取り除く。

しかし、**Ra** 針を取り除いた後、ホールの中の高い背景カウントは、すぐにほとんど標準に戻った。

30 分の換気の後、それは、**60cpm** に下がった。

ラジウムの除去の後に、我々全員が長く経験した主観的な感覚をより完全に読者に知らせることは重要だ；

そしてオーゴン・エネルギー研究所の中の特に **NR** 材のない **OR** エネルギー室に近づいたとき、いつでも、日がたったのに概して感覚はさらに強烈に、戻ってきた、

OR 研究者は、彼の知覚閉鎖から自由なことが専門的に要求される。

新しい領域での位置を案内するのに、稼働中の装置で客観的に制御してわかるものと同時に印象と感覚反応に大いに頼る。

主観と客観的な経験は、欠かさず、共に一緒に行かなければなりません。

感情的にブロックされるか「死んだ」研究者は、オルゴン研究で完全に役に立たない。

彼自身と他を危険にさらすだけだ。

わずかに、にがく、いっぱい伸ばした舌はすっぱくなり、塩気のある鋭い味覚は、建物の中と、建物の外 50 フィートまでの至る所で、存在する全てに感じられた。

更なる実験で、この不快な感覚は、より激しくなり、新鮮な外気がある外でますます感じられた。

観察に加わった全ての労働者は、ホールへ入った後、2、3 分以内にひどい結膜炎になった。

全てのオブザーバーは、頬骨の深いところの、三叉神経の II 分岐の出口の領域に、独立して激しい圧力を報告した。

後になって食欲をなくし、大部分の労働者は吐き気を催した。そして、弱くなったと感じた；

バランスのコントロールをなくした。

額のあたりと、後頭骨の領域への鐘が鳴るような圧力は、多くのオブザーバーにほとんどすぐ感じられた。

横隔膜の部分は、特に敏感なようでした。

圧力、苦痛または強く引っ張られる感覚は、上腹部に感じられた。

一部の参加者は、ホールに入ると同時に2、3 分以内で非常に顔色が悪くなった。

自律神経の感情バランスのひどい障害の発現で、冷えとほてりが戦慄の感情の中で交互に表れた。

場合によっては、皮膚は、特別なヤシの実の模様で、まだらになった。

以下の出来事についてより多く報告されるまで、これで十分かもしれない。

OR エネルギーは、致命的な危険なパワーに変化したようでした

我々は、この効果を「DOR" (Deadly ORgone).」(致死性オーゴン) と呼んだ。

283

建物の中の全ての仕事は、すぐに中止しなければならなかった。

誰も、そこに入るのを許されなかった。

その時、例えばヒーターの油を満たすこと、あるいは、実験ホールに残されたマウスを気にかけることといった特定の雑用をやり遂げるために、一度に 2 から 3 分だけ中で働き、少なくとも 10 分間「外の空気」に触れるために建物を出るよう命令された。

オーゴンの嵐の反応に大きな感度を見せた労働者は、完全に離れるように言われた。

特別な個人的理由で、血液検査を拒否した 2 人の保守係を除いて、全ての労働者をライヒ **Orgonomic** 血液検査を毎週した。

彼らのうちの 1 人は完全にホールで働くのを禁じられ、そして、他のものも一度に 2-3 分以上長くどまってはならないと指示された。

血液検査の結果は、別に報告する。

これらは、理論的にも実際的にも大きな価値があり、「Oranur 病気」の性質の共通機能と白血病に対する関係に、新しい展望を開いた。

我々は、1月5日から12日まで毎日、1時間同じ実験を繰り返した。

(1月12日金曜日)に、我々は毎日おこなった一連の **Oranur** 実験の最後の実験を行った。実験で、20層のオルゴンチャージャにラジウムの 1mg. を入れた。

そこに 30 分間だけ置いた。

この最後の実験結果は、大きく詳細に報告されるに値するほど、激しかった。

実験のための 3 人のオブザーバーは、研究所の外およそ 100 ヤード以内に残った。

1 人のアシスタントは、実験用ラジウムを **OR** エネルギー室と、20 層のチャージャに入れて促進させた。

我々は、更なる不必要な露出を避けるために、今度は **GM** 測定器のメーターで測るのをやめた。

数分後、明らかに大きな窓から見て研究所の中の空気が「曇った」ようになるのを見た；それは、目でガラスを通して、みると、紫と青に輝き、動いていた。

我々は、研究所の外で、約 100 から 250 フィートを上がったたり下がったりして歩いたが、同じことを経験した我々 3 人全てが、最初は誰もそれにあえて言及しなかった。

ひどい吐き気、意識が鈍り、(かすかに気が遠くなる感じ) は、平衡感覚の喪失だと感じ、私の足で直立する努力をしなければならなかった。

私と一緒にいた **S. トロップ** 博士を見た。非常に青白くなっていた。

彼は何も言わなかった、そして、私もどのように感じているか、彼に話さなかった。

それから、私を感じたことと無関係に、どのように感じたか、尋ねた。

彼は、すぐに額の中の圧力と、吐き気を起こす、胃の中の弱い圧迫感といった、力ない病的な感じを認めた。

それから、私自身の反応を言って、彼の経験を確かめた。

284

我々は、実験ホールから遠く離れた外部の真冬の午後遅く、見通しのきく、乾いた新鮮な、空気にいたことを、以後両方とも話すのを躊躇した。

そこで、我々は実験を中断し、研究所から半マイルの距離までの、無人の 280 エーカー領域の中の、ラジウムを片づけた。

我々が経験したことから、研究所の壁の遠く外まで OR エネルギー・フィールドが大きく広がり、危険なことが起きたことは、完全に明白でした。

オルゴンエネルギーの機能から、明確な境界線がないので、チャージャの中にラジウムがなくても、反応は常に持続するだけでなく；より、速く広がるようにみえた。

我々は、この Oranur 反応の広がりがどれくらいまで広がるか、そして、どこで止まるか心配し始めた。

我々は、約 4 マイル離れた村に起こることに関係すると感じ始めた。

最も近い居住建物は、少なくとも 1 マイル離れていました。

我々も、全ての希望である OR の反核効果の行く末に関係なく；Oranur 実験を続けると、何が起こるか疑心不安になった：

OR が高く集中したならば、まだ未知のものである NR 材の爆発は、可能なのだろうか
苦しんでいた、病気から回復するかどうか

そして、どんな残った効果も無化するか

我々の目は熱く、結膜はかなり炎症を起こした。我々は、約 500 ヤード離れた丘の上の OR 研究棟に乗りつけ、すっきりした飲物を飲んで、別に我々の感情的で身体的経験を書きとめ始めた。

これらの手紙は、アーカイブ書式で署名して、投函された。

我々全員の共通認識は、以下の通りでした

厳しくげっぷをする // (吐き気)

目の深い部分鼻骨構造の中の圧力、

交互の寒さとほてり、

知覚異常、

不均衡の感覚、

不特定な箇所足の痛み、

腕の弱まり、

特に尺骨の領域の、鈍い頭痛、

咽頭での緊張、

ひどい頭痛。

その同じ日の朝、我々は 2 匹のオルゴンマウス（すなわち Oranur 空気にさらされた以前健康なマウス）を解剖した。

2匹は、ひどく病気で死にそうであった。

両方のマウスは、皮下組織の点状出血、肋膜の線維素タイプの滲出液、白血病の方向への形の変化と RBCs のチャージによって、出血を明快に示し、(別のレポートで後述する)、そして、白血球の増加である。

両方のマウスの血培養物は、次の日まで、T-ポジティブである。

285

T-画像と同様に血液画像でも、明らかに **Oranur** 病気と白血病の関係を見つけた。

私の同僚は、およそ 2 時間の休みの後、離れた。

私は、嫌気を起こし、疲れはてすり切れたようになって、早くベッドに入り、すぐに寝入りました。

我々は「**Oranur** 病にかかった。」、私はぐっすりと、約 5 時間、深く眠った。

24 時に、私は起き、リフレッシュした。

私は、非常に明瞭な完全な周囲の形態の認識と、展望が現れたことに感激した、そして、まるで私の **OR** エネルギー・フィールドが特に広がり、活性化されたようだった。

私の目は、クリアになり、スパークしていた；

結膜は、わずかに吹き込まれた。

その時からいくぶんバラ色に見えた。

私は、12 年前の 1939 年 1 月に初めて、私のオスロの研究所で **SAPA bions** の **OR** 放射に遭遇したとき、もっと小さいが、似た経験をした。私は、充血した目で嫌気を起こして、恐怖を最初に感じた；

私はいたずらに「身を守ろ」うとして、援助のためのアムステルダムの物理学者に電話をし、起きたことと、増大するかもしれないことを恐れた。

それから、2、3 日後に危険に見えないので、開始した。

私の、頭は非常に明瞭になった、

私の全身は、冬の北風の中、服を着ながら焼かれた、また、それから、私は、関係する危険への恐れを失った。

私は、どんな保護もなしにハイオルゴン-エネルギーを使うことを学び始めた。

これらの経験は、私の本「**癌 BIOPATHY**」である程度報告した。

しかし今度の、全反応は、1000 倍増加したと思われた。

OR エネルギーは、怒り狂ったようで、おそらく建物の外さらに遠くまで、大気の中に連鎖反応が起きる。

特別な注意は、避けることが出来なかった。

1939 年に、私は全く単独に働いた。

今度は、1 ダースの労働者は **Orgonon** で仕事をし、そして、多くはニューヨーク地域で備えていた。

夜の 1 時に、私は図書室でラジオをオンにした。

大気のオーゴン・エネルギー・アクションを報告するガイガーカウンターからの騒音だけの送信は、なかった。

私は、この特別なラジオが何かで悪化したと思った。

私は、壁面コンセントのプラグの向きを変えた。

雑音は、残った。

私は、もう一つのラジオをオンにしてみても同じ結果だった。

3番目のラジオにも、同じことが起きた。

これは、善意の偶然の一致ではなかった。

2 マイクログラムの放射性コバルトを、研究棟の屋根より高い塔へ移動した。

この塔は、セメントの床が基礎になっている。

したがって、雑音の多い3番目のラジオから約60フィート離れた、セメント床を放射性コバルトの活動が伝わったことは、ありえないと思えた。

286

それでこの反応は、理解できるようになった：

放射性コバルトを小さな10層のチャージャーの内部に入れて、置いた塔は、また、建物全部にアンテナ構造を収納しており、塔のアンテナから壁の裏の中をワイヤーが走って下の研究所ホールのコンセントにつながっていた。

この時の効果は、以下の方法で説明可能だった：

もしも、核の活動で大気のオルゴンエネルギーが激しく興奮し、無数の放出が、起こったならば、接近した雷雨、あるいは、二次コイル・システムを操作したときのような「静電気」のようなノイズを出している。

私は、次の朝研究棟の塔からチャージャを含むラジオ・コバルトを除去し、それを北の壁から約100フィート離れた、ガレージに置く予定でした。

それで雑音が止まるならば、私の解釈は正しいと思われた。

私は、正しかった：

雑音は次の朝止った、そして、全ての3台のラジオは再び動いていた。

この観察は、繰り返すことが必要だった。

また、Oranur 効果は、以下の方法で現れた。

観測所はいくつかガイガーカウンターがある。これらのうちの1つが大気と生体のエネルギー活動を記録するようになっていた。

後者（有機体の活動）は長さ6インチと幅5インチのコイルとワイヤーで送られる。そして、それはGM装置の拡張アンプのグリッドに接続している。

それは、スイッチによって自由に時々閉じることができる

その人の手がコイルにさわった瞬間、ネオン管にインパルスと光の閃光の安定した形で有機体の反応が、現れる。

陽がさんさんと降り注ぐ乾いた日の、送信コイルからおよそ1または多くとも2インチの

距離の手のひらの、強い生物エネルギー・システムは、リアクションを起こす。

しかし、さわらないで、距離があって、おきる反応は、非常に珍しく、非常に乾いた、陽がさんさんと降り注ぐ日だけに、起こる。

私が特に強いと感じる時だけ、私の手のひらはそれを与える。

私は、私の手の **OR** フィールドをテストするために **GM** 測定器へ行った。

2 フィートの距離で反応が起きたときさえ、私は唖然とした！

私は、何度も試験した。

疑いは、ありえなかった。

私の手のひらのフィールドは、約 2 フィート測定できるほど広がっていた。

私は、したがって、ひどくチャージした、あるいは、少なくとも異常に高いバイオエネルギー的な活動状態にいた。

私はその刺激的な日の間に起きた、これらの事実をすべて説明するとか理解したとか、言わないで、報告している。

これらの事実の多くは、私の約 15 年前の活動の経験から、すでに形態を知っているオルゴンエネルギーと一致していた。

他の（例えば多数の死にそうになっているマウスなど）は、まだ説明できなかった。

しかし、その激しい反応は、すでに **OR** による特別な生物学的反応として詳細に述べたもので、**NR** 放射線の効果ではありえないことに全く疑問はなかった。

しかし、わずかな疑問が我々を悩ましていたが、以下のことが起きたことで、この点は、完全に追い払われた：

アンテナから広範囲にわたる大気の妨害を引き起こした後、**2.26** マイクロキュリーという、少量の放射性・コバルトは、**150** フィート離れた、天文台のガレージの小さいチャージャの中に置かれた。

3 人の医者が、**Orgonon** での会議のためにニューヨークから到着した。

彼らに **Oranur** 効果を示すために、私はアシスタントにラジオ・コバルトのサンプルなしの小さなチャージャを持ち込むよう頼んだ。

テーブルの上に空のチャージャを 1 分間よりも短い間、置いておいた。そのとき、まるで船酔いの影響を受けたように、我々全員気分が悪くなり始めた。

我々は吐き気を催し、頭と目に圧力がかかり、体のいろいろな部分での痙攣が起きた。

再びチャージャはすぐに移動したが、十分な換気と心を引きたたせる強い飲物にもかかわらずおよそ 1 時間効果が持続した。

最初から、医者は、**Oranur** 実験の真実を速くも確信していた。

私は、**orgonomic** な機能と作動論理の受け入れを拒否し、座礁する人は、このような空のシューターから発散する空気を吸い、オルゴンルームの空気の中に少量の **NR** と共に、20 分間だけでもいることを提案する。

科学的な議論での提案されたような効率的方法は、**orgonomy** に対する不合理な異議に直面

すれば、完全に正当化される。

科学において、意見でなく経験だけが、問題を決定する

オルゴンエネルギーの有効な意見に達する唯一の方法は、かなりの期間の間規則正しく OR
アキュムレーターを使うことだ。

特別な生物学的反応

Oranur 効果と接触している労働者が非常に特別な仕方で反応したことは、ますます明白になった。

まるで大気圏の中の鋭い弾薬が彼または彼女の最も弱い点を攻撃したように、思われた。

1 人の労働者は、数年前肝臓の炎症を病み、時々腹部がふくらんだ。

この労働者は、実験の間、腹部の膨張感と肝臓の痛みについて不満を言った。

二人目の労働者は、長年皮膚の過敏症を病んでいた。

それは、皮膚を通してどんな苛立ちにも反応した。

その時以前、彼は長年トラブルから開放されていたが、実験の間、皮膚炎になった。

288

3 人目の労働者は、肥満になり、感情的な苦悩から「爆発」が出現した。

実験の間に、彼女は、まるで内部の若干の分泌腺が機能不全に陥って病気の肥満体で苦しむように、あらゆる面で、はれたように見えた。

4 人目の労働者は、副鼻腔炎と時々眼球が突き出るバセドー氏病で苦しんだ。

Oranur 実験の期間の間に、彼女は、ベッドの療養を必要とするぐらいこれら正確な症状でひどく苦しんだ。

5 番目の労働者は、かつてしつこい膀胱トラブルで苦しんだ。

Oranur 期間の間に、彼女は膀胱の部位の痛みで気分が悪くなった。

6 番目の労働者は、何年も前にあった、上腹部のわずかな痛みで苦しんだ。

彼は深刻に正確に同じ徴候で苦しんだ。

7 番目の労働者 Oranur.の間（私はオーゴン療法でよくその人を知っていた）が生物学的被害 biopathic な疲労から苦しんだ、

Oranur の間、彼は、ひどい不調と、弱点、血液画像も同じように反応した。

彼は、Oranur 実験の作業から完全に離れなければならなかった。

他の労働者は、一般的な仕方で反応した。（例えば不調と頭痛、短い期間の弱点の再発）

これらの徴候は、少量の NR 放射線源（1mg.）とは、全く関係がなかった。

少量の NR に接触した OR システムによるので、全く NR 源がない場合でも、これらは現れた。

たとえば、我々は長年ガンの場合の OR の仕事から、オルゴンエネルギーは病気にかかった正確な部位または器官に影響を与えるのを知っている。

これは、本来バイオエネルギー的に（解くのが簡単でない）大問題です。

これらの観察の重要性は、明らかだ。

これらは、将来可能な **OR** の治療的使用の可能性を開いた：

OR は、治療する症状の種類と激しさによって、望ましい量の **NR** によって高い活性度にすることができた。

これは、**Oranur** の更なる調査をするべき主なルートとして現れた。

仕上げの妥当な投薬量は、最も重要な課題でした。

Oranur の治療的な見込みへの疑いはなかったにもかかわらず、みんなは、厳しい反応に苦しみました。

全ての労働者は、2、3週後に健康に戻っただけでなく、**Oranur** が中断したあと、彼らは特別健康で、強く元気だと感じた。

289

近距離で実験に参加した人々は、**Oranur** の特別な生物学的反応として、特別な免疫を現したという、異なった印象を我々は持った。

289

GM 測定器で測定するために 1 ミリグラムのラジウムをととてもチャージした空気に持ってきて、もはや反応しなかった。

その時、新鮮な外気を開けて「換気」し不快感を無くすことができた。

反応は、より激しくはなかったそして、持続しなかった

1951年1月5日以後最初の2週間に衝撃的な反応が起き、青くなって「熱をおびて震えが始まる」ことから前後に揺れはじめるのは、我々ほとんど全員に共通で、後で、我々みんなの顔は見事な色になった；

通常薄い色の傾向の人々は、ピンクになるか、日焼けした；

怠惰に傾いた目は、光りそして、輝くようになった。

私は個人的に、1939年に **SAPA bion** の放射を、発見し、類似したバイオエネルギー的な嵐に遭遇し、非常に活発だと感じた詳細な動きと現象を、よく知っていた

私はほとんど睡眠を必要とせず、いつもよりとても楽々と、よく働いた、そして、手足を動かす際に、独特な快さを感じた。

また、私は非常にチャージされた **OR** 大気で、全く、不快な反応なしで、**NR** と働く能力を確認し始めたが、2週間前だけは、非常にチャージされた **OR** 大気の中の同じ少量の **NR** は私を深く邪魔し、無力にした。

したがって、**NR** 効果へのいわば免疫についての考えは、もはや奇妙でなく、実際に我々に起きた事をそれほど鋭く否定しなかった。

我々のバイオシステムの鋭い **OR** 反応は、それに順応するだけではなかったように見えた。

我々がなにもなければ持つことができたものより、我慢することではるかによりよくすることができた。

一部の医者がニューヨークから新しく到着したとき、実験の開始と3週間後での我々のバ

イオエネルギー的な状態の大きな違いを、対照して明らかにすることで、ケースの中に非常にチャージされた OR 大気の中の（マイクログラム）という少量の NR の存在にひどい不快感と、バランスの損失で、反応することを明らかにした。

2 人の新顔がほとんど気絶した間、他方、我々は簡単に、そして、能率的に働き Oranur に適応した。

これらの医者は、すぐに、我々が何を話しているか理解した。

彼らは、*orgonomy* の正確に同じ経験の事実を習慣的方法で、疑う誰をも服従させることを提案した。

みんなは、これができれば、しなければならないことに同意した。

効果と危険を含んだ免疫可能性に関して、明快さが得られるまで、マウスの被爆実験は行われ、続けられた。

290

ちょうど今定まったことに基づいて、私は以下の可能性を慎重に考慮すべきだと提案する：私は、Oranur の NR 放射効果に対する「免疫効果 *immtrnization*」と呼ぶ、放射線障害に対抗するとても強力な武器を得たが、我々は、更なる実験で、私の観察を補強しなければなりません。

その最後の結果を考え抜いていくと、おそらく以下の方法で NR 効果に対して全人口を免疫にすることが可能だ。

一回目の、慎重なステップでは、Oranur の免疫は、NR-ラジウム、ウラン、放射性同位元素、ピッチブレンド、その他何らかの、マイクログラムのみ少量で、高いエネルギー・レベルに興奮したオルゴンアキュムレーターを動かし人々が使用することによって確立することができた。

低いところから高いところへむかう Oranur チャージの慎重な進行を通して、

非常に高レベルで機能する生物エネルギーが、提供することができ、

そして、それを現在持つと脅迫する原子力爆風は

おそらく、爆風からある距離の人口には広範囲にわたる有害な影響がない。

もちろんこれはその時の 2、3 の観察のみに基づく提案で、それは実行不可能なことがわかるだろう。

我々は Oranur（現在のいわゆる DOR 効果）の、致命的な性質を知らなかった。そして、実験用マウスから学んだものは、脱水と RBCs の変形と内部の窒息を通して血液崩壊の方向に行くようだ。

ほとんど、すべては、依然として調査され、広く安全な基礎の上に確立されていないままです。

このレポートは、特定の方向を示すだけだ；

それは、最終結論を主張しない。

ポジティブな方向で、ほんの少しの希望も、言えないようではいけない。

それは、核戦争の脅威からの避難へのちょっとした答えでしょう。

我々が行動と意見を鋭く自発的にコントロールする準備ができている限り、害はそこから生じない。

この点で、現在の以下の結論は、保証することができる：

1. NR 放射はオルゴンエネルギーを鋭く活動させ興奮させる。

これは、前の多くの年の経験に一致して、全ての電磁気エネルギーは OR エネルギーと異なり敵対的だ。

2. 実験領域と近くで接触した労働者のバイオエネルギー的な (orgonotic な) システムは、大気の鋭い orgonotic な刺激にひどく影響を受けた。

3. Oranur による被曝は、死に至るまでの自律神経系と血液システムの重い病気を引き起こすことがある。

4. 最小の量でも、NR による OR の刺激は、過大だ。

生物学的に特別な反応

291

オルゴンは、いわば、野放しです。

OR に対する NR 影響は、その主観的な面で死の痕跡を与える。

まるで NR は、致命的なものであるように、有機体のオルゴンは NR に対抗する。

いわば、陽がさんさんと降り注ぐ日の or-gonotic な輝きから稲妻が発生するのに類似して、いつもは穏やかなオルゴンは致死的な枝 (DOR) に分裂する。

5. 病気を引き起こすのは NR でなく、Oranur の大気なので、Oranur と同様にすべてを透過し、どんなに多量の鉛レンガでも、エプロンまたはマスクでも分離しシールドすることができない OR なので、身を守る可能性は、ない。

6. 致命的なオルゴン効果 (DOR) は、白血病が観察される方向で活動する。

骨、髄、その他の破壊である RBC-の発生システム、

7Oranur プロジェクトは、全体として NR +オルゴン反応に含まれるオルゴンの致命的な変化の完全な表れとして運命づけられて現れた

しかし、非常に重要な他の可能性が、NR +オルゴンにある：

a. Oranur の健康を生み出す性質は、慎重な投薬量によってだけ入手できる。

砂漠で死の渇きにさらされているとき、誰かが水を発見し、彼の胃にすぐにガロンの水を注いだとすれば、彼は、他でもない人命救助の要素によって確実に死ぬでしょう。

OR は、有益な健康に寄与する Oranur 活動のために NR の望ましい量の慎重な調整によって、オルゴンを刺激し Oranur 反応させるのに十分な時間オルゴンアキュムレーターに入れることで可能だった。

b. 有害なものから有益なものを切り離す境界線が、なければならない。

*各々の有機体のオルゴンエネルギーで興奮している状態。

8. 理論上の仮定では、原子の爆発において大気のオルゴンが重要な若干の役割を演ずることが、完全に放棄することはできない。

4。

原子の「パイル」は、金属の（プルトニウム）と非金属の黒鉛材とで造られ、特別な種類の OR チャージャーを構成する。

若干の部分で少なくとも、

OR アクションの連鎖反応はウランの影響によって誘導されることがありえる。

これらは、更なる実際的な実験のための理論的な問いかけで、可能性の推測以上のものではない。

9.

全ての機能を完全に解明しようとする上で、長い間よく知られたバイオエネルギー的なくつかのよく知られた現象と同調して OR の死の性質がそれほどドラスティックに明らかに現れて、ウィルヘルム・ライヒ基礎の調査スタッフを啞然とさせた。

a. これらが致命的な T-細菌と接触するとき、健康-肯定的なパパ bions は興奮したようになって、強く luminate します。

292

パパ bions は、T-細菌を殺すことができ、この過程で、パパ bions の一部は、自らの回復する性質を失いそして、有害な T-体に変質する。

b. 非常にチャージされた RBCs は、ガン細胞を固定して、自らに T-崩壊を引き起こすことで、ガン組織を攻撃することができる。

しかし、この過程で、健康な RBCs は、自らの生物エネルギーのチャージを失い、T-体に崩壊する。

c. それは、有名で一般的です。健康で、実直な、正直な人間が、悪と死と戦う時、全ての彼のエネルギーを使って戦っている彼自身が、悪の特質と正確に同じものに変わるかもしれない、発展するかもしれない。

挫折を通して、愛が簡単に激しい憎悪（その正確な対立者）に等しく変化することは、有名です。

自然のいろいろな領域のはるかにかけ離れた機能特性の中に、とても動いている性質のものがある。

一つの法則が全てにみなぎるこの基本的な統一の影響に、人は、耐えることができません。

愛が憎しみと戦う間、憎しみへ変質し、T-細菌と戦うパパ bions 自身が、T-体に変質し、

そして、生気を与える大気のオーゴンエネルギーも、殺人者、稲妻に変化します；

またこのように、NR と戦う間、OR は DOR に変わる。

これらの著しい対照をなす機能の中の創造的な可能性は、終りはない。

悪に対する戦いで善を悪に変化させることのない、適切な有益に使う手段を学ぶこれらのことは一部の人間の完全な献身に値する。

またこのように最初の **Oranur** 実験の社会的関連とモラルの問題は実験の実演で必要とされる大きな危険性を正当化するのに十分重要です。

大気の **Oranur** 連鎖反応

液体放射性同位元素を取り扱う際の健康のための定まっている精巧な必要処置は、時代遅れになった。

苛立ちの下で怒り狂う大気のエネルギーからの保護の手段を、原子力エネルギーが出すことはなかった。

我々は、**NR** 放射に対する安全性処置の上で1人の医者に来てもらうためにすでにオークリッジに申請書を送った。

それは撤回された、そして、また、第二の申請書（送る準備ができていた）も保留になった。

これらの出来事の時点で、しばらくしてネヴァダで実行された原子の爆発についての知識が、私にはなかった。

そして、私は東部 **USA** と、カナダでの背景カウントの増加を予測できなかった。

私には我々の **Oranur** 実験とこれが関係するという考えはおき得なかった。

293

しかし、3週間後の2月3日の、ニューヨークタイムズが、1月の最後の1週間、カナダとロチェスター（ニューヨーク）で見つけた異常に高い背景カウントを報告したとき、私は啞然とした。

Oranur 実験に参加した **Orgonon** の数人の労働者に、1人1人独立して同じ考えがあった：我々の **ORANUR** 実験は、東部 **USA** で高いカウントを引き起こしたのか？

この質問に対する答えに近づくために、いくつかの点を、明確化することが必要となる：

1. **Orgonon** の背景カウントは、高かった：

すなわち、**Oranur** 実験中は、通常値 **20-30 cpm** の間の、2から3倍の **60-90 cpm** です。

それは、全ての研究所のビルディングの中の全ての装置またはエネルギー集中を分解した後だけは通常値の **20-30 cpm** に戻った。

どんな **NR** 源の存在がなくても、小さな1立方フィートのシューターで再び集めさえすれば、すぐに高い数値（**50-70 cpm**）以上に戻った。

装置が取り除かれると、それは再び落ちた。

さらに、**Oranur** で使用中だった **OR** アクキュムレーター単に近くにあったオルゴンアクキュムレーターは、放射される **Oranur** 効果を非常に高めた。

2. **AEC** の一部の物理学者は、東部での高いカウントが1951年1月27日と2月3日の間ネ

ヴァダで起きた原子爆弾の爆風によると考えた。

そのような説明がどんなに自然に思えても、我々は重大な疑問を持った。

原子の爆風が起こる前に、我々は長く **Orgonon** のまわりの大気のエネギーの連鎖反応の可能性に対して関係があると感じた。

我々はまた、研究所ビルディングから遠く外へ、**Oranur** 反応の激しい広がりの実現が、4 マイル離れた村に起きるかもしれないことを心配した。

異常に高いカウントがあった地域は報告された。それは、およそ **Orgonon** を中心にしてまわり 300 から 600 マイルまでの円を作った。

放射能がはるか外の大西洋の海に届いたかどうかは、誰も言うことができなかった。

しかし、我々の仮定では東部カナダより遠く、約 600 マイル南西に、それは届いた。

1951 年 2 月 3 日に背景カウントの増加が報告された。すなわち、最も強い **Oranur** 反応が起きたあとの、3 週間後。

.我々が **Oranur** 効果が 21 日で西に 600 から 700 マイルまで移動したと仮定するならば、**OR** エネギー膜の一般的な西から東方向に対して、速度は 1 日約 30 から 35 マイルまたはわずかに毎時 1 マイル未満でした。

これは、実際の可能性の限界内で正しいと思われた。

294

他方、我々が東部 USA での高い背景カウントが **Oranur** が原因でなく、ネヴァダでの原子の爆発に起因したと仮定するならば、以下の矛盾があった：

a.東部での高いカウントが報告される 1 週前に、最初の原子の爆発は起こった。

しかし、後者が 1951 年 2 月 3 日（すなわち最初の爆発の 2、3 日後）の前に、すでに数日間観察されていた。

b.、(ニューヨーク) のロチェスターの落ちてきた雪の中に、雪が溶けたあと、大気中の増加した放射能が、見つかった。；

.このように、放射能はおそらく 2300 のマイル移動した (!!) ネヴァダの **Los** ヴェガス地域から東部へは 2、3 日のみとして、およそ毎日 1200 マイルの速度であり、すなわち毎時 50 マイルである。

すなわち、晴れた、風のない日にハリケーンの回転速度である。ハリケーンの前進速度、平均毎時 10-12 マイルよりは速い。

我々の天気図によれば、1 月の最後の週は、大部分は日が照っていて、大きな嵐なしで、穏やかだった。

USA 東部の 1 月 26 日の週の大気放射能は高かったが、

ネヴァダでの原子の爆風によるのか、または、1950 年 12 月 28 日に開始したメインの **Oranur** での実験によるのか、これらのことは、全て不明瞭であり、我々の推測が確かにそうかどうか疑いを晴らし、石は引っくり返されないように、決定されなければなりません。

c. 大気中の放射能の増加は、東部で気がつかれた

東部ロチェスターからニューヨーク、ラスヴェガス、ネヴァダという例外的な後者へ方向への即時の接近という、異常なことことに気がつくことはなかった。

放射能の「雲」が、2300 マイル以上大きな嵐の速度とともに移動し、東部の境界州に着くまで、痕跡をたどれず、そこで当時の高い数値が現れただけということが可能なのか？

私は、Oranur が大気の増加した活動に対して関係があるという考えより、そのような他の解釈の方がはるかに許容できるものではないと思う。

d. これまで原子の爆発に関してアクセスできる全てのレポートは、高い放射能が2、3秒だけ続くとゼロ点を越えて；ほんの少しのマイルだけ着くという事実を強調する。

そして、爆風と増加した放射能の場所との間の約 1700 マイルの前人未踏の面積と、私は2300 マイルまで影響については耳にしたことはなかった。

他方、ビキニからのレポートは、ビキニでの爆発の年の後、生命有機体は、非常に高い放射能が残った。

e. 最後になったがおろそかにできないのは、考慮に入れられなければならない基本的な考慮として

1951年2月6日からの出来事を再びゆっくり、しかし、確実なものにしなければならない。:

295

OR エネルギーの拡張性と同様に強度の作用圏は無限にある砂の粒のような、1またはせいぜい10ポンドの核分裂性の材料の原子力の作用圏の中にある。

宇宙が原子と電子で構成されているという仮説から自分を引き離し、少なくとも長く十分にORをNRと比較したかどうかで、人は、たぶんこの重要な鳥瞰図を理解するかどうかが決まるだろう。

匹敵するのに最も少なく長い十分でまたはNRで、人が自分を宇宙の憲法の原子で電子仮説から、取り外さないならば、人はたぶんこの重要な鳥瞰図を逃がします。

Orgonon の、1951年2月6日からの出来事

1951年2月6日に、慎重なチェックは、Orgonon と、そのまわりの広く分離されたいくつかの場所で達成された。

研究所は80から120cpmと、または実験ホールの中は $2 \times 10^2 \text{mR x/H}$ と非常に高く活発なのが見つかった。

NR材は、ホールに存在しませんでした。

少量のNR材が到着してから、13日目、2月3日に測定され、数百ヤード離れた住いと建物から取り除かれた。

. orgonomic な血液検査をその同じ日に、おこない、実験的なマウスの世話をした医者と、2週前にOranur 病気のためにOrgonon で働くのをやめたもう一人の医者と私自身が高度な被爆を示した。

研究所の範囲の中で残った唯一の NR 材は、

1 マイクログラムของラジウムの破片を含むアルファ粒子の観察のためによくシールドされた scintilloscope であった。

26 のゲージ金属が敷き詰められた 1-立方フィートオルゴンチャージャが置いてあった。その時いかなる他の NR 材も、オルゴンチャージャに置かれぬし、オルゴンチャージャから 200 フィートより近くに、そのような材料は何もなかった。

鉛で遮蔽された 2 ミリグラムのラジウムは、どんな建物からもさらに半マイル離れて、置かれた

実験用のミリグラムのラジウムは、10 層の小さなチャージャから取り出された。

わずかの作用圏でも、ホールから二階の上の使っていないポーチまで研究所の 2 フィートの岩とセメント壁の外に取り除かれた。

2 月 6 日の背景カウントの測定結果は、次の通りでした：

| | |
|---|---|
| 新しく造られた OR チャージャ、内部 | 30 から、40cpm |
| 新しく造られたオルゴンチャージャの外 | 30 から 50cpm |
| 20 層のオルゴンアキュムレーターチャージャで | 100 から 30 から 40 CPM に下が った 最初の放出 |
| 2 マイクログラムを入れた金属を敷き詰めた箱 CO-60 +火花テストの結果 | 50 から 60cpm |
| Rangeley から 4 マイル離れた、物理学者 S.博士トロップの家 | 25 から 35cpm |
| Rangeley のオーゴン研究所プレス・オフィス 約 2 マイル離れたカントリー・クラブへの道 | 35 から 40CPM |
| ラジウムに通じている新しい道 | 30 から 50cpm |
| すぐ近くにシールドされたラジウムを含んでいるチャージャ、 | 30 から 50cpm |
| シールドされたラジウム (100cm dist.) を入れたチャージャ | 20,000cpm |
| シールドされたラジウム (300cm dist.) を入れたチャージャ | 1500 から 2000cpm |
| 学生研究所の外部 | 200 か ら 300cpm |
| 学生研究所の内部 (1951 年 5 月にはまだ使えない、) | 40cpm |
| OR の部屋の内部 | 30 から 50cpm |

-296

全ての Oranur 実験は、故意に中止した

数週間必要な血液検査を全てやりとげるために。

労働者は1月5日に最初に Oranur 実験が開始した学生の研究所での作業を再びやめるよう命令された。

我々は、研究所の掃除に期待していた。

若干の仕事は、天文台の密閉装置 the hail に移動した。

明らかに完全に実験を中止することは、問題外でした。

一部の労働者への激しいバイオエネルギー的な反応を考慮して、続けることも同じく不可能だった。

我々はこのように、難しいジレンマにあるのに気づいた。

新しく造られた2マイクログラムの CO-60 を置くためのオルゴンチャージャは最も魅力的だった。

大気に対する影響の可能性を考えることを、中断した。

近い将来の原子の爆風なしの実験は、確かに、東部 USA と、カナダでの 2300 という高い数値が数マイル離れたネヴァダからの爆風に起因しているのかどうかに関する問題を、最終的に決定する。

1951年2月6日の午後の間に、研究所ホールの中の cpm は、再び 30 から 40 ぐらいに降りて、低いままになった。

297

マウスの中の Oranur の結果

我々が Oranur 実験を始めるすこし前に、白血病を研究し始めた。

同時に、異なる種類の実験的なマウスは、いろいろな目的のためにとっておかれた。

Oranur 実験が始まったとき、Oranur にさらされなかったそれらのマウスは主な建物から 100 フィート離れた小さい木のキャビンへ移された。

マウスはオルゴンで治療され、同じ建物の中の洗面所へ移された。

洗面所は、片方がセメントの壁でメインの電から分離されている、そして、違う側面は開いた空の電になっている。

残りの2つの側は、フリーのオープンスペースの方へ向いている。

我々は、40匹の健康なマウスを新たに畜産家に注文し、正確な Oranur 実験の備えをした。

これら全部は NR 実験が始まる前に、数週間、OR で治療され、OR で治療されたマウスへの、NR-の有効性をテストするという我々のオリジナルな意図に従った。

これらの慎重に備えた計画の全ては、実際の出来事によって完全にひっくり返された。

我々は、少しの流体放射性同位元素も注射しなかった。

その場所で、最初のテストグループの4匹のマウスを30分間に各々3回、裸のラジウム針にさらした。

これらのマウスのうちの2匹は、前もって、OR で治療された

そして、NR 露出の後、彼ら4匹の全は、オルゴンで治療された。

結局のところ、Oranur 実験の相当な影響で、これらの期間のすべての精巧な詳細は、重要性を失った

予防したか、治療したマウスがいたかどうかは、まったく重要ではなくなった。

その後、30 分か 1 時間、純粋なオルゴンで治療したかどうかも、重要ではなくなった。

原子力プロジェクトで使われる精巧な保護装置に意味がなくなったように、慎重に分単位で OR 照射のタイミングを測る前からの習慣が意味がなくなったことをすぐに理解しなければならなかった。

事前の Oranur 効果のための準備は、ハリケーンの間、誘導コイルのまわりに小さな火花を生じさせて空へ稲妻を発生させることだ。

我々が慣れていたことと、その時行ったことの違いは、全くものすごかった。

Oranur 実験の間、深い恐れを経験しなかった者は誰もいなかった。

我々も、マウスと一部のテスト・グループとともにガン実験に平行して連続していろいろな bion と XX 製品のための実験を実施していた。

ふさわしい特別なマウスのグループに関して、臨床と実験的な違いの全ては簡単に表にしてきれいにされた、それによって、全く違いが生まれなかった

298

Oranur 効果は至る所で同じでした、そして、すべてのマウスは同じ死の徴候を示した。

研究所の洗面所の中に置かれていたか、あるいは、100 フィート外のキャビンの中にいたか、異なるグループで、どんな大きな違いも生まれなかった。

Oranur は研究所ビルディングの外何百ヤード遠くまで浸透された。

しかし、続けて実験的なホールに置かれたほとんどは、Oranur の作業の間、苦しんだのはマウスの外観から全く明白だった。

Oranur の病気の一般的徴候は、以下の通りだった

さまざまな度合を固定すると;

粗い毛皮;

冷たい汗;

体の完全な縮小;

チアノーゼ的 cyanotic な尾、鼻、唇、耳葉;

発症し固定される前に、相当に掻き、落ち着きがない

高度の渇きは乾燥ティッシュの中の生体検死結果と、脱水された血の調査結果と一致した。

成熟したマウスより、マウスの子が速く、すぐに死んだことは、重要でした。

また、ガンのマウスの子の様に、元々バイオエネルギー的に弱い有機体が健康なマウスより速い率で死んだことは、重要に思えた。

しかし、全ての近所のマウスは、概して、深刻に苦しんだ。

純粋な OR 治療は、なんらかの助けになるようだった。

また、一部の人間はオルゴンエネルギー装置で、悲惨な徴候を軽減されたようでした。

他方、Oranur 実験に完全に参加した大部分の労働者は、OR アキュムレーターを使うのを嫌う期間があった。

温度差を測ったそのような単純な金属をひかれた箱、または、8-inch 四方のアキュムレーターのような小さな狭く広げられたアキュムレータ装置さえ、襲った。

1951 年 2 月 11 日 日曜日

その日実験的なマウスの世話をした 1 人のアシスタントが 12 時間以内に死んだ約 30 匹のマウスをもって下の研究所から朝やって来た。

すなわち最後の観察の前日である。

実験的なホールに残った、若干の白血病のマウス、その同じ期間の間に洗面所にいた、OR 治療されたガン・マウスの多くの子、そして、学生の研究所からの約 100 フィート離れて小さい木のマウス・キャビンへ移された健康な何匹かのマウス、そしてこのマウスは、Oranur 実験中のマウスである。

この大量死は、我々全員にもものすごいショックを与えた。

299

これらのマウスは、おそらく Oranur 実験の結果として大挙して死んだ

我々は、その同じ日に多数がなぜ死んだか、理解できなかった。

我々は、これらのマウスの検死でその日曜日中働き、1 つの 1 つに現れた病理学的絵に、Oranur あるいは Ca グループのそれぞれのグループのマウスが、白血病に属していたかどうかの問題をみた。

これらのマウス（我々は、その日曜日中働きました）（現れられた 1 つの一つの病理学的絵）の検死問題それぞれのグループのマウスが、白血病、Oranur または Ca グループに属したどうか。

これらのマウス全てに共通の徴候は、以下の通りでした：

1. 出血か、組織的狀態での肺炎。
2. すべてのマウスの中の肋膜空洞を完全にカバーしている厳しい纖維性の滲出液、そして、若干のマウスの中では、腹部をわたり、骨盤の方へいつている。
骨盤皮下組織と性器（会陰と同様に）は、全てのマウスが影響を受けた。
強い T 細菌注射で死んだ多くのマウスの前の検死から、この種の滲出液は、我々には有名でした。
3. 皮下組織の死後の、緑がかった T 変色。
4. 頸動脈静脈を含めて、ひどく膨張した静脈（V. porta と V. cava 腔）。
ひどく膨張した外耳（静脈の中の黒っぽい血）。
5. 精囊または卵巣管の厳しい膨張で、生殖器の紫の変色。
6. 全てのマウスで尾は堅くなり、灰色がかったチアノーゼ的な、いくぶんネジの巻かれた形になっていた。
7. チアノーゼ的な耳、つま先と唇。

8. 全て死んだか、新たに殺されたマウスの血画像の中の、同じ形の奇形の RBCs は 12 月の初めの白血病に対する我々の作業の間、白血病マウスに見つかったものと同じで何が原因であるかは問題にもならなかった。

若干のマウスの中では、白血球の高い発生率は全くなかった。

9. T-cultures, positive.

9. T-培養組織は陽性であった。

10. 若干の Oranur マウスでは、脾臓が通常のサイズの最高が 4 倍に非常に拡大していた。

11. 血流システムの中の流体の明らかな不足と腹膜の著しい乾き。

(Oranur 実験の間に、みんなは、のどの乾きと痛みで深刻に苦しんだ。)、私は他の、型にはまらない調査結果はここで省略する。

このレポートを最も一般的な特徴描写に制限することが必要だったからだ。

長い期間にわたる詳細な仕上げが、重要だと考えている。

しかし、労働者が仕事のために必要な状況によってまさしく危険にさらされるならば、我々はこれらの重要な調査の努力をどのようにして続けるのか？

Oranur-1951 年 3 月 26 日までに Affected されたマウスの調査

1950 年 12 月に注文した 40 匹の健康なマウスは、同位元素 P.32 を注射の予定であるが、毎日前もって予防的な OR 照射をした。

-300

1951 年 1 月 5 日。

これらのマウスは、実験的室の内側で飼われていた。

これらの 40 匹のマウスのうちの 14 匹は、実験の間に死んだ；

この日付で 26 匹のマウスは、まだ生きていたが、深刻な Oranur 病だった。

II. Oranur 実験が開始したとき、実験的なマウス・プレゼントのすべては生きていた：

286. これらの 286 匹のマウスのうち 57 匹は、Oranur 病で Oranur 実験の間に死んだ。

最新の検死資料のために厳しい苦悩の中で 12 匹は、死亡した。

残りの 217 匹のマウスは、Oranur 病に深刻に冒されていた；

全ては、いろいろな程度で病気になっていた。

III. ガン・マウスの子は、特に Oranur に影響を受けた。

このグループの中の 23 匹のマウスは、最初の 2.3 日間は、何も影響を受けた気配はありませんでした；

しかし、その後で、23 匹の全てのマウスは、Oranur 病気の徴候で自ら死んでいった。

IV. しかし、Oranur 実験の 2 から 3 か月前に S. トロップ博士によって多量の overirradiation 過剰励起で、治療された 40 匹のマウスのどれもが、この日付 (1951 年 5 月) まで、実験の間も、後も、死ななかつた。

我々は、常習のその耐えられる総額のオルゴンエネルギーの overirradiation 被爆で

有機体をより高いエネルギー・レベルに誘導し調節した、そしておそらく、このように、サバイバルが可能になったという印象を持った。

V. 42 匹の白血病マウスは OR エネルギーで、扱われた

16 匹は、自然に死に、2 匹は死の前に検死され、すぐに死んだ。

残りの 26 匹のマウスは、Oranur 病です。

非処理の 34 匹の白血病コントロールマウスのうち、30 匹は生きていたが、病気だった。その黒い日曜日になぜ、何十匹ものマウスは、全て同じ徴候で死んだのか？

我々は、発見するために検死機で、顕微鏡で一日中取り組んだ。

たぶん答えを提供する、関係する観察をまとめよう：

1. 全ての死んだマウスは、弱い生命エネルギー・レベルが共通する実験群に属していた。

結論：低い生物エネルギーは、ORANUR による死を強化する。

2. NR が、有機体で利用できる資源を減少させたときでも、生命エネルギーの高いレベルは、オルゴンエネルギーの十分な補給手段を提供する。

チャージされた有機体の予防力の高さが、ORANUR の影響を少なくする装置での放射の後より非常に能率的に、病気が襲う。

3. 続く 2 月 11 日は、日夜、湿っぽくはなかったが（40~50 度相対湿度だった）非常に暗い、霧がかかったようであった。

このような大気はオルゴンエネルギーを弱め明らかに下げた。

したがって、空中からの新鮮なオルゴン供給がほとんどなかった；

動物自身の組織のチャージからエネルギーを引きださなければならず、これは再び、大量死を強化した。

同じように、大気のオルゴンのテンションは、一般に冷たい、悪天候で下がる、このように、間接的に、有機体に送られる生物エネルギー供給を弱める。

301

4. 回避的人間性は、重要問題をもっともらしく処理する。

木の家で零下の悪天候で、単に肺炎になったとして、マウスの大量死を説明できないか？

私自身、これについて考えた。

しかし、事実への厳しい責任は、このような簡単な脱出を、許さなかった：

Oranur 実験の間、日の照った、暖かい天気の 2 月 11 日前後に、マウスは死んだ。

以前から、その木のキャビンにマウスは、いたが、60-70 度 F.まで加熱された。だが以前は死ぬことなく、25 度で外部では 0 度以下あったのだ。

特別な調査で、その寒い夜、管理人の配慮で、ストーブを持っていったと確証した。

そして、ついに、我々が死んだマウスで見つけた徴候は、単純な肺炎をはるかに越えていた。

全ての最終的な死因の中で、肺炎は若干のマウスだけだった。

また、みんなは、天気が良いか悪いかで特定の程度に Oranur の徴候の病気にかかっていた。

したがって、弱った有機体が更なるストレスに屈したという結論から、脱出は、ありえない。

生命有機体の中と大気圏の中の使える生命エネルギーは、知識とデモンストレーションで固定され、測定でき、そして、これまたはあれが「空気細菌」または「ウイルスX」で死んだとする回避的な浅薄な声明は、決して示されず、決して見られず、決して実際に取り扱われず、もはや許容できない。

「空気細菌」のそばに、「ウイルスX」のそばに、生きて作用する、有機体の中の何かがある;

これは、「なんらかの」有害な影響に反応する。

白血球の生成物より高いなにかが、ある（どこから？空気からか？）病気にかかった部分の方へ充血（何が、動いているのか？イオン？塩？化学製品か？）

熱が移動してここに集中する、そこが希薄になる（有機体の熱とはなにか 15？）、

痙攣、繊維 *fascicula* の小繊維化、そして、(個人的に、実験で観察された) 心臓が、打つのをやめたさらに後に腹膜の中の小繊維化。

それは「何か」、それは体の牽引と患部を詰まらせる、

それは熱を引き起こし、環境の温度より高くその常態を保ち、

それは有機体の範囲内でどんな神経と人の境界線にも関係なく、場所から場所に、移動し有機体をぐいと引いて、ひきつらせる、これをまたの名を**オーゴン・エネルギー (生命エネルギー)** という。

事実の相互関係は、あまりに多く、きわめて明白に、見渡すには、あまりに長かった。

この生命エネルギーの具体的な枠組みなしでは、Oranur 事件の一つの特徴も、理解できない。

出来事は賢く、他に引き続いて上手に起きている。

302

時々我々の観察と論理の証人であることに驚いた、

つながりのない機能と、仮の仮定さえ、一列であったようになり、大部分が理解できる機能になった。

302

このように、それが過剰励起した時、RBCs が最初、明るく輝き、2、3分後には青くなるようだった;

これらは生理的レベルでのエネルギー損失プロセスで、*orgonomic* なアプローチ以外には理解できない事実であった。

また他の事実では、ひどく悪化した白血病マウスに正確に見つかる RBCs の形は Oranur 実験の始まる数週間前にみつかった。

これで、放射性の病気と白血病のリンクがすぐに理解された。

それはまた、白血病（ガンでの縮小よりむしろ遅いプロセス）が幼少と思春期にそれほど大流行する理由と方法を理解可能にした：

また、白血病は、赤血球システムのオーバーチャージに原因があるようだった。

こういうことは、収穫するには、まだ観察と実験の詳細な豊かな基礎が念入りに作られていない。

だが、病気の性質の領域の上に巨大な展望を開いた。

しかし、その中に全く、心配する十分な理由が、あった。

研究棟からの全ての NR 材の除去の後、遮蔽してその人のポケットで問題なく持ち歩かれることができる取るに足りない量のアルファ粒子の観察のための scintilloscope だけが残った。

しかし、この少量でさえ、私の妻と、7才、私の息子が血液崩壊の高度の徴候を現して、避難しなければならないほど、全体の建物で DOR 反応を引き起こすのに十分だった。

血液徴候学は、別々の文脈で、広範囲に扱われるに値する。

ここで、当然すべての血液画像が、血液白血病と同じような重大な悪化を示す、若干の特徴を持ったことは、強調されなければならない。

長い間我々は塩分のある溶液の中の血の 1 フィールドで 3 から 400 倍の拡大で 1 から 3 つまでの白血球を見るのに慣れていた。

悪化したこれらの写真の中に、我々は、1 フィールドに 4 から 8 つ以上の白血球があるのを見た。

我々は白血病において、暗視野で RBCs の範囲内で繊細な粒にされた構造を観察した。

現在、若干の RBCs で同じ粒状化を見ることができ、我々の考えでは、T-変質であり、言い換えると、ひどい腐敗である。

先進のガン biopathies の中で常に行うように、明確な血液培養の一部は、この見解を確かめた。

organotic な被爆の徴候として、我々が白血病マウスの中に、最も多く、観察した

RBCs の、その赤い中心は、（明るい青い中心の代わりに）十分に発達した白血病の発生のもっと前に、腺のなかに発生する。

その時、Oranur 実験に参加した全ての労働者の血液に、この状態は、明らかに観測できた。

303

病気にかかった労働者の健康処置と避難

Oranur 効果のピーク時に、制御不能の Oranur 効果の激しい嵐に対して人員の保護に役立つ何かをすることは、不可能なようでした。

大部分の労働者は、午後 5 時ごろの Orgonon を去って、次の日の朝まで、帰りませんでした。

た。

彼らは、Oranur の連続的影響から約 16 時間の小休止をとった。

彼らと、私自身と私の家族と Orgonon で生きる管理人の間で、周期的な交代で断続的な回復を図る以外に、可能性はなかった。

元々強い有機体がひどくは反応しないことがわかったが、Oranur の始まる前に弱まっていた有機体はたとえ彼らが Orgon から離れて生き続けたとしても、強い反応を発症させた。

私はしばしば疲れはしたが、ベッド療養の必要を自身では決して感じなかった。

しかし、私の息子が雪で遊ぶ間、足を濡らして風邪になったあと、彼は重病になった。

私が Oranur 反応の引き金として刺激物として機能した全ての NR 材を空にした事実にもかかわらず、わずか 15 か 30 分間窓を、閉じておこならば、60-70cpm まで上がった背景で、天文台の空中の圧力は圧制的な高さになり続けた。

そして、窓をゼロに近い温度で連続して開けておくことは、難しかった。

子供の、足のわずかな弱点が発症し始めたとき、複雑化が、起こった、苦痛に撃たれ、そして、呼吸でさえ静止への傾向を見せ始めた。

そのような徴候は、我々が Oranur 野外活動に備える過程で、造った OR 毛布を使うことによって、通常は簡単に取り除かれた。

しかし、この同じオルゴン毛布も、その時は、Oranur の源因になる働きをした。

我々は最初の短い何日間か、このことを見落した。

子供は病気がひどくなった。顔色は鉛色といってよいほど蒼白であった。

手のひらは、冷たい汗 (sympatheticotonic 交感神経系の収縮の確かな徴候) で濡れていた; 連続的に不調を感じ、不快で、我々ができることは何もないようだった。

建物の長い換気が影響を取り除かなかったので、我々は換気だけで状況に対処することは望めなかった。

彼は、DOR 効果が強くなかったもう一つの家の一部に移動した;

それは助けになったが、十分ではなかった。

血液検査は、RBCs (白血球の数の増加) の厳しい overirradiation 過剰励起を示した、そして血液血球に白血病の悪化の 2、3 の徴候をみて苦悩した。

304

シメオン J. トロップ博士 (その人は Rangeley で住んでいた) は、彼の家の子供を避難させるよう我々に訴えた。

私は、Oranur で影響を受けた有機体が、他の有機体に影響を及ぼさないことがわからない時に、そのような処置をすることをためらっていた。

大挙して死んだマウスは、強い放射能の明確な徴候を彼ら自身が示しており、非常にいやな臭気をかいた。

また、私自身の手は、複合的にに彼らのバイオエネルギー的な活動を増加させた。

ついに、私は同意した。

トロップ博士の家で子供は2、3時間後にわずかに回復した、しかし、次の日、彼はまだその弱点の発作で苦しんだ。

また、非常に疑い深い血液画像が立証するように、子供の母（イルゼ Ollendorif）はひどい Oranur 病気になった。

また彼女は、顔色が悪く、顔はわずかに鉛色でした。

彼女は、次の日 Orgonon から避難し、すぐにその後回復し始めた。

この時に、他の全ての人は、Orgonon から離れているよう命令された。

しかし、これは、我々の問題の不徹底な解決でした。

Oranur の第二週の間すでに働くのをやめ、もはや Orgonon に来なくなった、技術的アシスタントは、Oranur 病がさらにひどくなりました。

OR 病は、数週間残ったのです。

不規則な間隔で、弱点に落ち込み、再び（ゆっくり）それから回復します。

彼の血液画像は、明白によくなった。

RBCs から赤いセンターは消えた；

崩壊のタイプは、通常の生体 bionous の写真の方へますます変化した；

彼は、もはや顔色が悪くなく、焼かれたようになった。

彼は、健康上の理由のために Oranur 作業に readmitted 参加しなかった。

Oranur 病気の最後の結果を知らない限り、我々は他の人々の命から危険を少しも取り除くことができなかった。

この期間中、その労働者と同様に Oranur との恒常的な、安定した関係から見て、未来の健康への武器に関して非常に重要な何かが起こったのを感じた；

我々は、根気よく更なる発展を待った。

数日後の1つの事件は、我々が扱っていた力の獰猛さを鋭く認識させショックを与えた。

1 人の医者生命の危機

我々はゆっくりと Oranur 効果の、いろいろな労働者の特定の反応を理解し始めた、そして、日が経過したので、我々はサインを読むよりも良い方法を学んだ。

しかし、事前に、我々は1人の特別な医者に対して危険を判断することができたのにこの知識を十分使うことができなかった。

この医者は、彼女の思春期から苦しんだ、ひどい感情的な大変動のためにおよそ 50 の脈拍数の徐脈を体験した。

305

2年前に精神医学的なオーゴン療法を行ったあと、徐脈は毎分 70 の脈拍数あたりまでよくなった。

長年完全に泣くことができずに苦しんできました。

泣く感情の「抑制」は、彼女の **biopathic** バイオパシクな大きな徴候の 1 つでした。

私は、この感情的なブロックと徐脈の関係の可能性を、かなり知っていた：

実際に「泣くことをのみこむこと」は食道にのみこまれることで持ち運ばれる。；

口と喉の下部器官に一定に「入り込むこと」で、胸と隔膜の器官に圧力が、かけられた。

迷走神経が脳の基底の下を走って延髄を通し、食道と気管に沿って、出て行くので、これらの器官にかかる恒常的な圧力は、たぶん間接的に迷走神経の神経に影響を及ぼし、心臓に「抑制」神経の働きをし、このように慢性の徐脈を引き起こした。

したがって、この医者は、(**vagotonic** なタイプの) 弱点の発作で苦しんだ、そして、彼女のオーゴン治療の間、2 回か 3 回まるで彼女が「完全に動くのを止めるように」実際に感じた。

これは、彼女のケースを取り扱ったもう一人の医学的 **orgonomist** に私と同様に知られていた。

Oranur 作業の殺到し、信じられない驚くべきことが続き、

我々の心の中で、彼女をマウスと細菌学部門、その他で働く続けるとても熱心な医者と研究員にしておき、この医者の特別な **biopathic** な構造と、特別の **Oranur** の効果に関係付けなかった。

彼女が倒れたとき、彼女その日まで少しも激しい反応を示さなかった、そして、ほとんど、完全に過した。

これは、以下のように起こった：

1951 年 2 月 19 日に私が図書館で働いていたとき、この医者は、わずかに部屋が揺れはじめて、彼女の口とあごのあたりは鉛色に変色し、非常に顔色が悪くなった。

彼女は、目にみえてショックがあり、おびえて厳しい苦悩の中にいた。

彼女は、ちょうど今研究所の、金属で敷かれたキャビネットを掃除したと私に話した。

ものを取り出すために、腕を深くキャビネットに入れなければならなかった。

彼女は、確認するために **Oranur** のような何かを「嗅ぐ」ために、彼女の頭をキャビネットに入れた。

そこで、壁のようになった彼女を打った。

「彼女は、バランスを失っていた、もう一人の医者によって車で研究棟に移動した。

私は、新鮮な外気を吸うために開いたポーチの上へ彼女を連れ出した。

彼女は、ますます青ざめ、視野と聞こえなくなることの、不満を言い始めた。

306

私にはそれがわかりました、同時に、目の変化がわかりました。

彼女の脈はかろうじて明白で、青白くなって、脈拍数は毎分およそ 46 で続いた。

彼女を寝かし、刺激薬を塗り始めた。

さらに弱まった鼓動は、とても危険なほどに遅くなった。

彼女の青白さは、最初変化するようすはなかった、しかし、約 30 分後、ほてりと交替し始めた。

彼女の薄いことは最初は譲歩するようではありませんでした、しかし、約 30 分後、はほてりと交替し始めました。

彼女は、常に話し続けることで励されていた。

時々、頬が赤くなるのが見える非常に強い拡大の後、より厳しい収縮が、始まる；

何時間か、唇はチアノーゼのようで、頬と両腕は鉛色になっていた。

私はコニャック（強いコーヒー）で彼女を刺激し続けた。そして、彼女と話しかけ、冗談を言った。

彼女と目の接触を失った時「崩壊する。」ようだった、

そして、私が見ていという強い刺激と、度重なる声え掛けは機能停止を防ぐようだった。

彼女の脈をいつも見つけることは、難しかった。

我々は、彼女に付き添い続け、呼吸が続くように何回か彼女を怒鳴らなければならなかった。

彼女が、再び拡大している時と、ギブアップだと、脅しているときとが、明らかに理解できた。

彼女の腕と手はくたくたで冷たかった。そして、そのことは足も同じだった。

触覚の感覚は、無いか麻痺していた。

暖かいお湯を、彼女の、のどにもっていった。

私は、確かに、OR エネルギーで照射することをあえてしなかった。

また、全てのオルゴン装置は、建物の外にあった。

我々は 2 時間、氷のように冷たいタオルで彼女の頬、首、心臓地域と腕をこすり続けた。

これは、大いに助けになったようだ。

彼女は特別な瞬間に、話すことができないようでした。延髄と視床領域の関係に問題があるのことは疑問がなかった。

激しい減速と、生命装置の拡大との間で、一進一退が続けられ

後者が次第にゆっくりと優勢になった。

ついに、約 2 時間後に、彼女は回復し始めた。

彼女は自律機能のバランスを回復した。

すぐにその後、彼女自身で以下の症状を口述した：

1951 年 2 月 19 日；

午後 12 時 30 分

症状記載 on.博士

私は、1951年2月19日の朝は、完全に問題なかった。

私は学生の研究所（まわりの多くのアキュムレーターのために、風通しの悪さを知っている）で、20分を過ごした、そして、私は全てのドアと窓を開けた。

それから、私は他のDORの源または分解されなかったアキュムレーターを探した、そして、私はガラス製品が保存されていた研究所の後ろの部分に、1層の、古いアキュムレーターを見つけた。

307 このアキュムレーターは、過去5週間に1、2回の機会を除いて開けられなかった。

このアキュムレーターは、金属のオルゴンルームの外壁である壁に沿って立っていた。

私は、全ての内容を非常に速く棚へ移した、中に私の腕を入れて、すぐに、終わった、そして、私は、アキュムレーターを最も敏感な領域である私の頭でテストした。

しばらくして、私は突然頭の中に、まるで頭上から大ハンマーの攻撃を受けたように、感じた。

私は強烈な圧力とフラフラした感覚を感じた、そして、私はすぐに外へ出なければならぬことを知っていた。

以下の徴候の漸増が、次の5分にわたってあった：

私はますますフラフラすると感じ始め、私の体全体が弱くなった。

私の足が動いているかどうか、足をコントロールしているか、わからないような、まるで私が私自身を所有してないように感じた。

私の腕と足を動かすのに相当な努力をした。

私は、まるで全ての動きが遅いように、そして、重力に対して私自身を立たせなければならぬように感じた。

非常に重いと感じた。

我々が天文台に着く頃は、麻酔をされたときの場合のように、まるで私が2人の人間であるように、私は感じた —

そして、それは雪靴その他を脱ぐときのように、私自身に何をしなさい、と話さなければならなかった。

私は、恐れを感じ始め、それはこれまでに経験した最も激しい死の不安になるぐらい増加した。

これは、以下の感覚でした。：

感覚が完全に停止し、私の脳で、眼の部分と、私の腕のまわりが、バンドのように局所化された。

また、私の弱点と他の残りの体との分離。

私は、半ば意識はあったが、明らかに見ることができず、私の耳の中がズンズンいい、明確に聞くことができなかった。

のみこむことが困難なののがわかり、脈は非常に弱く45と48の間に、減速した。

呼吸が困難になり、かなりフラフラし、私は壁に支えてもらわなければならなかった。
この点で、私の外部への表れは、皮膚の鉛色（不安の表現）という初期ショックのそれで、特に目の中はそうでした。

まるで私が死に向かっているのを、単にちょっと停止していると私は感じた。

研究棟に近づいた時から私がベッドで横になった時までの、出来事に関する私の記憶は、非常に曇る。

私は、これまでの人生で気絶しなかった。

私は、吐き気を感じなかった。

私はベッドにダウンし — 部屋で風に当てられた、そして、私の頭と四肢は湿った冷えたタオルでこすられた。

回復に、ほぼ1時間がかかり、波があった。

不安の症状の発現は、およそ3回、起きた。

まず第一に、私は安心し、不安は消え、快方に向かっているのに気がつき、死ぬ恐れが無くなっていった。

私の脈は、弱く、1分間48と50の間でした。

それから正しくより強くなった。

腕が重いと感じられ、運動は、遅く、

皮膚感覚は、鈍くて不均称でした。

首までの鈍さ、そして、呼吸困難を伴う、舌の中の鈍さと、激しい頭痛と圧が再発した。

それが直ったとき、バンドのような圧力が頭のまわりに残った。

308

その後、私の顔はうずき、明るくなり始めた、そして、波の感じが脳の基底のまわりにあった。

2時間後に、体を起こすときにわずかなめまいが、まだあった。

OR機能の停止は、極端な暖かさ（うずくことと透明性）に取り替わった。

その時、脈は60と64の間であった。

5才で、私は高度のbulbar徴候を伴うひどいジフテリアで足の麻痺で苦しんだ。

4時間後、脈は64でした、そして、心臓の動きは普通でした。

実際に起きたことは、明らかにこれでした：

彼女が頭を密閉された金属で葺かれたキャビネットに入れたとき、DORは特別な方法で彼女の最もひどい弱点を打った：

それは、延髄の迷走神経と呼吸中枢に影響を及ぼした。

約21年前、彼女は彼女の腕と足のわずかな麻痺で、ジフテリアの後遺症の苦悩で苦しんだ、この弱点は、彼女に確立され、機能している彼女のbulbarの軽い障害となった。

このように、致命的な徴候をもつ症候群は、ほとんど 20 年間気づかれずに眠っていた、それが、DOR の危険な方法で捜され復活した。

OR エネルギーは、通常通り、その人の特別な弱点を攻撃した。

ここに、ひどい病気の強力な治療への大きな希望が、あると、私は思います。

我々は、Oranur での更なる詳細な実験で問題なくそれを仮定することができる、それは、有機体の機能全体のどんな弱い関連でも、OR エネルギーが病気にかかった器官またはシステムでその方法を見つけ、オルゴンエネルギーがダイレクトな治癒力となることが可能である

これらの反応の一部の危険な性質が、我々を妨害してはなりません。

有機体の治癒力の作用因に働きかけることができずに、化学療法またはショック療法を適用し我々が麻酔と大きな手術をするちょうどその時、我々は、患者の命をもっと高い危険にさらしている。

慎重な実用投薬量とよく働く外部と組み合わせられた、自律神経特有の OR エネルギーの選択的な力は、有機体に治療上であらゆる点に手が届くことができる、そして、たぶんすべての病気に手が届くのを可能にします。

この最後の文は、「**病気または病状の背景**」が実際に何を意味し、表すか、その見地から、慎重で詳細な調査を必要とする。

我々が、organotic な機能と機能不全という特定の言葉で表現でき処理できる形ですでに病気の性質が明白になり、生命エネルギー（生物エネルギー）を取り扱う経験をした時から、いかなる疑いも、もはやない。

私は、将来の論文のために、これらの関連を理論的に確かめる最初の試みを予定しておく。

Oranur 実験は、この点を今、議論するにはあまりに豊かな収穫を生んだ。

309

実験領域から収穫を集めるのはかなり時間がかかり、そして、その家庭に持ってきたすべては、将来の使用と研究のために保存価値がある。

Oranur 実験の中断

1951 年 2 月後半の間、研究所のマウスを担当していたほとんどの医者はひどい Oranur 発作で死にそうで、Orgonon の労働者は耐えられない緊張感を抱いて生きていた。

すぐにやりとげるといふ矛盾した決定の圧力で、ジレンマが若干の混乱を引き起こした。

もし、我々がより大きなスケールの Oranur 実験を続けたならば、USA の健康当局に我々全員を脅すかもしれず、そしてまた、おそらく USA 東部の、大領域の危険について警告しなければならなかった。

危険なので、我々は Oranur 実験を中断することに決めたと彼らに通知した。

とりあえず一時的にこの終了までの処置をまとめさせてほしい：

- 1 最初は、誰も一回に、数分以上長くは、Oranur 実験場の近くで働くことを許されなかった。
2. 全てのオルゴン装置は、2 枚のパネル（「層」）が決して互いに向かいあわないような方法で、片づけ完全に分解された。
平行した 2 層の配列は、強いオルゴンエネルギー・フィールドをつくるのに十分です。
3. 金属で葺いた OR 部屋は、完全に分解された。
天井と床と壁の金属板は分離し、裂き、空気にさらした。
4. 水が OR を吸収するので、それが、Oranur を吸収すると仮定した。
したがって、ホールとアキュムレーターの壁は、水と石鹼で洗われた。
5. 空気乾燥が OR 効果を軽減するので、広範囲に頻繁に空気乾燥を、使用し、その効果は、大きかった。

6. しばらくの間、全ての労働者は、家の中の OR アキュムレーターを分解し、新鮮な外気をたくさん必要とし、窓を大きく開いて眠るように勧められた。
7. 数人の労働者と 1 人の子供は、何日間か、研究所から避難し、全てのオルゴン装置を分解した後まで、2、3 日帰れなかった。
8. 全ての NR 材は半マイル離れて置かれた。そして、鋼とセメントで出来た、重い 4 インチの壁のある、金庫に入れた。
これは、もちろん NR 材が危険だったので、そうしたのではなかった、それが OR を興奮させ Oranur 事件にいたった。

-310

310

我々は、多くの客観的なものだけでなく、主観的な観察に基づいて仮定しなければならなかった、他のどの地域よりも、280 エーカーの全 Orgonon の領域が連続的に OR の非常に高いレベルを備えていたので — 連続的なオルゴンの作業のために、その土地に長年運ばれた。

また、多くのアキュムレーター装置と、非常にチャージした OR ルームは、すべてきちんと廃棄されなければならなかった。

9. 最後になったが、何か月間全ての実験を休むことが、決定されたのは重要なことだ。
労働者が回復し、新しい事実に影響されないような観察の、配置事実と、命令は、必要だった
AEC に、この効果を伝えた。

10. これらの処置がとられたあと、研究棟の中の背景カウントは 50-80 cpm から 30-40 cpm の平均値まで降りた。

しかし、1951年5月の間と同じくらい後、これらの金属の箱を解体した後でさえ、OR ルームの壁は、さらに「白熱していた」。

— 3月26日と同じくらいの、数週後に OR エネルギー・アキュムレーターは、分解されたが完全な暗闇のテストで、見て、その視覚的印象は、いつものように、ブルーグレーではなく、赤から紫の、鋭いエネルギー活動の確かなサインを見せていた。

Oranur の基本的自然-科学的な関連に近づくことが可能になる前に、多くの実際的な問題が解決されなければならなかった。

解決しなければならない最も深刻な問題のうちの1つは、こうしたことを USA の保障機関に説明する方法でした。

Oranur は、致命的な特性を現した。

配慮が足りない、悪意のある人間の、手の中にこの特質を手渡すことは、すでに過度に緊張している社会的空気に混乱を加えるだけである。

他方、結果を秘密にしておくことは、もはや可能には見えなかった。

Oranur 効果についての情報は、あまりに遠くまで広まった。

我々の中の多くの人達は、世界のために最も確かな安全な場所へ行く行き方を、全ての人に伝えたいと思った。

少なくとも、医学効率を解決しようとしているまじめな、信頼ある労働者は、誰もが Oranur から純益をえる。

場合によっては、回復効果が致命的で、危険な方法だけで得られることは残念だった、しかし、これは誰も助けることができなかった。

可能なすべて、最高の知識で研究し、

我々の労働で達成したか、できたものを政治の殺人者は心配したが、

我々は、暗雲の中で明るい日光を識別し始めた：

1951年3月末の状況

311

前に言及した医者は、致命的な攻撃でダメージを受けた後、2、3日が過ぎて、極めて有望な方法で回復し始めた。

彼女は「まるでバランスを失い浮いているようで、」、まだフラフラすると感じた；

彼女は彼女の脳の基底はまだ「鈍く」なっていた、しかし、前のように彼女の目からは火

花が出ていない。;

彼女はこれまでの、前の機能エネルギーより高いレベルで、完全に生きているように見えた。

もう一人の医者はひどく軽く反応し、軽い黄疸になり、現在は日焼けし、元気に見えた。彼女の目を見て時折退屈さで苦しんでいた、もう一人別の労働者は、生命で明るく、輝いていた。

この奇妙な病気にかかった少年は、研究棟への復帰後、一杯に、光り輝く健康そのものになった。

私は、私自身がこれまでより活発に生きていると感じた。

私は、完全に自由に考えを飛ばすことが出来、睡眠も、多くを必要としなかった。

私は、元気だと感じ、ものすごい熱意が吹き込まれた。

徐々に、Oranur が、これまでに平和な人々の手で、所有した人類を癒やす力のなかで、最大の1つに変わることは明らかになった：

きちんと、思慮深く、かなり慎重に制御され適用すれば、表面までの操作で、おそらく潜在的な病気さえ治癒する。

それは、さらに惑星中の人間の NR 効果に対して免疫するかもしれない、そして、このことで、現在指揮する悪魔的精神を持つ者の手から殺人兵器を奪い取る。

これらの可能性は、明らかにある。

我々は、原子力が非常に熱心に早くから約束し、手を伸ばし研究してきたものを Oranur は達成したことを知っている

宇宙エネルギーの医学的使用。

このように、我々の手に;、人類がこれまで知っていた最も強大な治癒力ヒーリングパワーを我々はもったが、社会の多くの場所を感情的な伝染病によって無力にした。

Oranur 実験で信頼ある労働者である我々自身と同様に一般の人々にとっても、状況は、ますます複雑で、危険になった。

Oranur が始まって 15 週後

1. Oranur 実験は行われた学生研究所は、使えなくなったが、3月に開始するために OR エネルギー金属室を分解した。

それは、3月26日に再び仮の活動に入った。

それは、4月8日にさらに白熱し、その中での仕事は、再び4月14日に中止しなければならなかった。

2 1951年8月2日の今日は、研究所はまだ放射しているが、再び使える。

労働者の健康は、orgonornic な隔週の検査を通して規則正しくチェックされた。

1951年4月の後 Oranur 生物物理学の反応について将来、別々のレポートと、記事で発表

するつもりだ。

312

2. 他の全ての集積装置は、例外なく解体し、住んでいる建物と分離した。

新しいオルゴンチャージャだけを、戸外に単独で置き、組み立てた。

それはこれまで Oranur 生産のために使われなかった、Oranur-効果を受けた 20 層のチャージャだった。

3. 1951 年 1 月 5 日前に使用中だった OR アキュムレーターのどれも再度組立てるのは、さらに不可能だった。

これらは、非常に活発でバックグラウンドカウントは、100 cpm より多く普通の 4 かける 2 倍の率まで動きます。

4. Oranur で参加した大部分の労働者は、通常健康状態に戻った。

しかし、時折、彼らが Oranur で使用される装置に接触すると、不調、吐き気、疲労と被爆した RBCs のような特定の徴候を繰り返す。

5. 彼らの車が、同じガレージで分解した Oranur-効果を受けたアキュムレーターの近くに置いてあった後、「活性化」したことは、一部の労働者が気がついた。

6. 労働者は、一週おきに、血液検査がされた。

Oranur で影響を受けた人の生きた血液の像と、新しい人の血液との間の違いは確認された。完全に適切な評価は、まだ可能ではない。

血液画像の中に白血病の傾向が無いことは、最近の 2、3 週間で、気がついた。

7. さらに 建物は、Oranur 効果で活発化した。

適当な換気の不足は、ガイガーカウンターを作動させる。

8. 一般に、労働者はすっかり健康になった。

1 人は、時折人生でそれ以前にあった症状の再発の不平を言う。

この点にオラーナの診断の可能性がある。

9. Oranur 実験を繰り返すことは、十分な資金と施設が無いために現在問題外だ。

また、労働者の健康は、十分に考慮に入れなければならない。

それは、彼らが無茶なもう一つの Oranur 効果の実験をすることは疑わしい。

我々は、もっとよく準備し、より多くの経験を備えた次の機会に、再び Oranur 実験が、なんとかできる、そのときまで静観しなければならない。

10. Oranur 実験の全期間、全労働者が OR エネルギー・アキュムレーターを使うことの嫌悪を増大させたが、彼らほとんどに、最近 OR 照射の必要感が戻った。

一部の労働者は長年の間 OR エネルギー・アキュムレーターの常時使用のために、冷えとか他の病気がなかったが、悪天候の中で軽い鼻かぜになり始め、すぐに、また OR が必要になった。

1951年3月事件の終わりの状況

313

11.Oranur 効果を受けたシューター（それは住でいる建物の外に置かなければなりません）は鼻と副鼻腔の部分の軽い風邪と戦うのに最も効果的だ。

2、3分の照射は、鼻から出るのを止めるのを助ける。

こうした新しい経験の全ては、再テストされ、非常により大きなスケールで解決される必要がある。

これは、年月と多くのお金がかかる。

最初の Oranur 実験の詳細と結果は、もちろん、まだ大部分は不明です。

何が OR と NR との劇的な衝突で、実際に何が運動したかは、理論的な準備と年月と大きな資金が要求されるかもしれない。

前にいくつかの機会に言及したように、Oranur で働く実験している人員に対する危険に満ちている、そして、慎重な投薬を除いて、致命的な被爆からの保護は存在しない。

Oranur はすべてを透過するので、原子力の研究と関連して念入りに作られた健康保護装置はオルゴンには適用できない。

これに関係する問題は、現在の詳細な解決方法でも克服できない障害で重大な問題である。

1951年2月の初期に、Oranur 実験が中止させられ、

ライヒの血液検査に確認された後、全ての労働者が普通の機能にゆっくり戻り、状況の調査の試みは、いろいろとなされた。

DOR 効果は、消えたか？

どれくらいで、それは影響を受けた Oranur 装置から全て消えるか？

または、Oranur アクションは、無限に続くのか？

誰も、言えなかったし、現在も言うことが出来ない。

しかし、

Oranur.に影響を受けた

1-立方フィートの大きさに設定した1個または2個の小さいオルゴン「シューター」を研究棟に戻すことによって我々は、状況をテストしようとした。

我々は、何度かこの手順を繰り返した、

そして、毎回背景カウントがおおよそ 80cpm まで、0.02MR/R またはもっと上に上がった Oranur の影響を受けた装置は、1時間だけまたはもっと短い間だけ存在した。

Oranur アクкумуляターが戸外に取り外されたあと、これらの影響は再びすぐに消え、背景の数値は、30と同じくらいに低く下がり、そして、MR/Hはおおよそ0.008になった。

ある晩、小さいシューターを、指の切り傷を扱うためにベッドルームに持ってきた。

それはそこで置き忘れられ、そして、夜の間、その部屋に泊まった人はのどに激しい高

度の渴きが起きた;

また、空气中に酸素が不足したという感覚もあった。

シューターはすぐに外へ出された、苦しみの兆しは消えた。

1951年4月の中ごろ、これらの文章を書く時点で大きな学生研究所の最初の **Oranur** 実験は、金属で葺かれた非常にチャージされたオーゴン・エネルギー室で行われたが、これらは依然として使えなかった。

314

板金は、壁、天井と床から除去された、すなわち蓄積のメカニズムの分解の事実にもかかわらず、セメント板の壁はまだわずかに「白熱している」、そして、一部の労働者はホールで働くとき、苦痛で苦しむ。

再建した **OR** エネルギー室で働く間、他の人は快適であると感じる。

彼らは、一気に1、2時間だけを働くよう命令され、それから、「外に出る。」この建物がその本来の機能が完全には復旧されたか、そうでないかは、まったく確かではない。

頭を **Oranur**-影響を受けたキャビネットに入れた時に、死んだようになった医者は、ほぼ完全に回復した。

この期間、ニューイングランドを通過してほとんど全ての家が影響を受けた、荒れ狂った「流感」は **Orgonon** に触れないままでした。

近くの村では、数週間引き続いて人々を大挙して、ダウンさせたほどのインフルエンザには **Orgonon** では、誰も、かかりませんでした。

Oranur 実験に参加したすべての労働者の、血液検査は一週おきに記録された。

被爆の確かな徴候である **RBCs** の赤いセンターは、完全に消えた。

我々がこの特定の現象を注目した、**RBCs** での **OR** エネルギー・フレームは、さらに「不鮮明」である、そして、ニューヨークまたはフィラデルフィアから **Orgonon** に来た、人々の血液の写真と **RECs** の写真は、明らかに異なっていた

これらの問題は、広範囲にどこかほかで扱う

しかし、これらはこの文脈で、簡単に言及されなければならない。

Xray Effects and Oranur Sickness

X線効果と Oranur 病

それは、物理的な影響から Oranur の医学面を切り離して、特別な論文を全てのこの重要な主題に捧げることが必要です。

医学経験の報酬は、あまりに豊かで、この点を扱うにはあまりに混乱している。

しかし、両方の面で働いている人々に、不必要な害を防ぐために、すでに現れている X線とオルゴンエネルギーの影響に関して、このレポートで 2、3 の事実に言及することが重要に見える。

以下の事件は、問題点をハイライトするのにかなり適しているかもしれない。

4 月の末、私は仲間の医学的 **orgonomists** の 1 人に彼自身の治療のために尋ねられた。

彼は、**Orgonon** と **Oranur** からの 500 マイル離れたニューヨークで働き働いていた。

彼は、短い時期を除いて **Orgonon** にいなかったが、1950 年 12 月の間に 1 日訪問した。

1950.-

X線の影響と ORANUR の病気

315

彼は、どの装置とも、または **Oranur** と関連して使われた実験的な装置と接触していなかった。

彼が **Orgonon** に到着したとき、彼は最初の印象で、完全に病気に見えた。

彼の顔は鉛色でした。そして、思わしくなく変色していた；

目は、充血していた。

彼は、2 ヶ月以上の間吐き気を催していた。

彼の健康は病んでいるようでした、そして、彼は横隔膜部分に、動かない疲労と、大きな渇き、弱さ、不調と激しい圧迫を感じて苦しんだ。

注意深い **orgonomic** な検査でも、ひどい不快感の明瞭な理由は、見つからなかった。

私は何年か彼とやり抜いたトレーニングから、よくこの医者を知っていた。

状態の激しさの原因に横隔膜領域に装甲ブロックを見つけるのを私は、予想した。

だが私は、彼にバイオエネルギー的な運動障害を見つけることはできなかった。

彼は、体中が柔らかかった；

ブロックは、なかった。

このケースは、謎を生んだ。

更なる検査の間、私立の診療所で彼自身とスタッフが、反核の民間防衛体制を準備し、その野外活動と関連して、何個か **OR** エネルギー毛布を造ったことがわかった。

これまでオルゴンエネルギー毛布は **Orgonon** にはなかった、そのうえ、これらの毛布はこれまで少しも **Oranur** の影響を受けた物質には接触しなかった。

これは、謎を複雑にするだけでした。

薄い金属板の代わりに、ワイヤー・メッシュで造られた OR エネルギー毛布が異なるタイプの有害な OR 放射を作り出すことはあり得るか？

これは、ありそうもなかった。

更に問合せた後、彼のオフィスから離れたもう一人別の医者のおフィスに稼働中の X 線機械があるのがわかった。

これで、問題の答えが出た。

彼は、常に、Oranur 効果で苦しんだ。

臨床の症状は、Orgonon で劇的に見たのと同じものだった。

血液検査がすぐに実行され、この結論をそれは補強した：

彼の血液は、白血球の増加を示し、非常にオーバーチャージされた RBCs と RBC が崩壊している白血病のような最終状態の血液の典型的写真がとられた。

彼は、大いに宿舎を換気して、多くの水を飲み、頻繁に、長風呂に入るのを、繰り返し、すべてのオルゴン集積装置はすぐ移動するように勧められた。

ラジウムが Orgonon に及ぼすのと同じように、オフィスの空気の集中したオルゴンエネルギーに、X 線が影響したことは、明らかだ。

316

数年前の 1940 年代初期に、類似した出来事（状況）があり私は、それを考えることなしに通過した。

主に患者の中の横隔膜でのブロック形成の研究と、OR エネルギー・フィールドの写真撮影のための、異なる目的で、私のフォレストヒルのオフィスに X 線の機械を所持していた。

その時、私は、弱り、しばしば、嫌気を起こし、のどが渇き、そして、一般的に疲労していた。

X 線機械は後で売られたが、私とその除去後に、気分が前より良くなり始めた理由を理解する。

フォレストヒルズの建物は長年オルゴンエネルギーの中でオーバーチャージされた。

私は Oranur 効果を経験したが、それを知らずに、1951 年の Oranur 実験の影響に対してすでに免疫されていた。

私は労働者のなかで最も少ない苦しみでした。

我々は、X 線処置で患者に発生する有名な損傷は、本当の十分に発達した Oranur 効果の初期段階だとかなり確信している。

私は、ガンの場合には常にオルゴンエネルギーと X 線の同時処置には熱心に反対した。

これは、経験的に正しい推測のうちのほんの 1 つでしかない。

私は、OR-処置されたガン患者が同時に、X線処置されることを、しばしば、早口で断ることを知っていた。

これは全く明らかに理解できる：

OR エネルギー処置はエネルギーチャージを増やし、X線に対する反応を強める。

OR なしでも、X線は、常に血液システムに損害を与え、一般的な低下と同様に不調を引き起こし、また、X線療法で有機体のオルゴンエネルギーが、Oranur 効果で反応する。

それがX線療法士の邪魔をするかもしれないが、この結論は全く現在確実です。

orgonomist はさまざまな方法で多くの人々に邪魔されることに 10 年間にわたって慣れている。

これは、どんな種類のものでも新しい基本的知識が必然的だ。

この要約記事を終わるにあたって、X線、ラジウムまたは類似した放射作業が少しでも同じ建物でされるならば、高い生命エネルギーを集中して使うことのないように警告したい。全ての医者が患者と一緒に使うオルゴンエネルギー治療で、OR と NR を互いの近くに持つてこないことを確認することが、必要だ。

広島での原子の爆弾の後の病気、ビキニ爆発の年の後に発見された海洋生物の中の放射能異常、NR エネルギーの金網の近くで働く人々の病気、その他これらの重要な結果の相互関係の理解のための研究が、全ての状況を専門的に注意し考えて進めなければならない、それは、Oranur の設定と類似している。

317

317

1951年4月12日から4月30日の記録から：

我々は1951年4月12日に新しいショッキングな驚かせることに遭遇した

それは、orgonomy の基本理論からすると、完全に躊躇なしに、受け入れるのを我々自身は渋った。

しばしば前もそうであったように、未知のことに接触するとき、特定の領域についての一般的な考えと知識を、私自身に定着させた。

例えば（1936年のエネルギー小囊の中の生物エネルギーの発見のずっと後、私は皮膚の表面の感情的なバイオエネルギー的な機能を「バイオ電磁気」で表した。（1937）

更なるに前進を可能にするため、これは、後で修正されなければならなかった。

類似した方法で、OR エネルギーの集中から NR 源を切り離すとき、私は放射線で認められている概念を固守した。

読者は、覚えているかもしれないが、学生の実験的研究棟から 1200 フィート離れた空の建物に、2 ミリグラムのラジウムを 0.5 インチの鉛容器の中に、各々1 ミリグラムの Ra を入れて安全に離して置いた。

容器を収容した金庫は、鋼とおよそ 4 インチの厚みのコンクリートの壁を持つ。
放射の核の理論によれば、約 5 インチの厚みのコンクリートに鋼をプラスしてあれば、完全に 2 ミリグラムのラジウムと他の 2、3 マイクログラムの核の元素の活動をシールドするのに十分はずだ。

これは放射線の認定された概念に従って、嚴重にシールドした核物質について、もはや心配しなかった。

私は、引き金効果を誘発する原因として集中したオルゴンエネルギー以外に、この少量の NR では、危険性があるとは考えられないと再び繰り返さなければならない。

夏の住いはオルゴンアキュムレーター装置を移動していなかった。

鋼のコンクリートは安全だ。

このように、これを見渡すと、わずかに異なる状況で多くの害を引き起こすことがありえることに、重大な間違いを犯した。

NR に関係物を収納した金庫は、OR エネルギー・アキュムレーターとして機能した。

道の雪が消え去ったあと、GM 測定器とともに空の建物に行き、Oranur 実験で、2 月以来実際に進行したことを発見したことを、1951 年 4 月 12 日に学んだ。

以下の表は、同日と次の日 Tracerlab SU-5 のベータ・ガンマ測定計で測定した Oranur 効果の測定数値を提供する

| | cpm | MR/H | cpm | MR/H | 距離 SAFE, CONTAINING 1 インチの『鉛 でシールドされ た NR 源 を含む 金庫 |
|---------|-----------|--------|------------|------|---|
| モニターの配置 | IV. 12 番目 | | IV.13 番目 | | |
| 大通り | 60-80 | 0.004 | 70 | | 600-700 feet |
| 道 | 60 | | 60 | | 400-500 feet |
| 道の曲がり角 | 60-80 | 0.02 | 60-80 | | 100 feet |
| 道の終わり | 100 | | 50 | | 40 feet |
| 建物の玄関 | | 0.02 | | | 50 feet ??? |
| メイドの部屋 | 800 !! | | 1000 !! | | 300 cm. |
| 金庫の部屋 | | 5-10!! | 6000 !! | 3-4! | 200cm |
| 金庫の壁 | | | 10-20,000! | | 壁から 1cm 内側ソース から 30cm、 |
| 金庫 | | | 600 | | 100cm |
| 金庫 | | | 100 | | 建物の外部 1000cm |

この結果は、衝撃的でした。

700 フィート離れた管理人のキャビンのカウントは、およそ 40cpm でした。すなわち、Orgonon で普通でした。

(100 から 700 フィート離れた道路のカウントがなぜ、ただ 30 フィート離れた、主要入口のカウントより高いのか、理解できなかった。

しかも、安全な鋼のコンクリートの壁の 20,000cpm は、全く過大でした。

私と 1 人の医者があり、私はすぐに不調と、圧力その他の、強い Oranur 効果を自身で感じた：

2 日目に医者は見えなかった。

事故を経験した時、頭を Oranur 装置に入れた医者などのことで、金庫を開けるのが怖かった。

単に安全に全体を湖に投げ捨てるのは、賢明でないようでした、

たぶん Oranur の活性化は湖に影響を及ぼした。

等しく地面にそれを埋めるのは、我々の概念では、土からの OR エネルギーが反応し続けるので不可能に思えた。

この建物自体、夏の間使えなくなったようだった。

我々は、一人で責任を負うことができなかった。

ワシントンとオーガスタ（メイン）の管理局の援助を得ることは避けられなかった、そして、4 週前、シールドされた源から 30 フィート離れて造られたフリーザーから食品をとりに行ったとき、胸に苦痛を感じたと、後で管理人が我々に話した。

1951 年 4 月 12 日-4 月 30 日

319

4 月 13 日に、異なるタイプの何匹かのマウスを（Ca、Lk、生まれたばかりの健康なマウス）安全に隠した部屋に入れた。

マウスは、安全に隔離して飼われた。

これらのマウスは、4 月 14 日によく育っていることが報告された。

次の日、4 月 15 日、日曜日に、この地域でもう一回慎重なチェックが、行われた。

モニタリングの結果は、ここにある：

2 ミリグラムのラジウム（シールドされたこれ以下の量）を安全にモニタリングする

1951 年 4 月 15 日のハウスで

| | CPM | MR/H |
|---------------|--|------------|
| I. 金庫から 1 cm. | 底 20,000 上で 5,000 | 10-20 |
| 100cm | 1000 | 0.4 |
| 1000 cm. | 150-200 | 0.04 |
| 5000cm | 60-80, 400 CPM, GM tube without shielding | 0.16 |
| 2. メイドの部屋の隣： | 200 | 0.02 |
| 3. 道：200 フィート | | 0.016 |
| 240 フィート | | 0.02（水に近い） |
| 4. BADGER 道路で | 60 | 0.012 |
| 30 meters | 60-80 | 0.02 |

| | | |
|----------------------------------|--------------------------------|-------|
| 40 meters | 60-80 | 0.018 |
| 50 meters | 400 ,GM tube without shielding | 0.016 |
| 60 meters | | 同上 |
| 70 meters | | 同上 |
| 80 meters | | 同上 |
| 100 meters | | 同上 |
| キャビンとの間 50 メートルは : 60-80 cpm。 | | |
| キャビンから遮蔽なしで 30 メートル : 200cpm。 | | |
| マウスの箱を、研究棟で後にモニターすると : 40-50 cpm | | |

金庫の外壁は、20,000 CPM と 10-20 MR/H で金庫の中の 2 ミリグラムのラジウムは、1/2 インチの鉛で保護され、

鋼とコンクリートで 4 インチ厚さがあり、ソースから約 30 から 50cm 離れており、CPM MR/H 各々、まったく莫大な量に見えた。

また戸外で、50 メーターまたは 150 フィート離れて 400cpm、(シールドから取り出された測定管で測ったが、莫大にみえた。

56 時間後、マウスはそのまま健康だったという事実だけは残った。

-320

おそらく Oranur 実験の本来のゴールに達したという考えは、我々の心中を照明のように照らした。

おそらく...

これが将来最も厳密なテストに耐えるならば、我々は明らかに、Oranur 過程のなんらかの部分の扱っていたはずだ。:

最初の段階:

NR のオルゴンへの最初の反映で、もっとも有害な状態。

突然有機体と大気の OR エネルギーは低下し、NR の予想外の活動に反応する。そして、いわば、心理的に無力になる。

第 2 段階:

NR による最初の打撃が表に出たあと、それが克服されそうならば、オルゴンエネルギーは残酷に反撃する。

いわば、狂って、気が変になって、走る。

それは殺人者になる。そして、イライラさせ、NR を殺そうとする。

この闘いで、それが支配する有機体の殺人者へとそれ自身が悪化する:

致命的なものにさえなる**放射線障害** (または例えば、白血病のような、若干の慢性破壊的

な病気)。

血液システムは、この点で有機体の最も敏感な部分です。

第3段階：

もしもオルゴンエネルギーが、NR放射と戦い続ける機会があるなら

新しい大気のオルゴンの更なる供給で置き換えることができるかどうか

優勢を保つ上で十分なエネルギーは、NR放射を無害にすることに、最終的に成功する

NR放射を無害にする

NR物質の侵入による有害なNRの第二活動を、それ自身の動きで取り替える。

この第3段階で扱っているものは、以前の有害物質の範囲内のNRとオルゴンエネルギーではない。

この段階で、ORエネルギーの全ての特性とNR物質の特性が変わろうとする。

高い数値のオルゴンは、厚さも、物質の種類も問題なく全ての壁を侵入するが、有機体に弊害はおきない。

これは、年間全てを通して扱って明らかになったが、

NR源の小さなサンプルは、最初ORエネルギーを刺激し、生命組織を害する「イオン化」の力を持っているが、最後に失い、善意のしかし非常に活性材料に変わる。

この第3段階での10mR/H近くの活動は全く気分がよかった。;

それはマウスに触れなかったために、我々は非常にわずかにOranurを感じるだけだった。

1951年4月23日から、12日後、これらをテストしても、全てのマウスは依然として問題なかった。

しかし、生命が危険なOranurの1と2段階を苦しんで通過して、たぶん必要な免疫ができたのだろう。

321

有機体は、非常に調節可能な機能ユニットである。

最初の2番目の段階の間に、すぐにロックアウトされずに、;時間と新たなOR供給のチャンスを与えられたならば、自身のオルゴン反応をNR活動に適応させ、それは結局は活発に反撃し、もはやNRまたは二次放射線で苦しまない。

これは、その時Oranurプロジェクトの本来のゴールの方へ、すなわち原子爆弾効果に対する免疫手順のための確固とした基準となって現れた。

この作業の具体的な実質的な成果は、まだ遠くにあるように見える;

しかし、その方法は、明らかに設計され、理解された。

パイオニア的な仕事が、なされた;

主な危険信号は、Oranurの1と2段階で認められた:

これらの段階の中の主な症状は、公になった。

1と2段階の後に、概説したNRの無力化とORエネルギーの勝利が起こる第3段階が、明

らかに存在した。

基本的な仕事が、なされた。

後は、その時代の人々と健康機関、AEC、国家の官僚、英国自然科学らの主要な代表者次第です、

2、3の結果を比較することによって、起こったことを慎重に考えよう、それは、各々を別にしたら意味をなさないが、パズルのように部分をまとめると、その後で秘密が完全に現れる。:

閉じた金庫の近くの活動の測定値は10mR/H以上20,000から30,000GPMで、高かったが、その数値は、4インチの鋼とコンクリートの重い壁を通し、鉛でシールドされた、それぞれ1ミリグラムの2つのラジウム針と、他の2、3マイクログラムの核物質のソースだけから明らかに来たものだ。

この発見に基づいて、遮蔽物なしで、1センチメートルだけの距離でのおよそ10倍敏感な測定管での裸のソースの測定は、非常に高いカウントを生むことを人は予想しなければならなかった。

私は自身で金庫を開けた。そして、安全に源を取り除く際、私の口と鼻の上に濡れたマスクと長い手持ち挟みを使った。

ラジウムを実際に取り出す前に、私はおよそ40x40x50センチメートルの範囲の大気の活動を測った。

カウントは、GM調査メーター針が最高比率の方へ、そして、それを越えるほど、高かった。金庫内の源からシールドされおよそ40から50cm遠く離れたところで、20mR/H以上、100,000cpmのはるかに上であった。

私は、NR材を外部へ数メートル離して移動し、再び内部を測った。

活動は30-50cpmの通常のカウントより上で、ほとんどすぐに、およそ50%下がった。疑う物理学者にも、この事実から「言ったとおりだろう」と確かに存在することを勝ちほこって言うことができる。

322

あなたのOranurは、でっち上げだ。

NRは、何によってもおそらく変わることができない。

お手上げだ。

金庫の外部の高い放射能の理由はNR源だ。

全ての常識では、この彼の意見は正しく見えた。

実際に内側のNR源の除去の後、高い数値は、すぐに消えた。

しかし、

それはシールドされた1mgのラジウムから40cm離れ、MR/Hが0.5の安全な範囲内にあ

り、インチの鉛と 4 インチのコンクリートと鋼を通してカウントは同じくらい高かったことが、どのようにして可能なのか彼は答えることができなかった。

以下が我々に教える全ては、常識が完全に間違っているということです；

原子論の見地からは、そのような機能を基本的に考えることができない

人が Oranur を理解したいならば、最終的に宇宙的概念で考え始めなければならない。

我々は、車で丘の天文台まで NR 材を移動した。

それは、その遮蔽を取り除かれ、すぐ 30mg./cm.2 肉厚の真空管の SU-5 探査計に比較して 1200 ボルトの、2.3mg./cm.2 の厚さの雲母窓測定管を持つ大きな 4096 の Tracerlab Autoscaler で測られた。

、結果の要約はここにあります：

| | COUNTS | |
|-----------------------------|---------|------------------|
| SHIELDING 遮蔽 | MR/H | CPM |
| 1 遮蔽：コンクリートと鋼と 1/2」鉛の 4 | | |
| 距離：金庫の外およそ 40cm | | |
| GM 測定管：壁の厚さ 30mg./cm.2 | 10+ | 20,000++ |
| 2 遮蔽：1/2」鉛 | | |
| 距離：30-40 cm | | |
| 金庫内 GM 測定管：30mg./cm.2 | 20+++ | 100,000+++ |
| 3 遮蔽：無し裸の測定管 | | |
| 測定管雲母窓の厚さ：2.3 mg./cm.2 | 1cm | 30,000 から 35,000 |
| 4096 Autoscaler (Tracerlab) | 100 cm. | approx. 3,000 |

このように NR 放射についての全ての均整がとれた理論を否定するほどの誰もが感ずる驚きは、同じ NR 源で、鉛遮蔽を通して、40 センチメートルの距離で、GM計数管に 10 万 cpm まであがり、40 の距離で、少なくとも 10 倍敏感な測定管でもおよそ 3 万 cpm 以上はこれにプラスすることはできなかった。

323

『我々は、結果を成し遂げた：

結果は、そこにあった。

それが NR 源でないならば問題は GM 計数器の外部と金庫内部が高くなったことだった。

それは、シールドされた源と安全な住まいの建物

安全な 600 フィート上の道の方を取り囲む大気のオルゴンエネルギー以外の何かではありえなかった。

私は、全ての NR 材を大きなチャージャと、20 層のオルゴンアキュムレーターに入れた。

新しい激しい反応のため再び外のことを考えなければならなかったので、次の日の午後遅くまで、私は残った。

何日か後に 2 ミリグラムのラジウムは両方とも遮蔽されてオーゴン・エネルギー研究棟に、運ばれ GM Autoscaler.自動測定器で裸のと遮蔽されたのとで比較評価された。

結果は、以下の表にまとめられた：

、

ORANUR

ラジウムの遮蔽されたのと裸のと 2 本の針（それぞれ 1mg.）の GM AUTOSCALER での測定

1951 年 4 月 28 日、午後 3 時

全ての測定は 1cm 距離。

各々の測定値は、いくつかの測定値の平均。

| | 物体 | 測定量 | 遮蔽の有無 | むきだし | 秒単位 | Approximate CPM |
|----|--|------|-------|------|------|-----------------|
| 1. | Ra1 (one mg. untreated) (1mg. 処理されていない) | 4096 | + | | 0.8 | 307,200 |
| 2. | Ra2 (one mg. Ra1 (1mg. OR-treated) | 4096 | + | | 1.05 | 245,760 |
| 3. | Ra2 | 4096 | | + | 0.4 | 38400 |
| 4. | Ra 2 | 256 | | + | 2.8 | 81,920 |
| 5. | Ra 1 | 4096 | | + | 8.3 | 28,877 |
| 6. | Ra 1 | 4096 | + | | 0.8 | 307,200 |
| 7. | Ra 2 | 4096 | + | | 0.8 | 307,200 |

| | | | | | | |
|----|----------------------------------|------|--|---|------|----------------|
| 8. | Ra 2 | 4096 | | + | 3.0 | 81,920 |
| 9 | 単独でシールド | 64 | | | 3.15 | 1,280 |
| | 5年 Ra-OR-treated した マイクログラム | 4096 | | | 0.8 | 307,200 |
| | 1 ヶ月見た、Watch, one month owned | 4096 | | | 10.0 | 24,576 |
| | 2 年は見た | 4096 | | | 10.0 | 24,576 |
| | Calibration after measurments | 256 | | | 4.25 | 毎秒 60 サイ クル |

324

さらに進む前に、再びこれらを単独でなく、相互関係で、事実をチェックしよう、:

1 番目:

裸の NR 材は、重い鉛遮蔽物で囲まれた同じ NR 材料より非常に低い数値（10 分の 1）でした。

2 番目:

10 倍より高いカウントの NR を敵に戦う OR エネルギーの機能は、シールドされた NR 材のまわりの大気圏にある。

3 番目:

OR と NR の間の相互作用が止まるとすぐに、高いオルゴン活動力は、消えて、通常の大気のレベルまで低下する。

4 番目:

NR に刺激されない限り、オルゴンエネルギーだけでは強く反応しない。

NR 材が金庫でなく、大きいチャージャに入れられたあと、すぐに Oranur 反応は、再び厳しくなった

カウントは、チャージャの外の 2000cpm と同じくらい高かった。

空気は再び重くなり典型的 Oranur 症状（不調、吐き気、圧力）がでひどく、金庫の近くで以前 50 だったことは感じられない。

これは、我々に更なる前進のためにもう一つの手掛かりを与えた

.明らかに、NR 材が、重い鋼とコンクリートの金庫の中にあるとき

すべてを透過する OR エネルギーは、簡単に金庫に入ることができたが、NR 活動は、金庫から出られなかった。

このように、NR に対する OR の戦いの勝利の可能性は、NR に対する OR の有利に移動し

た。

他方、NR 材が十分にシールドされなかったとき、オルゴンエネルギーは DOR 動きを刺激し、誘発する機会となる。

これは、激しい自然の不調を金庫のそばでは感じなかったのに対して、それをチャージャの近くでひどく、すぐに感じた理由だった。

DOR 効果を減らすためには、NR 材料を、嚴重に遮蔽し、このように限定してチャージャに置かなければならないことは明らかにみえた。

OR は、NR になる、しかし、NR は OR にならない。

我々は、再び NR 材を置く金庫のために、すぐに住宅を建設することに決めた、

そして、チャージャの近くに NR を入れた金庫を置くことにする。

我々の推理が正しいならば、これで、DOR 要素なしに Oranur 効果が得られるだろう。

第二の Oranur の連続実験を行うことが可能になるまで、この問題の更なる追及は待たなければなりません。

結局、対照実験の独特な結果は、言及されるに値する：

我々は、ニューヨークからラジウムの 3mg を注文した。

それを Orgonon もってくる前に、それをテストした。

このラジウムの 1mg. の測定結果は、ニューヨークの放射研究所でえた：

325

325

裸の...およそ 16,000cpm

『鉛 1 インチで遮蔽-----およそ 7,000cpm :

Orgonon に到着してすぐに厚く鉛で遮蔽した同じソースをすぐに測った

結果は、GM 自動計数器でおよそ 300,000cpm と SU-5 測定メーターでおよそ 100,000cpm でした。

Oranur 効果は、5 から 20-までカウンターの数をすぐに上げるか？

更なる作業だけが、この問題に答えてくれる。

しかし、結論は確実に見える：

それは、GM カウンターに反応する NR 材を取り囲む大気中の OR エネルギーです。

それは、何ヶ月も 1 年も NR 材と反応し続ける生きた有機体の中のオルゴンエネルギーです (バイオエネルギー的な放射能; 「放射線障害」)。

326

6. 展望

我々は、ひどく、危険で、致命的な経験をしたと感じ、これまで隠された宇宙的に機能する大きく深い領域に投げ込まれたが、それをまだ完全にはしっかりつかむことができなかった。

我々は形而上学的思考に、気が向くこと、多くは無いが、観察され、正確な器具で測定され、多くの明確な物理的発現にもかかわらず、これらの経験の精神的領野との関連に感動せずにはいられなかった。

それに、ここで詳細に立ち入るにはあまりに早い。

しかし、我々は、最初の Oranur 実験が、OR と NR の基本的な対立を確認しただけではなく、私が何年も前に予測した事実がほぼ実現化したことを意味する。;

それは、例えば宇宙オーゴン・エネルギーに関する機能の多くの一見取るに足らない仮定に、より鋭い焦点を当てさせた、たとえば、その「意味のある」挙動と、電気または磁気のような完全に機械的に機能するタイプのものとを区別した。

我々は、この場面に入りこむ、神秘的な誤解の危険性を完全に知っている。

それでも、何百万もの人々が育ち、千年紀の間形而上学的信念で生きてきたならば、「Prana」その他の中に何かが必要でないと、思った。

そして、この真実は、それ自体を緊急に我々に知らせたように見えた：

神秘主義と形而上学は、不合理な不安に基づくのか

有機体の中にも外にも宇宙エネルギーがなければならない

このエネルギーが、本当に物理的発現をするのを予想した

そして示されたこの機能は全ての機能のまさしくその基礎で OR と同類である生命と感情が提携している。

この事実は、我々にとって新しくはなかった。

我々は、長年単に物理的にだけ、オルゴン機能だけの領域で、精神的機能の前段階を観察してきたが、全く論理的に、我々の生命エネルギーの研究のフレームワークに適合し、これらの類似は我々を驚かせ続けた。

たとえば、bion 水を冷凍することで OR エネルギーを圧縮する;

冷たい動物は、正確に同じ方法でふるまう。

326

327

例えば、OR-charged された検電器の自然発生的な放出、

または流体と同じように関連する organotic な温度差の変化の法則的な動き、

ノンメカニカルな、天気の法則的な変化といった機能または、流体での、ノンメカニカルなタイプの全てのオルゴン機能;といった全ての動きに見られる。

また、それは最初の **bions** の融合で、物理的性質としての結合と融合の基礎が明らかに示された。または、高い拡大中に見られる、小さなエネルギー小囊の生きているようにみえる「思いがある」、「ふざけた」動き、そして、他の多くの類似した現象。

これらは、生命と心のより高い機能と質的に同類である。

これらの自然の基本的機能のオブザーバーが（その人はバイオエネルギー的な感情を知り、きちんと訓練されていない）この点を確実に逃がし、何を見ているか、理解していないのは明らかだ。

他方、バイオエネルギー的によく訓練されたオブザーバーは、彼の毎日の専門の活動によって、感情的な動きとバイオエネルギー的な表現を精査し、患者の一部の上で言葉なしに話される意味を読み、しばしばさらに物理的機能を理解する前にこれらの微細な **orgonotic** な現象の「意味」を把握しすぐに読もうとすることに使う。

物理学のメカニカルな技術者の中の、自然の物理的機能の観察は、感情的な発現から「物理学」と「神秘主義または「信仰心」として分裂する。

他方、よく訓練された **orgonomic** な観察者の中で、互いに非常に対立的な自然を経験するこれらの 2 つの方法は、1 つの構図に連合する

ここでは物理的なものが、量的でなく質的であるもの、意味深い価値を除外しないか、否定しない。

我々は、これらの問題が自然-哲学で深い重要性があるのを知っている。

物理学といわゆる「形而上学」の間の明らかな境界線は、壊れた。

形而上学の直観力は、物理的な基礎を持つ：

「**GOD**」神と「エーテル」は、一つだ。

本当に珍しいことだが、理論的によく訓練された、すなわち、物理的にと同様に **bio-energetically** に訓練を受けた、**orgonomist** は、西洋文明を支配する物質界画像と、東洋世界を支配する神秘的な、「美的」世界画像の考えの間の和解の多くの試みを読んでいる。彼が西洋の科学の中の目的と東の宗教的な哲学の主観的なものを調停する試みを続けるとき、必然的に、目の前に電子的にチャージされた **bions** の動きを見なければならない、調製冷凍 **bion** 水の収縮した黄色の芯から、後で生きた **plasmatic** な薄片が生み出され **Oranur** 効果での物理的動きと感情的な意味の統合を畏れることになる。

328

もはやニュートンとゲーテの、それぞれの物質界画像は、彼らが考えたほど、ひどく正反対なものではない。

彼らの見解は、和解でき、和解しようとしています。

科学者とアーティストはもはや彼らがまだ混ざり合えない世界と思われている 2 つの全く比較できないものの管理人ではない。

知性と直観力は、科学的な作業の中の両立しない対立物ではない。

実はこれまでも、これらは基本的自然研究で対立物ではなかった。

読者は、ここで何が、動かしているかよく理解しています：

科学と宗教、科学と芸術（主観）の全ての境界、

そして、主観、量と質、物理学と心理学、天文学

そして、宗教と神とエーテル、が取り返しのつかないほど壊れ、全ての自然の

基本的な統一概念 CFP 共通機能と取り替えられる、

それは、いろいろな種類の人間の経験に進出する。

もちろん、これは完全に区別がなくなることを意味しません。

これに反して、人と動物の間の機能特性と、オルガスムの熱望と宇宙への熱望、神とエーテル、その他、に照らして、特別な違いは、より多く鋭く出てくる

そして、合理的な差異を明らかにすることは良いことだ。

我々は、この考える方法の基本的変化との多くの関係を学んだ：

ORGONOMY は、自然科学の単に分科だけでなく、それは単なる芸術的な手順でもなく、また、心理学だけでも生物学だけでもない。

本当を言うと、それは全て、問いかける対象と完全に一致する、それは基本的自然法則に関係する知識の本体である。

宇宙エネルギー海から、他の全ての機能は、バリエーションを通して出てくる。

これは、アイデンティティを作り、互いとの変わりやすい互換性もつくる。

全ての鋭い、メカニカルな区別の故障で、当然、我々の宇宙存在の新しい見解が、出てくる。

我々は、まだ必ずしも全くその方法を知らないがこれは、すでに真実である。

もどります：

また、OR エネルギー機能から、NR 放射は、第二の自然機能として一度、分化を通して出てきた。

我々は OR と NR の間の対立だけではないことを経験した；

致命的な方法で、我々も経験したが、OR は、我々がそう言うことに慣れているが、激怒で気も狂わんばかりになることができる。

我々は、その期間にそれ以外は穏やかなオルゴンエネルギーを引き起こして、それを野獣に変えたという印象を持った。

329

率直な議論

この結論は非常に重大です。そして、一般の人々のまさしく健康に関連する問題と保障を含む。

したがって、鈍い言葉使いも、回避のための婉曲な表現も避けられない。

問題のテーマに入る前に、この仕事の率直な議論を妨げるかもしれない躊躇の可能性が出てくる部分を軽減したい。

公衆衛生の **biopsychiatric** 生物物理的な面に関する私の鋭い理論的で実際的な公式化は、これらがすでに世界中で現代の教育で少なくとも部分的に取り入れられた時には、妨害してはならない。

私の約 20 年前のヨーロッパでの過去の革命運動との提携は 18 年以上の間私には全く政治的な提携がないのだから、妨害してはいけない。

私は言葉の上での政治的な感覚において、これまで活発でなかった、しかし、私は私自身を独裁の伝染病（赤と同様に黒）のあらゆる特徴に博識にした。

私の職歴の非常に初期から、実際に独裁の種類と戦った；

そして、党の問題ではない、

1931 という早い時期に、誰もが本当に知そのすべてをる前に全ての私の精力と知識で特にあらゆるひそかな悪人と戦った。

また、USA によるソ連政府の承認の前に切望する。

私は、私の科学的な信念や、最もわずかな意図も、国も、その少しの部分も強制しない；

そして、今日、私自身が本当に、**orgonomic** な教えに関係して危険がどこにあるか知り、気がついた唯一の人間だと思う。

豊かな経験に基づく私の信念は、現代の社会的混沌から現れた希望は、平和な社会的な生命と、私の心へ明るい光である、世界の至る所で作業中である前向きの方の強力な根が、隠されて生きてあるというその事実には大きい希望がある。

古い、つまらない、縛られた上に向かう世界は、壊れているのを、極めて少ない信頼性がある人々だけは、今日、完全にわかっている、そして、新しい、有望な、若い世界が、ゆっくり、そして、痛みながら生まれている。

今から過去 30 年以上進行中の現在の **biosexual** な革命は、その芯を構成する。

意見の無料交換に対する障害を除去することを望んで、私は要点を書き進める：

我々の意図に反して、**Oranur** 実験は、**Orgonon** で制御できなくなり、特に USA の安全保障を危険に脅かす規模に達し（現在、1951 年 5 月）政府は、まじめに国の利益と万々に備えて、さらに遅らせなければならない情勢を必要とする。

330

要約すれば：

Oranur 実験は、それほどはるかに重大な関連を持つことを明らかにした；

これらの範囲と革命的な特性は、誰の誤りでも、意図でもない。

この点で事実の証拠と、結果の理論上のフレームワークには、あまりに多くのことが含ま

れる。

およそ 1947 年以降、私は、安全保障上の理由のために、長年 Oranur の最近の実際的な理論上の背景について、何も発表しなかった；

私は、起こるかもしれないことが実際に起きたと感じた。

1951 年 9 月 12 日、ゲラ刷りで挿入された注。

1951 年 4 月頃、Oranur 実験は、Orgonon の労働者に対して恐怖させる効果を発揮していたが、以下の概要は、その悲観的な面においてそのひどい状況を反映している。

恐怖させる出来事は、部分的に今も熟練工は、いないし、その範囲と危険の準備が完全にできていないでこの実験に入ったという事実によっている。

以下の特に 1、6、7 と 8 が読者に悲観的な印象をととても与えるかもしれないが、それを軽くしたい。

それは、また、新しい殺人武器が科学者によってつくられ、Oranur の致命的な部分が、ポジティブな生命に奉仕する、機能をはるかに上回るという恐れを除去するのに必要である。

この最初のレポートの結論の後の 5 か月間に、

悲観的な展望の多くは、新しい観察によってはるかに詳しいものにされ、それは積極的な医療に使用され Oranur の生物学的結果が間違いなく、残された。

これらの役に立つ結果は、現在相当に見える、そして、慎重な詳細な調査のために長い期間が必要とされる。

私は、Oranur の全て言及された危険な状況では、人（動物）に対する生命に前向きな影響と植物の保全を無視した取扱いは、正当であると思う。

私は、1951 年 4 月現在、不変のオリジナルのテキストを残す理由は

（反応）実験の最初の進行に対する、我々の感情的で生物学的反応の本当の完全な状態を描写することで、それは、疑いもなく、ほとんど初めて Oranur で実験しようとする誰でも起こる。

1. Oranur の前向きな影響が上回ることの 2 番目の追加レポートは、すでに準備中だ。

放射性物質 1 ミリグラムだけを大気の非常に集中したオルゴンエネルギーに入れることによって（20 層のオルゴンエネルギー・チャージャまたは部屋にチャージされた OR エネルギーに対する年間の効果を通して）、大気エネルギーに変化が、起こる、それはどんな疑いも越えて遅いが、永続する連鎖反応の特性を持つ。

それが強度または期間が、特定の限度を越えるならば、原子力エネルギーに対するこの **オルゴンエネルギーの反応は生命に危険だ。**

2. OR エネルギーが鉛とレンガを含むどんな厚さの石の壁もを透過するので、NR 放射に刺激されて、野放しになった OR エネルギーに対する保護は全くない。

原子力プロジェクトによって使用される、現代の安全性基準は Oranur に対しては効果はない。

3. 一旦 Oranur 効果が起こるならば、まるで、玉突き的に連鎖反応で、群がるように、1 つの地域の後、他の地域へと空中を移動する。

そのような現象は、本来の Orgonon での影響の場所から、2 マイルほど遠くで見つかった。

1mg. の NR が 20 層のチャージャの中に入れて、使用されただけだ。

. 500 層の OR チャージャの中の 1 グラム NR の可能な影響は、予測できないし、同時に私は破滅的恐怖をもつ。

4. 元々引き金を引いた NR 材が除去されたあとも、全く普通の材料（例えば岩、金属とか特別にオルゴンエネルギーの蓄積能力を持つ材料）が活発に長く続けると仮定することは、最適で避けられない。

これは、放射能の誘発に似ている。

現在岩が実際に原子的に崩壊しているかどうか確認するのは難しい。

しかし、それは疑う余地なく活発で、続いている。

我々が 1mg. のラジウムに対するオルゴンエネルギーの影響（5 から 10 倍の集中で）をテストし始めたとき、この影響は全く予想外で、意図せずに発達した。

この活性化は、通常の、自然活性の単に急激な増加です。

5. たとえこれらが NR 放射によって直接影響されなかったとしても、大気の OR エネルギーを蓄えることのできる構造（例えば鋼の毛糸、事務用金属キャビネットまたは単純な金属をひかれた箱）は作動中になる；

これらは、直接影響を受けたオーゴン・エネルギー・アキュムレーターと接触することで十分である。

6. 人類の犯罪の憎悪者、または政敵がこれを知っているならば、そして、USA がこれらを知るか、効果を研究したならば、簡単に作動する Oranur 装置を落とすことができる。それは、単純な金属を葺いた箱のように見える。これらは、全大陸ではないが、全地域を荒らすことができる。

7. 我々が 4 か月間だけの観察と実験期間で、学んだものによれば、人々は Oranur- の荒れた空気で病気になる。

病気にかかった各々の人は、彼または彼女の特異的疾患または病気への体質によって個々に反応する。

この影響は、OR エネルギーの生物学的エネルギーの選択的な影響による

特に病気にかかったものは有機体に苦痛を与える部分を攻撃し、症状を高い鋭敏さに最初

に追いたてる、そして、誠実にきちんと適用されると彼らを回復させる。

-332

しかし、

管理されずに、制御される、

そして、特に悪質な意図で使われるならば、空気のそのような横行は確かに多くの人々を殺害するか、少なくとも固定するだろう。

わずか1マイクログラムの放射性物質でさえ50-または20倍のオーゴン・エネルギー・チャージャに連続的に残されたならば、結果は破滅的でありえる。

9 Oranur 効果の強度と拡張性を図示しろという命令：

建物からどんな放射性物質も無くし、あらゆるオルゴンエネルギー蓄積装置は、除去されても、規則的な換気が半日だけ怠られるならば、80 または 100cpm と同じほどの背景カウントを動かす。

他方、新鮮な外気は影響を取り除き、40cpm までの活動をおよそ25の標準に下げる。

10. 原子炉反応の力学の中での決定的な役割でなければ、大気のORエネルギーは、大きな作用を演ずるという事実は、ほとんど疑いがないということは、これまでに制限されていない論文で査定され、明らかにされた。

これらのダイナミックな現象の慎重な実験的研究は、現在の社会的事件の状態では生命の重要な保証がもしも危うくなるとすれば、極めて重要に見える。

11. 私は核分裂させなかった、そして、私はOranur実験の間に核分裂を起こさなかった。荒らされた材料において核分裂が、実際に起きるのは、確かではない、しかし、このケースではおそらくあったかもしれない。

したがって、ORエネルギー研究の大きな医学潜在性のために、私は選ぶ

人々のためと、これらのものを報告する私の身の安全のために、

そして、全ての官僚主義が、彼らの範囲にふさわしいスケールの上で、これらのプロセスを排除するために危険と希望が終わったかのように切り捨てることを断固として主張する。最大の明快さで、テーブルの上に、持っているカードを公にすることは、現在重要な義務です：

普通の材料の分裂が起こるならば、その情報公開は心の中で完全に異なるゴールへ向かって始めた実験に付随したことの発表だ。

12. 状況の重力は、Oranurの機能が今日の原子物理学の多くの大事にしてきた信念をたぶん揺るがすという事実によって、さらに増大する。

これのほとんどはまだまだ不明です、しかし、概略はすでに明らかに見える。

極めて少ない結果だけに私は、言及する

a. 宇宙の基本的構造の原子の『粒子』理論は、もはや筋が通っていない。
初源的なエネルギーの海が、以前、「エーテル」と呼ばれた質量のないものが、存在している。
重い不活発な質量は、詳細な *orgonomic* な研究にはすでに確実に知られている機能プロセスから、質量のないエネルギー(*mass-free energy*)から発生する。

333

b. いわゆる「物質波」の領域に下がった点、(間違っただ、まぎらわしい表現)、「粒子波」の領域(再びまぎらわしい)、波だけからなる電子の領域で、電子の勢いと同時に、位置を測定することが不可能で、「単に統計的な可能性だけの法則」、その他、その他、
原子論で自然の原子以前の機能のある点で、確かに *orgonomy* の機能理論は、始まる。
これらの原始の、核以前の問題は、メカニカルであるか唯物論的な考え方に強く堅固にある。

機能的に接近する場合だけ、これらは論理的に理解できることを明かにする、
すなわち、*orgonomically* に接近することである。

事実、観察と理論上の推論は、仮定を正当化するために明確な十分な形態で長年畜積を続け、それまでの全ての電子理論が、はるか遠くの宇宙的な**初源的な機能**に関係しており、宇宙の基本的機能の機能理論と取り替えられる。

これらの問題は、当然、非常に重大で、考える上での惰性、誤った实用理論その他といった、この分野の誤解を片づける勇敢な心を開いた偏見のない、知的な努力、を要求する。
それに加えて、多くの評判は危なくなつて、私情も傷ついている。

c. 現在、数年間のうち、OR エネルギーは、真空管において毎秒最高 25,000 のインパルスを生んだ、そして、0.5 ミクロン圧までのどんなガスからでも解放される。

これはイオン化理論の仮定に基づくと、測定管の「ガス」粒子に出される「イオン化効果」である、影響を与える放射によって、「粒子」は徐々に弱くなる。

ガス-充填材は、オルゴンガイガー効果を得るのに、必要がなかった。

高い真空でのオルゴンエネルギーのルミネーションと、量子力学的方法での明確な動き。
たとえば、それは黒点周期と大気の変化のような宇宙の影響だけを受ける。

orgonotic な量子力学的な動きは、大きな周波数であり、多くのものは、元のものを、連続的か、または線形の動きに変化させる。

13. 医学可能性に関する展望：

医学的 *Oranur* 効果は、強力であるだけでなく危険です。

これらは、攻撃し、個人特有の特異的疾患を前景にもってくる。

この過程で、無学にいじるるならば、病人は早まって死ぬかもしれない。

しかし、その有機体の特定の場所と症候群を求めて医学的に実行する作動因が事実、見つかったために、非常に有望である。

Oranur の装置が、注射または他の機械式装置のそばになく、単に徐々に、そして、用心深く病気の有機体を Oranur. の必要な服用にさらす以外はない。

14. NR が OR を起動させ、それを Oranur に変えるので、Oranur は、他のオルゴン装置に影響を及ぼして、玉突き状態で続くので、最初の引き金効果は、前に言われるように、Oranur 活動の連鎖を始めるのに十分である。

334

我々は、その時 NR によって引き金を引かれない OR アキュムレーターがある; ことを 識別する。

これまでのように傷、火傷、その他の治療のために、完全に、規則的な、防止的な照射が、適用される。しかし Oranur 装置は、少しでも居住している建物には置いておくことは出来ず、単純な OR アキュムレーターと対比して、これらの潜在的な危険を、最大の配慮で取り扱われなければならない。

Oranur による個々の処置は別として、

新しい可能性が、現われる、

単に強力な Oranur 装置で地域全体に影響を与え

このように大量病と流行と戦い、そして、おそらく NR 放射線障害への免疫を予防的方法で形成する。

後の可能性は、もちろん、多くの詳細な仕上げと厳しい法的予防措置が必要である。

この作業は、我々の財政的範囲と我々の義務をはるかに越えている。

このようなものは、Oranur. の最短の重要性であるが、人間の感情的反応への Oranur の影響は、長期的見地からは、無限なほどの大きな重要性がある。

我々にはここで、今見たような、大きな出来事への用意ができています。

国家の政治体制は、核戦争の脅威を廃止することに向けられ、世界中の平和を確保し、至る所で人々に健康と幸せをもたらすことは、数えきれない利益をもたらすことができる。連鎖反応を遅らせることと医学効率が宇宙の初源的力に見つけた時から、宇宙エネルギーは、最終的に役立つ目的にかなうことができた。

そのようなヒューマンな深い努力は尊敬を集め、そして、我々の努力が至る所で人々の深い信頼を得る。

このゴールに、組織も、一人の人も、到達することができなかつた;

保育所から高等教育の学会までの、プロの組織からあらゆる土地の軍のペンタゴンまでの社会的機関の同盟だけがそれをすることができた。

APPENDIX

付録

Oranur 実験の技術的な準備に関して

I. 非常にチャージされた大気エネルギー

どんな建物でも、Oranur 実験のための建物を勤めるのに、普通の建物より高い organotic なチャージレベルが 3 から 10 倍集中されて続けて保たれるならば、どんな構造かは重要でない。

OR エネルギー・チャージのそのような高いレベルは、普通の 3-10 層のオルゴンエネルギー・アキュムレーター存在によって連続的に簡単に得ることができる

または、より能率的な特別な「1、2 個の 20X オルゴンエネルギー・アキュムレーターを含むオーゴン・エネルギー室の存在によって。

オルゴンエネルギーの存在の高さとチャージの程度は、決定される、紛れもない主観的な感覚は別として、

自然発生的な放出（「自然リーク」）の electroscopic な測定によって

20 層のオルゴンエネルギー・アキュムレーターの内部で、そして、戸外で、部屋の中で。

オルゴンが、高くチャージされた測定スペースの中では、

戸外の放出率と比較して、放出率が遅い。（Organotic ポテンシャル）。

それは戸外の、平均して、3 倍未満であってはならない；

望ましいのは、最高 10 倍以上です。

II. 「オルゴンエネルギー室

「オルゴンエネルギー室」は、およそ 15 フィートのホールまたは正方形の控え室である。壁の内部は、鉄または鋼の板金で覆われなければなりません。（銅またはアルミニウムのこれらの金属は健康に危険なので、使用してはいけません!!!）

内部の鉄金属裏と外の壁の間で、普通のグラスファイバーの絶縁層が、置かなければならない。これは、蓄積効果を増やす。

OR 蓄積は、新しい金属で葺かれた壁の後ろを動く。

しかし、それは十分に強くない。

OR の活動が一定の高いレベルに達するのに数週間は、大気の OR エネルギーを十分「吸収する」のに必要です。

活動は天気によって変化する。悪い、雨の天気に近いゼロに減少し、日が照った、乾燥した天気で、吸収量を増加させる。

約 4 から 10 センチメートル内側の金属裏から離して手を保持することで OR 放射の熱を簡単に感じるができる。

OR の部屋は、暗闇でのオルゴンエネルギーの観察を可能にするために光を通さなくされな

ければなりません

336

このような視覚的観察は、すべての物理的な **orgonomy** の学生の厳しい必要条件である。頑丈なエネルギー室で、15 から 30 分目が慣れた後、ブラックでなくブルーグレーに見えなければならぬ。

1 時間半の後、部屋は始めより明るく見えなければなりません 一、よい天気だけに、より高い高度だけで明らかに、紛れもなく白っぽい、黄色がかった光のきらめきが見える。後で、特に壁と天井で、ピンポイントの無数の小さいすみれ色の火花が、至る所で見られなければなりません。

後の観察が、始めから、すべてのオブザーバーに手に入れられるわけではない。換気しても、不快を感じないで、およそ 2 時間以上中断なしにこの部屋に留まることは、平均的なオブザーバーには不可能である。

OR エネルギー室から出て行くシグナルの外観は、赤か紫の光のパッチです。

III. **OR** エネルギー・アキュムレーター

オーゴン学会出版部のパンフレットの医療利用のための科学的なオーゴン・エネルギーアキュムレーターの構造の記述を見てください。1951.

IV. **ORANUR** 効果を成し遂げる方法

機械的エネルギーでも、**OR** エネルギーをより大きな活動へ興奮させることができる。：単純な熱、誘導コイルからの火花、摩擦、その他で **Oranur** 効果は、その猛烈さと、その危険な性格によって **OR** の他の刺激と異なる。

放射線を出す、1 ミリキューリー放射物質（ラジウム、ピッチブレンド、ウラン）といったどんな源がひきおこす変化でも **ORANUR** 活動に引き金の働きをするのに十分だ。

この影響の量は、**OR** の部屋に置いた **NR** の活動量で、または露出時間を計ることで、その度合を操作できる。

OR エネルギー・フィールドの中に 1 ミリキューリーの **NR** 源または、**X**線機械を置き、**オルゴンアキュムレーター**を使用することを、誰にも、**厳重に警告する**。

OR 大気に従って動く引き金効果が、長く存在し、アキュムレーター装置にはより強い、影響が、多く存在する。

より強い効果は、引き金の動きの規則的な繰り返して起こる。

Oranur がとても集中した大気で、1 マイクログラム以下の **NR** が、わずか 2、3 分存在しただけで、ひどい結果を生じるのに十分です。

新たに得られた **NR** 源だけが、**eflective** 効果がある。

長期間（年）**オルゴン**にさらされた **NR** 材に、効果がなく、それ自体 **OR** エネルギーに変

化し影響された。

337

V. 典型的な ORANUR 病気の徴候

これらの徴候は、以下の通りです

不調; *malaise*;

吐き気;

頭、胸、その他での圧迫感;

筋肉と他の器官が痛みでひきつる

熱と悪寒と震え;

疲労;

古い又は、潜在的な病気の症状の再発;

病理学的血液画像;

白血球の増加;

結膜の炎症;

のどの渇き;

高度の渇き。

型には入れられないが、危険な徴候は、以下の通りである

気が遠くなる

慢性的な疲労;

致命的刺激の症状 (呼吸中枢のブロック)

長期露出による血液画像の白血病への変化;

肺炎 (*pleuritis*) ;

内部の出血。

他の徴候は、更なる観察で出てきそうです。

VI. ORANUR 病の治療 :

豊富な新鮮な外気;

部屋の周期的な、十分な換気;

全ての *Oranur* とオレゴン領域の装置の除去;

冷えた水は、炎症を起こした目の症状を縮小する;

飲料水;

長い風呂;

更なる露出の回避;

ライヒ **orgonomic** な血液検査による治療

余剰生物エネルギーの有機体からの規則的放出。

後者は、おそらく不当な高い数値に対する逆の治療として、全く重要です。

VII. Oranur 病気の最終的な結果は、現在予測できない。

VIII. ORANUR 形態で宇宙 OR エネルギーを予防的に、治療的に診断に自由に使う道が、設定された。

医学と生物学のための効果は、まだ確定できない。

歴史的記録から

338

Oranur に関して残された NYC の記録情報

| | From | TO | By and Date | About |
|----|--|---|--|--|
| 1 | Orgone In-stitute Re-search Labs (OIRL) オーゴン、研究学 会 (OIRL) | Director, Office of Technical Advis-ers, Atomic En-ergy Commission, 原子 力エネルギー委員 会(AEC)テクニカ ルアドバイザー局 長 (AEC) | 1948 年 4 月 30 日)代表との個人 的会合が許可さ れる | OR と VACOR 現象の GM 効 果について AEC 代表は オルゴのン基本的な自然-科 学の調査を AEC の視野の範 囲外だと述べた。 |
| 2. | Chief, Public Information Bureau, AEC NYC、 AEC NYC 公共 情報部部長 | OIRL | 手紙 (1948年5月26 日)。 | OR の GM 効果の公表を制限 しない。 |
| 3. | オーゴン学会 | AEC 議長 ワシントン D.C. | 手紙 (1948年7月22 日) | オレゴンの回転力に関する 公共の責任。 全体主義大国による誤用の 危険。 |
| 4. | OIRL | テクニカルアドバ イザー局長 AEC、NYC | 手紙 (1948 年 9 月 9 日) | OR モーター効果。 モーター回転子スピナーモ デルを得る。 |
| 5. | テクニカルアドバ イザー局長 AEC、NYC | OIRL | 手紙 (1948年9月17 日) | AEC は OR の基本的研究に 興味があるが、AEC の活動 範囲外のを助けること ができず、調査を支持するこ ともできない。 |
| 6 | . オーゴン学会 | Medical Directors,, OIRL | 手紙 (1948年10月5 日) | OR の核との関係。 AEC 範囲外の OR の法律尊 重義務より事実結果の重要 |

| | | | | |
|-----|--|--|--------------------------------------|--|
| | | 医学部長 | | 性と公共的責任と支持の必要性。 |
| 7. | OIRL | 技術的なアドバイザーディレクター、オフィス | 手紙 (1948年10月21日) | NR と OR の関係。 調査するお金の必要。 |
| 8. | 技術的アドバイザーディレクター オフィス AEC | OIRL | 手紙 (1948年11月2日) | オルゴンは AEC の範囲外。 |
| 9. | オーゴン学会 | Chief, Patent Branch, AEC (AEC) 支店 (特許) 責任者 | 手紙 (Nov. 8, 1948) (1948年11月8日) | .OR に関する文書 10,000 / 毎秒のインパルスを与える GM の反応 GM 自動測定器. の真空管 |
| 10. | Chief, Patent Branch, AEC, 特許責任者 支店 (AEC) | オーゴン学会 | 手紙 (1948年11月23日) | オルゴン研究は AEC の現在の活動と関連がありません。 |
| 11. | オーゴン学会 | Board of Trustees, 、 ウィルヘルム ライヒ財団評議会 (WRF) | 手紙 (1950年9月6日) | .OR の医学的効果。 NR を打ち消すことが出来るかもしれない。 |
| 12. | 法律顧問、(WRF) | .AEC コミッショナー | 手紙 (1950年9月18日) | Transmission of Sept. 6, 1950 letter from Orgone Institute. 1950年9月6日、オーゴン学会からの手紙の伝送。 |
| 13 | Chief, Medical Branch, 主要な、医学学校、 AEC (ワシントン) D.C. | 法律顧問、(WRF) | 手紙 (1950年9月29日) | OR の特性についてもっと知らなければいけない。 OR について AEC 医学支所の誰も見解を述べる事ができない。 |
| 14. | OIRL | 放射性同位元素 RI) 支店、 | 電報 (1950年12月4日) | 放射性同位元素のための装置 |

| | | | | |
|-----|------------------------------------|--|--------------------------------|---|
| | | AEC (オークリッジ, テネシー) | 日) | |
| 15 | OIRL. | Tracerlab 社、 ボストン (マサチューセッツ) | 手紙 (1950年12月4日) | 放射性・コバルトの取得。 放射性コバルトの標準の CPM |
| 16 | OIRL. | Tracerlab | 手紙 (1950年12月4日) | Ordering of tongs, lead con-tamer and film badges. 鉛のコンテナとフィルムバ ッジテストの注文 |
| 17. | オーゴン学会 | オーゴンエネルギー・クリニック、 ディレクター Forest Hills, N.Y. | 手紙 (1950年12月4日) | Oranur 実験の計画。 |
| 18. | AEC RI 支店、 | OIRL | 手紙 (1950年12月6日) | 放射性同位元素用のアプリ ケーション |
| 19. | WRF | Important Civil Defense, State and Federal Agencies | 謄写版印刷され た資料速報 (1950年12月) | Oranur 実験の概要。 (オーゴン・エネルギー非常 事態速報) (OEEB)。 |
| 20. | AEC RI 支店、 | OIRL t | 手紙 (1950年12月 15日) | 放射性同位元素の取得。 |
| 21 | . オーゴン学会 | アメリカ合衆国大 統領 | 手紙 (1950年12月 19日) | Oranur プロジェクト。 |
| 22 | (オーゴン・エネ ルギー, クリニッ ク. ディレクター | ニュージャージー 連邦議会議員 | 手紙 (1950年12月 28日) | Oranur プロジェクト。 |
| 23. | ニュージャージー 連邦議会議員 | オルゴンエネルギー・クリニックデ ィレクター (オーゴン | 手紙) 1951年1月1日 | Oranur プロジェクト。 |
| 24. | ニュージャージー 連邦議会議員 | 軍医、 アメリカの市民 公共医療機関 | 手紙 (1951年1月1 日) | Oranur プロジェクト。 |

| | | | | |
|-----|--|--|--|---|
| | | RI 支店 (AEC) | | |
| 25. | Tracerlab | OIRL | 手紙 (1951年1月1日) | ラジオ・コバルトの取得 |
| 26. | OIRL | RI Branch,AEC | 手紙 (1951年1月2日) | NR 安全性処置の訓練 |
| 27. | カナダの ラジウム、とウラン Uranium 会社 (NYC) | OIRL | 手紙 (1951年1月3日) | 2mgs.のラジウムの注文。 |
| 28. | ニュージャージー 連邦議会議員 | Director, Orgone Energy Clinic | Letter (1951年1月5日) | Oranur プロジェクトに精通している軍医。 |
| 29. | Tracerlab | OIRL | 手紙 (1951年1月5日) | 放射性コバルトに対して標準のCMPをえることが不可能 |
| 30 | . WRF | 重要な民間防衛体制、州と連邦役員、 図書館、病院、 etc. (Approx. 700) | 手紙 (1951年1月5日) Printed OEBB (Jan. 5, 1951) | Oranur Project. |
| 31. | RI AEC 支店 | OIRL | 手紙 (Jan. 8, 1951) | NR material.放射性物質を取り扱うための Oranur の人達トレーニング。 保護マスク。 |
| 32. | Industrial HygieneBranch (AEC NYC 産業衛生支部) | OIRL | 手紙 (Jan. 8, 1951) | 保護マスク |
| 33. | カリフォルニアの 大学 図書館 | WRF | Letter (Jan. 15, 1951) | Receipt of OEBB. OEBB.の受領 |
| 34. | Chief, Radi-ology Branch, AEC (ワシントン | Brigadier General, U.S. Army | 手紙 (Jan. 10, 1951) | Oranur プロジェクト。 |

| | | | | |
|-----|--|--|--|--|
| | ン) D.C. | | | |
| 35. | Brigadier General, 准将 | Orgone Energy Clinic, Forest Hills | 手紙 (Jan. 17, 1951) | Oranur. プロジェクト |
| 36 | Orgone Institute オーゴン学会 | Directors, Orgone Energy Clinic | 手紙 (Jan. 22, 1951) | (AEC) 医学責任者との会議を提案する |
| 37 | ディレクター (N.Y.州民間防衛体制委員会)。 | Medical Orgono-mist | Letter (Jan. 24, 1951) | Receipt of QEEB. QEEB.の受領 |
| 38 | Directors, Orgone Energy Clinic。 | Medical Chief, AEC | 個人的会議(Jan. 26, 1951) | . Oranur プロジェクト。OR の NR の影響。 |
| 39. | General Manager, AEC, Wash., D.C 総合マネージャー、AEC、ワシントン、D.C. | U.S.Senator from New York | 手紙 (Feb. 2, 1951) (Letter forwarded to the Orgone Institute) | 放射能に対してオルゴンエネルギーの効果を使う可能性は、何回も AEC の注目を呼んだ。 |
| 40 | ディレクター (オーゴン・エネルギー・クリニック) | Orgone Institute | 手紙 (2月. 3日, 1951) | 1月26日のAECの代表との会議。 |
| 41. | オーゴン学会 | Directors, Orgone Energy Clinic エネルギー・クリニック | 電話 (1951年2月13日) | 東のマウスの大量死という Orgonon のシリアスな状況。 |
| 42. | ディレクター (オーゴン・エネルギー) クリニック | Medical Branch, AEC and Surgeon General | 電報 (1951年2月14日) | とても信頼性のある物理学者と公共の衛生官が、Orgonon.に緊急に送られるコミュニティに対する危険性。 |
| 43 | . OIRL | Medical Branch, AEC Surgeon General and State Health | 電報 (1951年2月16日) | Orgonon と、コントロールされたコミュニティの緊急の危険 |

| | | | | |
|-----|---|--|------------------------|---|
| | | Officer, Augusta, Me. 医学校、Medical Branch, AEC Surgeon General and State Health Officer, (外科医) 衛生官、 オーガスタ (メイ ン) | | |
| 44. | オーゴン 学会 | Medical Orgono-mist, Oslo,Norway | 電報 (1951年2月19 日) | 現在の実験段階でオルゴン エネルギーで放射線障害を 治療しようとしないうよう警 告する。 |
| 45. | RI Branch, RI 支店、 AEC | OIRL | 手紙 (1951年2月23 日) | P-32 の使用が DOR 反応と 関係することを考慮すると 潜在的に危険である。 |
| 46. | OIRL | RI Branch, AEC RI 支店 (AEC) | 手紙 (1951年3月6 日) | .Oranur 実験の中断。 Oranur.の政治的な誤用の危 険 |
| 47 | . RI 支店、AEC | OIRL | 手紙 (1951年3月13 日) | .Oranur 実験の中断。 将来の協力。 |
| 48. | オーゴン学会 | Dept. of Health and Welfare, Augusta, Me. 健康福祉省、 オーガスタ (メイ ン) | 電話 (1951年4月13 日) | 金庫の Oranur の反応 公共の健康に有害な可能性。 |
| 49. | Dept. of Health and Welfare, Augusta, Me. | Public Health Service, Wash., D.C. 公衆衛生 | 電報 (1951年4月13 日) | 金庫の Oranur の反応は 公共の健康に有害な可能性 がある。 |

| | | | | |
|-----|---|--|---|--|
| | | サービス (ワシントン) D.C. | | |
| 50. | Dept. of Health and Welfare, Augusta, Me. | OIRL | 手紙 (1951年4月26日) | ワシントン D.C 公衆衛生局は普通でない cpm でも、公共の健康には有害なものではないと述べた。 |
| 51. | OIRL | Dept. of Health and Welfare 健康と福祉省、 Augusta, Me. | 手紙 (1951年4月26日) | GM 自動測定器で Oranur の安全性の綿密な測定。古典的な調査結果との矛盾。Oranur.の政治的な誤用の危険 |
| 52 | . WRF | 大統領オフィスと AEC | 手紙と、「Oranur 実験最初のレポートのゲラ刷り。」オーゴン・エネルギー速報、 (1951年9月11日) | 大統領オフィスが「Oranur 報告」の海外での配布と出版による USA の危険を注意するかどうかについての手紙 OR エネルギー研究は基礎研究であり、制限されなかったが AEC の悪意ある以前の声明。 |
| 53. | AEC | WRF | 手紙 (9月24日, 1951年) | Oranur は機密扱いにしない。 |

339

340

オーゴン・エネルギーの研究の参考文献

| | |
|----|---|
| 1 | <p>I ウィルヘルム・ライヒ博士 EXPERIMENTELLE ERGEBNISSE UBER DIE ELEKTRISCHE FUNKTION VON SEXUALITAET UND ANGST. Abbandl. zur personellen Sexualkonomie, Nr. 5, Sexpol Verlag, 1937. (Out of print 絶版.)</p> |
| 2. | <p>DIE BIONE. Klinische und experimentelle Berichte, Nr. 6, Sexpol Verlag, 1938 (Out of print.) a.Communication to the French Academie de Science on Bion Experiment No. VI, January, 1937 ChIV</p> |
| 3. | <p>Bion EXPERIMENTS ON THE CANCER PROBLEM. DREI VERSUCHE AM STATISOHEN ELEK-TROSKOP. Klinische und experimentelle Berichte, Nr. 7, Sexpol Verlag, 1939.(Out of print.)</p> |
| 4. | <p>THE DISCOVERY OF THE ORGONE, vol. 1: オーゴンの発見 (第1巻) : THE FUNCTION OF THE ORGASM, 2nd edition, 1948. オルガスムの機能。第2版、 1948年</p> |
| 5 | <p>. THE DISCOVERY OF THE ORGONE, vol. 2: オーゴンの発見 (第2巻) : THE CANCER BIOPATHY, 1948. ガン BIOPATHY (1948) a. "The Orgone Energy Vesicles (Bions)," pp. 11-51. 「オーゴン・エネルギー小囊 (Bions)」 第一版 : International Journal of Sex-economy and Orgone Research (IJSO) 1, 1942. 国際性経済ジャーナルとオーゴン研究、1、1942年 (IJSO)。 b. "Experiment XX," pp. 51-63. b. 「実験 XX」 (pp. 51-63)。 First published: 第一版 : IJSO 4, 1945。 c. "The Visualization of the Atmospheric Orgone," pp. 78-83. 「大気のオーゴンの視 覚化」 (pp. 78-83)。 First published:第一版 : JJSO 1, 1942。 d. "The Mechanism of the Concentration of the Atmospheric Orgone," pp. 95-96. 「大 気の大気のオーゴンの集中メカニズム」 (pp. 95-96)。 第一版 : JJSO 2, 1943. e. 「Thermical Orgonometry」 (pp. 97-107)。 第一版 : IJSO 2, 1943 and JJSO 3, 1944.</p> |

| | |
|----|---|
| | <p>f. "Electroscopical Orgonometry," pp. 108-111.第一版 : IJSO 2, 1943 and JJSO 3, 1944.</p> <p>g. "Quantitative Determination of the Orgone," pp. 112-120. 「オーゴンの量的決定」 (pp. 112-120)。第一版 : JJSO 3, 1944.</p> <p>h. "The Carcinomatous Shrinking Biopathy," pp. 128-168. 「癌性縮小 Biopathy」 (pp. 128-168)。第一版 : JJSO 1, 1942 and JJSO 2, 1943.</p> <p>i. "Orgone-biophysical Blood Tests," pp. 144-145. 「Orgone-biophysical な血液検査」 (pp. 144-145)。 第一版 : IJSO 1, 1942 and IJSO 3, 1943.</p> <p>j. "Anorgonia in the Carcinomatous Shrinking Biopathy," pp. 291-344. 「癌性縮小症状 Biopathy の Anorgonia」 (pp. 291-344)。 第一版 : JISO 4, 1945.</p> |
| 6 | "Orgonotic Pulsation." 「Orgonotic パルゼーション」 pp. 97-150. IJSO 3, 1944、 |
| 7 | CHARACTER ANALYSIS, 3rd Enlarged Edition, "The Schizophrenic Split," 性格分析、第3増補版、「分裂する分裂病患者」、Ch. XVI, pp. 398-508, 1949。 (精神病の症例でオーゴン・エネルギー・アキュムレーターの使用の記述を含む。) |
| 8 | "A Motor Force in Orgone Energy." Orgone Energy Bulletin, January, 1949, pp. 7-11. 「オーゴン・エネルギーの運動力。」オーゴン・エネルギー速報、参考文献 343 |
| 9 | "Further Characteristics of Vacor Lumination." Orgone Energy Bulletin, July, 1949, pp. 97-99. 「Vacor Lumination.真空発光の更なる特徴」オーゴン・エネルギー速報、1949年7月、pp. 97-99。 |
| 10 | . "Public Responsibility in the Early Diagnosis of Cancer." Ibid., pp. 110-116. 「ガンの早期診断法の公共責任。」同上 (pp. 110-116)。 |
| 11 | "Cosmic Orgone Energy and 'Ether.'" Orgone Energy Bulletin, October, 1949, pp. 143-159. 「宇宙オーゴン・エネルギーと『エーテル。』」オーゴン・エネルギー速報、1949年10月、pp. 143-159。 |
| 12 | ETHER, GOD AND DEVIL, Annals of the Orgone institute, No. 2, 1949. エーテル、神、そして、悪魔 (オーゴン学会の年報) No.2 (1949)。 |

| | |
|----|---|
| 13 | <p>"Orgonomic and Chemical Cancer Research. 「Orgonomic と化学的なガン研究 A Brief Comparison." Orgone Energy Bulletin, July, 1950, pp. 139-142. 短い比較」 オーゴン・エネルギー速報、1950年7月、pp. 139-142。</p> |
| 14 | <p>"Orgonomic Literature Ordered from Russia." Orgone Energy Bulletin, July, 1950, pp. 152- 15 4. 「Orgonomic 論文は、ロシアから注文された。」 オーゴン・エネルギー速報、1950年 7月、pp. 152-15 4。</p> |
| 15 | <p>"On Scientific 'Control.' Ibid ", p. 155. 「科学的なコントロール』」 同上 (155 ページ)。</p> |
| 16 | <p>"Orgonometric Equations: General Form." Orgone Energy Bulletin, October, 1950, pp. 161-183. 「Orgonometric 方程式： 1.公式。」 オーゴン・エネルギー速報、1950年10月、pp. 161-183。</p> |
| 17 | <p>"Meteorological Functions in Orgone-charged Vacuum Tubes." ibid., pp. 184-193. 「気象機能は、真空管を Orgone-チャージした。」 同上 (pp. 184-193)。</p> |
| 18 | <p>"The Orgonomic Anti-Nuclear Radiation Project (ORANUR)." Orgone Energy Emer-gency Bulletin, No. 1, December, 1950. 「Orgonomic な反核放射線プロジェクト (ORANUR)。」 オーゴン・エネルギー非常 事態速報、No.1、1950年12月。</p> |
| 19 | <p>" 'Cancer Cells' in Experiment XX." Orgone Energy Bulletin, January, 1951, pp. 1-3. 「実験 XX.での『ガン細胞』」 オーゴン・エネルギー速報、1951年1月、pp. 1-3。</p> |
| 20 | <p>"The Anti-Nuclear Radiation Effect of Cosmic Orgone Energy." Orgone Energy Bulletin, January, 1951, pp. 61-63. 「宇宙オーゴン・エネルギー 対 核放射線影響。」 オーゴン・エネルギー速報、1951 年1月、pp. 61-63。</p> |
| 21 | <p>"Complete Orgonometric Equations." Orgone Energy Bulletin, April, 1951, pp. 65-72. 「Orgonometric 方程式を完了せよ。」 オーゴン・エネルギー速報、1951年4月、pp. 65-72。</p> |

| | |
|----|---|
| | |
| 22 | "The Storm of November 25th and 26th, 1950." Ibid., pp. 72-75.. 「11月25日と第26の嵐、1950。」 同上 (pp. 72-75)。 |
| 23 | "The Leukemia Problem, I Approach." Ibid., pp. 76-80. 「白血病問題への私の接近。」 同上 (pp. 76-80)。 |
| 24 | . THE ORGONE ENERGY ACCUMULATOR, Its Scientific and Medical Use, 1951. . オーゴン・エネルギー・アキュムレーター、その科学的で医学使用法、1951。 |
| 25 | "Armoring in a Newborn Infant." Orgone Energy Bulletin, July, 1951, pp. 121-138. 「生まれたばかりの幼児が装甲すること。」 オーゴン・エネルギー速報、1951年7月、pp. 121-138。 |
| 26 | "'Dowsing' as an Object of Orgonomic Research (1946)." Ibid., pp. 139-144. 「物体を『ダウジングする』ことの Orgonomic 的な研究(1946)。」 同上 (pp. 139-144)。 |
| 27 | "Three Experiments (1939)." Ibid., pp. 144-145. 「3つの、実験 (1939)。」 同上 (pp. 144-145)。 |
| 28 | "Wilhelm Reich on the Road to Biogenesis (1935-1939)." Ibid., pp. 146-162. 「ウィルヘルム・ライヒの生物発生説 (1935-1939)」 同上 (pp. 146-162) |
| 29 | CosMic SUPERIMPOSITION, Man's Organ otic Roots in Nature. 宇宙スーパーインポーズ (自然の中の人間器官の根)。 (1951年の) 秋の終わりに発表された。) |
| 30 | The Oranur Experiment: : First Report (1947-1951)." Orgone Energy Bulletin, October, 1951. 「Oranur 実験の最初のレポート (1947-1951)。」、1951年10月、オーゴン・エネルギー速報。 |
| 31 | II. WALTER HOPPE, M.D. II. ウォルター・ホッピー博士 "My Experiences with the Orgone Accumulator." Orgone Energy Bulletin, January, 1949, pp. 12-22. 「オーゴン・アキュムレーターに接した私の経験。」 オーゴン・エネルギー速報、1949年1月、pp. 12-22。 |
| 32 | "Further Experiences with the Orgone Accumulator." Orgone Energy Bulletin, January, 1950, pp. 16-21. 「オーゴン・アキュムレーターに接した更なる経験。」 オーゴン・エネルギー速報、 |

| | |
|----|---|
| | 1950年1月、pp. 16-21。 |
| 33 | <p>III. SIMEON J. TROPP, M.D. III. シメオン J.トロップ博士</p> <p>"The Treatment of a Mediastinal Malignancy with the Orgone Accumulator." Orgone Energy Bulletin, July, 1949, pp. 100-109. 「オーゴン・アキュムレーターによる縦隔悪性病変の治療。」オーゴン・エネルギー速報、1949年7月、pp. 100-109。</p> |
| 34 | <p>"Orgone Therapy of an Early Breast Cancer." Orgone Energy Bulletin, July, 1950, pp. 131-138. 34. 「初期の乳ガンのオーゴン療法。」オーゴン・エネルギー速報、1950年7月、pp. 131-138。</p> |
| 35 | <p>"Limited Surgery in Orgonomic Cancer Therapy." Orgone Energy Bulletin, April, 1951. 「Orgonomic ガン療法の中での限定的手術。」、1951年4月、オーゴン・エネルギー速報。</p> |
| 36 | <p>IV. THEODORE P. WOLFE, M.D. IV. セオドア P.ウルフ博士</p> <p>"Again the Common Cold." Annals of the Orgone Institute, No. 1, 1947, p. 138. 「再び風邪について。」オーゴン学会、No.1、1947、138ページの年報。</p> |
| 37 | <p>. EMOTIONAL PLAGUE VERSUS ORGONE BIOPHYSICS, 1948. オーゴン生物物理学対感情的な疫病。(1948)</p> |
| 38 | <p>V. A. ALLAN COTT MD A.アラン・コット 博士</p> <p>"Orgonomic Treatment of Ichthyosis." Orgone Energy Bulletin, July, 1951, pp. 163-166. 「魚鱗癬の Orgonomic な治療。」オーゴン・エネルギー速報、1951年7月、pp. 163-166。</p> |
| 39 | <p>VI. OLA RAKNES, Ph.D. OLA RAKNES (博士)</p> <p>"O~nne Th~vy "A lecture delivered before the Medical Students Unionj, Oslo, Norway. February 24, 1950. 「オルゴンセラピー、オスロ、ノルウェーの「Union 医学生の前でされた講義。1950年2月24日。</p> |
| 40 | <p>VII. WILLIAM A. ANDERSON, M.D. VII. ウィリアム A.アンダーソン博士</p> <p>"Orgone Therapy in Rheumatic Fever." Orgone Energy Bulletin, April, 1950, pp. 71-73. 「リウマチ熱でのオーゴン療法。」オーゴン・エネルギー速報、1950年4月、pp. 7</p> |

| | |
|----|---|
| | 1-73。 |
| 41 | VIII. EMANUEL LEVINE, M.D. エマニュエル・レヴァイン博士 "The Treatment of a Hypertensive Biopathy with the Orgone Energy Accumulator." Qigone Energy Bulletin, January, 1951, pp. 23-34. 「オーゴン・エネルギー・アキュムレーターによる高血圧症状の処置。オルゴンエネルギー速報、1951年1月、pp. 23-34。 |
| 42 | IX. HELEN E. MACDONALD, Ph.D. ヘレン E.マクドナルド (博士) "Wilhelm Reich's Concept, 'Cancer Biopathy.' " Orgone Energy Bulletin, July, 1950, pp. 124-130. 「ウィルヘルム・ライヒの概念 (『ガン Biopathy.』) オーゴン・エネルギー速報、1950年7月、pp. 124-130。 |
| 43 | X. R. H. ATKIN (R. H.アットキン) "The Second Law of Thermodynamics and the Orgone Accumulator." Orgone Energy Bulletin, April, 1949, pp. 52-60. 「熱力学とオーゴン・アキュムレーターの第二法則。」オーゴン・エネルギー速報、1949年4月、pp. 52-60。 |
| 44 | "Mathematical Questions without Answers." Orgone Energy Bulletin, April, 1951. 「答えのない数学的な質問。」、1951年4月、オーゴン・エネルギー速報。 |
| 45 | XI. JAKOB BAAtJMANN "Some Observations of the Atmospheric Orgone Energy." Orgone Energy Bulletin, April, 1950, pp. 74-83. 45. 「大気のオーゴン・エネルギーのちょっとした観察。」オーゴン・エネルギー速報、1950年4月、pp. 74-83。 |
| 46 | XII. PROFESSOR ROGER Du TEIL テル ロジャー教授 "Life and Matter. A Series of Three Experiments." Published in DIE BIONE. (「生命と物質」)一連の3つの実験。」BIONE.の発表 |
| 47 | XIII. N. WEVEICK 博士 . "Physical Orgone Therapy of Diabetes." Orgone Energy Bulletin, April, 1951. 「糖尿病の物理的オーゴン療法」、1951年4月、オーゴン・エネルギー速報。 |
| 48 | XIV. MYRON R. SHARAF "From the History of Science." Orgone Energy Bulletin, January, 1951, pp. 35-38. 「科学の歴史から。」オーゴン・エネルギー速報、1951年1月、pp. 35-38 |
| | 特に明記しない限り、全ての本と定期刊行物は、公表され、オーゴン学会出版から入 |

手可能である。ウィルヘルム・ライヒファンデーション出版局。

Address:

アドレス : 私書箱 153、Rangeley、メイン

P.O. Box 153, Rangeley, Me.

Orgonotic Pulsation

1-----4 まで

電磁気学者との対話で明らかにする電磁気とオーゴン・エネルギーの違い

WILHELM REICH

序論

この論文は、宇宙オーゴン・エネルギーの物理的特徴として、**orgonotic** パルゼーションを述べる。

関連する実験は、自然の非生命の領域での **orgonotic** な現れを示す。

オーゴン生物物理学は、オーゴン物理学に基づく。

通常理解される電磁気から、宇宙オーゴン・エネルギーを区別することは不可欠で実り多いことを、過去 5 年間 (1939-1944)、示した。

この分化のプロセスで、**orgonotic** パルゼーションと生物学、地質学と天文学の問題との豊かな関係が、発見された。

これらはまだ数え切れない、そして、これらの中の少量の一部分だけ組織することができた。

オーゴン物理学の基本的事実の公表を延期するか、その時までこれら全ての関係が本質的に明らかのように公表するか、特定の問題に区切って、これらを分離して紹介するか、の選択に直面していた。

最初の場合は、オーゴン機能の全体構図の提示は、必然的に仮説となる。

第二の断片的なプレゼンテーションのケースでは、全体の構図不満足で、しばしば混乱させられる。

しかし、特別領域の機能の詳細をよりシャープに話すことができる利点がある。

私は第二の方法を選んだ。そして、それはまた、私が全体にオーゴン機能のいろいろな面を相関させようとする前のやり方とは異なって重要な見解を集めることを可能にした。

私は、できるだけ早く、できるだけ多くのものを学びたいと思う私の友人の苛立ちを理解することができる。

1939-1944年に『セオドア P.ウルフ Theodore P. Wolfe.によってドイツ語から翻訳された。書いた

エリカ・ウルフ・バーク Erica Wolfe Burke の許可で再版された。

21

作業全体への目配りのため、発見された時から公表までには数年間が必要となる。

これは、理論上の大失敗に対する自動安全装置です。

オーゴン研究のまさしくその始めから、新しい重要な洞察に発展するまで、新発見を公表しないことは、大切なことがわかった。

継続的な新しい洞察への発展は、前の発見の確認となる。

それがガン細胞の理解に導いたときまで、膨張する全ての物質が **bionous** な構造を示すという発見を公表しなかった。

オーゴンの可視性の発見は、温度差の発見の後まで発表しなかった。

electroscopic での **orgonometry** な熱の研究結果が発表されたとき (1944)、**orgonotic** な引きつける力と反発の現象はすでに確認されていた。(1942-43)

現在、私が **orgonotic** なパルゼーションの現象を公表し提出するとき、すでに新しい研究結果との関係性を見つけており、それはパルゼーションの研究から導かれた。それは、念入りに確認されている。

これらのことは、正当な理由に基づいて言っている。

私の批判者の多くは、判断が早急だ。

たとえばこの、「オーゴンの発見」(1942)の論文への反論が出た場合に、たとえば、私は測定値を出した方法を使用して更に実験をしなければならなかった。

我々は、オーゴンの最初発表した論文の特定の4分の1の部分に対する皮肉な嘲笑に、注意を払う必要はない。

それは、無力な人々の生命への反応です。

自然の非生命の領域での **orgonotic** なパルゼーションの発表は、電磁気学者との対話の形でなされる。

ここの電磁気学者の見解と反論は、その年、実際の物理学者によって提議されたものだ。

若干の場所で、典型的教科書意見を、彼が言ったことにして考えた。

他の部分では、私の実験の間に、彼が思いついた反論を言っている。

他の部分で、彼はオーゴン実験の由来の説明をする。

このように、我々の電磁気学者は、多くの本当の物理学者を擬人化して多様なオリエンテーションを提示した。

プレゼンテーションのこの方法は、オーゴン物理学と電磁気学者の共通の理解への、最高の道を開いた。

われわれの電磁気学者の誤った概念は、物理学の世界で全く共通です。

これらが私のものではないことは、言うまでもない。
あちこちに見つかるかもしれない小さな誤りに対する読者の寛大さをお願いしたい。
人がジャングルを通り抜けるなら、人は根につまずき、失敗しやすい。
ジャングルの開拓者は、必ずしも木の葉の正確な化学組成を知る必要はない。
それがオーゴン物理学のような若く先進的な実りの多い科学を受容出来ないほど狭量な批判者の役割として理論物理学は現れ、基本的な多くの誤りを含む。

1944年4月。

ウィルヘルム・ライヒ。

自然科学の中の生物学的エネルギーの位置

電磁気学者 (E) :

私の友人の生物学者は、あなたのオーゴン研究について非常に独特なことを話した。
彼は、あなたの **bion** 実験が生物学のための重要な大きな発見かもしれないと思った。
他方、彼は古典的な生物学の世界が **bion** の理論を受け入れるか疑問に思った。

オーゴン生物物理学者 (O) :

私は、彼の疑いを共有する。
生物物理学と物理学の領域だけでなく、オーゴン生物物理学は、生物学の領域で社会的な最初の承認を得ていない。

E.

私には、わかりません。
結局、あなたの出発点で精神医学的な「エモーション感情」の性質に関する問題で、精神的プロセスの生物学的基礎に到達する方法を見つけた。
人は、生物学の領域が最初にあなたの発見結果を認めたと知っている。
あなたは、古典的な生物学の一部の抵抗を理解しているか？

O.

この質問は、短い言葉で答えることができる：
活力論は別として、生物学は本質的に機械学的な指導を受けてきた。
オーゴン生物物理学は機能の実験的理解と解釈で、理論を公式化する。
古典的な生物学は、悲劇的なジレンマにいるのに気づく。

23

一方、それは、非生命の自然から詳細に描写して、鋭く考えて、生命プロセスを扱います。
他方、同時に、それは、方法として完全に物理学と化学（すなわち非生命の自然に関する科学）から取り出された生命原則の概念で理解しようとする。
オーゴン生物物理学は、対立する立場からそれ自体を見つける。
それは第一に、自然の非生命の領域から生命へ移行した流体の存在を仮定する。

それは第二に、当然、生命プロセスでのメカニカルな物理的概念を排除する。

それは、特別な生物学的エネルギーが、全ての生命プロセスをシンプルな自然法則に基づき支配することを示している。

このオーゴンと呼ばれているエネルギーは、メカニカルな自然のプロセスと完全に同じ様に生命も支配する。

このエネルギー機能は、非生命の物質から生命物質が発達する過程の方法（すなわち生物発生説）を理解可能にします。

E.

私があなを訪ねたのはこの側面からのあなたの研究でした。

生物学に興味がある以外、電磁気学者としての関心は、あなたのところに足が向きません。

切手を収集したり、ゴルフをするように、自身の専門分野を変えろという命令で、私はある分野を研究してきた。

O.

私は、生物学に対するあなたの関心がほんの付随的な内職でしかないことを疑う。

自身の科学で満たされなかった生物学者は、物理学と化学の乾燥したメカニズムからの休息を求める。

同じ理由で、神秘主義以外の多くの物理学者と化学者は生命が機能している領域に自分のいくべき道を見つける。

ニュートンが形而上学的で宗教的な問題範囲に関係していたのを見ることは、有名です。

一見したところ、「最も自然科学で正確な」ものの代表として数学は素晴らしい。

しかし、生きた本物の科学者は自然法則とプロセスの中の共通分母のために、基本的要素を常に捜す。

生命は、自然の重要な一部です。

今まで、神秘主義と本物の狂信的信仰の中にそれは存在した。

もちろん、私はすでに認められた知識に関係する公式の自然科学に、ここでは言及しない。

これらは、偶像を見張っている博物館の守衛に相当する。

私は、自身の限られた分野の向こうへ行こうと、どうしようもなく努力する人、

自然プロセスの統一をめざして、特別なフィールドの場所を見つけようとする人といった、本物の研究者に言及している。

明らかに、常に、統一されたシンプルな科学的な世界像の相当な必要性があった。

残念なことに、その方向への努力は、無駄でした。

むしろ、研究のいろいろな分科と詳細な作業と、専門化による関係の増加は、対立しあう影響を与え、自然プロセスの簡略化と統一という自然科学の本当のゴールからより遠くへ、より遠くへとそらさせた。

自然哲学者の仕事はすぐに、発展し推測と、純粹思想で自然の共通分母の謎を解決する試みの専門家になった。

これらの個々の機能と同様に自然全体のプロセスと機能が見つからない限り、自然科学の統合を求める叫びは小さいことを意味している。

今日の専門家は、組織的思考を十分に訓練されていない。

彼らは、全体にむけて詳細な部分を調整することができない。

人は森全体のために木を見るわけではなく、または全ての言葉で、自然のプロセスをみようとすわけでもない。

何千もの建築業者が全体計画を持つことなく素晴らしい構造物を作成するかのようだ。

このように、美しく家具付きの部屋が、入口もなしにある；

水道管は、煙突につながっています；

ベッドルームは、8階のロビーと応接室にある。

結果は、完全な混乱です。

入居者が引越すと、誰も我慢出来ず、現代のテクノロジーの改良方法を見つけることができないために、戦争がおきる。

O.

私は、非常に単純な図で通常メカニカルな言葉の科学と機能主義的自然科学の違いを私の生徒と友人に示している。

E.

それを聞きましょう。

O.

モダンなリビングルームに原始人を連れて行って、彼が人生で最初に椅子を見たとしよう。

すぐに彼におこる疑問は、何か？

「これを何と言っているのか？」、あるいは、「どう使っているのか？何でできているか？」

E.

もちろん。

まず第一に、椅子という言葉がその機能または、座る装置としての性質について何も説明しません。

25

「テーブル」または「本」が彼には、「椅子」と同じ意味になってしまう。」彼の生物学的運動感覚は、すぐに、この独特な座る装置がどんなことに「使う」か、彼に語りかける。

我々のこの原始人が実際の機能に接触し、これを理解するまでは、この装置に「足休息器」、または、「お尻、支え装置」といった名前を与える：

O.

我々の古典的な生物学者は、現実に接近していない。

古典的な生物学は、分割し、生命の領域を外部の統計特徴に従って再び分割し、多数の難しい言葉でそれを覆い隠した。

それで、自然な機能情報は完全に萎縮し、最初の感覚機能と機能の起源は完全に失われた。

生物学者がエネルギー小囊を見るとき、それは球状で、青いグラム染色法をとりそれに「ブドウ状球菌」という名前をつけるとき、満足にそれを説明したと思いきや、それによって、何が、それに起きているか？、どのように、それは機能しているのか？といった問題へのアプローチの通路を完全に封鎖する。

E.

はい。

そして、言葉の無限の数の多様な表現がある時、結果が素晴らしく混乱する。

O.

神経学は、今の今まで、刺激が走る神経繊維が示す運動を「説明した」と実際に思っている。

動物の何十万もの解剖学的器官の名称といろいろな名前の反射に言及するがオルガスムの収縮に言及するものは、一つもない。

単純で基本的な生物学的機能の動きは、理解された。

動物がメカニカルな体の解剖学の教科書の記述によって機能するならば、手足を動かすことはできないだろう。

E.

私は、かつて防御の堅い、頑固な精神病者に会って、精神科医に意見を聞いた。

彼は「これは、有名な *opisthotonus* です」と言った。:

『彼は、動きの表現（すなわちその機能）を見ない。

O.

物理学者が厳密な機能的な言葉で話すのを聞くのは、喜びだ。

結局、電子理論は、科学的な世界観が要求する統一を、ある程度は、実感しなかったのだろうか？

デモクラテスの古き良き原子論は今日の電子理論と一致しているのではないか？

新聞ニュースと専門的な出版物で見事に判断されるように、すべてはなっているようです。

-26

E.

私はプロの物理学者に同意するとしても、生命ある有機体には同意できない。

まず第一に、誰もまだ電子を見ていない。

これらの存在は、共通分母を理解する試みで、作業仮説として仮定された。

残念なことに、この共通分母は中性子、陽子、電子、陽電子、その他ですぐに無関係にばらばらにされた。

これらの共通分母は、知られていない。

原子は同じように、不可視のままでした。

O.

人々の遺伝形質の遺伝子のようだ。

E.

その通りだ。

にもかかわらず、元素が非転換のままにしているという迷信は、キュリー夫人のラジウムの発見によって消えた。

しかし今では、物質が電子、陽電子、その他から造られているとされた。共通分母の問題はより複雑になり、移動しただけだった。

磁気、熱、メカニカルなエネルギー、その他、が加わった。だがこれらの共通の基礎は、知られていない。

ケプラーとニュートン以来、引力の法則は知られている、しかし、人はその実態については何も知らない。

さまざまな形のエネルギーの共通分母の理解から、これまでより遠く離れたように、思われる。

O.

私は、意見をここで形成するための十分な実際的な物理学と化学の知識がない。

生物精神医学で自然科学のメカニカルな断片化が、妨害しています。

これまで物理学と化学はどちらも、理論的にもまたは実際的にも、生命現象の理解には、基本的になにも貢献しませんでした

有機体の機能の総体は、謎のままでした。

E.

人々は、あなたのオーゴン物理学は、精神科医としての能力を越えていると言う。

あなたが論争するように、測定でき、見えることができる宇宙エネルギーがあるならば、物理学者はずいぶん昔にそれを発見しなければならなかった。

あなたは、実際的な物理学と化学をよく知らず、この反論をあなた自身も認める。.

O.

能力の問題をはっきりさせましょう。

それは、能力を審査する基準の問題だ。

私は、非生命の自然において **organotic** な発現を理解する点で私の能力に不足がないかどうか、しばしば自問した。

27

2つの考慮は、私の疑いと矛盾した：

第一に、メカニカルな自然科学が最も単純な生命発現（例えばパルゼーション）の理解に根本的に何も貢献してこなかったことは、多くの著名な研究者によって事実定まっている。古典的な生物学は無機化学と物理学のエプロンの紐に、そのまま結びついていて、そして、非生命の自然の領域からその科学的な原理を引き出すことにもまた、失敗した。

能力が見せかけでなく業績から審査されるならば、メカニカルな自然科学がその能力を生

命の領域で証明できなかつたということは疑えない。

これは、薬と不可欠な装置に関して優勢な悲しい状況に明らかに示される

ガンの人々は、命が腐敗して死ぬ。

病理学者、化学者または医者は、この単純な事実に気がつきません。

二番目の特定の生物学的エネルギー、オーゴンの発見は **biopsychiatric** 生物精神医学の基本的な問いへの逸脱から生ぜず、彼らの一貫した研究からでたものでした。

全く論理的に無意識の精神的生命の発見は、「精神的エネルギーの存在を仮定させた。」

等しく論理的に、この仮定された「精神的エネルギー」は『生物学的器官に根ざしているように、考えられなければなりませんでした。

性的経済はその精神的感情の広大なフィールドで重要な生物精神医学の発見をする 15 年前は、忙しかった、

どんな動物の生命体でも 3 つの基本的感情である、喜び、不安と、激怒の感覚の強度は、機能的に生命器官の生物学的刺激量と同一であると、オシログラフで示された。

*、これは不明瞭な心-身の問題への深い突破口でした。

数千年間もメカニカルな考えは、エモーショナルな感覚は、生物学的刺激の「結果」ではないと考えてきた。;

そして、降霊術信者が常に信じたように、それは生物学的刺激の「原因」ではなかった。

それは二元論者が信じたように、刺激から独立してはいないし、また、刺激の「他の面」は一元論者に対立している。

生物電気実験は、感覚の強度が刺激量と一致するので、その刺激と感覚は一つの生物学的の中器官での同じプロセスであり、そして、その逆も同じことを示す。

'Cf.

ライヒ「性的関心と不安の生物電気の研究

「The Bioelectrical Investigation of Sexuality and Anxiety,」、

Farrar, Straus and Giroux, New York, (ニューヨーク) 1982 [ed.

しかし、感覚（例えば視覚の印象）が刺激を同時に生じることができ、逆に言えば、手の接触でも感覚と、刺激を同時に引き起こすことができる。

血中のアドレナリンは不安をつくり、不安は血中のアドレナリン分泌を増加させる。

E.

あなたは、「感覚と刺激の対照的な関係を機能的に対立しつつ同一であるという：

『対立しつつ同時に同一である特性を思いつくことは、難しい。

O.

これは、すなわち、現実に合わせて機能的に考えられない武装した人間構造による。

E.

人々に固有の生体の心理学的構造によって、自然のプロセスを誤って認識すると主張するならば、強い反論が起きるだろう。

もしあなたが正しいならば、数千年の間に、人間の性格構造からメカニズムと形而上学の2つの有力な思考システムが生じたと、理解されねばならないだろう。

それは、納得するのが難しい。

O.

地球は宇宙の中心だという2000年間の間違っただけの思い込みを否定しなければならなかった時ほど、人間にとって困難なことは、何もなかった。

人間生成と超自然現象を説明する神学者の教義は宇宙の中心は地球で世界の中心だという間違っただけの信念をもっていた。

同じように、性格構造から独立した人間の思考が「論理的で本来正しい」という誤った考えは、自然哲学の誤った信念である。

書かれた歴史の始め以来、権威主義的な文明の結果、人間構造は堅くなっている。

この理由によって、それは純粋な bioocial 生物学的な法則にもはや適合できない。

生物学的に堅くない有機体、例えば、ヘビと異なる方法で、生物学的に堅い有機体が自身の体の中の感覚と知覚で経験すると理解することは、困難ではない。

E.

あなたが意味したことは、これですね：

自然哲学が常に知っていたように、感覚は我々が環境と自身の組織に接近する唯一の入口です。

29

もし、有機体の感覚が統一をめざさず、ブロックされ、分離され分割されるならば、自然プロセスの知覚と知的理解にこの状況は反映されるはずだ。

その場合、統一された方法で、その植物的流れを直接経験せず、それ自体、角ばって、機械的に経験し、有機体はメカニカルな世界像をえることができるだけなので、この影響下にある有機体は神秘的な、超自然力を仮定しなければならない。

O.

正確です。

他方、機能考えは、有機体の機能的統一を求める特性と一致する。

この事実は、骨の折れる性格分析的研究によって、明らかに確立された。

精神分裂症において、たとえば、感情は植物流れの認識が刺激で妨害されるので、外部から来た影響として認識される。

刺激と感覚が分離することは、この病気の基本的徴候であって、それでこの名前が与えられた。

経験するすべてを細部にメカニカルに分割する傾向と、機械の、角のある、頑固な強制的考えと、強制的性格は、メカニカルな思考の典型です。

実際は、通常メカニカルな堅さと神秘的な経験は、手を取りあって行く。

メカニカルな自己認識は生命を真空と破片として経験するので、これはそうなる。

メカニカルな堅い、思考が提供しない、神秘的な経験の側面は、病理学的方法でメイクアップされる。

E.

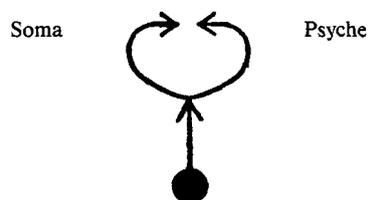
あなたの生体心理学的機能の概念を視覚的に表すことができるか？

O.

これが、それです：

.図 1. 体の生物学的刺激

精神の生物学的機能の概念図 1.



あなたがわかるように、概念図は相対立する心理学的な生体の器官 **biopsychic apparatus** と同じ様に統一からも成っている。

30

表面の対立的機能は、深いところでは同一である。

この概念図は、最も困難な観察の安全な手引きと、自然科学の公式化となることを証明した。

E.

非生命の領域の単純な例でそれをためしてみたい。

磁気において、磁石の北極と南極は、対立的になっている。

磁力の機能としては、これらは同一だ。

もし「北極の性質は、南極の性質を決定する」と磁気を解説するならば、あなたに否定されるだろう、それが逆であっても明らかにナンセンスだ。

あるいは、「北極の性質と南極のそれは、全く同じだ」、「北極と北極が互いに反発するので北極と南極が互いを引きつける」というのも、誤っている。

「北極と南極の機能は、独立している」というのも、同じように間違っている。

O.

化学の例でそれをみてください。

E.

ナトリウム・イオンと塩素イオンは対照的に機能するが、これらは互いの「原因とならないし」、「決定もしない」。

ナトリウムは、陰極へ、塩素は陽極へ行く；

それぞれ、これらは正と負にチャージしている。

しかし、これらは互いを化学的に引きつけ、中立の合成 NaCl をつくる。

これで、2つの対照的な機能は結合し、異なる新しい機能単位 (NaCl) をつくる。

あなたの概念は、他の化学合成物に関しても同様にあてはまる。

O.

より一般的な自然プロセスでそれをテストしてください。

E.

E.

あなたの公式は、自然の全てにあてはめられます：

生命物質は、非生命の物質と鋭く区別され、しばしば著しい対照をなす。

同時に、それは共通に非生命の特性（例えば基本的な化学と物理的プロセス）の基本的ファクターを持ちます。

O.

生命の機能の **orgone-biophysical** な公式によって生命と非生命の物質の対立と特性が最も簡単に同時に、示される。

それは、生物学的パルゼーションの基本的公式です：

メカニカルな緊張-エネルギーチャージ-エネルギー放出+メカニカルなリラクゼーション。

心臓のパルゼーションのそれは虫の運動またはツリガネムシの収縮と同様である。 **applles**

31

E.

わかった。

張力と緩和、チャージと放出はまた、非生命の自然でも発見される。

その程度までは、生命自然と非生命の自然は、機能的に同一である。

これらの物理学的機能は、生きている自然の領域で 4 拍子の組合せで起こりそれは、生命に特有で、非生命の自然では起きないという対照的な、事実がある。

それは、素晴らしい。

O.

これにメカニカルな、あるいは生気論の思考方法を適用してみてください。

E.``

非生命は、生命を決定する：

『正しい。

しかし、生命も再び非生命に変わる。

この事実は、非生命から生命への一方的な決定の概念を、除外する。

心霊主義は、非生命は生命へ依存していることを仮定する。

生命物質から非生命の物質へ方向転換していると、考えている。

しかし、ここでは、反対方向のプロセスは、そのままにしておく。

二元論はどうか？

「生命と非生命は、2つの異なる、平行した独立した、自然のプロセスだ：

『これは、明らかに、誤りだ。

「生命は、非生命と同一だという一元論については、『これも、また明らかに、一方的で、誤りだ。

あなたの公式は他のものより、現実をよく、反映している：

生命は、非生命と同一で同時に、対立的だ。

O.

O.

我々の生命機能の公式は、メカニカルな科学者と生命力主義者 *vitalists*.の間の長年の確執を解く。

メカニカルな科学者と唯物論者によって仮定されたように、生命物質には、非生命物質と全く同じ自然法則が続く。

だが、同時に、生命力主義者が固執するように、生命と非生命の物質には基本的な違いがある。

生命と非生命の間の機能特性は、全く同一のエネルギーが両方の領域を支配しているという事実がある。

緊張—チャージ—放出—リラクゼーションの4拍子に機能する点が、生命物質では異なる。

この四つのビートは、自然の非生命の中には存在しない。

E.

あなたは、形而上学的なものも含めて、どんな概念も何らかの実際的根拠があるとどこかで言った。

同じ自然のプロセスの機能に基づく、各々のケースまたは異なる側面は、自然に関する多様な理論と関係することを意味するのか？

32

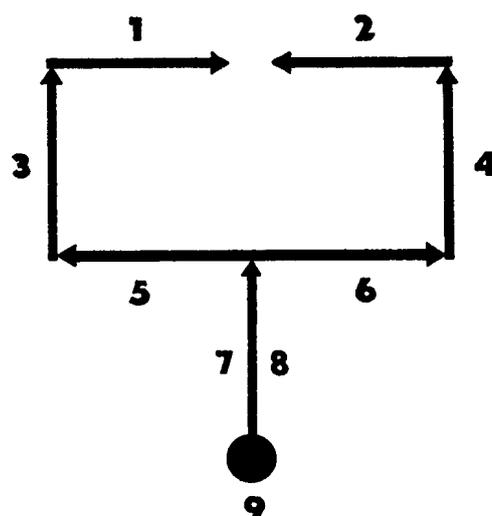
O.

私は、かつて、多様で矛盾する思考方法を我々の基本的機能概念で結合しようとした。

E.、しかし、それは、不可能だ。

もし多様な思考方法が個々の機能だけを扱い、これらの証明する多様な方法が一方的であるか誤っている思考概念のまま、結合することはおそらくできない。

O.



まだ、それは可能です。

一方的な誤りにもかかわらず、それでも、有機体の自然プロセスを観察し、記述した我々の機能概念で表された現実の一部分に当たると、人は、仮定しなければならない。

E.

だが、精神が体をつくる心霊主義の概念は、自然の機能概念とほとんど互換性を持つことは不可能だ。

O.

我々の概念を我々が挙げた部分に分割しよう：

1 2 3

6

4

7

9

図 2。

メカニカルと、生氣論、二元論、神学的神秘主義と一元論の自然哲学を含むエネルギー的な機能主義の図。

1 2 3 4 5 6 7 8 9

1-2 メカニカルな唯物主義 Mechanistic materialism

2-1 イデアリズム 活力論 Idealism, vitalism

3 フィート

4 精神物理学的心身平行説、二元性 Psychophysical parallelism, dualism

5'有神論神秘主義 Theism, mysticism

7—8 一元論 精神物理学の同一性 Monism, psychophysical identity

9 「自然の公分母」、宇宙的なエネルギー、オーゴン（神秘主義的な「神」;物理的な「エーテル」): "ether")

33

我々が概念の構成部分を別々に考えるならば、以下のようになります：

表面で、1 と 2、精神と体は絶対的に対立します。

この領域で、メカニカルな科学者は、化学と物理学から一方的に精神の機能を引き出す。

それはまた、逆に言えば、不可欠なエネルギーが体をつくり、決定すると考える活力説信奉者の領域でもあります。

「体は、感覚を決定する」と、メカニカルな科学者は言う；

「感覚（エンテレケイア）は、物質を決定する」と、活力説信奉者が言う。

全ては、あなたの出発点が 1 か 2 のどちらであるか、次第です。

3 と 4 は平行に動き、互いの間にどんな関係もなく、図は別のものとして考えられます。

これらの線は、心・身二元理論（身体と精神的なプロセスは互いに独立しており、平行である）と一致します。

5と6は、反対方向で作動する。

これらは「物質と精神」「体と精神」「本能とモラル」「自然と、文化」「性的関心と仕事」、「現実と神」といった互いに相容れない対立する概念と一致する；

これらより、もっと多くの著しい対立がある。

これらは、あらゆるタイプの神秘主義の思考を表す。

7と8では1方向だけがあること、そして左または右のどちらかも見ることができる。

それは精神物理学的同一性の一元論の概念と一致し、精神と身体は同じものの単に異なる側面である。

我々はメカニカルな科学と、生命力論者、二元論、その他より、一元論者の思考が真実に近くなったと認めなければならない。

これらは、他の全ての機能の共通の起源に非常に近くなった。

だがこれらは、統一が分割されたことから生じる対立、たとえば、生命と非生命の物質の性質、動物と植物、または有機体の自治器官といったものを見落した。

対立を見る際、身体と精神の相互の相互依存を見落す。

他方、我々の概念は、機能ユニットの多くの自主的な機能を考慮に入れる。

この概念によれば、いろいろな機能は、共通の源泉(9)に由来する；

特定の領域では、異なる機能が同一になる（7、8）、異なる領域では、これらは異なる（5、6）；

または、これらは互いに独立して平行に動く（（3、4）

または、最後の（1、2）は同方向に収束し、互いに引きつけるか、影響しあう。

具体的な言葉で事例を示そう：

動物の有機体は、**orgonotic**な膨張と収縮機能を備えた一つの統一をめざす細胞から作られる。(9)

この統一をめざす細胞から、

緊張とチャージする機能に基づいて、(7/8)の中の

複雑な全体の有機体になる統一された枝として、精神機能の他に身体が、発達し、それは、独立した精神と身体の諸機能に、まだ分化していない。

そこに、分化が起こるのを我々を見る：

身体の機能は、これら自身によって形成され、胚発生のうちに、いろいろな独立した器官ができる。

この期間、感情的な機能は、最初の喜びと不快知覚の段階を越えては、発達しない。

生まれた時、統一された装置に体と精神の2つの機能分岐がすでにもうまれ(5、6)、器官機能が一方で働き、快感と不快の機能が他方で働く。

バイオエネルギー的な枝はこれらに共通に(7/8)、存在し続ける。

今後、2つの成長は互いに独立に、すなわち「平行に」(3、4)なり、そして、同時に、互いに影響します。

いろいろな体の機関は、つくられて、成長し続ける。

この独立した、快-不快の機能の枝は、不安と激怒と喜びの3つの基本的感情と知覚のいろいろな機能に分化していく。

そして、知覚の機能の分化の自律的發展は、器官の成長とは独立している。

にもかかわらず、両方の連続的發展は自律神経系の形で生物学的エネルギーの共通の枝(9と7/8)、を備えている、なぜならば、(感情の發展と同様に)器官の成長は全体的な自律生命装置の機能に依存するからである。

出産後の生命の最初の短い月日の間に、人間器官の機能(目、腕、足、把握、すわる、その他の動き)が、互いに全体的に調整される方法を観察することができ、他方、喜び、不安と激怒といった反応もより詳細になり、より調整されて、統一される。

35

こうして、ひとつに統一された。

それから、知覚への器官の反応と器官運動への知覚の反応といった、器官運動と知覚器官との結合過程は、段階的にあとに続きます。

まだ目的のない動きの個々の調整から、意図的な全身運動になり、個々の感覚の調整から全身の認識へと向かい、そして、ボディインパルス総体を調整し、体の知覚が具体化されて、我々が意識と呼ぶものが、徐々に発達する。

数えきれない個々の機能は独立して動き続け、同時に、これらは統一をめざす全体を作り、**synergistically** 相乗的に、同時に相反しつつ、互い(1、2)に影響する。

歩く機能で言えば、到達目標の「ゴール」、テーブルに着くというゴールが、それを育てると言うことができる。

The function determines the goal, not-as the vitalists believe-the goal the function. not-as function.

活力説信奉者がゴールを機能として信じるような機能ではないが、機能が、ヤギを決定する、

But the function also determines the chemico-physical processes, and not vice versa, as the mechanists believe.

機能は化学-物理的プロセスをも決定する、しかし、メカニカルな科学が信じるようなものではない。

それは、生物学的現実で我々の思考を導く機能主義だ。

より正確な観察は、多くの流れと差異が生じる、しかし、同じ時、より包括的な統一をめ

ざすのが我々の思考である。

我々の思考の機能的性質は、他の機能と関連しながら、対立と同一性を認識する事にあります。

それは、堅いものではない。;

それは、流動を認識する。

それにもかかわらず、それは確実な法則を引き出す。

同じプロセスで、全く同一の時に、異なる機能があるかもしれないという事実を、考慮に入れないで、広範囲にわたる、統一をめざす、自然の機能を別々の機能をメカニカルに分けることは、他方、必然的に堅いものに終わる。

E.

あなたがここで示したものは、線書きの遊びとは本当に違っています。

それが全く同一時に、差異化と、共通分母と対立の場所を残すので、それは本当に真の現実の反映です。

男性と女性は、共通の起源と共通の興味を持っている。

これらには性的に対立する解剖結果があり、これらの利益は異なるかもしれず、平行し独立しているかもしれませんが、そして、どんな対立にもかかわらず、互いを引きつけることができ、互いに溶けあうことができる。

どのように、あなたの思考がこの方法論的な概念に到達したか？

36

O.

有機体の機能に区分が生じることは、生物物理学になぞらえて考えることから導かれた。

有機体は、統一と分化の素晴らしい姿をみせている。

それは、機能の統一と全体をつくる。

全ての器官は、1つの小さな未分化の性細胞に由来する。

未分化な統一されたものは、異なる機能を生み出し、多様な器官に分裂する。

本来心臓の機能は、聞く機能と関係がなく、二頭筋の収縮は胃液分泌に何も関係がない。

全てのいろいろな器官の自治にもかかわらず、有機体は秩序と協力の、完全な調和した統一の姿を表し、要するに、生物学的自己規制を見せています。

もしもあなたが、共通分母と単一機能から開始するスキーマの中に有機体のいろいろな機能を配置し、著しい対照をなす複雑なものに進歩させると、我々の機能的思考のスキーマに到達する。

E.

私は、あなたがこれとは違う科学では理解することが困難であった理由がわかり始めた。

この思考方法は、新しい。

それは、多角的です。

普通の思考方法は、一方的です。

あなたの方法論では、機能は流体移動を示し、明確な法則が続く。

慣習的な思考は多かれかれ、堅い壁を確立して、そのような移行を許さない。

O.

あなたは、正しい。

オーゴンが発見される前は、我々の機能方法は精神と身体の機能を研究し開発しなければなりませんでした。

能力の問題に戻ります：

生物学的エネルギーの発見が化学または物理学の領域でなく、生物物理学の領域で起こったことは、論理的にみえないか？

すべてを導く原理は、ディーゼルエンジンの機能ではなく、心臓の空胞または原生動物のパーゼーションです。

それは、化学合成物でなく、性的な引きつける力であり、X線でなく感情的な興奮であり、飛行機の飛行でなく、鳥の飛行または魚の運動であり、エンジンのピストン運動でなく、オルガスムの収縮または胚の中の成長の収縮でした。

37

手短に言えば、それは生命物質の機能の顕れで、非生命物質の機械的な要素は重要ではありません。そして、それはオーゴン・エネルギーに通じる領域で、性的経済をもたらした。性・経済の研究が非生命の領域から何も借りなかったという単純な理由で、これら生命を支配するエネルギーを発現させた。

その代わりに、それは生物学的エネルギーの特性の直接の観察から生命運動の特性を演繹することを学んだ。

過去 10 年間のうちに、多くの物理学者は、あとに続こうとした。

知覚と感覚のプロセスで、自身が非生命の過程の思考様式を単純に放棄することができなかったため、彼らの多くは失敗した。

E.

ニューヨーカーがストックホルムを訪問したとき、ニューヨークの地図で生活しようとするならば、それは変なことになるでしょう。

O.

O.

I wonder whether you will be as easily convinced if we enter, in a practical way, the field of perception and its interpretation.

我々が知覚とその解釈の分野に実際入ったとき、あなたが簡単に、確信するかどうかはわからない。

そこでは、我々自身が 1 つの都市から、他の都市に行くだけでなく、居住していた場所と類似点のない、通りと家がまだ建設されていない密生したジャングルに連れ去られたこと

に気づくのではないかと私は、恐れる。

E.

実際的な仕事のハードなプロセスより理論上の原則に従うことは簡単です。

ラジオで軍事的勝利について耳にする喜びは、実際の勝利を得る感情的経験とは同じではありません。俳優より見物人のほうが楽です。

O.

勤勉な自然科学者の、根拠のない賞賛は、通行人のあら捜しをする批評の痛切な経験と、ほとんど同じです。

機能的な研究方法は、孤立した事実を互いに関係づける能力と基本的事実についての多角的な知識が要求される。

そういうわけで、力学的に考えて、作業する専門家と相互理解することは、それほど難しい。

それに加えて、機能的な研究はその知識と、その人の自身の性格構造の把握などその他付随的なことが前提となります。

これは、あらゆる知覚と感覚は、性格構造で染められる。

それが自然科学の全ての基本的な分野の研究と関係した時から、オルガスム研究は、特に高い自制を必要とした。

この研究は、精神医学的な仕事から発達し、性的な生物学と感情的な圧力と生物物理学的興奮に研究の焦点を定めていきました。

たとえ初め私にその暗示がなかったとしても、それは宇宙エネルギーの領域に入りました。

38

E.

個人的にこれらの問題を知らないものにとって、物理学の新しい分野が性科学の研究から発展しなければならなかったことは、独特です。

オーゴン物理学とオーゴン生物物理学以外に、性的エコノミーとオルガスム理論についてもはや話してはいけないと私は思います。

これですぐにもっと許容可能な理論になるはずですが。

O.

そうすると、すぐに新しい知識の分野が消えるでしょう。

私は、性的経済とオルガスムの考えに対する人々の反応に、非常に精通しています。

これらは、ポルノ的な考えを喚起します。

しかし、それはこの、非難で反応する人々の性格構造の問題で、性的経済の問題ではない。

これらの反応は、危険であるだけでなく、痛みを満たした、おかしい状況をつくる。

この宇宙的な病気それ自体が最初から周到に考え抜かれた医学的敵対勢力に直面している

ことに気づく。だがこの感情的な伝染病の発現に性的経済は屈服しなければならないのか？

いいや、我々は歴史的なありあまる理由のために性的経済の条件と概念を固守し続けなければならない。

性的経済とオルガスム研究なしに、オーゴンが発見されなかった。

オルガスム研究は、基本的宇宙エネルギーの研究のために、十二分に歴史的重要性を持つ。

People and concepts come and go.

人々と概念は、行ったり来たりする。

彼らは、急行列車に無関心な乗客のようだ；

彼らは、短距離の移動をするだけで、再び去っていきます。

しかし急行列車は、大陸を横断していきます。

生命機能と人間の偏見機能を比較してください！

オルガスム研究を妨害してきた人間の偏見は、ほぼ 4000 年も続いてきた。

しかしオルガスム機能は、永久です。

人間と動物か、意識的か無意識であったかは別にして、呼吸と共に、オルガスムの熱望のように表れたそれは生命の基本的機能です。

人間がポルノ的に悪化したことは、この動物の自然過程によらない。

また、ポルノの偏見は、人間の種の邪魔された比較的少ない一部の個人によって以外、うみだされない。

残念なことに、感情的な伝染病を病む個人による自然の中傷に対する刑事上の法則は、まだなく、彼らは、ものすごい大きな成功を成し遂げています。

オルガスムの最も即時的な実際の機能の再調査は、ポルノの正確な除去となる。

39

その向こうは、常にオーゴン研究の中心になります。

私は、そのように、しなかった；

我々がそれが欲しいかどうかです。

E.

あなたは、正しい。

何らかの方法で性的なプロセスから仕事をしなかったいかなる研究者またはアーティストも、いません。

オルガスムの機能の提示において、あなたは生体電気について話す。

オルガスムは、生命を自然の一般的なプロセスの一部であるようになる。

あなたは、動物の有機体が自然の一般的な電氣的なプロセスの一部であるという意見ですか？

O.

オーゴン・エネルギーが発見され、研究の対象になる前、それは電氣的なエネルギー・プ

プロセスがオルガスム機能の基礎であったと仮定することは必要でした。

しかし、この仮説によるプロセスの解釈は、何度も、解決不能な矛盾に直面した。

たとえば、感情的な興奮は、ミリボルトの電位差で表された。

この極めて少ない電気的な反応は、有機体の作動中の巨大な力にあてはまりませんでした。すなわち、有機体の統合させる機能を、正と負の電気の二極性の概念と用語で、定義することは、不可能です。

たとえば、男がマイナスに女性はプラスにチャージされていると仮定して、性の極性を電気的な極性と同一ように考えることは不可能です。

また、生命組織の波状の遅い運動は、電気の、迅速で、角のある運動と、変化とともあります。

言い換えると、オーゴンの発見の前、電気的な概念を適用するには多くの困難が、生命の領域にあった。

オーゴンの段階的な探究は、決定的にその非電気的な性質を示すことによってこの疑問を解決した。

電気的刺激は知覚されるが、この感覚は有機体にとって本当に、異質なものです。

これらは、有機的な感覚を変化させ、不穏な影響を与える。

ちなみに、生理学は特定の生物学的反応を電気的なプロセスに引き下げることに成功しなかった。

電気刺激装置と活性電流の研究より、少しも進展しませんでした。

しかし、刺激と活性電流の間に、知られていない第 3 の関連現象、特別の生物学的反応がある。

しかしこれは、刺激と活性電流から独立した現象である。

それはまた、刺激なしで機能する。

40

それに加えて、この反応は、電気刺激と明かに関係がない。

同じ電気刺激が、骨格の筋肉、心筋または平滑筋に異なる反応を起こす。

真実、電気刺激は生物学的反応（収縮）をもたらすことができる、しかし、収縮のエネルギーは刺激したエネルギーと異なる何かだ。

E.

あなたは、生物学的反応の基礎を「エンテレケイア」とか「精神」とみなすのか？

まず、第一にこの基本的質問をしなければならないと私には思われる。

有神論者と神秘主義者でないだけでなく、優れた自然科学者だけが、非生命の自然を含む自然の一般的な「アニミズム」を仮定した。

Democritus デモクラティスの「原子論」から始まった、自然のこの概念は、多様な自然科学的なイデアリスムの形で、2000年以上にわたって持続してきた。

我々は、これをヘッケルの「水晶の魂」、カントの「"categorical imperative"物自体」、そ

の他に見る。唯物主義者は常に正しく「認識する物質」を仮定し考えた：

これは、人が形而上学的な宇宙の絶対精神、を除外するならば、全ての自然科学研究の最も大きい謎のようだ。

たぶん、動物と（人）のプラズマを認識するのにあたって、宇宙エネルギーを宇宙的な絶対精神と誤解した。

残念なことに、認識できないので、人はこの宇宙的な精神を表すために、陳腐な人間の特徴（例えばあごひげ）に、それを象徴させた。

どこに、あなたは生命と非生命の間に境界線線を置くか？

O.

「魂」と「知覚」が他の動物と区別して、人間だけのものとされた時から、長くはたっていない。

生物物理学の見解は、生命の領域で知覚はパルゼーションの増加であり、境界線を見つけることはできない。

我々の生物電気実験から、生物学的刺激の量が喜びまたは不快の認識の強度と同一であるという結果を見るならば、生物学的刺激と精神的知覚は機能的に同一である。

すなわち、知覚は非常に最初の **plasmatic** な伸縮に依存する。

他方、非生命は非収縮だと認め仮定する十分な理由は、ない。

41

非生命の自然を含む総ての自然を精神化するという考えを除外することは、重要です。

知覚と生物物理学についての現在の我々の知識の状態で、生命を非生命から切り離すことをより適切にやる必要がある；

生き物はパルゼーション（伸縮を交替させる）と知覚によって特徴づけられる、非生命は堅く、知覚機能がない。

パルゼーションがない所に、知覚もまた、ない。

E.

オーゴンならばエネルギーは自然の両方の領域で機能し、オーゴンが生命の特徴に関係するならば、知覚を非生命の領域から締め出す方法を私はしらない。

O.

パルゼーション（すなわち交互の伸縮）がオーゴン・エネルギーに内在する基本的機能であることを示すちょっとした実験が、あります。

堅い物質においてもオーゴンは、脈打つ機能を示す。

この発見は、あなたの議論を支持する。

しかし、自然科学のこのような隙間を利用して、神秘主義はすぐに自然科学が宇宙的な精神の存在を確認したと主張する。

それが **orgonotic** なパルゼーションを引き起こすことができるという点で、生命物質は非生命物質と異なる。

その堅さのために、非生命物質は、**orgonotic** なパルゼーションを引き起こすことができない。

E.

違う言い方で言うと、収縮可能な物質で、宇宙オーゴン・エネルギーが機能する場合だけ、**orgonotic** なパルゼーションが、その中で実際のパルゼーションを生じている場合だけ、生命について話すことができる。

O.

正確だ。

それは、物質に起こる、脈動物質の形態変化です。

それは、基本的な生物学的機能（例えば成長、分割、出産、代謝、喜びと不安）を決定する形態変化です。

人が堅い物質（すなわち形態変化ができない物質）に、見たことも無かったパルゼーションを観察するまで、これは本当には理解されない。

こうして、人はエネルギーパルゼーションと物質パルゼーションの 2 つの種類のパルゼーションがあることを確認する。

生命プロセスが生まれるために、この同期が、表裏一体でなければならなければならない。

E.

あなたは、堅い状態から脈打つ状態までの物質の移行を直接観察することに成功したのか？

O.

この移行の研究は、微細な **bion** 研究の最も重要な側面です。

以前の **nonplasmatic** な物質が、**plasmatic** になるプロセス、言い換えると、以前の堅い物質が、パルゼーションが可能になる様子が、直接観察される。

42

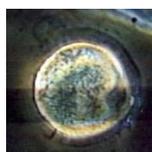
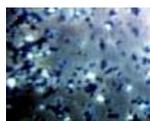
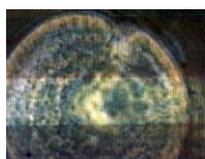
E 以前は堅い物質に収縮・膨張の動きを、あなたは観察したと言えるのか？

O.

はい。

そのような観察は、3000 倍未満の拡大率では可能ではない。

この直接の観察は、メカニカルな科学者が分子のブラウン運動と呼んでいるメカニカルな外部からのインパルスではなく、どんな疑いも越えて、内部のインパルスが動きを引き起こしていることを示す：





E.

ブラウン運動があちこちへの外側の動きだけに終止することは明らかで、それは内部の運動を説明できないと考えなければならない。

O.

これは、一部の生物学者によってすでに認められた。

E.

エネルギーのない動きは、考えられない。

外からのインパルスの存在を除外しなければならないので、内部の運動は物質から発達したエネルギーだけによる。

O.

それは、おそらく間違っていない。

E.

どのように、堅さから内部の運動性へ移行するか？

O.

物質を膨張させて。

これは、単に水に入れることによってできる。

内部の運動が最初に発現するまでの時間は、おおよそ硬さと密度に比例して、時間が経過する。

プロセスを短くするために、自然で絶えず進行しているプロセスを再現させる塩化カリウムのような、物質を加えて、膨張過程を進展させ、その際、圧力鍋で 120 度 C. に熱する。

たとえば、人は長い春雨の後、大地に鮮やかに脈動している **bions** を見つける。

非常に硬質で堅い物質（例えば岩または石炭）は、膨張過程にさらす前に、白熱するまで加熱し「激突させなければならない」。

E.

bion はそのオリジナルな物質とどのように異なるか？

O.

最初のものとは全て構造的に違う。

例えば、石炭または岩の粒子、または鉄のクリップの破片は、なめらかか、細い溝の構造を示す。

しかし膨張した後、同じ物質の、特に暗い部分は、多孔状の構造を示す。

小嚢は、それ自身が離れて存在する。

アポクロマート・レンズで 3-5000 倍の拡大で見ると、これらは青または青緑. のように見え

る』

43。

しかし、最初のオリジナルな材質は、自身の色を示す：石炭は黒または黒っぽい茶色などに見える、

あらゆる物質は生きた物質と膨張という、この2つの大きな特徴を示す：

bionous はきわめて多孔状の構造と極度の青緑色である。

E.

どの段階で、パルゼーションの動きは、起こるか？

O.

O.

When the membrane of the bion has become thin enough to yield to the internal impulse to expansion and contraction.

bion の膜は十分細くなって、収縮と膨張の内部のインパルスに屈する。

E.

非生命の領域でのオーゴン機能を理解するまで、自身を物理的発現に制限し、生物物理学の議論を延期するように提案したい。

O.

よいでしょう。

E.

粒子は、周囲に、どんな影響を与えるか、また、この点で、バイオンとオリジナルな材質の間でどんな違いがあるか発見したか？

O.

オリジナルな非生命の材質は内部の運動性を示さず、**bionous** な物質はそれを示す。これは膨張過程で引き付ける力と反撥する力が動員されていることを示す。

堅いオリジナルな材質は、近くに置かれたバクテリアに影響しない。

しかし、**bionous** な物質の塊は、これらを引きつけ、麻痺させる。

この効果は **bions** に多くの運動と強い放射があることを示す。

E.

あなたは「強い放射」と言うが — あなたはどのように、これを証明するのか？

O.

Bionous な物質は、非 **bionous** な物質よりも光を強く屈折させる。

顕微鏡と、写真によって、膜のまわりに強く屈折させる「マージン縁」が確認される。

bion が死ぬとき、物質の **bionous** な崩壊でこの放射されたマージン縁の現象は、消える、それは、静止したようになるか、**T** 細菌に変質する。

T 細菌、あるいは、異なるものになったために、オーゴンが弱くチャージされた粒子は放射されたマージンを示さない。

血小板は、それを示さない。

放射されているマージンは、確かに屈折現象ではない。

E.

E.

あなたは、オーゴンと光の関係を仮定する。

あなたは実験的にそれを発見したのか？

O.

O.

今まで確かめてはいない。

関係は、まだ不明瞭だ。

満足な結論に至ることなく、過去 5 年間写真プレートで実験した

-44

E.

オーゴンに影響された写真プレートは、あるか？

O.

我々は、オーゴンが写真の感光乳剤に影響を及ぼすという論争の余地のない証明を持つ。

しかし、異なる実験で得られた結果は、慣習的放射写真撮影の見地からは普通でなく、両立できるものでなく、まだ確定できないものだ。

この理由のために、これまで得られた結果をまだ発表していない。

E.

結局、あなたの新しい研究分野では、誰もすぐにすべてを確定したものとして見たいと思わない。

オーゴンは、光または、電磁エネルギーの種類のように写真プレートに影響するか？

それは、プレートを黒くするか？

O.

現在までの観察によれば、大気のオーゴンは、エネルギーの 3 つの異なる形態から成る。

私はあなた自身でこれらを見て欲しいので、これらについてはまだ話さない。

オーゴンがすべてを透過する理由のために、3 つの異なる形を区別することが可能でなかった、また、互いを分離することも可能でなかった。

暗闇で写真プレートを集中したオーゴンにさらすと、光の影響と一致する結果を得る。

しかし、プレートを集中したオーゴンと光に同時に連続してさらすと、オーゴンには影響しない感光乳剤の部分が光の影響に反応するのがわかる。

オーゴンは光とは、同時に対立的であるように見える。

一方の、光は写真プレートを黒くする；

他方オーゴンに光による黒くなる作用を妨害するか、濃度を減らす。

E.

それは、独特だ。

このエネルギーによる光の影響の防止または縮小は、基本的に何か新しいことだ。

オーゴン・エネルギーを見たい。

O.

それは、難しくはない。

この完全に暗いオーゴン・アキュムレーター（有機材と金属的材質を交互に張り合わせた層から成る*）の中に、座る。

外部から内部へ、celotex 有機材、薄鋼板の層、再び有機材 celotex の層、薄鋼板の層が、交互に張り合わせてある。

*Reich は Orgonon の研究所の層にされたアキュムレーターの部屋に言及している。

45

30 分たった頃、暗闇へ我々の目は、適応する。[ed.]

あなたの観察を話してくれますか？

E.

わかった。

非常に奇妙で、直接的な観察を信じてください。

残念なことに、物理学において、我々は直接エネルギー粒子の飛行を観察できない；

我々は、その写真を撮ることができるだけである。

しかし、それは同じものではない。

我々は、これらを観察できず、電子の運動に関して仮説的概念を強いられる。

我々は、これらの運動を演繹できるだけで、それを見ることができない。

エネルギー粒子の運動は、目にはあまりに急速で、蛍光性の物質または写真プレートを経由して以外、本来認識できない。

O.

オーゴンを観察する際、粒子の運動は非常にゆっくりとしており、電磁エネルギーの速度と比較して大きな有利さがある。

アキュムレーターの金属壁の点をよく見続けてください。

本当に現象を理解できるまで、待たなければならない。

E.

部屋が全く黒くなく、薄暗い広がった光で満たされて現れているのがわかる。

それは、青っぽい灰色です。

飛んでいる小さな青っぽい点があるようだ。

私が、目を閉じると、続けて存在することが確かめられません。

O.

オーゴンが至る所で存在するので、

あなたがアキュムレーターの壁の外部をみるその時だけ、あなたの目の中にそれを確認します。

これは、この観察で固有の困難のうちの1つです。

オーゴンはまた、視神経をヒリヒリさせて、残像を生じる。

E.

それは違ったように見える。

私は、小さい青い火花が私の方へ、私を過ぎて飛ぶのを見る。

これらはリズムカルな間隔に壁から出てくるようだ。それは私の脈拍数と関係はない。

点が私の方へ進んで、彼らはゆっくり連結して、広がるようだ。

そばを横に飛ぶとき、これらはパラボラに類似した弾道になる。

この弾道は、ループのような形で終わる；

弾道の特定の点で、反対方向に飛び始めるかのようだ。そして、ループをつくる。

O.

ループ間の距離があるかどうか見えるか？

E.

あるように見える。

O. 弾道の描き方を議論したい。

すぐに、それがわかる。

In the corner of this large orgone accumulator is a small one consisting of three layers each of organic and metallic material and measuring 1 cubic foot.

1立方フィートに測定される大きなオーゴンアキュムレーターの角は、有機質と金属的材質それぞれ3枚の層からなる。

46

It contains a small frosted bulb, such as those used in the development of highly sensitive photographic films.

それは、例えば現像で使われる非常に感度の高い写真フィルムの小さい凍結した光の球を含む。

In the front wall there is an opening measuring 4 square inches, containing a cellulose disc with a dull surface on the inside.

内側にセルロース・ディスクを張った表の壁は4平方インチに計られる。

その代わりに、例えば、X線透視撮影法で使われる、蛍光スクリーンを使うことができる。

その代わりに、人はまた、それがX線蛍光透視法において現状のままで使った蛍光スクリーンを使うことができた。



私は、緑の電球をつける。

E.

まるでその上を蒸気が進むように、ディスクにある種の動きを見る。

それは、ビビッドな明滅だ。

これは素晴らしい！

あなたは、安定した薄暗い光を与えるダークグリーンの電気の電球をつけた。

でも私が見ているのは、ゆらめくことに加えて、緑ではなく、青いバイオレットな光だ！

O.

これは、オーゴンの特有の色です。

あなたは、詳細に見ることができるか？

E. わたしの目は、いくぶん盲目になる。

O.

これは緑の光によるはずはない、なぜならば、目は暗闇で休んでおり、薄暗い緑の光に刺激されていない。

E.

光と暗さが交互に開くかのようだ。

時々、光という印象は、全く消えるようだ。

他の時には、まるで個々のインパルスで、開かれて明るい蒸気がから出て来るように見える。

O.

Sx の拡大率の拡大鏡が、ここにある。

それをディスクに集中させてください。

E.

私は、四方八方に非常に速く動く黄色がかった白い光線を見る。

それは、ミニチュアな花火のように見える。

O.

O.

言い換えると、あなたは今オーゴンの 3 種の異なるエネルギー形態を見た：

一定の間隔のループからゆっくりと浮かんだ、青い灰色蒸気、青いバイオレットの点、そして最終的に急速な、まっすぐな、黄色がかった光線。

E.

それに対する疑いはありえない。

あなたがまだ確かな方法でこのきわめて強いエネルギーの写真を撮ることに成功してないことは注目すべきことだ。

おそらく、それは光となんらかの関係を持つ、なぜならば、これらは、安定した薄暗い緑の光の背景に対するより、暗闇では、光の点はそれほど異なっていなかった。

薄暗い光が粒子により強い放射を生じたかのようだ。

とても独特な！

47

O.

緑の光の代わりに、暗い部屋で薄暗い赤い電球をつける。

E.

ディスクの薄暗い赤ランプに対してはっきりしたバイオレット色の斑点がある。

あなたは、バイオレット色の電球をつけませんでしたね？

O.

いいえ、しかし、赤プラス青は、バイオレットになる。

これは、青いエネルギーが大气にあることを再び証明するだけだ。

E.

私はより長く見ていると、弾道はいろいろと異なってくる。

疑いはない：

弾道はリズムカルな方法でそれ自体に引き返し続ける、そして、小さな点は交互に大きくなり小さくなる。

あなたはこれをどう考えるか？

これによって、光の性質をどう考えるべきなのでしょうか？

O.

別の時に、この質問を議論しよう。

E.

これらを理解することはとても難しいが、事実にはもはや疑うことはできない。

放射エネルギーは、非常にゆっくりと動き、浮くようであることを示す！

私の目は、痛む。

O ちょっと新鮮な外気を吸おう

オーゴン・アキュムレーターの中の空気は重い、我々は1時間半それに座っていた。

E.

私は、この経験について考えたい。

2、3日我々の議論を続けることができるか？

D.

私は、それを楽しみにしている。

THE ORGONOTIC EXCITATION OF INSULATORS

絶縁体の ORGONOTIC 励起と静電気概念の疑問点

O.

あなたは、大気でのエネルギー粒子の存在を目で確かめた。

私は、このエネルギーを、それと既知の他の全ての放射現象と区別するために、調査の目的のために、最初、「オーゴン」と呼んだ。

我々はこのエネルギー機能が「電気概念に包含できないと仮定する正当な理由を持つ。」、私の観察は一般に電磁気と呼ばれているものがオーゴン・エネルギーの特別な機能だと仮定することを強く求める。

E.

それは、非常にラディカルな結論です。

人は、シンプルにエネルギーの新概念を考え出さずに、何千もの研究者は古い概念で無意味に縮小させて考えている。しかし、私はあなたの論拠を聞こう。

O.

これをする前に、電気の基本的原則に関するなんらかの考え方のコンセンサスが物理学の世界にあるかどうか、知ろう。

電磁気理解で、基本的なギャップがあるという認識が、あるか？

E.

たしかに、ある。

多くの矛盾が、ある。

著名な物理学者の非常に多くが、いわゆる「静電気の一般概念の正確さを疑問視している。」

O.

どのように、これらの疑問を一時的に公式化するか？

E.

現代物理学は、エネルギー機能を公式化するまで進歩した。

「物質」と「エネルギー」の概念は、もはや固定的ではない。
これらは鋭く詳細に輪郭を描くフィールドをもはや意味せず、その機能状態はむしろ、絶えざる移行である。

「エネルギー」はもはや「物質」に付随したものと考えていません；
むしろ、エネルギーは物質が溶かされ、とてもスピードアップした物質で、物質は、固まり、きわめてスローダウンしたエネルギーと考えられる。
現代の物理学の中のこの機能概念と比較すると、おそらく静電気の検電器の現象を説明する「電氣的な2つの流体」の概念は、不完全だ。

O.

オーゴン生物物理学の知見結果は、物質とエネルギーの関係の機能概念に完全に一致する。
他方、2つの別々の正と負の電氣的な流体の概念とは、これらは違っている。
この古い理論は、ものを分割するメカニカルな思考を反映している。
この思考は「物質」と「エネルギー」を完全に区別してきた；
それは電気エネルギーを「2つの独立した流体」として分離した。

E.

老練な科学の開拓者は非難しないでしょう。
結局、この概念は、摩擦電気の多くの現象と一致する。
ゴム・ロッドをこするとき、出て来るエネルギーはガラスのロッドをこすって出てくるエネルギーと反対の *electroscopic* な効果をだす。
こすったゴム・ロッドは検電器の葉をそらすならば、こすったガラスロッドがそれを減少させるとき、二番目のこすったゴム・ロッドはそれを増大させようとする。
これは、2つ別々の電氣的な流体の概念を確認させる。

O.

私は、何回もこの古くからある電気実験を実行して、これを確かめた。

49

その際、私は理論を改変させる2つの観察をした。

E.

新しい観察は、古い理論で解釈出来るかもしれない。
これが完全に不可能な場合だけ、古い理論より新しい概念が多くの事実をより良い方向で単純に説明する時だけ、古い理論を取り替える権利がうまれる。
実験的物理学は、混沌を避けるためという以外の、正当な理由のない新しい理論を厳しく審査する。

理論変更させる根拠となる観察は、何か？

O.

私は、以下の方法でゴムとガラスに誘発される電気実験を続けた：
ガラスのロッドを生きていないフェルトの表面でこする代わりに、私の頭の髪の毛の表面でこ

すった。

検電器は、刺激を与えられたゴム・ロッドで興奮した。

あなたのメカニカルな理論では生きていないフェルトと私の髪の毛の摩擦に、差はない。

摩擦は、摩擦です。

従って、私の髪の毛で興奮したガラスのロッドは、検電器のチャージを反対に減少させるはずだ。

現実には、こすったゴム・ロッドと同じようにチャージを増やす兆候がでる。

これは、特別なガラスの電気の仮定を否定する。

髪の毛でこすった、ガラスのロッドは、フェルトでこすったゴム・ロッドと同じエネルギーを与えられた仮定するのは不合理だ。

しかし、髪の毛とガラスのロッドとの間で起こるプロセスは、生きていないフェルトとガラスのロッドとの間に起こるプロセスとは異なることが、考えられる。

この現象は、摩擦による、電気励起のメカニカルな概念と相容れない。

私のオーゴン発現の観察は、矛盾を説明する。

これは2つの特定の電気流体の仮説では、説明不能だ。

E.

いやまだそうとはいえない。

髪の毛より非常にざらざらしたフェルトは、ポジティブに、反応するが、ガラスのロッドは、それ自身で励起状態になっている髪の毛から陰電気を引き上げる可能性がある。

O.

私自身には異義がある。

もう一つの実験が、あなたの議論への答えだ。

あなたが正しいならば、

独立したガラスのロッドの刺激とフェルトの摩擦によって誘発された検電器の徴候は同一の髪の毛による摩擦で引き起こされたものと同じ結果に終わらなければならない。

E.

同一量のメカニカルな摩擦が現象の原因と考えるならばそうだ。

実験は、何を示すか？

O

私の頭の髪の毛の上を軽くガラスのロッドでなでた。

検電器の葉は、およそ45度にそれる。

ガラスのロッドを水につけてみよう。

非常にざらざらしたフェルトで軽くそれをなでる。

可動部分の葉はすこしそれるか、あるいは、まったく動かない。

すなわち、現象はメカニカルに決定できない。

フェルトよりも髪がより簡単にガラスロッドだけを励起させるわけではなく、ゴム・ロッドでも同じように、異なるエネルギーをチャージする。

E.

これは間違いに違いない。

これは、まったく理解できない。

O.

間違いではない。

私は、この実験を何百回もくりかえし常に同じ結果を得た。

これは、オーゴンの他の観察と一致する。

現象は、ガラスとゴムの 2 つ別々の電気流体のメカニカルな概念の観点からは、理解できない。

E.

ゴム・ロッドで同じ実験をしたとき、どうなるか？

O.

確認。

1..

髪による励起は、生きていないフェルトと同じである。

2.

髪による励起はフェルトでの同じ操作より比類なく強い。

E.

これらの調査結果からの結論は、何か？

O.

準備段階にある結論に過ぎないが。

それは、以下の通りだ

いわゆる『摩擦電気』は、摩擦とは関係がない。

次の事実が、この仮定を確認する。

E.

あなたの理論は結局検電器でそれを得るためにゴムまたはガラスをこすらなければならぬ事実を説明できますか？

明らかに、摩擦は不可欠です。

あなたは、摩擦で髪から引きだす。

O.

「抜き取ること」と「摩擦すること」は、同じことではない。

しかし、もしも激しく摩擦しないで穏やかに引き出す場合は、**organotic** な現象が現れる。

摩擦は、穏やかに引き出すことで簡単に得られる多くの反応を除去する。

More about this another time.

ほかの時より多く。

オーゴン理論は、以下の方法で摩擦の問題に答える：

オーゴン・エネルギーは、至る所に存在する。

土または空気のように、フェルトはそれに浸透されている。

しかし非生命の物質としてのフェルトは、それ自身で射出するエネルギーはない。

それは、それが環境からえたもの、または強い摩擦によって開放されたものを放出するだけだ。

他方、生きている髪は、その生命機能によってオーゴンを放射する。

それは、自発的にチャージする。

この理由で、ゴムかガラスのロッドが髪からオーゴンを引き出すことは、非常に簡単です。

フェルトは生きていない、すなわち、それは自発的にオーゴンを放出しない。

オーゴンは、「こすりだされるだけである」。

E.

これで、「摩擦電気」の概念を **orgonotic** な励起の概念と取り替えることができることになる。

「摩擦電気」は受動的に吸収されたオーゴンに基づくかもしれず **orgonotic** な励起現象の中の特別興味のわからない特殊例でしかなく、あるいは、生命機能の一部として放射されたオーゴンである。

O.

それは、これらの観察から出された正確な結論です。

しかし、摩擦なしで、エネルギーを引き出し、同じ検電器反応が示されるまで、それは完全に説得力がない。

E.

そうであれば、本当に論争の余地がない証明となる。

だが、私はそんなことができるか疑っている。

O.

はい、それはできる：

いかにこの事実を解釈するかは別問題として、金属、ゴムまたはセルロースの表面をこすっても、**electroscopic** な反応は現れない。

セルロース・ディスクが検電器で反応を示さないことを確かめる。

それをオーゴン・アキュムレーターの金属壁の上に、2、3日間おいておく。

アキュムレーターの中のオーゴンのテンションに従い、セルロース・ディスクはオーゴンを多くまたは少く吸収し、検電器は強くまたは弱く反応する。

この実験をする際、忍耐強くなければならず、あまり早急に、反応を予想しないでほしい。

E.

物理学者自身を新しい実験で困らせることをあなたは、それほど期待してはいけない。

摩擦で引き出すことなく **orgonotic** な励起を示す別の方法は、ないのか？

52

O.

はい、ありますよ。

太陽は、空气中に絶えずオーゴンを放射している。

おそらく風がないときの明るい日光の下に、**electroscopically** に無反応なセルローズ・プレートを置こう。

およそ 15 から 30 分日光へ露出した後、セルローズは検電器に反応を引き起こす。

反応の大きさは、太陽放射の強度と空气中的相対湿度に依存する。

相対湿度がおよそ 50%以上であるとき、オーゴン反応はほとんど消え、再現しないのを見ることは、重要です。

E.

これまで、いわゆる「摩擦電気」がオーゴン・エネルギーの特別な機能であることをあなたは示した。

しかし、あなたはオーゴンが電磁気では完全にはないという最初の議論をまだ証明していない。

物理学が「電気」と呼ぶものは、オーゴンの特別な機能かもしれない；

それも、基本的に別な何かかもしれない。

私の信念は、オーゴンが単純にマイナスの **electricity** だということです。

O.

これは、1939 年のオーゴンの発見時点にオランダ人の物理学者によって言われたことと同じです。

ゴムまたはガラスのロッドの中のオーゴン（髪から取り出された）は、本当にマイナスの静電気のようなふるまいをする。

全てのエネルギーの公分母にならなければならないので、言うまでもなく、我々が「オーゴン」といわゆる「電気」と呼ぶものは互いに、なんらかの関係を持たなければならない。

しかし、残念なことに、重要な違いが、ある。

電子理論に関して、これらを、電気の有名な条件でオーゴンの特徴を表して解説できれば、ずっと私には便利です。

残念なことに、それは事実を捻じ曲げずに、可能ではない。

オーゴン・エネルギーの機能は、電磁気機能に関する既知の用語で理解されるはずがない。

これは、研究者に電磁気の中に **orgonotic** な機能は存在しないという、確認するのに難しく、時間のかかる実験を実行することを強制し、そして電磁気は、言い換えると、**orgonotic** の

特別な存在であるのです；

オーゴンと既存の電磁気間の関係が疑う余地なく理解され、最後に、オーゴンと電気は同一のものではないと証明するなら、それは非常にシンプルでしょう。

53

あなたは私が最初の願望から結論に飛躍しないことを知っている。

E.

私は、あなたの仕事は見込みがないと思います。

あなたは、単純に電気の数百年の研究を廃棄することはできず、あなたの主張を支持する必要な全ての証明を提供できるわけではありません。

O.

そのように、見られるかもしれません。

しかし、電気理論にオーゴン物理学で埋められる隙間がある。

理解を助ける基本的に十分な多くの観察がある。

人がモンブランをのぼらなければならないならば、人は自分で上り、その高さと困難によって脅迫されることができない。

辛抱強い登山家は、あなたをかなりの距離まで連れて行く。

あなたが頂上に到達することに成功するかしないか、誰も予測できません。

E.

聞きましょう。

我々は、それが簡単だとは思いません。

O.

以下のような若干の慰めがあります：

物理学を研究し、物理学者と話すとき、私にも多数の不正確な断定の可能性をゆるした、多くの誤った盲目的な信念に基づく主張に出会う。

私が成功してえる、富の収穫の可能性は、試みを中止するにはあまりに魅惑的だ。

それに加えて、物理学の中の多数の矛盾は、もう一つの誘因だ。

E.

さて、新しい仮説を公式化することに害はない。

O.

古代のギリシア人と、後に、ギルバート、Cabeo、Guerike、フランクリンとその他によって非金属の物質に発見された電気は、しばらくの間支持された。。

産出するが、伝導しない物質の電気」を彼らは「*electrica*」と呼んだ

金属的な物質、それは、伝導するが、電気を発生しないものを、彼らは「非 *electrica*」呼んだ。：

古きよき電気機械は、革とガラスの間での、摩擦原理に基づく。

電気エネルギーは「ライデンジャーか点を通して蓄えられた

、
フランクリンの有名な避雷針の実験は、これに基づいた。

これまでの電気を発生する本来の方法があきらめられ、歴史博物館に置かれたことにあなたは驚かないか、？

E.

率直に言って、私はそれを考えたことは一度もありませんでした。

しかし、ボルタとファラデーの日から、電気を発生する原則が完全に異なるようになったのは本当です。

--54

産業界では、電気エネルギーは、磁場での金属ワイヤーの元素または運動によって発生する。

発電機とバッテリーは、古い電気機械に取り替った。

それが全てだ。

それは大して、私を驚かせたりはしない。

O.

しかし、それだけのことではない。

これは、偶然に起こったことではない。

2つの別々の流体の概念が出た後、摩擦電気の理論は沼に捨てられ、それ以上発展しなかった。

技術的には、それは誤っていました。

実際的には、2つの電氣的な流体の原則は、より実り多い、動く電磁エネルギー・フィールドの原則に取り替えられた。

E.

それがどうした？

あなたは、難しくなっている。

O.

いやそうではない。

正確に言ってオーゴンが電気かどうかの問題に関して、単に過去の忘却されたものから、とても重要な事実を再発見しなければならないからだ。

私の主張は、古代のギリシア人とギルバート以前の我々の祖先が扱っていたエネルギーが物理学者、ボルタとファラデーが述べたものとは基本的に、発生の原則だけでなく、他も、基本的に異なるエネルギーであったということだ。

古代のギリシア人は、摩擦の原理で実際は、オーゴンを発見した。

電流はボルタ、ファラデー、クーロン、アンペア、その他によって最初に発見され、それによって、古代のギリシア人からギルバートとフランクリンの時代までのエネルギー研究の流れは、完全に破壊された。

E.

それはファンタスティックに聞こえる。

私があなただが誠実だということを知らないならば、私はこれ以上聞こうとさえしないでしょう。

O.

それは、一部の物理学者と天文学者が大気のオーゴンを理解したのと同様、特にファンタスティックではない。

E.

どのように、大気のエネルギーを完全に理解したという事実を説明するのか？

O.

私がほかで書こうとしているように心理的な、むしろ生物学的説明がある。

いや、完全に技術的な説明が、ある。

「宇宙線」を研究する人は、長い間オーゴンの領域にいた。

彼らがそれらの事実を見逃がしたのは、electroscopic な反応の誤った解釈による。

E.

まさか！

単純な方法でこれを説明できるか？

O.

基本的事実は、常に簡単に提示することができる。難しいことは、新しい方法で働くことで、とりわけ、単純な事実を覆う偏見にみちた誤った概念への反証です。

大気のオーゴンの全ての現象は、特に明らかだ。

E.

あなたがオーゴンの論争の余地のない視覚的デモンストレーションの実証を与えないならば、私はこれ以上あとに続くことを拒否したでしょう。

O.

まさにその点で多くの物理学者は私を信用していない。

人は、古い、安定した概念をあきらめるのが大嫌いだ。

常にそれは、そうだ。

人がこれまでに、新しい何かを見つけて勝利を感じるために

安定した概念が提供する感情的な保障の幻想を放棄する気になるかどうかはわからない

E.

あなたは、嫉妬の要因と日常的な思考の狭さを見落す。

O.

私は、この視野狭窄を理解することを学んだ。

それは、秩序立って機能する社会機構と、人間の不合理を保護するために必要です。

残念なことに、それは人生の困難の本当の克服のための決定的な洞察を妨害する。

E.

あなたのいう事実は、何か？

我々は事実の解釈を最後まで延期したい。

O.

私は、あなたが二つのことを明確に区別するのを聞いてうれしい。

あまりにしばしば、事実を、空疎な概念によって無理やり釈明してしまう。

私が **bions** を生物学者に示したとき、彼は「ブラウン運動は、周知の事実だ」といって無視した：

『私が「分子圧力」に基づく物理的ブラウン運動が **bions** の拡大と収縮の動きを説明できるか、彼に尋ねたとき、怒ったようになった。』

新しい事実を見ることから始めよう、そして、これらを電気概念と一致させよう。

これらの理論の説明者として、電気伝導と絶縁の認知された公式の見方を話してしてもらえるか？

E.

これは、一般にシンプルに認められている：

電気の良導体は事実によって絶縁体または低伝導物質と異なり、その中を、電気（電子）の単位は自由に移動する。

56

これらは、良い絶縁体で静止する。

O.

これは、ゴムで断熱されるワイヤーの中の電気エネルギーがワイヤーの表面を越えて行かない事実と一致する。

ゴムはワイヤーの表面に電気を伝導しません、それは「絶縁します」。

私はあなたに実験を見せたい：

我々は、この検電器の金属ノブと **M** の間を、細いポリスチレンで絶縁します。..

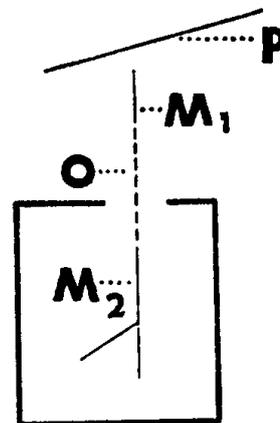
図 3。

有機物質がオーゴンを伝導するデモンストレーション。

P = ポリスチレン・ロッド；

M (=金属 knob; ノブ)；

O = 有機的な絶縁体 (ポリスチレン)；



M (=金属ロッド)。

葉と金属ロッドを、つなげた。

すなわち、我々は端子 knob と葉の間に「絶縁体」を挿入した。

あなたの理論によれば、電気は端子 knob から葉まで流れない。

実験は、この主張と矛盾する。

ノブからのおよそ 1cm の距離に髪によってチャージしたポリスチレン・ロッドを持つと、直接的な金属の伝導と同じ検電器の振れを得る。

唯一の違いは、中間の絶縁体でいくぶんゆっくりと振れが起きます。

少なくとも、絶縁体が「電気を流している。」

E.不良品の絶縁体を選んだに違いない。

O.

すぐれた絶縁体は、とてもよく反応している。

ポリスチレンは、優れた絶縁体として知られている。

それは、常に反応する。

57

E.

これは、素晴らしい。

私は、この実験についてこれまで聞いたことがない。

O.

電気装置の絶縁体の絶縁機能が静止することは、概念の見地だけから見ても素晴らしい。

オーゴン理論の見地から、現象はまったく驚くことではない。

私が髪から引き出すエネルギーは、電気でなくすべてを透過可能なオーゴン・エネルギーだ。

絶縁体の理論は、オーゴンに電気にはあてはまらない。

オーゴンは、電気と異なる何かだ。

E.

この 1 つの実験は、あなたの主張を証明するには十分ではない。

よく訓練された物理学者は、電気概念のフレームワークで、それを説明できた。

例えば：

あなたは検電器を調整したか？

あなたは、使ったチャージの大きさを知っているか？

O.

私の検電器は、調整されていた。

90 度の振れはおよそ 1000 ボルトの振れと一致する。

E.

あなたが罠に陥ったのは残念だ。

あなたが正しいことを証明することを望む、なぜならば、我々の静電気の概念は本当に不満足で矛盾している。

我々の普通の電線は 110 から、220 ボルトまでを完全に絶縁する。

もし 1000 ボルトをワイヤーに通すならば、絶縁体を通り抜ける；

すなわち、同じことが、あなたの絶縁体に起こる。

この事実は、電気フレームワークでよく理解されている。

O.

私がそのような事実を考慮せず、適当な証明を主張するとは本当に思っていないはずだ。

E.

そのような証明はまったく、ありえない。

O.

これらは、今までに理解された大気圏の中に見るエネルギーの存在の事実と同じくらい単純だ。

あなたの静電気エネルギーで検電器をおよそ 1000 ボルトのテンションを意味するように、振らすようにチャージしてください。

E.

チャージしている。

これはなんだろう？

O..

検電器の金属プレートの上に、およそ 6x12 インチの大きさの良い絶縁体であるセルロースのディスクを置いてください。

あなたの指で絶縁ディスクに触れてください。

E.

検電器は、徐々に放出する！

O.

その電磁気の見解によれば、碍子は電気の伝導体にならず、したがって、電気を伝導せず、あなたの電流の観点からは理解できない。

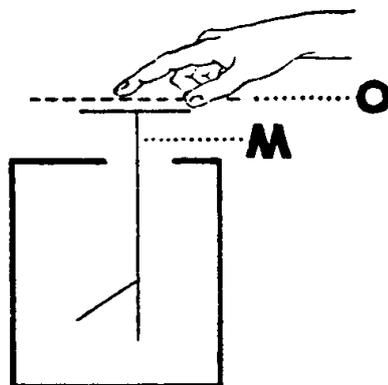
-58

図 4。

絶縁体を通してオーゴンを放出し検電器-
チャージする。

O = 有機的な絶縁体 (セルロース) ;

M = metal plate.



M = 金属プレート。

電気。

オーゴン物理学の観点から、現象は簡単に理解できる：

検電器 **electroscope** は、電気でなくオーゴンによってチャージされている。

異なる速度があるだけで、オーゴンはすべて、コンダクターと絶縁体を透過する。

絶縁体は、電気を伝導しない。

しかし、それはオーゴンを伝導する。

これが、絶縁体を通して検電器に放出するちょうどその時、絶縁体と検電器に **organotically** にチャージし充填できる理由だ。

E.

検電器におよそ 1000 ボルトのテンションを与えた。

あなたが検電器の中のエネルギーが電気でないならば、この主張が正しいとすることは可能だ。

ボルト計を検電器に接続しよう。

我々の理論によれば、葉 **leaf** の陰電気とケースの陽電気の中のテンションによる。

これは、ボルト計で測定できなければならない。

O.

あなたの望むどんなやり方でもいいから、ボルト計と検電器を接続してください。

検電器の中のエネルギーが電気ならば、ボルト計は反応しなければならない。

E.

どうやっても、ボルト計で少しの反応も得ることができない。

O.

わかっている

これを私は、何回もチェックして、常に否定的な結果を得た。

検電器はおよそ 1000 ボルトの、エネルギー量を含むにもかかわらず、ボルト計はまったく反応しない。

電気の観点から、これは理解できない。

59

それはオーゴン理論の観点から、とてもシンプルです：

オーゴンは、電気ではない。

検電器 **electroscope** は、電気でなく **organotic** なチャージである。

オーゴンは、それが正確に電気でないから電磁測定装置に影響しない；

これは驚いて、私が長い間観察してきた事実です。

E.

仮に、あなたの見解をそうだと私が仮定します。

それによれば、オーゴンと電気間関係は、ない。

これは、ありそうもないように聞こえると、私は言わなければならない。

O.

実際は、関係がある。

オーゴン・エネルギーは、電気エネルギーを妨害する。

何か月も、私はオーゴン装置にいろいろなやり方でボルト計をつないでも、わずかな反応も決しておきなかった。

それから、ある日、非常に「非科学的」方法でボルト計が反応するのを、私は見た。

ボルト計と乾電池のバッテリーを接続してください。

E.

ボルト計は、4 ボルトを指す。

O.

あなたの髪からのオーゴンをポリスチレン棒に引き出し、それをおよそロッドの横 2-5cm の距離で取り付け、ボルト計ポインターを通り過ぎるように動かす

E.

これを実験的な方法とは呼べないね？

O.

いけませんか？

我々がこれが好きかどうかに関係なく、事実は事実です。

E.

わかった。

さて、私がロッドを動かすやり方によって、ボルト計ポインターが振れる。

O.

私が初めてこれを見たとき、あなたと同じくらい仰天した。

しかし、それは本当に全く単純で完全に他のオーゴン観察と一致する。

オーゴンは、磁針を振らす。

それは、電磁装置を妨害する。

太陽点活動時の大気圏の中の増大したいわゆる電磁嵐は、電磁気エネルギーとは関係がない。

これらは電気測定装置の針を振らす、そして、あなたの体のオーゴンが、ボルト計を振らすときと同様のやり方で、これら電気測定装置を妨害する。

E.

それは素晴らしい！

O.

一見したところだけでそう思うはずだ。

私がそうして、人がそれに慣れるならば、今まで不明瞭なままだったことが全く単純にな

り、多くの自然のプロセスが明確になる。

E.

対照実験を誰かが、実行したが、彼らはあなたの実験を確かめなかったとかって私に話した。

60

しかし、ここでは、あなたの主張のすべては、真実であることが証明された。

O.

私のオーゴン-物理的仕事の初期に、私は繰り返し物理学者と生物学者に個々の調査結果を見せる間違いをした、結局彼らは仕事に参加しなかった。

彼らの反応は、常に同じような不可解なものでした。

彼らは、発見を見て、ちょっとした「説明」を聞いて、これらを理解したと思った。

私は、これらの新しい発見が彼らの持っている自前の論理的な文脈の中にだけ提示されなければならず、そして、事実と解釈の間を矛盾があっても画然と区別してしまうことがわかった。

例えば：

私が蛍光灯の **lumination** の現象を発見したとき、私は物理学者にそれを見せた。

それを示す前に、私はチャージされたポリスチレン・ロッドを放電管の近くに持ってくる、何がおこると思うかと、彼に尋ねた。

彼は、何も起こらないと言った。

それにもかかわらず、チューブが **luminated** したとき、彼は最初非常に驚いたが、すぐに「説明を見つけた、

『それは、チューブの中のガスだと、彼が言った。

私は、チャージした絶縁材料のロッドに放電管が近づいたとき、**luminate** した理由をこの優れた電磁気学者が「説明」したとき少しも説明になっていないことが理解できないことを知って驚いた。

専門家は、あまりに小さな好奇心を持っている；

彼らは、あまりに言葉に簡単に満足している。

E.

あなたの **lumination** 実験は、帯電した大気現象の一つであるオーロラに関係することを思い出させる。

私の知識によれば、全ての天文放射現象は、電気的なイオン化によって説明される。

オーゴン実験は、これについて何と言いますか？

O.

あなたの考えた、この関係は全く正しい。

北極光のような現象の慣習的解釈は、全く無批判であった。

これらの現象全てを、我々は電気でなくオーゴンとして扱っている。

E.

あなたは、それを証明できるか？

O.

はい私の実験的経験の程度までは、

北極光が電氣的な性質ならば、これらの現象の実験的な再現にボルト計は反応しなければならない。

検電器ノブにこの蛍光性のアルゴン・チューブのノブの1つをつないでください。

すぐに、放電管を通り越すまでオルーゴン-チャージしたポリスチレン・ロッドをあちこちに動かしてください。

li p

x

IOM

I " I

61

--T

図 5。

蛍光灯の中の orgonotic な lumination
のデモンストレーション。

P = ポリスチレン・ロッド;

T = 蛍光灯;

OM = orgonometer (検電器) ..

E 検電器は数百ボルトを示す

O.

部屋を暗くし、我々の目を暗闇に適応させる。

それから、我々は elec-troscope の端子 knob の近くに、ロッドを持っていく。

E.

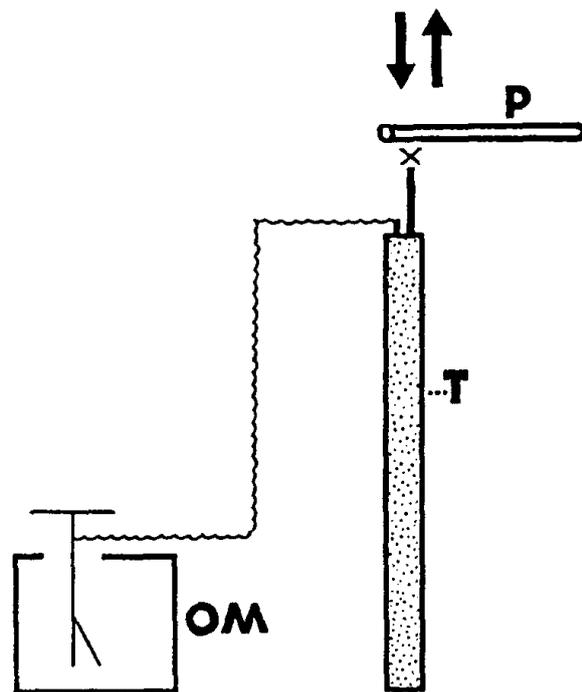
ロッドを近くに持ってくる時、放電管の luminesces はいつもなくなる;

私が放電管の近くにロッドを持ってきて、それを取り去るとき、同じことが起こる。

O.

すなわち、orgonotic なチャージは、放電管を luminate させる。

検電器の端子 knob に、ワイヤーを通して移すとメーターは振れる、またその逆方向でも同じようになる。



E. もしも、放電管を接地したら、現象は消えるだろうか。

O.

それをためしてください。

E.

チューブが接地しても、現象は同じままです。

O.

正確だ。

この事実は、正と負の電気チャージ理論と相容れない。

あなたは、チャージした 2 本の棒の間のテンションに適合しなかったことを思い出すはずだ。

62

我々のエネルギー・システムは、単極性です。

単極現象は、電気の領域にはない。

これらをどう仮定しても、批判的な試験は電気ではない **orgonotic** な反応を示す。

我々が知っているように、作動中の数百ボルトのチャージがガス・放電管の中にある。

どんなやり方でもいいから、ボルト計と放電管のノブをつないで実験を繰り返してみてください。

E.

検電器反応と同様に **lumination** 現象は、存在し続ける。

しかし、それが接続したか、接続しなかったかに関係なく、ボルト計は反応しない。

O.

これは、再び初期の実験とオーゴン理論を確かめる：

オーゴンと電気は、同じではない。

E.

これらの観察によれば、慣習的に言われる「静電気」は、まったく電気ではない。

O.

それは、必然的な結論です。

我々が古代文明諸国の「電気」をオーゴンによって確認し、**orgonotic** な現象のために電気概念を保持するかどうかは、単に慣例の問題だけだ。

この場合、ファラデー、アンペアとボルタ以来電磁気として知られていたものを、新しい概念に基づいて作り直さなければならない。

でなければ、それぞれの **orgonotic** な現象を電気と呼んだ、古代文明諸国の電気の概念を断念し、ワイヤーの中の流動で得られる電気と磁場の現象に制限すべきだ。

E.

これは、ラディカルで痛みの多い作業です。

たとえば、それはコロイドと原子を含む必然的に化学と物理学の広い野原に影響する。

O

あなた自身でそれを確認したように、私が事実に関守し続けるならば、わたしはそれができない。

しかしそれが、有利になる。

人は、饒舌の領域から事実の領域に降りることを強えられる。

E.

それは、簡単ではない。

O.

私は、大変な困難への覚悟ができています。

組織化された自然科学は、生命を作ることとなる；

それは、その機能の1つです。

この機能に完全に適合できない限りすべてのパイオニアの作業はひどく苦しむ。

E.

あなたは、これらの事実が組織化された物理学と生物学によって認められることを期待しているのか？

63

O.

私が、それをするにはあまりにナイーブでした。

多くのにがい経験の後、たとえば、白熱電球の発見者が、ガス灯のメーカーに電気 illumination を認知するのを期待するほど十二分にナイーブであったことが私の身に起きている事に気がついた

E.

あなたの場合は、誰がガス灯業界の役割を演じるのか？

O.

製薬産業。

E.

ラジウムとX線業界があなたにはとても危険であるように私には思われる。

O.

私は、それを知っている。

E.

我々が今日話したことについて考えたい。

一時にたいへんなことを聞いた。

私は、帰る。

続く。

Orgonotic Pulsation*

電磁気学者との対話による電磁気とオーゴン・エネルギーの 区別

オルゴン集積器の中での電磁的放電の測定 (1940-1941)

Electrophysicist (E.)

電磁気学者 (E.)

私は多くの時間をかけた。

私は、単純な検電器が、1つの棚としての脳になるとは思いません。

オーゴン生物物理学者 (O.)

私は、生物学的感情の研究以外に、非有機的な物理学の方向から検電器に接近しなかったのは幸運だった。

E

あなたは、検電器が非生命の領域よりも、生命の領域に密接に関連していると言うつもりはないのか？

O.

それは、私が思っていることそのものです。

検電器（ボルト計でない）は、生物学的エネルギー・プロセスの性質を決定するための適切な手段です。

E.

あなたは、あまりに早急にオシログラフを除外します。

O.

私は、それを除外していない。

目を保護するという理由だけでなく、私が何百メートルの現象でもミリメートルの分割処置を使わないで測定可能だろうか。

E.

あなたは、私に大きな理解能力を要求する。

O.

発見者に作用するオーゴン・エネルギー機能より、大きなものはない。

オーゴンが電気ではないと、どうしても主張する前に、多くの眠れない夜と、中断できない長年の難しい仕事をやってきた。

そして、物理学によって造り出された全ての言葉が、作業をより簡単にするわけではなかった。

E.

しかし、確かに、あなたは電磁気学者の中に意見への同意があるとは思いません。

O.

私は、それを知っている。

『1939-44 に書かれた時セオドア P.ウルフによってドイツ語から翻訳することがすぐに同意された。エリカ・ウルフ・バークの許可で再版された。

20

新発見を社会的に承認しないことに問題がある。

E.

苦さは、研究を助成しない。

検電器は、非生命のものより、生命の領域に密接に、関連しているというあなたの主張を証明することは、とてもよいことです。

O.

私は、その声明に保証を与えなければならない。

生命を支配するエネルギーは、非生命の領域でも機能する。

これは、電気機械産業を特徴づける研究プロセスで、検電器が十分に役に立たないことを意味するだけだ。

他方、生命と同様に非生命の研究自体、立派に、オーゴン機能の解明に役立ちます。

E.

最初の議論において、あなたはオーゴンの多くの機能が正と負の電気的な流体の概念と相容れないことを説明した。

しかし、あなたはこの理論をより良いものに取り替えることができませんでした。

2つの電気的な流体の理論は、ネガティブにチャージされたゴム・ロッドの接近で起こる検電器の葉を説明する。

ゴムの陰電気は、ディスクへの検電器の陽電気を引きつけ、葉は陰電気をはね返す。

葉の中の陰電気は、葉が振れる原因になる。

ゴム・ロッドを取り除けば、それは消える。

ディスクの陽電気は、再びなくなり、葉のマイナスのチャージの効力を消す。

O.

正と負の電気的な流体理論の詳しい議論を、ここで始める必要はない。

私は、この理論が *organotic* な現象を説明できないとわかった。

私はまた、オーゴンが電気でないことを明らかに示す事実を見つけた。

摩擦電気は、オーゴン・エネルギーの特別な顕れで、従ってファラデーの電気と異なる何かだ。

E 何百メートルの領域とミリメートルの分割の領域をどうやって測定すると言うのですか？

O.

オーゴン生物物理学はファラデー電気とオーゴンの領域の間の橋を、長い間捜していた。

関係はこれまで暗黒であったが、その存在まで疑うことはできない。

若干の考慮されるべき奇妙な事実が、ある。

数学的に、1000 ボルトは、50 ミリボルトと等しくない。

これがオーゴンと電気を同じに考える中で、引き出される不条理な結論でした。

The first measurements of the biological energy at the surface of the human.

human.の表面の生物学的エネルギーの最初の measurements

f

21

organism were made with a sensitive electromagnetic oscillograph.

有機体は、電磁オシログラフで測定された。

有機体の表面の興奮した場所と興奮してない場所の間の電位差は、0 と 100 ミリボルトの間であることが示された。

他方、頭の髪の毛の光の脈動または性感帯は、およそ 1000 ボルトの電氣的なチャージを与える。

電磁測定システムの反応は、このように検電器の最小部分にみられる。

オーゴンと電気の間に関係があるにもかかわらず、この関係は問題を含む。

オシログラフの数ミリボルトは、検電器の数百ボルトと同じであるはずがない。

我々が生命有機体によって成し遂げられる巨大な仕事を考慮するならば、静電氣的な検電器の反応が電流計より忠実に現実を非常に反映していることは明らかだ。

脳波は、重要でない反応のみを明らかにしている；

これらは、脳のエネルギーと仕事を比較すると小さな副次的作用です。

E.

この矛盾は、これまで指摘されなかった。

あなたの事実は、本当に検電器の測定値とボルト計のボルトを同等に考えることを許しません。

1000 ボルトの緊張でワイヤーに触れることは全く危険なのに、どんな害も感じることなく検電器の 1000 ボルトを我々の体へ放出することができるという事実に衝撃を感じる。

これは、検電器とボルト計とはエネルギーの基本的な違いがあることを確かに示している。

私には、ゴム・ロッドがそのポジティブな対応物なしで陰電気だけを含むという考えは、異様に思えることを認めなければなりません。

O.

あらゆるオーゴン生物物理学者がオーゴンを電気と区別しようとするとき、必然的に理論のジャングルであなたをもつれさせた。

物理学は、300 ボルトの電気圧力と静電気の単位とを同等に考えた。

検電器の静電氣的緊張がボルト電流の緊張と同じ特性だという誤った概念が電気理論にそっと入った。

E.

オーゴンの性質の概念上の明確化は別として、オーゴンそれ自身が、特定の法則で機能するという明確な実験的証明があるか？

-22

O.

その証明は、ある。

我々が **or-gonometer** と呼んでいる正当化可能な検電器で、この証明の多くは、得ることができる。

E.

同意した。

ところで証明はどうするのか？

O.

我々のために **orgonometer** 検電器の放電の有力な理論をまとめてくれないか、？

E.

それは、とても単純だ。

理論的には、チャージした検電器は、そのチャージを保持しなければならない。

実験は、これが特別なケースではないことを示している。

自然発生的な放電（いわゆる「自然放電」）が、ある。

それは、通常空気の湿気のためとされているものが、針 **the leaf** と箱に影響を与えるロッドと関係すると仮定する。

しかし、この点でコンセンサスが物理学者の中にない。

しかしもし、測定値から自然発生的な放出分をマイナスするならば、正確な放出速度を決定することが可能だ。

この原理は、ラジウムの測定で常に使われる。

帯電させるあらゆる種類の放射と、ロッドとケースの間の空気のイオン化についてそれは示す。

イオン化された空気は、弱くイオン化され、または非イオン化された空気より、速く電気ポテンシャルを均一化するので、検電器の放出速度はイオン化効果の強度の指標となる。

O.

この概念によれば、放射源からの電気エネルギーの量は、electroscopic な放出速度に正比例する。

言い換えると、多くの激しい放射は、多くの急速な放電である。。

E.

それは、正しい。

原則として、宇宙放射線の測定は、これに基づく。

検電器の放電は、下より、大気の高層で、より速い。

高層でこれは激しい宇宙放射線を示す。

下層で減らされた強度は、大気圏の空気によって宇宙線が吸収されたことによるものとされる。

しかし、宇宙線は浸透する莫大なキャパシティ力をもつ、これは深い海と、鉱山でのエレクトロスコーピックな放電測定でわかった。

この侵透のキャパシティ能力は、まだ理解されていない。

O.

electroscopic な放電での有望な理論が正しい場合だけ、この概念は正しいとされる。

23

It stands and falls with the theory of the electroscopes.

検電器の理論は、立って、落ちている。

あなたは、

ラジウムを含む検電器、または、X線にさらされた検電器のようなイオン化している影響なしでより速く放出するという事実を疑いませんか？

O.

私は、この事実を疑わない。

しかし、私は1の分野で有効な概念を別の分野に無批判に適合することに反対します。

あなたは、electroscope の自然発生的な放電を考えることに失敗した。

E.

そんなことはない。

空気は、常に特定量のフリーのイオン（それは最小のものかもしれませんが）を含むが、検電器の自然発生的な放電を説明するのにはかなり大きい。

O.

私が正しく覚えているならば、稲妻の現象は、「電気の放電」であると説明されているが、あなたは、空気のイオン量はあまりに小さいと言う。

空気は非伝導体ではないのか、あるいはそうではなく、優れた絶縁体なのか。

大気圏に莫大なエネルギー量を蓄えることができ1回の稲妻は何百万ボルトも放出可能であるという説とこれはどうやって一致するのか？

E.

これは、本当に説明できない矛盾です。

人は、雷雨が来て電気エネルギーの巨大な量を放出したことが単純に理解できない。

これらは、大気圏の非常に少ないフリーイオン量の、変化による。

O.

あなたは、ここで、何百万ボルトとミリボルトとが等しいというのと同じ、不条理な方程式に直面しているとは思わないか？

E.

それは、本当にそうだ。

O.

正と負の電気の理論の見地からは、この奇妙な方程式は、理解不能だ。

しかし、空気がオーゴンを含むことを知っている、そしてそのオーゴンは **electricity** ではなく、オルゴンが何であるか、そして、それがどのように機能するかは知らない。

もはや「**electroscopically**」でなく、オーゴンを持ち出して、**orgonometrically** にチャージを測ってみよう。

E

わかった。

私は、隙間の無い角に私自身を見つけ、非常に奇妙だと認めている。

あなたは、かなりの量の証明しなければならないことを知っている。

O.

わかっている

あなたは、どんな実験を提案するのか？

E.

私は、特定の既知の仮定から始めることができるだけだ。

人は、電離放射線(イオナイゼーション)の影響による **electroscopic** な放出の加速だ。

24

あなたのオーゴン・アキュムレーターの内と外とで放出速度を計ろう。

放出速度が同じならば、エネルギー集中には違いがない。

アキュムレーターの中に大気エネルギーの集中があるというあなたの主張は誤っているということが証明され、オーゴンが電気と同じかどうか決めることができない。

他方、アキュムレーターでエネルギーが集中するならば、**electroscopic** な放出速度の違いがなければならない。

依然として仮定だが、オーゴンが電気と同じならば、検電器の外部より内側でより速く放出する。

同意するか？

O.

はい、その実験結果が、あなたが言った二つでは全くなく、第 3 の、予想外のものならばと、但し書きをつけた上で、オーゴンと電気エネルギーの違いを認める。

E.

同意する。

しかし、私は第 3 の可能性を予想しない；

二つだけが、考えられる。

O.

実験に進もう。

我々は、エレクトロスコープ---私の **orgonometer**、をチャージし、両方の測定のために同じスケール分割にします。

E.

オーゴン・アキュムレーターの中の検電器の放電は外部の自由空気より、ずっとゆっくりしている。

2つの予測された可能性のどちらも、実現しなかった。

この結果は完全に予想外で、私はそれを説明できない。

O.

あなたは電気理論の仮定だけで、オーゴン機能に接近している。

E.

アキュムレーターの底より、外部の空気は検電器のまわりをもっと速く循環することがありえる。

従って、内側に比較してより多くの空気のイオンが、走り放電を速める。

O.

この説明は、検証できなかったのではないか？

E.

私は屋外で検電器を、一回に、二度放出させ、そして、1回は電気ファンを使った。ファンは放出速度に影響しないことがわかった。

これの後では、私は大気エネルギーと電磁エネルギーの基本的な違い、対立さえ認めなければならない。

25

それは明らかに電气的概念のアプリケーションを否定する結果だとあなたは理解するようになる。

O.

それは、更に **orgonometer** で観察しないと可能ではない。

たとえば、知らないスラブ人が、よく知っているイギリス人とは異なる反応をするのを、確認するのは簡単です。

人が未知なることを知りよく学ぶ前に、この違いを確定するのは、ずっと難しい。

それとは基本的に全く異なるオーゴンを理解することが可能になる前に、誤って置かれた2つの対立する流体の電磁気理論のアプリケーションから自分が解放されることが必要だと、今あなたは認めようとしている。

E

私はそれを理解してうれしい。

私は、特殊な **organotic** な特性の研究で何が現れるか、非常に知りたい。

あなたに何か考えがあるか？

O.

オーゴンは生物学的に影響する特殊なエネルギーであることを知っているが、生物学的機能からオーゴンの仮説を引き出すことは簡単だが、私は物理的実験自らに物語らせるのを好む。

結果が、基本的生物学的機能と一致するなら、なおさらそうしたほうがよい。

もしそうでなければ、新しい謎が、みつかる。

E.

私は、現在、私がどのように考えるか、言うことができない。

合意がうまれるならば、これは生命機能のミステリーに対する決定的な洞察を提供するだろう。

もしもそうでなければ、我々はもっと考えなければならない。

大気のオーゴンにおける変化

CONCENTRATION.の準備

オーゴン機能の解釈

(1941年8月)。

E.

私は、オーゴン・アキュムレーターで **organometer** の放出の遅さを理解しようとした。

私は、放射性物質がアキュムレーターのどこか外側にあるかもしれないと思った。

これは、外部の金属壁が **ac-cumulator**.の内部にラジウム活動の速める影響が入ることを防ぐので、アキュムレーター内部で **organometer** がゆっくり放電する事実を説明することができた

26

O.

あなたは、そのような物質が至る所で見つかるかと仮定しますか？

E.

いいえ

O.

たとえ装置をどこに置こうとも、同じ結果を得る。

集中が変わるだけでオーゴンは至る所に存在する。

他方、ラジウムはめったに見つからない。

E.

それは、真実だ。

なんとか強いオーゴンの影響で遅い放出現象が確かめられるならば、あなたの理論は強化されるでしょう。

O.

それは確認された。

1941年夏に数週間にわたって毎日の大気のオーゴン濃度の変化を測ったとき、私は偶然にそれを見つけた。

E.

何によって、あなたにそのアイデアをえたか？

私が知る限り、そのような実験は、以前に決してされてない。

O.

この実験は、湿気または大気の「電気」が検電器の自然発生的な放出に影響するという信念を否定した。

あなたが毎時 **electroscopic** な放出を測定するならば、空気のイオン理論の見地からどんな結果を期待するか？

E.

2つの仮定が、可能だ：

1、空気のイオン濃度は本質的に一定のままである。

この場合、検電器の自然発生的な放出も、また、一定のままです。

2、太陽放射が大気圏の電荷を増やす。

たとえば、高度が高いところの空気は強くイオン化される。そして、多くのオーゴンを含む。

この場合、検電器（1時間ごとに測られる）の放出が早朝、最も遅く、正午に最も急速で夕方頃に再び遅くなると予想される。

O.

あなたの電氣的理論の見地からの予想は、完全に正しい。

しかし、**orgonometer** での1時間ごとの測定は、正確に正反対になる。

あなたは、それをためしてみたいか？

E.

これは、軽く扱うにはあまりに重要です。

私は、それを調査しよう。

私は、あなたが正しいのがわかる。

晴れた日、検電器の放出は早朝、2時と4時 **pm** の間でとても速い、そして、夕方頃に再び速くなる。

これは、イオン化理論を否定し、アキュムレーターの中と外側の放出を測って得た結果と同じだ

27

しかし、その結果は理解できない。

イオン化理論は、ここでは明らかに、失敗だ；

新しい解釈は、難しい。

O.

更に観察することで解釈しよう。

イオン化理論の見地から、雲の発生か雷雨の場合は、どんな結果が、予想されるか？

E.

雲が太陽のそばの空気のイオン化を減少させ、空気から電気をチャージし始めると、検電器はかなりゆっくり放電する。

O.

雷雨の間と、その前を、測定したくないか？

ちょうど今たくさん雲が発生している。

E.

雲が発生する前、electroscopic な放出はとても急速になるのがわかる。

晴れた天気のととき、放電に十数分かかる充電単位は、重い雲のときは、2、3分で放電する。

次の雷雨に私は自宅で electroscopic な測定をして、あなたにレポートをするつもりだ。

O.

我々の **orgonometer** は、このようにオーゴンを測定する。どんな理論上の結論に達する前に大気のオーゴンの発見によって、完全に解決される矛盾でもある電気理論の更なる矛盾に言及したい、

電氣的にチャージされた金属球（それに金属点を備えさせた）は、類似した金属点を備えていない球より、放出が、速いか、遅いか？

E.

点のある球は、ずっと速く自然に放出する。

それは、点のない球より非常に速く周囲の空中に電気チャージを放射する。

すべての学生は、それを知っている！

O.

その通り。

もう一つの質問：

物理学は避雷針の影響をどのように、説明するか？

E.

すべての学生は、それを知っている。

ベンジャミン・フランクリンは、金属点が摩擦した電氣的な材質（例えば琥珀またはガラス）から、電気チャージを引き出すのを観察した。

それは、彼が避雷針の基礎としたものだ。

金属点は、チャージされた雲から電氣を得る。

それは稲妻を引きつけ、地面へ導く。そして、稲妻の電氣がコントロール不能に建物の中に広がることから保護する。

O.

覚えていることが正しいならば、避雷針が点か、球か、どちらにしなければならないかに関して、博識な委員会のメンバーの中で一度論争があった。

E.

私には、この興味のひかない出来事に言及しなければならない理由がわからない。

O.

我々が現在議論している電氣理論の中にある 200 年前もの長い間、意識されなかった矛盾のヒントを私へえた。

Has it ever struck you that one and the same theory assumes that a metal point gives off electricity easily and on the other hand, in one breath, so to speak, it absorbs it easily?

これまでに全く同一の理論の仮定で

金属点が、簡単に電氣を放ちそして、他方、簡単にそれを吸収すると、考えたことはあるか？

1つの器具が全く同一のエネルギーで2つの対立的な機能を成し遂げることが、考えられるか？

E.

私はその矛盾に決して気がつかなかった、しかし、多くの物理学者はそれを考えたと思う。

O.

避雷針からおおよそ 1 メーター離れて置かれた発電機で、チャージされた球から電氣エネルギーを引きあげることは可能なのか？

E.

私は知らない、しかし、私はそれが出来ることを疑う。

電子とX線の放電管は、陰極 cathode から来る電子を引きつける陽極 anode が確かにまったくない。

他方、陽極のような金属点と陰極のようなプレートとの間にロウソク炎のような「電氣的な風」がある。

O.

私は、電氣の問題に干渉するつもりはありません。

私は、それをあまり知らない。

しかし、前進するために、電気とオーゴンの違いを明らかにしなければならないが、私にはよく知られているが電気物理学者に有名ではない。

こう考えなければ、electroscopic な放電の測定結果を理解できない。

避雷針の原理は「摩擦電気」の現象の原因からつくられた。それは磁場でのワイヤーの移動に基づく厳密な電気原則からの逸脱です。

我々は、古くからある静電気または摩擦電気がオーゴンの特別な例であることを知っていた。

避雷針の原理は全く正しいが、それは電気と関係がない。

避雷針は、雲または稲妻から「電気」を引き出さない。

それは我々の蛍光性のガス・チューブの上の点にオーゴンを引き出す。

29

E.

それは論理的です、しかし、それは混乱を引き起こす。

O.

私は、それを受け入れられない。

オーゴン機能の見地から見れば、事実は完全に一致している。

広範囲にわたる電気理論で理解しようとするならば、これらは一致していない。

だが、orgonometer の放電の最初の解釈は冒険的かもしれない。

あなたは、異なるレベルのチャージまたはテンションの有名な同等化の原則がこれに適用可能と思うか？

E.

高い鉢から下部の鉢にむかう水の流れ、または、大きな位置エネルギーから、低い位置エネルギーへの落下は、その逆と同じにはならない。

これは、電位差の同等化の原則です。

高い部分と低い部分との高度差に存在する「テンション」または強いところと弱いチャージはポテンシャルの差を構成する。ポテンシャルの差の同等化過程で、ポテンシャルエネルギーが生じその仕事は運動エネルギーと一致する。

電気またはカロリー・エネルギーと同様にこれは、「位置のエネルギー」にもあてはまる。暖かい体が、冷えたものに変化するとき、熱を放つが、逆は成立しない。

これらは物理学の最も基本原則の一部で、私はあなたがこれを疑うとは思っていない。

O.

とんでもない。

私のたった一つの関心は、偏見なしに、オーゴン・エネルギーの機能を研究することだ。

その際、私自身が他の形態のエネルギーにあてはまる原理でそれを誤って理解することはできない。

オーゴンの全容と、静電気として誤解されてきたものは、オーゴンは、異なる自然法則に従うという正確な事実です。

電気の基本法則によれば、エネルギーは常に多くチャージされたものからチャージされていない物体に流れる。あなたの指で（およそ 200 ボルトチャージした）検電器にさわるとき、あなたは何が起こると予想するか？

あなたが理解したように、我々の髪を 1 回穏やかに撫でることで、およそ 1000 ボルトに一致する量を簡単に引き出すことができる。

その仕事をするキャパシティの見地からすれば、我々の有機体は、検電器より非常にチャージされている。

E.

我々の有機体によって検電器はその最大のキャパシティでチャージされることを我々の理論で説明しよう。

O.

およそ 500 ボルトの量でチャージされたこの検電器に触れてください。

30

E.

私の指でディスクにさわると、それは、すぐに完全に放出する：

少しチャージされた物体から非常にチャージされた物体へエネルギーが流れる。

それは、きわめてナンセンスです！

O.

電気理論を現象に適用するなら、それは不合理です。

特殊な **orgonotic** 機能の法則の正当性を認めるならば、それは正しい。

我々は、あらゆる有機体が自律的な **orgonotic** なエネルギー・システムをもつと仮定しなければならない。

強い配偶子は、弱いものを引きつける；

卵子は精子、その他を引きつける。そして、砂の **bion** は強いオーゴン・チャージでオーゴン・エネルギーを単に引きよせることで **orgonotically** に弱いバクテリアを殺す。

E.

私は生物学について何も知らないので、あなたの考えの正当性を評価することができない。

O.

宇宙オーゴン・エネルギーは、生物学の性的な機能の研究と運動エネルギーから発見された。

このように、オーゴン・エネルギーには、生命機能と **mechaniso-**メカニカルな物理的機能とを特に異なるものにするエネルギー機能が含まれていなければならない。

生物学者は、生命の領域が正確に非生命の領域で動くものとして、化学と物理学の法則を適用したので、生物学的波動の基本法は現在まで発見されなかった。

この方法論的な疑問は、オーゴン生物物理学と生物学者の間で対立する問題であった。物理学者が生命システムとしての自然のプロセスに接近するだけで、生命に特有な機能を、排除するとは思わないが、メカニカルな法則が適用できないエネルギー（オーゴン）形態がある。

生物学的エネルギー機能の特殊な性質を見ることに失敗したことは、大気のオーゴンの全容を理解する原因となった。

物理学は、生物学でも、主要な自然科学だと主張した。

物理学は、その約束を果たせなかった。

これに反して、私は物理学の宇宙の機械学的概念が、生物学において生命機能を理解する道の障害になったことを確信している。

E.

あなたは、特殊な「エランビタールの存在を仮定するあやうい形而上学者と近いものになっている。」

O.

さて、誰も生命機能を支配するエネルギーまたは力の存在を疑わない。

それは、考え、理解する方法の問題だけだ。

31

物理学者と機械学の生物学者は、全くその存在を否定する。

形而上学的生物学者は、完全にエランビタールを物理学の領域と分離し、それを超自然現象に任せる。

オーゴン生物物理学は、この問題を解決する。

特定の生物学的エネルギーが、「向こう側に」存在しない；

それは、形而上学ではない。

それは、大気圏の中に物理的に存在し、視覚的に、熱として、*electroscopically* に明白だ。

それは、大地と、生命有機体の中で、生物学的に機能している。

動植物の呼吸で、純粋に物理的なものとオーゴンの生物学的種類の間エネルギー代謝の継続的なプロセスが、ある。

オーゴン実験は、十分にデモンストレーションをし、全くの生物学的機能についての知識から、物理学者は、多くを得ることができた。

E.

あなたが多分知っているように、かなり多くの物理学者は生命のメカニカルな概念に不満です。

形而上学者と機械技師は、同時であることも、多い。

彼らは、魂の再生を信じている

O.

そして、生命プロセスの機能的エネルギーによる説明とは戦う。

私は、しばしばそれを経験した。

E.

全く機械的な考え方から物理学の中の機能的な考えへの変化は、物理学者が必要とした形而上学を満足させなかった。

元素変換の発表と物質とエネルギーの対立の解消は、確かに機械的世界観を変えた；

しかし、明快さと平和の代わりにより多くの混乱だけが、科学の隊列にある。

機械学の因果関係の原則でつくられた隙間は、より良い考えと、より信頼できる方法で、満たされなかった。

O.

それは全く人間の感情的構造の精神医学的な問題で、非常に問題にしなければならない。

それは実験する場合と考える際に動く。

E.

どうか、ここに精神医学を持ってこないでください。

O.

自然科学の堅い境界は、消えようとしている。

バベルの塔を建設しようとしたが、言葉が混乱して崩壊した時代の様に、今日の科学は、あまりに多くの言語を話す。

彼らは、再び自然のプロセスを支配しシンプルに機能している自然法則を思い出さなければならぬ。

32

E.

あなたの新しい調査結果を解釈するならば、電気理論の初期に作られた最も単純な観察に戻らなければならないと思う。

O.

そうだ。

それは、何世紀のうちに、無関係に集まった詳細な概念の言葉の海の中で道に迷うにはあまりにシンプルだ。

E.

チャージされた金属球が金属点を通してエネルギーを失うという最初の事実に戻ろう

O.

そして、同じ金属球は、金属点を通してエネルギーを集めることができる。

これらの材料と形は、両方のケースで同じだ。

プロセスは、しかし正確に対立している。

このように、1つのプロセスのエネルギーが他のプロセスの場合と同じエネルギーであるはずはないと結論することが必要だ。

E.

あなたの **orgonometer** をチャージするプロセスは、電気効果です。

ネガティブにチャージした絶縁材料のロッドは、陽電気を引き出しながら、同時に、陰電気を放ち点へ影響を与えて検電器の端子をそらす。

O.

あなたは、この機能が影響する形を説明できるか？

E.

プロセスは、段階的で、継続的なものだ。

O.

現在、葉のマイナス電気と球のプラスの間の同等化は 1 回起こるか、あるいは、繰り返し起こるか？

E.

電気の基本的な法則によれば、それは一度だけだ。

たとえば、ゴム・ロッドに自由につるしたコルクを付けて、それに触れるならば、著しく対立的な電氣的な物質または流体のように均質化がおこる。

コルクは、ゴム・ロッドの電気を集めて、はね返す。

それは、新しい操作なしには再度引きつけられることはない。

さもなければ、不可能なペルペトゥウムモビレ永久運動が生じてしまう。

O.

私のケースの理論上の指標である、**orgonotic** と **bioenergetic** な考え方は、古い概念の誤りを証明し、それを正しく新しいものに置き換える準備となる。

E.

数少ない初期の **electrophysicists** は、電気のプラスとマイナスについて話さなかったが、電気にはたくさんあることと比較するとほとんどなかった。

33

他のひとは電気の「蓄え」と、「流出」について話した。

O.

もっと正確に電気の影響の概念を把握するためにここで立ち止まろう。

我々は、検電器 (**orgonometer**) の近くにネガティブにチャージされたゴム・ロッドを持ってきて、電気の影響で端子が振れるようにする：

ゴム・ロッドは、検電器の金属に触れない。

このように、検電器の金属にゴム・ロッドから電気は流れない。

ゴム・ロッドと金属点の間の電氣的なフィールド、または、空中をつたわる影響の結果として効果が起きる。

E.

それは、正しい。

O.

私の手を検電器の近くに持っていき、上からそれに接近する。

検電器が、チャージされるなら、可動針が振れ、動き始める。

私が近くに私の手を持ってくるとき、それは下がり、そして私の手を取り除くとき、その振れは前に戻る。

E.

正しい。

O.

しかし、検電器がチャージされていないならば、私の手で葉の動きを生じることができない。

E.

あなたの手は、チャージされたゴム・ロッドではない。

O.

しかし、それはエネルギー・フィールドに囲まれている！

電気的なフィールドに反応する **elec-troscope** は、なぜ、電気的なフィールドでない私の手または、ゴム・ロッドに影響されるのか？

E.

この矛盾は、これまで説明されなかった。

O.

これにはもっと多くの問題が、ある。

我々が見たように、私は、手のエネルギー・フィールドでチャージされた検電器に影響を与えることができる。

しかし、私は充電されていないものに影響することができない。

E.

私には理解できないと認める

O.

そのとき、我々の検電器は、およそ 600 ボルトに一致するエネルギー量を放出する。

すなわち、私のゴム・ロッドのエネルギー・フィールドは 600 ボルトの量に強く影響することが出来、増加させるか、減少させることができる。

E..

それは、実演された事実だ。

しかし、私はあなたが何を言っているか、わからない。

O.

比較なしに、ひとつの現象から結論を出すことは、特定のタイプの科学的思考からすれば不合理だと言えよう。

34

ワイヤーでこの 6 ボルトのバッテリーの 2 本の棒をつないで、それをこのボルト計のプラグに接続してください。

E.

それは、6 ボルトを示す。

O.

ワイヤーの近くにこすったポリスチレン・ロッドとあなたの手を持ってきてください。

E.

反応はない。

O.

その通り。

あなたの電気理論によれば、我々の手のひら、または、こすられたポリスチレン・ロッドが、6 ボルトに影響することがない同じ時に、確かにこれらは、600 ボルトに影響し妨害することが、可能でなければならない。

それは、ナンセンスだ。

ワイヤーは電子を含む、検電器の金属もそうだ。

検電器の電子は、影響によって動かされ、ワイヤーの電子は影響されない。！

E.

ワイヤーに、電気が流れるとき、エレクトロスコープではそれが安定している。

O.

鞭が、つながれた馬を走らせても、その馬の動きに影響を与えていないといえるか？

E.

私は矛盾を認める、しかし、電磁気学が全ての問題を解決するわけではない。

O.

それは、こうした多くの理解できない現象に対して、傲慢さをうむ。

問題点は、手とロッドのフィールド効果が、(あなたはそれを影響というが) **organotic** なエネルギー・フィールドで電気ではないことにある。

そうでなければ、私の手のひらが 600 ボルトのテンションを妨害する時、それは 6 ボルトのテンションも妨害するはずだ。

生物学的観察の見地からそれに接近することで、オーゴンの物理的機能を完全に理解しよう。

2つの異なる性の有機体は、「性的に引きつけられる：

『まじめな話、性的関心のような基本的なプロセスをエネルギー的な観点から見ると、性的興奮での引きつける力を **organotic** なエネルギー・プロセスと考えなければならない。

機能的観点から厳密にみれば、相反する動きがないプロセスはありえない。

引きつける力に相反する動きは、反発です。

反発も、また、性的な機能です。

引き付けることが起きたあと、オルガスムのエネルギー放出と度重なる筋肉の収縮の結果で性的な物質が放出されるまで、2つの交接している有機体は互いに付着する。

この後、有機体は自身を引き離す。

E.

35

私にはそれは、非常にこじつけに思える。

あなたは人間間の引きつける力と検電器の端子の反発を一緒に考えるのか？

O.

ちょっと待ってくれ。

性的プロセスは、プラスとマイナスのチャージによっては決定されない。

有機体の男と女は「対立する」記号ではチャージされていない、しかし、彼らは両方とも同じ統一をめざすエネルギーで興奮している。

このエネルギーは、明らかに2つの著しく対立する機能を示す：

引きつける力と分離（または反発）。

これらの2つの著しく対立する機能の中に2つ別々の物質または流体の存在を仮定する理由がない。

こんなふうに、2つの著しく対立する方向の機能は、全く同一のオーゴン・エネルギーによることを実験は確かめた：

Attraction 引きつける力

Repulsion 反発

Orgone energy オーゴン・エネルギー

Attraction and repulsion as antithetical functions of orgone energy.

オーゴン・エネルギーの著しい対立する機能である、引きつける力と反発。

E.

これが、単に他の1000もの仮説を増加させる新しい仮説でなく、よく知られた事実を説明し、新しい関係を説明するならば、私は同意します。

しかし、あまり遠くの領域にいかないようにしよう。

我々は、問いかけすることから始めた：

電位差の同等化の原理が適用できないならば、私の検電器（あなたの *orgonometer*）の放電はどの原理と一致するのか？

O.

私は、慎重にこの質問を考えたが、生物学的現象への回り道に行くことなしには答えられなかった。

これらを考えることは、オーゴンの物理的実験を助けてくれる；

これらは、我々をより遠くに運んで、あなたの仮説を確証したいという要求を完了させる。

E.

私は、あなたの実験的な証明を見たい。

私はエネルギーのフィールドであなたの実験的な証拠を、エネルギー・フィールドへの影響として見たい。

38

これは、多分オーゴンと電流間の接続の謎が捜されなければならない場所であるでしょう。しかし、現在はその問題に深入りしないようにしましょう。

オーゴン・ロッドが接近する時と、移動するとき起こることと、流れがオンとオフされるとき筋肉の収縮、一次コイルで流れがオンとオフに切り返えることによる二次コイルの中の誘導流、我々のアルゴン・チューブの **lumination**、との間に機能類似が、あるのを覚えていることは、重要です。

3つの全てのケースで、プロセスはダイナミックで、すなわち機能は静電的ではない。それは、興奮した物質の中での吸引と分離の繰り返し以外、プラスとマイナスの1つの電気粒子も放出されない。

E.

あなたは、実験的にこれを示すことができるか？

O.

2つの別々の電氣的流体の静電的概念から自身を解放したあと、私はそれに成功した。感度がにぶい重くて、堅い、ものの代わりにアルミニウムまたは金箔と、2本の細い絹糸を使い金属ロッドに付ける。

それから金属ロッドから金属ノブへの中間の部分に硬質ゴムまたはプラスチックの絶縁体を置き、ノブの近くに我々のオーゴン・ロッドを持っていく。

あなたは、それをためたいですか？

E.

髪からのオーゴンで興奮したノブまでロッドを持っていくと、絹糸に引きつける力と反発が連続してある。

私がロッドを取り去るとき、同じことが起こる。

反応は、カエルの足が収縮することを思い出させる。

最初、私はこのたとえを否定したい気分だった。

O.

にもかかわらず、それは完全に正しい。

それに加えて、メカニカルな形で **lumination** 現象を再現した。

あなたがロッドを動かさなければ、絹糸は静止したままだ。

近くにロッドを持ってきて、再びそれを取り除くとき、これらは前後に動く。

E.

このデモンストレーションは、単純で説得力がある。

私は、この場合、2つの電気流体の仮定があてはまらないことを認める。

それは、連続的反発に対して一度に発生する引きつける力でなく、吸引と反発の繰り返しである。

あなたは、この観察からどんな結論を出すか？

O.

すべての接触の確立と接触の中断がされるごとに興奮した物質のエネルギーフィールドの中2つの対立する機能が働くと仮定しなければなりません。

すなわち興奮の出現と消滅である。

39

蛍光チューブは *luminates* し、*luminate* をやめる。そして、二次コイルに流れは現れ、消える、そして絹糸はお互いを引きつけて、またはね返す。

E.

手短に言えば、プラスとマイナスの電気チャージの引きつける力を2つの *orgonotically* に興奮した物質の引きつける力として、置き換えて理解する。それは全く同じひとつのもの、すなわちオーゴン・エネルギーの影響にさらされている。

さらに、2つのマイナスまたは2つのポジティブな電気の反発の流れという考え方を、2つの *orgonotically* に興奮した物体の反発または分離、興奮の消滅または *lumination* に置き替える。

O.

生物学的興奮のプロセスの観察は、他のいかなる結論も許さない。

2人の人間の結合と分離は、現象のプロトタイプです。

2つの *or-gonotically* に興奮したシステムの引きつける力は、生物学の領域で明らかに、簡単に示される。

分離は、より複雑です。

E.

我々の今日議論は、オーゴン・アキュムレーターの中の正午ごろの、放出の検電器の遅さがイオン理論に基づいては説明できない事から始まった。

私はオーゴン・エネルギーの引きつける力と反発の機能がどのように現象を説明するか、わからない。

O.

オーゴン物理学の初期に、私は明るい日ざしが照る天気のアキュムレーター中の *orgonometer* の遅い放電をポテンシャルの差の原則によって説明しようとした。

私は、検電器が低いオーゴンのテンションよりも高いオーゴンノテンションで簡単に空気に放出することができないと *M* を仮定した。

しかし、この仮定は、否定されなければならなかった。

それゆえ、オーゴン生物物理学の領域では、常に、弱いところから強いシステムへ *orgonotic*

エネルギーは引き出され、ポテンシャルの差が高いところから低いところへというメカニカルな法則、または電氣的な強いものから弱いものへといった動きはありえない。

このもう一つの仮定は、事実とより一致した：

orgone-で励起した **orgonometer** は、周囲の空気へオーゴンを放射し、同時に、オーゴンを集め始める。

エネルギーの放出と吸収は、同時に起こる。

オルゴンルームの中の真空管は、オーゴンを集め、同時に、それを放射する。

このように、ポテンシャルの普通概念をあきらめて、オーゴン・エネルギーの放出と吸収が同時おこっていることを仮定しなければならなかった。

40

私は、更なる観察でオーゴン機能の特徴により精通するまで、**orgonometer** の自然発生的な放出に、この新しい概念を適用することを重視するよう提案する。

ここまで、我々は以下のペアの機能を確定した：

- 1 オーゴンの. 2つの吸収と放出。
- 2 オーゴン・システムの引きつける力と反発。
- 3 動くオーゴン・エネルギー・フィールドの中のアルゴン・ガスの **Lumination** と **lumination** の停止。

続く。

Orgonotic Pulsation*3

電磁気学者との対話で明らかにする電磁気とオーゴン・エネルギーとの違い

ORGONOTIC な引力と電磁気-**ORGONOTIC** フォースシステム (**EMO** フォースシステ

ム) : 仮説 (1942 年 1 月)

オーゴン生物物理学者 (O.)

生物学者は基本的な自然現象に精通しているが、それは、正しく、20 世紀を含むまで理解されず同じ時にまだミステリアスなのが当たり前でした。

私は、動植物の王国の中で男女両方によって互いに用いられる圧倒的な引きつける力を話そう。

この力は、性的な行為に至って、動物でオルガスムの、plas-matic な痙攣に達する。

それは、生命を支える力です。

この引きつける力は、生命の領域のオーゴン物理機能です。

電磁気学者 (E.)

物理学は、これまでこの問題に取り組まなかった。

それは、本当に大きな圧倒的な問題です。

O.

正確であろうとする自然科学は、自らをあまりに優れていると感じ、そのような「格下の」質問に関係するには、あまりに「純粹だ」と言うかもしれません。

対照的に太古から、哲学と芸術は、他のものより正確にこの現象を扱った。

E.

生物学において、性的な引きつける力は、単に再生のプロセスの研究に付随するだけと考えられている。

O.

「種を維持するための手段以外の何物でもないと、古典的な生物学は性的な引力を考えた。」、実際は、性的関心は再生機能ではない、反対に、再生はほとんど偶然の結果です。

*注 1939-44.年に書かれデリクとインジ・ヨルダンによってドイツ語から翻訳された。

性的な引きつける力は、融合 (相互浸透)、細胞分裂と芽を出す時に機能している。

E.

我々が主題からそれるのを恐れる。

我々は、今日、オーゴンと磁気の関係を議論することになっている。

O.

あなたが想像するより、我々はこの話題のかなりそばにいる。

E.

あなたは、性的な「磁力」に言及している。

確かに、我々は催眠術師のレベルへ下がりはたたくはない。

O.

今まで、この生命機能は、自然科学によって無視された;

これらは、神秘的なカルトだけに注目された。

私の意見では、自然科学において傲慢は不適當です。

ルルドの回生の泉は、より遠くのを「引きつけ」『X線またはガンマ線よりも人々を治すことができた。

E.

もしあなたが神秘主義を守るためにがんばるなら、どんな更なる議論よりも先にまずこれを問題にしたい。

O.

私の科学的な背景は、私がどんな神秘主義にも厳しい批判者だったということを証明する。社会科学はファシズムの神秘主義に関係するものを彼らの尊厳に値しないものと感じていたのでヒトラー主義は優勢を得、深淵の端に世界を引きずりこんだ。

自然科学も、どんな「宇宙生命感覚」の学問的議論よりこの莫大なこの分野の全部を行者と修道僧に任せたいほど、優れていると感じていた。

自然科学が重要な生命への問いに感情的に深い根の張った嫌悪を持つのを私が強く非難しなければならないのは、私が神秘主義の厳しい正確な批判者だからです。

繰り返します：

人類の多数は、原子論よりもはるかに神秘的なシンボルに「引きつけられた」。

そして、すぐに自然科学がその考えを変えないならば、それは神秘主義に、全分野を任すだろう。

また、この惑星上に宇宙法則のために、原子論と、数学的な計算をする場所はない。

E.

私は、我々の議論のテーマに戻りたい。

O.

それは神秘主義者のテーマであり、そして、誰も神秘主義と関係したくはなかったので、**Orgonotic** な引力はこれまで深く追求されなかった。

社会学がそれを克服するためにはヒトラー主義を理解しなければならないと同様に、神秘主義を排除するために、それは科学用語で理解されなければならない。

E.

私は、自然科学がそのような問題を扱うことをしり込みする傾向があるのを認める。

にもかかわらず非常に多くの、物理学者自身が、神秘主義的な傾向をもつ。

O.

その矛盾が、多くの物理学者が神秘主義者である正確な理由です。

神秘主義は、基本的生物学的ニーズを幻覚による満足感にして提供した。

さもなければ、神秘主義は人類の大部分を味方に引き入れなかった。

彼は暗く不明瞭な方法で、神秘主義と、宇宙エネルギーに人間動物自らの起源を感じている。この暗闇に光を持たらし、明確な認識を形成するのは、自然科学の作業です。

「自然科学によって導かれる社会」のスローガンの空疎な美辞麗句を連ねるままに、何にでも、神秘主義者のレッテルを貼って、軽蔑します。

E.、神秘主義への通路は、簡単です；

それは、信仰です。

自然科学の通路は、固く、困難と危険に悩まされる。

真実より恐れるものは何も、ない。

O.

正しい！

私に対して使える議論は、それ以外にはない。

この難しい義務を実行するために、科学者が自身の神秘的な欲求に自身を立ち入り禁止にしなければならないことに同意しよう。

しかしその際、彼らは神秘主義の内容を研究することに対して本当に神経症的なやり方で、タブーをつくった。

たぶん「生命を経験すること」は、冷静に見るにはあまりに巨大で、また重要な、個人的な話題がある。

それでもやってみよう。

神秘主義の問題を取り除くには多くの細部にわたる議論がある。

全ての、引きつける力の現象に関して現在の理論がどうなっているかまとめてくれますか？

E.

我々は、ニュートンの重力理論を越えてまたは磁気と電気を発見した科学者の見地を越えてあまり遠くまで進んでいません。

我々は、引きつける力に3つの基本的タイプを区別することができます：

磁気南北極の間の引力、正と負の電気エネルギーの間の引力、最後に地球上に見つかる全ての物体の上にある引力と、たがいの星の引力。

もちろん、私は重力または引力に言及している。

25

O.

それは、これまでに誰の身にも起こっているがゆえに、これまで、誰も、実験的に重力に関係した巨大なエネルギー量を示すことができなかった？

E.

この理由は、地球の引力の自然効果でそのような実験全てが混乱するからです。

影響を受けないで重力を示す実験方法が、地球の引力の中ではありません。

つるされた振り子を使うようなタイプの測定で、巨大な建物のそば、または山のそばの小さい粒子が最初の位置からきわめて微細にそれるのを測定すると、非常に不満足な結果に

終わった。

ちなみに、ニュートンは決して重力の謎を解決したと主張しなかった。

彼は、単に機能している法則を確認しただけでした。

引力の力は、距離の二乗に逆比例し、直接物体の質量と比例する。

相対性理論が落ちる物体の、引力と加速の違いを明らかにするのは不可能だと証明したとき、主に前の処置がとられた。

これは、ネガティブなもので、重力の明確な定義ではない。

我々は、まだ落下における引力と加速の違いを理解していない。

あなたは、**orgonotic** な引力と重力の関係を明らかにする実験を行ったのか？

O.

そのような実験は、あなた自身が言うように、同じ（重力）の力の影響を受けて、そのミステリーを崩すためにいろいろなテストを行われなければならないので、実行するのが難しい。

私は、そうするつもりはなく、我々が重力に関するまぎらわしい議論に入り込んだと指摘しなければならない。

しかし、その正当な理由は、ある。

実際オーゴン調査は、引力の理解する道を開くいくつかの観察をした。

まず最初に、他のエネルギー機能から判断することで、重力の機能を、引き出すことができる。

我々の **orgonotically** にチャージされた鉄球がコルクに影響を与える引力は、明らかに **orgonotic** で、電氣的引力ではない。

これは、**orgonotically** にチャージされたとき、同じ鉄球がスズのホイールをはね返す理由だ。

我々は、正と負の電氣の理論がここではあてはまらず、この現象が電氣的な概念で説明できないことに同意した。

26

E.

天文学者は、地球のいわゆる「磁場」を確認した。

その影響は、何万マイルもスペースの外へ広がると言われている。

しかし、このエネルギーフィールドの磁気特性を論ずる物理学者が、いる。

O.

エネルギー・フィールドが、我々の鉄球*のまわりにできる

それを、ソレノイドの電磁氣エネルギー・フィールドと区別するために、たとえば **orgonotic** なエネルギー・フィールドと呼ぼう。

オーゴン・エネルギー・フィールドでは、有機物質は引きつけられる、そして、金属的物質ははね返される。

しかし、強い磁石はコルクを引きつけないので、このエネルギー・フィールドは事実上磁

気ではないし、それはアルミ箔をはね返さない。

我々は、したがって、磁気でもなく電氣的でもないひきつける力の存在を仮定しなければならない。

E.

それは、今は、「静」電気概念の下で扱われているが全領域で電気と区別するならば、それは正しい、そして、それをオーゴン・エネルギーの領域に取り込んでみよう。

O.

磁力に関する **orgonotic** な引きつける力の特性を詳細に描写するとしよう。

このポリスチレン・ロッドであなたの髪の毛の表面をこすって、[コンパスの針]の磁針の近くに、それを持ってきてください。

E.

チャージされたオーゴン・ロッドは、その棒に沿ってどの点でも北極か南極を引きつける。

オーゴン・ロッドで用いられる引きつける力には、全く極性がない。

それは、両方の終端でそして、中央でもひきつける力を用いる。

たとえどんな方法で二つを配置しても磁針はそれ自身が常にロッドに垂直に適応する。

オーゴン・ロッドは、全く電磁氣的極性を示さない。

O.

我々は、**lumination** するオーゴン・エネルギーに極性がないことを発見した。

我々は、引力に関して再びそれと出会う。

チャージしたロッドを強い磁石で引きつけてみてください。

E.

それは、できません。

O.

すぐに、チャージされたオーゴン・ロッドを水に浸してみてください、そして、テストを繰り返してみてください。

E.

引き付ける効果は、消えた。

それは、奇妙です。

*See *Orgonomic Functionalism, Volume 5, page 20-ff.* [Eds.] *Orgonotic Pulsation* 27

*See *Orgonomic* な機能主義、ボリューム 5、ページ 20-ff. *Orgonotic* な [ed.] 波動 27

O.

電流と磁針との関係は、どうなっていますか？

E.

それは、非常に単純で有名です。

磁針は、電流が流れる方向に垂直に向かいます。

O.

物理学者は、磁針がこう動く理由を説明できるか？

E.

いいえ。

この現象は、既知の事実とされている。

それは電磁装置が機能する背後にある基本的原則です、しかし、誰もそれを理解していません。

O.

我々がファラデーによって電気とされた「静電気」と他方の私のオーゴンの現象とに鋭い概念上の区別をするなら、この質問に答えることができる；

そして、磁気と **orgonotic** なフォース・フィールドの区別をはっきりさせるために、ちょっとしたテストを行いたい。

いいですか？

E.

はい。

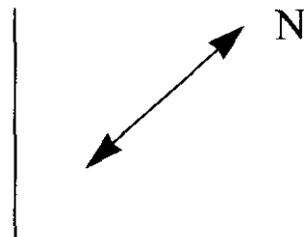
もし流れに対して磁針が垂直になる理由が説明できるならば、あなたの区別を受け入れよう。

O.

我々は **orgonotic** な引力に極性が無いということから、磁力とは異なるとした。それは湿気で消え、磁性のない材料に対しても効果を示す。

鉄のプレートに垂直に立ててください。

このプレートの中心に、性能の良い磁針を水平面に自由に動くように取り付けてください。



E.

鉄のプレートの中心で、磁針は、その南北位置を停止させる。

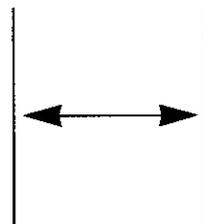
柔鉄は、通常磁性がなく、それに影響するどんな磁気も非常に速く失う。

O.

磁針から同じ距離に最初のプレートに平行に二枚目の鉄のプレートを用意してください。

E.

磁針は、両方の鉄のプレートの中心点でそれ自身が垂直になる。



O.

すぐに、針の N 極と S 極の位置を逆にしてください。

E.

磁針はそれ自身で両方のプレートに垂直に定めず、N と S 極を入れ替える。

あなたはこの現象をどのように、説明するか？

鉄のプレートが磁気効果を発揮するなら、プレートの中心からはできず、それを理解できず、磁針が N か S の方向をとる原因となることはありえない。

O.

実験を始めたとき、私は正確に同じように考えた。

物理学者による任意の方法では、「磁気」という言葉は、不正確に使われている。

磁力は極性に基づき、磁気材料の中心からは、決して出ていないので、観察された現象は磁気効果であるはずはない。

それに加えて、2枚の平行プレートは、現象のために必要です。

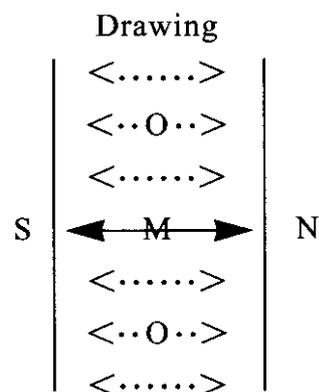
天気によって強さも変動するのは明らかで、現象は空気の **orgonotic** な変動に関係する。

私の解釈は、他の観察に基づく：

2枚の平行プレートは、プレートの中の空気のオーゴン粒子によって作られる **orgonotic** なフォース・フィールドの境界を決定する。

結論は、したがって、以下の通りだ。

磁力線は、**orgonotic** な力線のある方向にある。



29

E.

あなたは力線に対して直角方向でなく同じ方向と知っている。

だが、磁気と **orgonotic** な力線が、同方向、または互いに反対方向に走るか、まだ決定していない。

O.

オーゴン・エネルギーには 2 つの極性はなく、引きつける力と反発の 2 つの反対の機能からなる単極性なので、磁力線に関する概念である「同方向」と「反対方向」は意味がない。

オーゴン現象は、既知の概念を使って接近することができない。

その代わりに、これらの現象から新しい概念をつくらなければならない。

N か S 極は、鉄プレートの中央に位置することができる。

「**orgonotic** な空洞の一番下の終端か上端で、反応は、最も明らかに得ることができる。」

立方体を形成するように、6枚の四角の鉄のプレートを配置してください。

しかし、前もって、一旦鉄のプレートを水につけるならば、磁針の上全てで、最小の引きつける力だけ、または引きつける力が無くなることを、あなた自身でチェックしてください。

立方体の4つの上部へのりの各々の中心近くに、針を動かしてください。

E.

水にこれらを浸したあと、個々の鉄のプレートは磁針に対して少しもひきつける効果を發揮しない。

各々のケースで中の磁針のN極は、中空の立方体の4つの上部へのりの中心を示す。

O. 下のへのりの中央でもテスト繰り返す。

E.

磁針のS極は、規則正しく下部の端の中心を示す。

あなたは、物理学者にこの実験を見せたか？

O.

はい、実際、2回ほど。

彼らのうちの一人は、これは「新しいことではないと言った。」、他の人は、最初は何がおこっているか理解できず、どんな詳しい理由も云わずに、「地球の磁気が、含まれている」と説明した。

E.、いわゆる地球の磁気の磁気特性は、最近論じられた。

O.

私の意見では、当然だ。

しかし、我々が何かそれについて言う前に、更なる結果を見よう。

E.

この現象が磁気によるならば、水平位置での鉄の立方体の1回転は、磁針の位置を変化させるはずだ。

引きつける力は、立方体の特定の点に関係しなければならない。

O.

それをためしてください。

水平の縁が垂直の端に、そして、垂直の端が水平の横線になるように、立方体を90度回転させてください。

E. ...

立方体の回転にもかかわらず、磁針の反応は、前の通りです。

針のN極は、上部の4本のへのりの中心に垂直で、S極は下部のへのりの中心に対して垂直なままです。

現象は、金属の特定の点に依存せず、プレートの間で起きる効果によって決定され、特定の材質とは関係がない。

鉄のプレートの一点は、N 極を引きつけ、全く同じように他の位置にある S 極もひきつける。

O.

非常に正しい。

メカニカルな磁気材料学の解釈は、ここでは有効ではない；

機能的解釈だけが、この現象の判断に役立つことができる。

次々に、立方体の 8 つの全ての角の近辺に針を移動してみてください。

E.

針の N 極を上の方の部分に置き、下の方は針の S 極にすると、N と S の方向をそらし、上部プレートまたは下部プレートの中心を、大きな角度またはちいさな角度で、指し示す。

私は、ちょっと奇妙な考えをもった：

金属立方体は、正確に地球のようだ。

上部プレートの中心は、地球の N 極で、下部プレートの中心は地球の S 極のようだ。

O.

あなたの考えは、それほど、奇妙ではない。

6 枚の鉄プレートは、大気のオーゴン・エネルギーが集中したフォース・フィールドの境界を作る。

これらは、プレートの 3 対の間に *organotic* なフォース・フィールドを作る。

E.

我々は、ここ北半球で実験をしている。

あなたの意見では、どのような反応が南半球でなければならないか？

O.

私の意見が正しいならば、反応は正確に逆でなければならない。

南半球では、磁針の S 極は上部のへりの中心を示さなければならず、N 極は下部のへりの中心を示さなければならない。

31

しかし、この仮定を確かめるか、否定するためには実際に実験が行われなければならない。

E.

天文学者が言う「地球の磁気」は、このように地球オーゴン・フィールドの引きつける力だ。

O.

それは、観察から導かれる、唯一の結論だ。

オーゴンの高い集中は、鉄を磁化したようにする。

地球は、オーゴンを含んで、太陽から連続的にオーゴンを吸収する。

これは、熱とエレクトロスコープで視覚的に示された。

地球の大気を、明らかに越えて、宇宙に遠く広がるオーゴン・エネルギー・フィールドに

取り囲まれている。

地球の核にある鉄への地球のオーゴン・フィールドの影響は、地球の磁化と 2 つの異なる磁極、N 極と S 極の形成にむかわねばなりません。

地球の引力のフィールドは、事実上 **orgonotic** であり、磁気の特性に由来しない。

このように地球の磁気南北極は、地球の **orgonotic** なフォース・フィールドの極地的機能の効果と考えることができる。

E.

これは、より深い研究の基礎を形成する価値ある仮説のように思える。

地球のエネルギー・フィールドが事実上磁気だという理論は、多くの研究者に不満が残っていた。

オーゴンの導入は、新しい可能性を開く。

私は、今、地球の極地では無い赤道地域で、最も強く太陽の引力の影響を受けるのを思い出した。

全く同一物体の赤道での重さは、地球の極よりもわずかに少ない。

O.

オーゴンの全ての研究期間、オーゴン機能が天文学的問題と多く関係することを私自身でより強く追求するのを押しとどめるのに苦労しなければならなかった。

天文学的關係を調査することは、現段階でまだ早いように思える。

しかし、我々の **orgonotic** な立方体で観察される引きつける力の現象が地球エネルギー・フィールドと関係するはずなので、地球のエネルギー・フィールドに言及するのは、適切であった。

立方体のエネルギー・フィールドの中の磁針の動きは、大気エネルギー・フィールドの影響と、地球の磁極からの影響以外のものを示している。

E.

これまで単にこの形のエネルギーの存在が知られていなかったので実際はオーゴン機能であるすべての磁気現象を「電磁気」概念の下に理解してきたので、電磁気のフィールド概念から区別することを、主な作業にした。

地理学は、時々磁気、時々電気的に、地球のエネルギー・フィールドを考える。

電気でもなく磁気でもない第 3 の引きつける力が、ここにある。

電流が流れているワイヤーに、観察される、磁気針がそれる現象での、引きつける力はこのタイプのものになるのか？

O.

しばらくの間、我々がここに付け加えたこと全ては仮説です。そして、それは適切な実験によって確かめられる必要がある。

仮説は、以下の事実に基づく：

1. 2本の電流を流したワイヤーを平行に置くと、互いに対してひきつける効果を出す。

この引きつける力は、流れの方向に対して垂直になる。

2. 磁針は、この引きつける力の方向を示す。

3. 2枚の平行した鉄プレートの中に、我々が **orgonotic** と言ったフォース・フィールドが、発生する。

磁針は、このフィールドの力線の方向を示す。

4. 我々のチャージされたオーゴン・ロッドを電線の上におくとき、絶縁を通りぬけることができ、こうして検電器は、チャージされる、あるいは、**orgonomic** な用語でいうと、分離作用が起きる **is dissociated**。

5. 高い電圧が印加された2枚のコンデンサー・プレートの間に、フォース・フィールドが発生し、プレートに対して力線が、垂直にうごく、すなわち平行に置かれた鉄のプレートの間の力線と正確に同じなやり方で、磁針は垂直になる。

これらの事実から出される結論をまとめると：

電磁システム (**EM system**) は、電気力に垂直方向の磁力と同方向の第三の力の効果を含む。

電気エネルギーの装置無しで、2枚の平行な鉄プレートの中で機能する **orgonotic** な力線と正確に同じやり方でふるまうので、この第三の力は、**orgonotic** な特性のものとしなければならない。

電磁気システムへの **orgonotic** な力線の導入は、電流の流れる線での、磁針の奇妙な動きをうまく説明する。

33

磁針が流れの方向に対して垂直なフォース・フィールドを生成するので、現在の流れに対して磁針自身が垂直な位置をとる。

このフォース・フィールドは特別な **orgonotic** な特性を持つもので電気ではない、それはワイヤーを覆う絶縁材料を通して働く。

この全システムを **EMO**(電磁気オルゴン)フォースシステムと呼ぼう。

E.

それは、ソレノイドが磁石のようになる理由とその力が鉄のロッドを挿入することによって強化される理由を説明する。

電流が流れるコイルは、ワイヤーの方向に垂直に引きつける力としての **orgonotic** なフィールドをつくる。

O.

我々は、すぐにすべてを理解することはできない。

我々は、今まで理解できなかった1つの現象を理解した。

しばらくの間それでいこう。

仮説が、正当化されたのだから。

2つのワイヤーで気流が同じ方向に流れるとき **Orgonotic** な引力が起こり、気流が、反対方向に流れるとき **orgonotic** な分離または反発が2つのワイヤーで起こる。

たとえまだ理由がわかることができなくても、これは起こる。

この引力と反発は、電気理論の2つの電氣的な流体によって説明できない。

しかし、理論に従って、正と負の両方の電氣的な単位が、両方のワイヤーの中を流れる。

両方のワイヤーで、ある場合はなぜ引きつける力だけで、他の場合は反発のみなのか、電磁気理論では説明できない。

E.

電氣的にチャージされた2つの物体の従う引力の法則は、基本的にニュートンの重力の法則を決定する法則と同じものだ。

両方のケースで、引力は距離の二乗に逆比例する。

引力の場合は2つの物体の質量に比例し、電氣的引力の場合、それは物の電氣的チャージに比例する。

O.

磁氣的な引力を決定する法則を加えよう。

この法則は、引力が距離の二乗に反比例していると述べる。

34

E

3つの法則の共通性は長く知られていた、しかし、それはこれまでこれらを1つの共通公分母にすることが可能だとはわからなかった。

私は、あなたが何を引き出したか知っているのも、この理論にとっても精通した。

あなたは、オーゴン・エネルギーが3つのタイプの引力の公分母であり、電気と磁気の引力と同様に、引力の原因だと仮定したいとおもっている。

地球で発生している引力は、このように地球のオーゴン効果だ。

磁場と同様に電気効果は、論理的にまた、オーゴン・フィールド効果だ。

O.

そのような考えを退けることができないのは本当だ。

避けられない特定の論理が、これらにある。

しかし、あなたは前に進みすぎている。

我々には、引力または惑星の動きを表すことが可能な実験的な準備はまだない。

私は、これらの仮定的な考えを確かめ、反証をあげるのに成功するまで、長い時間がかかるのを恐れる。

我々が **orgonotic** なフォース・フィールドで物体を動かすことができるまで、オーゴン・フィールドと、重力場の特性は証明されない。

私は、これがどのように完成するか全くわからない。

あなたは「現在の電気」から「静電気」を区別することを認めなければなりません、そして、オーゴン機能にそれを分類することは実験的に正当化されるだけでなく、また、理論的に非常に重要です。

E.

私は快くそれを認める。

あなたのオーゴン理論は、正確に電磁気理論によって不可解なままにされてきた隙間をうめる。

オーゴンの存在を疑うことはできないので、電磁気科学はこれらの新しい事実を扱わなければならない。

O.

あなたはこれを、残念だと言った。

私は、この残念さを異なる方向に感じた。

オーゴンがネガティブな電気だとするならば、それは非常に便利で簡単だったろう。

しかし、目下の情勢では、対応しなければならないことがあまりに多い。

E

私はあなたが今思っていることを知っている。

あなたは、エーテル仮説を同様に含めなければならないことにしりごみしている。

O.

その通り。

私は、それを議論したくはない。

E.

わかった。

次の機会に話したいか何か提案があるか？

35

O.

私には、他に議論する話題は何もない。

E.

それは、哀しい。

私は、2、3月後に再びあなたを訪ねる。

その時まで新しいことが何もなければ、古い問題をもう一度議論することができる。

O.

私は、再びあなたに会いたいと思っている。

続けましょう。

電磁気学者との会話で明らかにする電磁気とオーゴン・エネルギー
の違い

オルゴンエネルギーフィールドにおける ORGONOTIC な 引力と反発(収縮と膨張) (1942).

Electrophysicist (E.)

我々の最後の議論のあと、私自身で **orgonome-ter** [検電器]の放出速度が雷雨の少し前に増加することを確認めた。

嵐の間、何回かの測定で、普通は 30 分または 1 時間であるのに、1 秒または数秒で放出する。

これはあなたの観察を確認する。それは天候の問題の新しいアプローチの通路を開く。

この観察は、説明できない。それはとにかく私がやり始めたので、身を引くより、未踏の困難な領域の進展に参加するのは面白い。

あなたの解釈には、影響される。

生物物理学的に機能する **orgonometer** は、悪い天気より好い天気で長く偏向する反応を示すのか？

このように、オルゴノメーターは生物物理的エネルギーの効果記録するのに、なぜ生物物理的な反応に関係しないのか？

オーゴン生物物理学者 (O.)

私は、何を意味するのか、全く、わからない。

E.

好い天気ときは、動物は気持ちよく手足を伸ばす；

悪い天候では、それ自体が低下する。

その収縮と膨張は、天気と一致し、**orgonotic** な粒子の分離と引きつける力の機能とに、完全に一致する。

O.

あなたがこれを考え抜いたことがわかってうれしい。

最初、私が放出速度のメカニカルな解釈を否定しなければならなかったとき、私は困っていた。

徐々に、あなたがちょうど出した考えに、私はなっていた。

私は、この前、それに言及しなかった

1939-44 に書かれセオドア P.ウルフによってドイツ語から翻訳された。

我々の友好を妨げることを考えてエリカ・ウルフ・バークの許可で再版された。

しかし、**orgonometer** の端子が広がるか、長い時間離れているのは、大気のオーゴンの高いテンションでそれが長く続くと言うのは完全に正しいと思う。

Biophysically に言えば、悪天候の弱いオーゴンの中より強いオーゴンのなかのほうが「気分が良い」。

言い換えると、引きつける力と分離が強いかわいいかであってメカニカルな電気エネルギーの場合のような、電位差を扱っていない。

生物物理学の波動は、律動的な交互の伸縮から成る。

オーゴンの膨張は、**organotic** な粒子の分離または反発と一致する。

収縮は、**organotic** な粒子の協調または引きつける力と一致する。

あなたは、この結論を正しいと考えるか？

E.

はい、それは理論的に正しいが、実験的に示すことができない。

それを示すには、非生命のシステムで膨張と、収縮を律動的にさせなければならない。

O.

引きつける力の形、つまり反発と協調の形で粒子を分離させることを再現することは可能だ。

しかし、まだ 1 つの体で交互に引きつける力（収縮と協調）と反発（膨張と分離）を作り出すことは可能ではない。

それは、こびとホムンクルスをつくることと同じことだ。

しかし、異なる物質で別々にこれら 2 つの基本的オーゴン機能を再現することは可能です。

E.

これは、単なる理論を越えた実際的で重要なステップであることは確かだ。

実験的な装置は、何か？

O.

これは、単純です。

だが、しばらくは考え方が問題だ。

反発と引きつける力は、エネルギー機能です。

これらは、物質の状態（例えば崩壊、分離、協調、結合）の変化に対応する基礎になっている。

したがって、物質の状態は、そのエネルギー機能によって決定される。

反発と引きつける力の機能を示そう。

我々は、ワイヤーで **organometer** の金属ロッドを、およそ直径 3cm の鉄球につなぎます。球の両側の上、2-3 mm 離れたところ赤道の頂点に、我々は物質を振り子のようにしてつるす。

後で説明する理由のために、振り子の長さは 16cm にしてほしい。

右の振り子は、小さなコルク、すなわち有機物質にする；

左は（5mm の長さの薄いスズ箔にする。

あなたがみるように、振り子はまったく動かない。

すぐに、orgonometer をチャージする。

E.

コルクの部分は、金属球の方へ動き固着する。

スズのホイールは、最初引きつけられるが、すぐに反発される。

O.

スズのフルーレは、その最初の垂直に停止していた位置に戻ったか？

E.

いいえ、それは金属球から逃げていく。

すなわち、orgonotically に Excite した金属球は、コルクの部分を引っつけ、スズのホイールをはね返し、遠ざける。

O.

球をチャージしてください。

E.

コルクは、球を固着し続ける。

The tin foil O

スズのホイール O

' IS ~ OF ;

『 ~ OF です ;

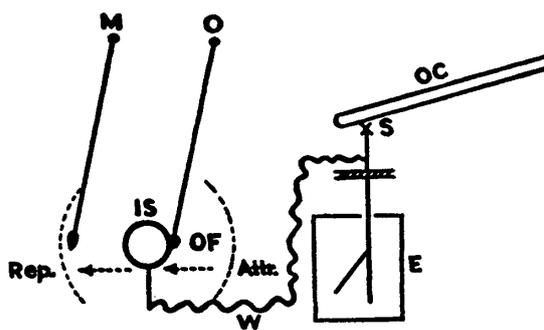
Reps ;

代表 ;

Id1k W

5

OG



金属的材質のオルゴンの力の orgonotic な反発と orgonotic な引っつけることのデモンストラーション。

O:

organic 材質。

E :

electroscope (orgonometer), grounded or M:

検電器 (orgonometer) は、接地する、あるいは、M につなぐ :

metallic material. not grounded.

金属的な材質つなぐ。接地しない。

OF: オーゴン・エネルギー・フィールド。

W: 線と接続する。

IS: 鉄球。

OC:

orgone carrier (polystyrene rod).

オーゴン・キャリア媒体 (ポリスチレン・ロッド)。

Attr.:

attraction.

引きつける力。

S:

spark to the tip of the electroscope.

検電器の先端の火花。

Rep.:

代表:

repulsion.

反発。

direction of deflection.

それる方向。

r

i

私

遠ざける距離が増加する。

我々は、反発が増大する方法を観察できる。

コルクを引きつける力の増加は推測だけでそれを観察できない。

O.

金属球からの全く同一の刺激で、きわめて対照的な効果がうまれる。:

それは、金属をはね返し、有機材料を引きつける。

あなたの理論によれば金属と、有機物質に存在する 2 つの電氣的流体の効果は、双方とも同じでなければならない:

金属と同様にコルクでも最初は引きつける力で次に反発がおきなければならない。

我々の実験では、違う 2 つの反応がひき起こされる。

E.

引きつける力と反発の 2 つのとても対照的な機能以外は、オーゴン・エネルギーは、きわ

めて対照的な 2 つの流体ではない。

これらの各々の機能は、物質の性質と特定の関係がある。

In chemistry, one knows metals, met-alloids, and carbon compour_ds

化学で、人は金属、メタロイドとカーボン compour_ds を知っている。...

O.

あなたの推測は中断しなければいけない。

化学機能との関係の議論は後にしよう。

とりわけ、それは化学の親和力のエネルギー機能に関係する。

我々は、まだその覚悟ができていない。

この 1 つの実験から得られる結論に限定しよう。

さもなければ、推測に夢中になってしまう。

二番目の **orgonometer** に接続した二番目の金属球を実験にもってこよう。

球 II は、球 I からだいたい 1-2 に cm の距離にある。2 つの球の間の中央に、正確にコルクの小さい部分が、つるされ、それにはうすい鉄と細い銅線が四方八方に入れられている。

それは、有機的であると同時に金属的材質を組合せたもので、それを **MO** と呼ぶことにする。

球 I は全面スズで、球 II はコルクにしている。

orgonometer I をあなたの髪からのオーゴンでチャージしてください。

E.

MO は、2 つの球の間で前後に揺れる。

各々の球は、交互にそれを引きつけて、はね返す。

球 II によってコルク (**O**) が速い状態で引きつけられとき、球 I によってスズのホイール (**M**) は、はね返され遠ざかる。

私は、直接的な影響を与えずに、**orgonometer II** が自発的にチャージされたことに気がつく。

それをどのように、あなたは説明するか？

OM=~

M

OF

a

OF

~oM a

orgonotic な反発と引きつける力の機能のデモンストレーション。

OM = **orgonometer**;

OF = オーゴン・エネルギー・フィールド;

I, II = iron spheres I and II;

I、II =鉄球 I と II

M = pendulum with metallic material;

M =金属的材料による振り子;

MO = pendulum with combination of metallic and organic materials;

MO =金属と有機材料の組合せによる振り子;

O = pendulum with organic material.

O =有機材料による振り子。

O.

全体のシステムは、オーゴンによってチャージされる。

ロッドから **orgonometer** のチップへの各々の火花は、システム全体にオーゴン・エネルギーの特定の量を加える。

オーゴン・エネルギー・フィールド (OF) は、両方の球のまわりで作られる。

スズのホイール (M) (1 オーゴン・フィールドのそばで影響される) は、はね返されて、遠ざけられる。

両方のフィールドのそばで引きつける力と反発とに影響されて、有機物質と金属を組合せた MO は前後に振動する。

E.

orgonometer I を接地してみよう。全体のシステムは、徐々に放出される。

orgonometer II をチャージする実験を繰り返そう。

我々は前に **orgonometer I** をチャージしたときと、同じような結果を得る。

O. 球の間に違う材質を組合せた MO の代わりにスズのホイール (M) を置いてみよう。

すぐに、球 I をチャージしてください。

E.

スズのホイールは、球の間で動揺する。

O.

orgonometer の端子に触れて、両方の球から放出させてください。

そして、球 II をチャージしてください。

E.

放出の間、スズのホイールは、依然停止している。

球 II をチャージすると、それは再び振動し始める。

O.

もう一度両方の球から放出させよう。

それを、チャージすると各々は交互に火花を均一に発する。

E.

スズのホイールは、振動せず、中央に停止している。

Thus it is held fast by the two repulsion fields between the two spheres.

このように、それは2つの球の間の2つの反発フィールドによってしっかり保持される。

私は、これを確かめた。

考えが正しいならば、私が球 I のチャージを減らすと、スズのホイールは球 II の方へ、それ
ず、球 I の方へ進まなければならない。

球 II より球 I を強くチャージすると、スズは球 I から球 II の方へ移る。

O.

O. もう一つ別のコントロールは、球の1つを完全に放出させることである。

E.

E. スズのホイールが球 I の間で活発に振動する..

私は、球 I を放出する

スズのホイールは、活発に球の間に揺れる。

現在球 II を放出すると。

ホイールは、もはや動かない。

O.

有機材料は、引きつけられ、しっかりつかまる。

金属は、しばらく引きつけられて、それから後まったく近づかない。

したがって、MO は引きつけられもせず、遠ざけられもしない；

それは、少し振動するだけだ。

E.

MO は、2つのチャージした球の間に鮮やかに揺れる。

それは、チャージした球の近く前後にわずかに揺れる。

球のエネルギー・フィールドは、少しMO を引きつける。

有機材料の完全な引きつける力は、金属的材料の反発を打ち消す。

球はMO をM のように明確に、遠ざけない、なぜならば、MO のO の部分の引きつける力
が反発を打ち消す。これらの実験が、明白に示している。

これは、2種の素材を組合せたMO での、金属的物質の反発と有機物質の引きつける力を
証明する。

何が、2つの球の間の有機材料に起こっているのか？

O.

MO と違って、O は、振動せず、M のようにも静止しない、かなり長い時間、1つの球に、
そのあと別の球にと、交互に付着しようとする。

これは、私がまだ理解できない現象を伴っている。

E.

誰も新しい実験のすべての詳細を知ろうとしなかったが、すぐに明らかになった。

O.

実験のこの総体から現れた 2 つの事実を特に強調したい：

1. 振り子の刺激はすでに静まっている時、球から放出させておいても、つないだ **orgonometer** に指で触れると、刺激を新たに発生させることが可能だ。それは、接触を絶つことで発生する **lumination** を思い出させる。しかし、この詳細は、まだまだ理解できない。

2. 興奮させた金属球のそばに、**MO** を置くと、それは振り子運動だけでなく循環するねじれ運動もみせる。これも、理解できない。

しかし、我々はこの回転を覚えておかなければならない；

誰も、それが証明とどのような重要な関係があるか予測できない。

E.

あなたは、非常によく観察した。

私は、両方の現象をみたが、これに言及しなかった。

それは、機械の妨害の問題ではないか？

O.

いいえ、異なる状況下でこれらは再現可能です。

電気理論によれば、電気チャージは、チャージされたものからチャージされていない物体に影響することによって移動します。

琥珀のロッドこすると、紙を引きつける。

我々の手のひらとこの理論を関係づけると、我々の手のひらはチャージされている仮定できる。

しかし、手は自由につるされた金属箔を引きつけない。

どのように、あなたはこれを説明できるか？

E.

私には、その説明ができない。

O.

スズのホイールが反撥されるように、金属球のまわりにオーゴン・エネルギー・フィールドを発生させてください。

E.

私は、そうした。

O.

スズのホイールの近くにゆっくり手のひらを持ってきて、再び手をスズのホイールから離してください。

E.

私が近くに手を持ってくるたびに、スズのホイールのは私の手に接近し、私がそれを取り去ると、再び戻る。

O.

あなたの手のチャージは、変化していない。

スズのホイールがオーゴン・エネルギー・フィールドにないならば、あなたの手はスズのホイールの引きつける力を使用しない。

しかし、エネルギー・フィールドがホイールのまわりに発生するとすぐに、あなたの手の引きつける力の効果が現れた。

もし電氣的影響の問題ならば、効果は最初から存在していなければならない。

それは、そのようではなかった。

球とあなたの手と、2つのオーゴン・エネルギー・フィールドが互いに接触したとき、現れる。

E.

これらの現象は、電氣の観点から理解できない。

オーゴンは、基本的に電氣と異ならなければなりません。

これらの事実の単純な論理的確認は、私自身が確かめた。

オーゴンは、大気圏や、全ての物質で、至る所に存在する。

それは、電話線の間、または高く励起したパイプに存在するはずだ。

これらのワイヤーは絶縁されず、そして、たとえそうしたとしても、オーゴンが絶縁材料を透過するので、それは何も変化しない。

オーゴンがもし単純な電氣ならば、ワイヤーの間に伝導があるでしょう、そして、放出と電氣的な妨害がある。

電報と電話は、不可能になる。

この場合は、そうではない。

オーゴンはしたがって、電話線の間で伝導を確立せず、論理上、電氣ではない。

O.

これは、電氣の概念の思考欠陥に対する重要な異議です。

オーゴンが電氣と同じものならば、飛行機の絶縁と絶縁材料は全く不可能でしょう。

私はオーゴンと、ここに思い浮かんだ「非電磁氣」の関係の議論を別の機会まで延期するように提案する。

E.

私は、私自身この関係にあると考えなければならなかった。

2枚の condenser プレートの間のフィールドに置かれた、異なる絶縁体がなぜ違った作動をするか、不明瞭なままでした。

dielectricity 「非電磁氣」定数の違いは、謎です。

O.

我々は、まだこれを議論する準備ができていない。

E.

わかった。

私は、オーゴンが電気と異なるエネルギーだと確認され、あなたの発見が電気理論のためにとっても重要だと理解し始めた。

O.

O.

生物学的エネルギーへのまだ隠された多くのアプローチがある。

数年の難しい実験的な作業で私はそれを見てきた、現在の電気理論は問題へのアプローチを提供するのに失敗するだけでなく、それは常に誤った道に導いた。

これを逸話で伝えたい：

ウィルヘルム皇帝研究所からの生理学者の助けを借りて、1935年にベルリンで人間をテーマとして私の最初の生物物理学実験はおこなわれた』。

我々は、搔くことによって平凡な状態にされた皮膚の表面と比較して、生物学のうえで、興奮状態のときの体表面の性感帯が生物電気ポテンシャルの増加を示したかどうか、知らなければならなかった。

私はすでに喜ばしい状態での副交感神経刺激によるポテンシャルの増加を観察していたが、講義をするために海外に行く間、アシスタントに更に実験を行うよう頼んだ。

6週後に戻って来たとき、アシスタントは「何にも、おきなかったと私に話した。『Cf ライヒ 「性的関心と不安の生物電気の研究」、Farrar, Straus and Giroux, New York, N.Y. 1982.

[Eds.]

喜びの中で性感帯でポテンシャルの増加はなく、私の仮説はしたがって、誤りだったことが明らかになった」。

私は、彼に実験の手順を示すよう頼んだ。

彼は6週間、きわめて高い精度でもって、乳首の上に粘着テープでガラスのカップを固定した。

ガラスのカップは、電解質の流体で満たされ、オシログラフに接続した非極性の電極を備えていた。

メカニカルに言えば、完全無欠で、あらゆる詳細が全く正しく準備されていた。

1つの事だけが見すごされていた、それは決定的なものだった：

ガラスのカップが粘着テープで貼り付けられるならば、生命器官は喜びの反応をおこさない！

E.

あなたの言うことを正しく理解したとするなら、これは非生命の領域から取り出されるメカニカルな方法が生物学的刺激の現象の場合適用できないことを意味する。

O.

それは私の主張そのものです。

それは、かなり多くの期待外れの経験に基づいています。

生きている物質の機能方法は死んでいる物質と基本的に異なる。

私のアシスタントはメカニカルな学問の概念と方法において優れた訓練を受けた、しかし、彼は生物学的概念として「感情」をどうすべきかわからず、彼の手順が不完全であることを理解しませんでした。

E.

あなたはメカニカルな方法を使用して最初に失敗したので、生物学的機能に合った新しい方法を考え出さなければならなかったのですか？

O.

そうです。

しかし、それは十分ではなかった。

生物物理学の法則は生物学的プロセスの観察だけから推論できるので、観察と実験の方法は、生物学的でなければならない。

このように、我々はオーゴン・エネルギーの性質を得るために生命有機体での仕事に固執する。

同時に他方では、純粋な物理的なオーゴン機能に達するためには、自身を生命有機体の領域から離さなければならない。

理想的には、オーゴン-物理検査実験は、生命エネルギー機能を納得がいくように示さなければならない。

生物学的オーゴン実験は、純粋な物理的実験に同意しなければならない。

E.

2つに分れた電流の仮説はどこにも導かなかった。

有機体は、1つはマイナスに他はプラスに充電された2つの極性を含まず、そして、マイナスとプラスの充電の間の同等化もない。

O.

より高いか、低いチャージが、あるのが真実です。

しかし、高いチャージから低いチャージへのエネルギーの流れはない。

これに反して、生物学的な特別のメカニズムは、より弱いものからより強く興奮した部分へのエネルギー流がある。

アメーバの強く興奮した偽足は、有機体の非励起状態の部分から、プラズマを引きつけます。

全プラズマの流れは、「這うように流れる。」、lumination ("excitation, 「刺激」"と "emotion (「感情」) は単極性で、電位差と関係がない。正と負のチャージの同等化は存在しない。

E.

正と負の電気の引きつける力と、プラスとプラスまたはマイナスとマイナスの反発の力を、著しく対照的な非電氣的な引きつける力と反発機能と交換した。

O.

電気の理論は、正と負の対立が中立の状態から発達すると仮定している。

生命有機体に、中立状態の概念は、適用できない。

、生命有機体は、発電機のように決して完全に落ち着いていない。

統一をめざし、常に機能している生物学的エネルギーは、生命プラズマまたはコロイドの中の、粒子の引きつける力と反発の 2 つの著しい対照をなす方向の中で働く。

粒子の反発は、分離または膨張として表され、粒子の引きつける力は協調または収縮として表される。

オーゴン生物物理学は、全く物理的に、全く同一のエネルギーのこの 2 つの著しい対照的な機能を示さなければならなかった。

数えきれない失敗の後、電気的な概念が捨てられた時だけ、このデモンストレーションは成功した、そして、実験は生物学的な引きつける力と反発の見地から、行われた。

E.

革、ガラス棒とスズのホイールなども互いの関係を客観的に調査して表にまとめるまで、何も意味しない。

スズのホイール箱の動きが生まれるには革でガラスのロッドをこすることが必要だ。

O.

私は、研究の最大障害の 1 つは科学が本当には理解していない個々の事実を分離していることだと常に理解していた。

フィールド

Periphery

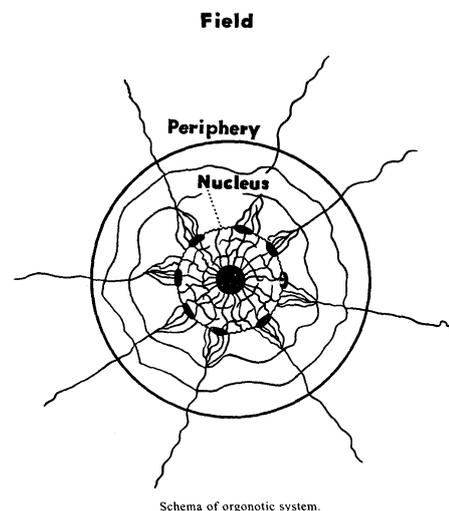
周辺

Nucleus

核

Schema of organotic system.

organotic なシステムの図解。



科学的な調査は、事実関係を本質的にわかりやすくする。

生物学的プラズマパルゼーションの問題は、それ自体

を交互に反発と引きつける力で（すなわち生命コロイドの粒子を）膨張と収縮させ（または分離と協調させ）. ことにある。

性的経済が自律生命系の脈動機能の基本を理解し始めたので、生理学と生物学における数えきれない認識されなかった事実関係が理解できるようになったことは驚くべきことでした。

31

あなたが知っているように、機能の **plasmatic** な公式（緊張-チャージ-放出-緩和の 4 拍子）は思考ではなく、実験によって発見されたものでした。

既知の生理学的事実の公式は、後で性感帯での生物学的電気実験によって確かめられた。

E.

理論にもどりましょう。

実験を続けるために、私はあなたの理論的立場を理解しなければならない。

さもなければ、私は突飛な個々の解釈によって別々の調査結果を簡単に理解してしまう。

O.

これらの前後関係から事実を取り出して、基本的な理論から分離し、すべての事実ごとの特別な「説明」を見つけるのは、簡単ではない。

たとえば、チャージした検電器の近くにあなたの手を持って来るなら、検針は下がる。それは「チャージされていた容量への影響です。」

もし摩擦したゴム・ロッドを近くに持って来るならば、検針は上にそれる；

それは、「影響の効果です。」

もし検電器ケースを接地した金属と接続するならば、増加する；

これは、「プラスにチャージされた検針への地球のマイナスのチャージの影響です。」

オーゴン・ロッドが放電管 **electric tube** のそばに持ってきて移動すると、テレビ放電管 **tube** はチラチラします；

これは「イオンの影響です。」稲妻が雲と地球の間にあるならば、これは「雲のプラス電気と地球のマイナス電気への放出である。」、しかし、地球との接触なしで、2つの雲の間に稲妻が発生するときは、雲は突然、プラスだけでなくマイナスにもチャージされていることを見なければならない。

空気の電気だけをみれば、稲妻は何百万ボルトも含む。

それは「水滴表面の電気チャージの効果」である。

E.

その説明の問題だけで、十分だ！

他の物理学の領域でも、言葉の魔法で科学的な説明がされているのを私は、知っている。

しかし、我々は新しい事実に手を伸ばしたい。

O.

私は、そんなに簡単に言葉の魔法でごまかすことができない。

私とその言葉の魔法に対する長年の敬意を失い、ついに自主的にオーゴン研究の独立宣言を決心するまで、必要なあらゆる段階で、大きな尊厳と権威をもって私の批判に言葉の魔法が使われた。

私が顕微鏡で **bions** のパルゼーションを示したとき、これはパルゼーションを説明することができず、「ブラウン運動」の問題だと言われた。

SAPAbions（それはオルゴンエネルギーの領域に道を開いた）は、「単なる sarcinae.」と言われ性格分析は「古いガラクタ」または「全て間違っているといわれた。」、生命機能の公式に基づく Vegetotherapy ビジタセラピー自律神経治療は「単純なマッサージと言われた。」

オーゴン・アキュムレーターに関して、多くの物理学者は、その言い分を立証することもなく、「もちろん」、金属キャビネットはウォーマーであると言った。

このように、我々は言葉の魔法をうまく逃げるできない；

我々は、それを克服しなければならない。

E.

言葉だけの解決の代わりに、正しい問題解決で圧倒しよう。

これら明確な現象がそのままにされ、これまで一人の物理学者も天文学者も注意をひかなかったのは問題です。

O.

あなたは、間違っています。

大気のオーゴンは、観察され、何百人もの物理学者、天文学者、気象学者、生物学者と化学者によって報告されてきた。

オーゴンがずいぶん昔に実際的な方向で発見されなかったのはメカニカルな自然科学の学問の断片化（メカニカルな学問的の言語表現）による。それは共通機能による説明（すなわち統一をめざす考え）の不足と考えられる。

E.

私は、何を意味しているのか、理解できない。

O.

天文学の場合と同様に、気象学でも全く同一の現象（大気のオーゴンの波状に **flimmering** する動き）が、見付き報告された。

気象学では主に日中の空気の観察から、大気のオーゴンを「水の蒸発の結果うまれる「青いかすみ」と **flimmering** として知られている。他方天文学は主に夜観察をするが、天文観察における「光の拡散」「視界の乱れ」妨害と言って、オーゴンを知っている。

地質学者と物理学者は大気のオーゴンを「地磁気のために空がゆらめくこととして知られている。」物理学者も「静電気"static."」として、オーゴンを知っている。天文学者と物理学者は妨害として主に大気のオーゴンを経験している。

検電器での自然発生的放出は、大気のオーゴンの自然現象です。

物理学者はそれを「自然放電」と呼んで、それがイオン効果の計算を妨げるので、それを除外するようにしている。

船のマストでのオーゴン **lumination** は、「聖エルモの火と呼ばれている；

「数百キロメートル上空の **lumination** は、「北極光」と呼ばれ、2、3百メートルの上空のそれは、「ヒートライティング熱した稲妻」と呼ばれる

部屋の壁での **orgonotic** 明滅は、「単に光学的な主観的印象と言われている。」

空の青（明確なオーゴン現象）は、「単に日光が青く吸収されたものだ。」

原形質の青い緑彩色は、「単に屈折現象です。」

ホタルの **lumination** は、単なる「黄燐。」と言われる物質の発光である。

崩壊した木の暗闇の **lumination** は、「単に腐敗現象です。」

自然科学がメカニカルに分割しないで、大変不都合な、あり余る程の概念で、考えず、作業しないならば、天文学者、地質学者と気象学者はずいぶん昔に大気圏でのゆらめく現象の知識に到着していたでしょう。

天文学者は、プラネタリウムの中の星でさえ明滅することがわかっていた。

気象学者と共に、物理学者は検電器の自然発生的な放出に法則的变化があることがわかっていた;

たとえば雲が形成され、雨の前になると放出速度が増加することと、午後の強い日光で減少することに法則性があることである。

それは、多くの散乱する事実を統一的に理解するエネルギー的な機能主義と宇宙エネルギーの現象の新しいタイプの科学的研究法の勝利でした。

この理論的理解は **orgonotic** な部屋の構築と、区切られたローカルな領域で大気圏の中で **flimmering** する **lumination** を再現すること、更に熱電子と電子スコープで宇宙エネルギーをデモンストレーションすることにつながった。

E

この異なった広い領域での異種の現象の理論的統一は理論を確かめるための新しい実験を順番に実施することに導くだけである。

O.

オーゴンの発見への道は、それとは実際異なるものでした;

それは、どんな物質にも **bionous** な構造がありそれが膨張するのを見つけたことから通じていった。

しかし、あなたが言った過程が必要だったかもしれない。

E.

次にオーゴンの熱電子的な発現を議論することはどうだろうか?

O.

いいですよ。

ZReich refers here to the orgone energy accumulator.

ここで Reich は、オーゴン・エネルギー・アキュムレーターに言及する。

ウィルヘルム・ライヒの「ORGONOTIC な、熱」(1939年5月-1944年2月)。

E.

私は、あなたの orgonotic な熱の実験をよく知りたい。

物理的熱理論に多くの欠陥が、ある。

たとえば、太陽のそばで発生する熱は、よく理解されていない。

単純な燃焼熱であるはずはなく、さもないと、太陽はずっと以前に燃え尽きていた。

太陽の放射による質量の損失は、およそ 4.2×10^6 グラム/秒、に達する。

これは、1億5000万年でその質量のおよそ1%、または4,200,000メートルトンと一致する。

地球単独で、およそ毎分、cmにつき2カロリーの熱を絶えず受けている。

この巨大な放射された熱エネルギー量を理解するのに、それが原子を構成する熱（すなわち物質の崩壊による熱）以外の、物質の燃焼によって発生する熱ではないと仮定した。

O

太陽の近辺から宇宙に放射される熱が、およそ1億4900万キロメートルの距離の地球へ行く途中で失われないことを誰もがどのように説明するのか、絶対零度に近い宇宙で、熱の急速な同等化はなぜおきないのか？

E.

私はそのような考えを知らない、しかし、それは疑う余地なく重要だ。

それについてあなた考えは？

O.

オーゴンの発見は、驚くべき理解につながった。

E.

日光への露出を通して簡単に orgonometer に数百ボルトチャージすることができる事実を私は覚えている。

それは、太陽が地球に直接オーゴン・エネルギーを放射していることを意味するはずだ。

オーゴン・エネルギーは、熱することなく orgonometer に現れる。

つまり、熱はエネルギーのただの表面的な顕れで、エネルギーそのものではない。

しかし、私はまだオーゴンと熱の関係について考えることができない。

経験によれば、オーゴンは全ての物質を透過する。

現在まで、熱の研究は不規則性を見せなかった。

全ての温度差は関係する物質の伝導率によって、より速く、またはゆっくりと、低い温度と高い温度とが同等化される。

現在、オーゴンは至る所に存在し、集中を変える際にだけ、その違いが発見されるはずだ。

この場合はそうではない。

O.

地球のような惑星の材質の配列をミニチュアで模倣する場合だけ、温度の同等化のこうした不規則性の再現が成功する。

そして、既知の一定の種類熱源でなくとも、一定の温度差が確実に見つかる。

E.

私はあらゆる驚きを覚悟しているが、それが実際に証明されたならば、爆弾だろう。

O.

私はこの「爆弾」が爆発するとき、「解明できなかった」突き通せない現象を解明することになる壁の手前を、多くの物理学者が掘り崩すだけに終わるのではないかと恐れる。

E.

あなたは、あまりに悲観的だ。

O.

いや、私の、経験を語っている。

しかし、最初、全ての温度差の同等化の法則が実際に正しいことを私たち自身で確かめた。

非常に正確な十進温度計が、ここに4つある。

土の表面から2インチ下にこれらを置いてください。

あなたは、日陰か、日当りのよい点かを選ぶだろう。;

いずれにせよ温度計の数値は、直射日光から保護されている。

E.

私は、日当りのよい点が好きだ。

4つの温度計は、同じ温度を示す。

Soil Level v' i

土レベル v' i i

-Blanket~///~・I'%'~

W001 t1

1

n~ediew...,~

i・I-Gla;

Illa 土 i

Absorption of energy

エネルギーの吸収

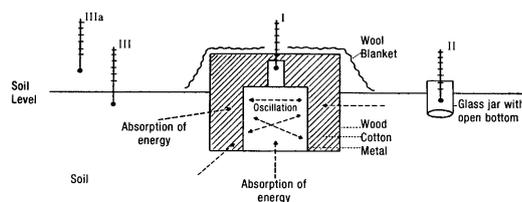
戸外での To-T 測定。

O.

我々は地中にこの装置を埋める。

装置は、外の木の箱と1立方フィートの薄鋼板の内部の箱から成る。

2 または3つに階層化した装置を使うことは、良い考えです。



箱の上部に、温度計の挿入のための小さな口があるガラスのシリンダーを挿入します。
装置が直射日光にさらされないように、全部土でおおいます。

温度を測ってもらえますか？

E.

E.

装置の温度計は、他の温度計よりはるかに高い温度を示す。

現在、違いは9度Cです

O.4月の太陽はあまり高くない。

夏は最高20度の、温度差を見、これらをTo-Tの違いと言おう。

それは、材料の配列によって生じ、土の平均温度より上になる。

実験の全部のフィールドで太陽放射が同じなので、材料の配列の結果で温度差がうまれる
だけだ。

E.

曇り空でした。

温度差は、徐々に2度Cぐらいまでに減少する。

O. 豪雨の間と前には、0.1-0.4度Cぐらいの非常に低い数値に減少する。夜は、日中より非常に小さい。

正午頃に増加し、日没頃に再び減少する。

言い換えると、我々は毎日オーゴン緊張度のカーブと、同じバリエーションを見る。

温度差のカーブは、大気のオーゴンの緊張カーブとほとんど平行している。

Op 3, ~ Op Accu

オペ 3 (~オペ Accu)

2.5

2.5

Op Accu

オペ Accu

Op 2

オペ 2

Op Room

オペ室

t.5

t.5

To~~~

Op 1 "-

オペ 1 「-

To-T

Op Room~~~

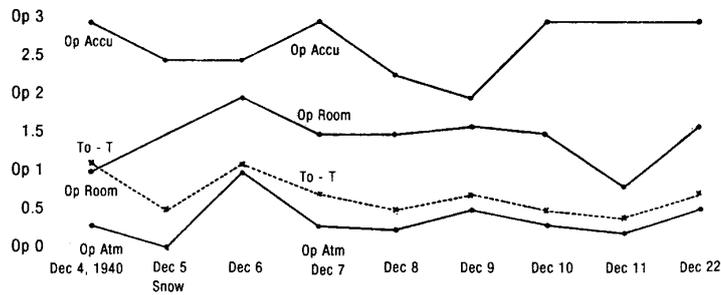
0.5 ~.~:

Op 0 Op Atm

~1

オペ 0 のオペ

気圧~1



1940年12月4日12月5日

Snow

雪

-

r

r

Op Atm

オペ気圧

Dec 6 Dec 7 Dec 8 Dec 9 Dec 10 Dec 11 Dec 22 Measurements of the atmospheric orgone in the open air, in the orgone accumulator, the orgone room, and To-T.

12月6日12月7日12月8日12月9日12月10日12月11日12月22日、オーゴン・アキュムレーターと、オーゴンの部屋における To-T、大気のオーゴンの測定は、開かれた大気でされる。

Op = orgone tension (Op 1 corresponds to To-T = 1-C.)

Orgonotic Pulsation 37

オペ=オーゴンの緊張力 (オペ 1 は、To-T= 1 度 C と一致する。)

E.

私には、異議がある。

オーゴン温度計が装置の上にある土の中の空気の温度を測るとき、制御温度計は、土に触れている。

上の装置と同じ状態にするには、制御温度計の先端のまわりを、ゴム・ホースでかこんでみる。

結果は、同じだ。

オーゴン・アキュムレーターの内側の温度計は、金属表面の上にある温度計より数度低い温度を示す。

O.

私がこの事実について、著名な物理学者に話したとき、彼はありえないと言った。

オーゴン・アキュムレーターの内部の温度は、その表面の上より常に低い。

この事実は、説明不能だ。

E.

私は、金属装置と同じやり方で、単純な木の箱を埋めるつもりだ。

木の箱の上の温度は中と同じだ；

その制御温度計はおよそ 0.2 度 C. 高いだけだ。

この実験装置で、金属は有機材料と全く違った反応をする。

私が知る限り、そのような現象は物理学で知られておらず、私はそれを正しく説明できなかった。

O.

物理学の他の領域の場合のようにオーゴン物理学でも理解しがたい、個々の調査結果が残る。

たとえば、対応する理論的知識なしで他の電氣的な事実、電氣的なフィールドでのコンパス針の偏向をあなたは説明できない。

すでに我々は、もしも、有機材料だけを使うと、それが温度差の消滅を説明するが、金属表面の上下間の温度差の説明する事実にも遭遇している。

我々が有機材料だけを使うかどうかは温度差の消滅を説明するちょうどその時、我々はすでに上記の間で温度差を説明する事実遭遇して、金属の下で浮上します。

E. そうです、オーゴン-チャージした金属球にスズのホイールが拒絶されるときコルク部分は引きつけらる。

O.

あなたは、正しい関係を確定した。

有機物質は、オーゴンを引きつけ、吸収する。

金属的物質は、それを反射する。

個々の調査結果を通して一見広く異種の事実を関係付けてもオーゴンの機能は、あまり理解できるようにならない。

この温度現象と引きつける力と反発の力の関係は簡単に推測できない。

温度と検電器現象は、一致する：

38

金属は、オーゴンの運動エネルギーを遅らせる。

有機物質もまた、オーゴンユニットを遅らせるが、有機物質の吸収効果で、ほとんどこれは完全に打ち消される。

ちょうどどんな運動エネルギーも遅れる時に熱が発生するように、金属的物質によってオーゴンの運動エネルギーが遅れるとき、熱として表れる。

それは装置の金属表面より上の温度が内部より熱が高い明確な理由であり、そして、アキムレーターの両方とも制御温度計より温度が高い理由です。

E.

私は、地表面より上でこの実験を繰り返すつもりだ。

私は、地上に装置を置き、その上の辺りの空間の温度を測り、それを日陰の気温と比較する。オーゴン温度計の先端は、日陰にある。

O.

もし日なたの気温と比較しても、基本的な数値は同じです。

E.

戸外の地面より上のオーゴン温度計は、日陰の気温と比較しておよそ 8 度、日なたの気温と比較しておよそ 10 度の違いを示す。

言い換えると、 $T_0 - T$ の温度差が常にある。

これは、本当に爆弾です：

明かに熱とは常時関係していない、一定の温度差！

O.

それは、正しくない。

太陽放射のそばに熱はなく、人工的な熱源もない。

もちろん、熱源がなければならぬ、そうでないと、不可能な永久運動の原則を発見して、我々自身がおかしくなる。

温度差の熱のもとには、金属によるオーゴン放射の遅れである。

我々は、人工的なものとか、機械的、化学的エネルギーを使いません。

装置の中のオーゴン放射による運動エネルギーを遅らせる金属によるエネルギーの消耗は、単に材料抵抗の存在で発生する受動的な性質のものです。

流星が地球の表面に落ちるとき、同じ種類のメカニカルな受動的エネルギーが消費され、光と熱をうむ。

オーゴン・アキュムレーターの高い温度差は、空中のエネルギー粒子の運動エネルギーによる。

39

オーゴンの運動エネルギーが、遅れる際に消費され熱に変わります。

しかし、実際的な話しではオーゴンの無限に利用可能な量があるが、熱に変化するエネルギー量は取るに足りない、これで観測者は「無から」の永久運動の熱発生という印象を持つ。

オーゴンの観測で、この事実は常に説明が困難になる。

温度差を見る際、任意の解釈を準備する以外は、観測者は常に熱源を探す。

かつて、私が単純な木と金属層のキャビネットの生物学的影響を示したとき、オブザーバーはワイヤーと電気的な接続なしではその効果が理解できず、隠されたコードを探し始めた。

時間と経験のみが、オブザーバーにオーゴンが至る所で存在するという事実を知らせ、特

定の方法で集中することができ、物理的、生物学的効果を高めるという事実を知らせる。

E.

これらの事実は、素晴らしい。

あなたの解釈は、単純でもっともに見える

ただそれは理論的に考え抜いて作り出してはいないと私は思う。

O.

確かに。

それは、骨の折れる不断の長年の観察と、数えきれない小さな調査結果を関係させて、理解することで作り出した。

全て特権的な人々は「傍観者的な批評的態度で、あれやこれやの孤立した発見を見て、すぐに、突飛な解釈または言葉でそれを処分しようとする。

著名な物理学者は、金属上の温度がより高くなければならないのは「全く自明のことだ」と考えた。

しかし彼が説明できなかつたのは、「全く自明のことだ」。

E.

あなたは、私に面白い経験を話した。

O.はい。

私は、1939年以降、地階の研究所で温度差を観察してきた。

明らかに壁からの、そして、部屋の物体からのオーゴン放射があまり強いから閉鎖された部屋では1.5度C.よりめったに高くはなりません。

私は、権威ある偉大な数学的物理学者に、私の発見をみせた。

その時、私は大気のオーゴン・エネルギーを発見してすぐだったので、戸外での温度測定の結果を得ていませんでした。

参照 アインシュタイン事件、オーゴン研究所広報部、1953。

40

物理学者は、5時間の会話の間、根気よく私の話を聞いた。

私のアキュムレーターの表面の温度がその内部より数度高いという事実を、彼はありえないといった。

そして、彼は断言した、

あなたのいった装置の中と部屋の中との温度の違いが本当ならば、「爆弾のように人を驚かさず。」彼は数週間それを観察ができるために、装置を置いておきたかった。

私は地階の彼のテーブルの上に小さいものを置いた。そして、部屋の同じ高さに温度計をつるした。

私がそこにいる間、彼は温度差を確信した、そして、彼はそれから2週間にわたって常時温度差があるかどうか観察した。

もし温度差の存在を確かめることができたならば、オーゴン研究を支持すると私に約束した。

彼はそれを確かめた。

それから、彼はアシスタントを呼んだ。

アシスタントはすぐに「説明を見つけた。」、彼は「部屋の天井からテーブルの上に向かう熱の対流による温度差」と考えた。

彼の解釈は不合理であっても、彼は当然誠実な実験によってその正当か無効かを確かめようとした。

彼は、テーブル表面より上においたオーゴン温度計と同じ高さに制御温度計を置かなければならないだけのことでした。

これにも、温度差が存在し、彼の考えは誤っていることが明らかになった。

彼の責任者は、わざわざ装置を分解して、テーブル表面の上下の温度の差を見つけようとした。だがこの現象は、私には有名でした。

それは、テーブル表面の下側が地上からのオーゴン放射を遅らせることで説明され、装置表面の温度には関係しない。

たとえ部屋の天井からの熱の対流を、中断させ、木のテーブルの表面を金属に取り替え、問題点を除去しても、To-T現象は、まだ存在し続ける。

しかし、これらのちょっとした操作は、権威者に期待されていませんでした。

もちろん、最も単純な手順は我々がちょうど戸外の計測でしたように部屋に存在するかもしれない全ての熱の影響を除外する。

これは、テーブル表面と同様に天井も除外する。

E.

このアシスタントの浅知恵は、素晴らしい。

結局、それはこの「爆弾」のような驚くべき現象を扱う方法ではない。

どのように、それをしたのか？

O..

通常通りだった。

私は戸外での測定によってアシスタントの解釈を論駁した、そこでの、現象はより強く、反論は出来なくなった。

私は物理学者にこれらの新しい測定数値を提出したが、彼は決して応答しなかった。

私は、これを決して理解出来なかった。

しかし、この私の仕事とその発展をよく理解していた人が私の調査結果の正しさを納得したという感覚を決して失わず、単に、離れ、待とうとした。

E.

それは、あなたの痛手になったはずだ。

O.

それは、そうでした。

それは、私より強くない他の人々によってなされる多くの小さなまたは大きな、新しい発見が、このような盗まれるだけの処理方法で、処理されてきたことを私に、考えさせた。彼が **orgono-**スコープを通して見たとき、この物理学者はすぐに放射を見た、しかし、後で、彼の主観的な目の現象と放射を区別することが全くできないと考えた。

ガス（例えばアルゴン）の **orgonotic** な **lumination** を、まだ私は知らなかった。

E.

それは、危険な状況でした。

あなたの仕事は、簡単に破壊されたかもしれなかった。

O.

いいえ、否定的反論への私の反証は明確だった。

それに加えて、あまりに多くの現実的に証明された事実があり、オーゴン物理学なしにはあまりに多くの埋めることのできない物理学の隙間がある。

E.

あなたはいわゆる「黒体の放射」、との関係を見つけたのか？「黒体」は白い物体によって反射されるスペクトルの全てを吸収する。

地球は、たぶんあなたの装置で吸収される熱を含む。

O.

この異議を論駁するために、あなたも知るように、全てのオーゴン箱は、外部を白く塗っている。

E.

あなたのオーゴン・アキュムレーターは、太陽と地球の熱を説明するようだ。

オーゴンが物質の崩壊から生じたエネルギーとするならば；さらに、オーゴンの熱はオーゴンの運動エネルギーを遅らせることで生じる；

それから、物質の崩壊から生じるおよそ 6000 度 C.の温度の「オーゴン熱」で、太陽の熱は単に説明することができた。

我々の土の中の小さなオーゴン・システムは、簡単に 10 度 C.の「オーゴン熱」（すなわち **To-T**.の違い）を生じまる。

これらの事実に基づくと、太陽熱は、もはや謎ではない。

地球の内部に起きる熱もまた、理解できるようになる。

地球の内部が「白熱の材料から成ると仮定する。」、地球の内部の熱は単に燃焼熱であるはずはない、なぜならば、化学燃焼は莫大な酸素の量を必要とする。

この酸素が空気からとられるならば、利用できる供給はすぐに使いされ果たされるでしょう。

さらに、我々は地球の内部を大気の酸素にアクセスしない静かな地域と見るかもしれません。

地球の内部は、白熱の未定義物質である「マグマ」から成る、。

その存在は、2つの理由から疑うことができません：

第一に、温度は地球の内部の方へいくにしたがって、深さ 30 メーターごとにおよそ 1 度 C.上がる。

第二に、我々の惑星の起源が星の白熱の材料からだとする地質学的説明がもしも正しいなら、地球の内部は、光り輝かなければなりません。

我々が化学燃焼を除外しなければならないので、我々は地球の内部が、オーゴン熱を起こすことでオーゴン・エネルギーを高めていると仮定できるだけだ。

最後に、これらの事実に基づいて、この過程のメカニズムがどんなにまだ不明瞭でも、太陽が地球に送るものは、熱でなくオーゴン・エネルギーだ。

また、太陽から地球への熱放射の直接的な伝送は、ほとんど絶対ゼロ度の宇宙と相容れない。

E. これは、オーゴンと光の関係の問題につながる。

あなたの実験は、手掛かりを提供したか？

O.

観察はそのような関係の存在を示す、しかし、私は何もそれについて言う準備ができていない。

光が電磁波と同一だという事実は、実験的にまだ未解決なもう一つの疑問に関係する。

波の運動は、常にそれが起こるのを可能にする媒体を必要とする。

空気のない音波も、水なしで波は考えられない。

波が動くには、媒体が振動しなければならない。

私の知る限りでは、誰も太陽から地球へ光線が何の媒体の中で動くか説明していない。

光の性格をもつ電磁波、すなわち、光の伝送の事実は、疑うことができない。

しばらくの間、オーゴンが光の電磁波が振動する媒体だと仮定しなければなりません。

これは、正当な仮説です。（「いいかげんな」ものではない）

電波の運動は、また、オーゴンのものとされる。

E.

この問題を決定するために、いわば、「オーゴンの橋」が太陽から地球まであるかどうかに関係なく、オーゴンが地球の空気を越えて広がる方法を人は知らなければならない。

太陽と地球の近くに介在するスペースの中のオルゴンは非常に濃いかもしれない。

光波を運ぶ媒体がそれである可能性を決して除外しない。

この考えは、光の媒体が最終的に理解されるかもしれない基礎を提供する。

O.

アレニウスは、太陽から地球まで、そして、宇宙へそれを越えて広がる円錐を仮定した。

この円錐は、十二宮の光 **the zodiac light** にも関係するようだ。

それは、「物質の粒子から成ると考えられた。」

あなたが **orgono** スコープを通して見るならば、あなたは動く光の粒子を見る。

鮮明な理解に到達することは、難しい。

我々は、しばしば後で誤りだとわかるかもしれない我々の知識の隙間を、見せかけで、満たすことを強制される。

オーゴンが動くことは、明らかに確定した事実です。

、空で、そして、物の上でゆらめく際にこの運動が見られる。

確かに、オーゴンは水たまりの中の水のようにじっとしていない。

さらに、運動はリズムカルなパルゼーションの性質（再び波を思い出させる）をもつようです。

orgonoscope で、我々は動く光の粒子を見、そして、オーゴン熱は明らかに、このオーゴン運動を機械的に遅らせることによって発生する。

良い望遠鏡は、わずか 60 倍の拡大でオーゴンの海の波状運動を鮮明に見せる。

E.

E.

私は、温血動物に、通常空気の温度より高い体温の動物を思い出す。

あなたが特別な分野から他の分野に急に変わることを気にしないならば：動物の体熱も、オーゴンの熱か？

O.

オーゴンが宇宙的な宇宙エネルギーなら、我々の議論が 1 つの専門分野からしばしば急に他の領域にいかなければならないことは、驚くべきではない。

あなたの言うことは、正しい。

有機体は、オーゴンを含む。

体の中には何度も数えきれない場所でオーゴンが遅れる恒常的運動がある。

これは、動物のオーゴン熱が起きる方法です。

動物熱の発生の問題は、このように単純な説明を見つける。

もし強烈な効果があるならば、多くのオーゴンの動きが、遅れる。

従って、より多くの熱が、起きる。

有機体の中の熱発生量は、太陽熱の発生と同じ法則に従う。

なぜ生命が太陽に依存するか、理解できるようになる。

両方のシステムは、**orgonotically** に機能している。

両方とも「**orgonotic** なシステム」の形態です

E.

私は、今オーゴン熱現象の爆弾が初めて爆発したと思っている。

O.、最もシンプルなもの常には最も驚くべきものです。

理論的に実験的にオーゴン物理学の基礎が確定される前に、生物学的オーゴン現象を理解

しようとすることは、早すぎるし、有害です。

orgonotic なパルゼーションの原則は生命の領域に由来するが、それが生命の理解のために利用されることができる前に、それは自然の非生命の領域で確かめられなければならない。我々が用心深く進まない限り、形而上学的にオーゴンを考える神秘主義の誘惑がうまれて非生命の自然と分離させ、それらの人は自然科学の見地から理解しない。そして、我々は今、神秘主義より十二分にすぐれたものを持ったと思う。

E.

あなたは、正しい。

あなたは、我々の次の議論のために何を提案しますか？

O.

磁気に関する **orgonotic** な引きつける力の現象。

続く。

Orgone Functions in Weather Formation*

天気とオーゴン機能

私のオーゴン・エネルギーの観察に基づいて話した方向に行こうとしている。

これらを解明する試みは言うまでもなく、気象の問題をとり上げることも、この目的ではない。

しかし、医学的オーゴン療法が大気エネルギー状況に依存するので、必然的に私に気象と天文学的自然の観察を行うことを強要される。

その実際の観察と、この普通には縁遠い分野の科学的説明はわかりにくい。

当然、この事実を単純に無視することはできない。

天気現象を詳細に説明するために、何世紀にわたって考えられた理論範囲を調べることは、ここでは適切ではない。

オーゴン研究が天気に関する慣習的意見とあちこちで衝突することは避けることができず、その基本的に新しい異なる事実に注目するよう仕向ける。

雲の形成と稲妻のような現象は、普通の正と負の電気理論だけで、単に近づくなれば、どれくらいひどく解けない矛盾に巻き込まれるか示すために 1 つの例をちょっと引用させてほしい、そして、この試みを了承したならば、この理論と観察された *orgonotic* な現象を一致させてほしい。

有力な見方は高温の風が、冷えた領域に上がり、空気中には水蒸気が含まれている。

一旦それが冷えた地域に着くならば、水蒸気はとてすばらしい水滴に「凝縮する」と言われる。

これらの水滴は「空気からの陽電気」を集め、雲が作られる。

この結果、プラスにチャージされた雲とマイナスにチャージされた地球の間で緊張が確立し、これら緊張は、稲妻の中で放出される。

オーゴン・エネルギー現象を扱う誰でも、この理論を理解する際に、主に、溶けない矛盾に関係した、困難に直面する。

・初版は 1943 年夏に書かれた。

1946 年夏に修正されて、配布された。

デリクとインジ・ジョーダンによってドイツ語からの翻訳。

42

とりわけ、地球に届かない 2 つの雲の間の稲妻の現象を理論は説明できない。

稲妻に 2 つの異なる源泉がなければならないことは、このあとに続く：

まず最初、稲妻は、プラスにチャージされた雲とマイナスにチャージされた地球の間の電気の放出で起きる。

第 2 に、プラスとマイナスにチャージされた雲の間の、放出で稲妻が起きる。

たとえ我々がこのような複雑な解釈を受け入れるとしても、雲がない場合と、幕電光の現象は不可解なままだ。

雲のない空の広い領域で起こる幕電光の現象を説明するには第 3 番目の解釈が、必要だ。

そして、雲の形成の電氣的理論は、「ポジティブな大気電気」の起源について何も言わない。

空気は最小のフリーの電氣量だけを含む、それは、とても良い絶縁体だ。

それから、巨大なエネルギー量の源泉は、何か — 稲妻閃光において数 100 万ボルトが放出される？

大量の物理学者と天文学者がかかわっても、天気構造の現象は、不可解でしたがって、この主題に関する我々の知識の現在の状態の反映に非常に近いのを我々は、感じる。

たとえばヴァールブルクが彼の実験的物理学に書き込んだように、「実験物理学」(第 24 版、1933、222 ページ)：

「実際、稲妻は電氣的にチャージされた雲（すなわち雷・雲）が放出する電流だ。

地球の表面を覆うこの電氣的なフォース・フィールドの起源が何かは、確実にはまだ言えない：

我々には知られているオーゴン・エネルギーの基本的特性を書ききながら、

これらが天気の現象を説明することができるかどうか見ている。

雨が降る前には、山が透明に、かすみなしで、見え、すぐ近くにあるように見えるという農民の古くからの言い伝えが、ある。

他方、すばらしく晴れた日（その後、雨は続かない）に、これらに全体的なブルーグレーがあらわれ、灰色の「かすみ」の中で、山は青い **Orgone** 機能で覆われる。

43

山は、はるか遠くにあるようだ。

「かすみ」という言葉に我々は、つまづく。

このかすみは、ブルーグレーです。

しかし、水蒸気は不透明で、それが谷の上に早朝、霧として積み重なるとき、外観は灰色

でブルーグレーではない。

我々は、オーゴンがブルーグレーで、水はオーゴンを吸収することを知っている。

遠い山の前に漂う青いかすみはしたがって、オーゴンを含む水蒸気でありうる。そして、それは雨天の始まりの前に消える。

この事実は、electroscopic な放出率に由来する他の 2 つの現象と表裏一体です。

ここに置かれたグラフは、大気のオーゴン・エネルギーのテンションを表し、実際の基本的な 3 種類の変動を表す：

陽がさんさんと降り注ぐ晴れた日が、晴れた次の日まで続く；

晴れた陽がさんさんと降り注ぐ日が雨の日に続く；

雨は降らないが照ったり曇ったりする様々な日が、最終的に 3 日間連続する。

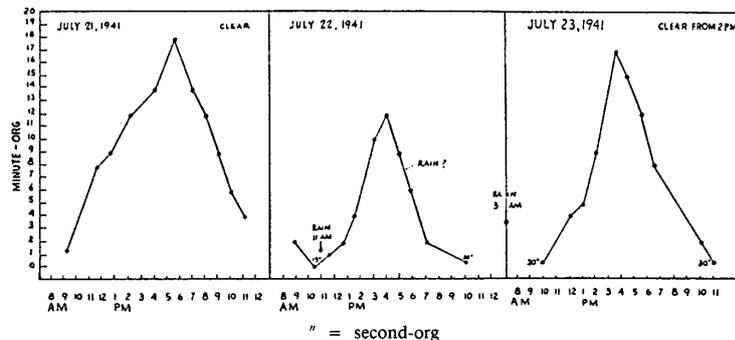
最初のグラフはメイン Oquossoc で 1941 年 7 月 21 日に測定された。すなわち、electroscopic な放出が 5 : 30 p.m. 頃まで多少均一なカーブで増加したことを知ることができたが、これらはますますゆっくりとなった。

5 : 30 p.m. から午後 10 時まで、カーブは均一なやり方で再び下がります、そして、測定が各時間実行されて、electroscopic な放出はわずかに速く起こる。

7 月 22 日と 23 日の天気は、日が照って天気は良かった。

44

両日、カーブのタイプは、同じですが、少量の降水は、7 月 22 日ほぼ午前 8 時 30 分 10 セカンドオルグテンションの短い期間の間に起こりました。



44

second-org

夜は測定出来ないなので、テンションが落ちたことは仮定である。

1 日を通じてオーゴンが大気圏に一様に分布されているのがこれらのカーブから推論できる；

オルゴンの集中に違いが、ない。

他方、毎日のカーブの一定の上り下りは、オーゴンの密度が毎日決まって一般的に増加し、至る所で減少することを示す。

午後 5 時 30 分まで、オーゴン・レベルは大気圏で増え、そして、太陽が沈んで、これらは

再び「もっと下がる」ようになる。

関係するエネルギーが電気なので、

より激しい太陽放射が空中に電気エネルギーの大きい蓄積をもたらすならば、

エレクトロスコープは、速く放出するはずで、正午ごろの温かい時間のエレクトロスコープの放出率の低下は、この見解に反している。

最初のグラフのカーブを説明するのに空気中に含まれる電気量が朝早く、夕方遅くに、最も大きく、太陽が最も強い正午で最も低いレベルに落ちると仮定することはナンセンスである。

他方、これらの数字は、オーゴン・アキュムレーターの内と外で測定されたオーゴンのテンションの差と同じだ。』、空中のオーゴンの集中は、直接太陽放射の強度に関する。

これは、また、地面で測定される温度差 TZ の急増と落下するパンの重さの測定によって確かめられる

第二のグラフは、完全に異なることを示す。

1941年7月16日に、彼らが7月21日にいた時、(メイン) Oquossoc の気象状況は一日中良く、日が照っていた。

しかし、この場合、午後4時までのカーブは安定して増大した後、30分間以内に14ミニッツオルグから10セカンドオルグまで急速に完全に低下するのがわかる。

その後、オーゴンテンションのカーブは、もはやそびえていず、夜遅くまでに10セカンドオルグレベルで変動する。

[ed.]

『オーゴン・エネルギーを蓄えるために金属と非金属の材料の層を交替させて造られた部屋を造る。』

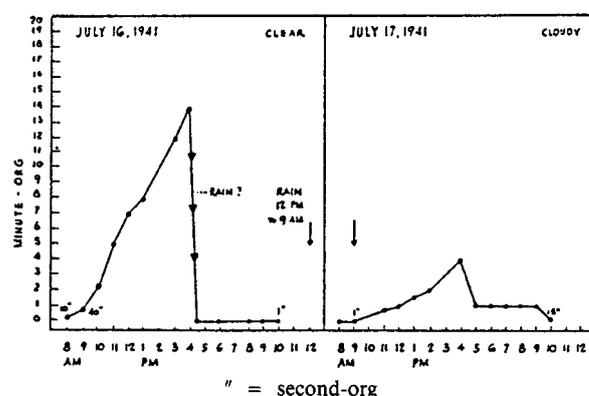
To T は、オーゴン・アキュムレーターと、周囲の大気圏との温度の差を表す。

8時間カーブの中の急落の後、次の日まで続いたシャワーのような一晩中の豪雨が、起きた。

7月17日の午前8時の、大気エネルギーのテンションは、およそ1セカンドオルグだけでした。

午前10時までこの低い集中でいて、それから、午後4時に4ミニッツオルグの量まで上がり、午後5時から9時までに1ミニッツオルグへ落ちた。

これは、午後4時30分ころに、地面の近くの地域の検電器の近くにオーゴン・エネルギーは、見えなくなり、それから、真夜中により高いレベルの局地的集中が再び現れ、嵐の雲



が、チャージされたことを意味します。

空気がクリアになって、最初の均一なオーゴンより濃い集中が再び現れ、これに対応して毎日のより高いカーブに反映する。

19418月1日から3日までの3日連続して照ったり曇ったり天気は交替し、曇った日が優勢でした。

オーゴンテンションの毎日の変動は、不規則です。

各々のケースで、陽がさんさんと降り注ぐ日に起こるはずがないテンションの急落が、一貫してあった。

この低下が起きると、同時にすぐに、雲ができる。

常に太陽が顔を出すわずかに前にカーブは上がり、あるいは、常にすでに空が曇り、あるいは、雲がでてくるとき、カーブは落ちる。

『Izaken と他の全ての人の観察は、これらの全ての現象は1つの解釈だけが適合することを意味している：

大気の下層からの、フリーのオーゴンの除去に伴って、雲が形成される。

46

地球表面の集中が減るので、テンションのカーブはしたがって、落ちなければなりません

加えて、一旦雲ができるならば、それは必然的に太陽から発散しているオーゴン放射を妨げ、それが空気の下層に達するのを防ぐ。

大気にあるオーゴンのテンションのカーブは、こうして低くなる；

実際、それは落ち続けるかもしれない。

しかし、それが、長期のひどい土砂降りの前ほどは、決して低くは落ちない。

風または他の要因によって再び雲が散らばるなら、ほぼ通常の数値に落ち着くまで、テンションのカーブは上がる。

太陽のオーゴン放射は、もう一度大気の層の深くまで入りこむことができる。

大気のエネギーテンションは、増加する。

テンションのカーブの変動の表れ、と雲の消滅の間の、相互関係は、以下の結論を出すことを許す：

雲の発生は、より上層の大気の点に、大気の水蒸気と共に、空気の下層からのオーゴンが集中したことを示す。

より熱い太陽光線は、大気のオーゴン緊張カーブを急速に、前より上がりオーゴンのローカル集中を集中させ、雲が生まれ、雨が降ります。

雷雨が「出し抜けに」発生するとき、これはオーゴンとさらに水蒸気の突然の局部的集中による。

我々は、どんなオーゴンチャージされた材料でもそれを濡らすことで放出することができ

るので、オーゴンが水で迅速かつ容易に吸収されることを知っている。
空中のオーゴン・チャージされた水粒子は、互いの方へ流れ、結合する。
その結果、水粒子は、凝縮して、より大きくなる。
溶解した水分子が空中にとどまるにはあまりに大きくなったとき、雨は降り始める。
夏の暑い日に雲が地球の表面の近くに暖かい空気の層ができ、より高い、「より冷たい」空気の層で水蒸気が凝縮するという仮説は私には誤っているように見える。
本当に、暑い夏の日に登った登山家は 3,000 または 4,000 メートルの高度まで、気温は実際同じままだということを知っており、ちょっとした事で、それは増加する傾向さえある。
他方、雲の多くは大気の下領域でできる。
我々が高い山の頂上に立つとき、はるか下に雲の海を見下ろす。

47

従って、水蒸気の低温での凝結は、雲の形成の原因であるはずがない。
雲に含有された水の中の電気であられることはできない。

雨の水は、全くミネラル塩を含まない;
それは、川と海で見つけられる塩分を含んだ「堅い」水と比較して「柔らかい」。
そのようなチャージは原子がイオンの形で存在できるだけなので、無塩の水の中で電気チャージが集積する方法を想像するのは難しい。
雲の中で水は H と O に分離されず、したがってそれは、電気チャージのキャリアーになるはずはない。
明らかにチャージされた H が O から分離されなければならないので、雲は、「プラス電気」で充電するのは全く考えられない
雨が中立の H₂O から成るので、ちょっとした雨も、ふることはありえない、

最初に、水粒子に電子が付くという仮説は、そうした付着が起きることは非常にありえないので、詳細な研究に耐えることができない;
第二に、そのケースでは、雲の水粒子は、マイナスにチャージされなければならない。
地球がマイナスに、チャージすると仮定された時から、稲妻はなく、これらはプラスにチャージされることもできなかった。
または、分離されていない水粒子に陽電子が付くことがあり得るか?
要するに、雲がプラスの電気チャージを運ぶ全概念は、誤っていて混乱している。
他方、水がオーゴンを吸収するという事実は、そのような矛盾がない。
孤立したポジティブな電気のチャージが分離していない水で起こるという不可能な仮定は、質的に同一のチャージを運ぶ水粒子が互いに引きつけられるという理論に置き換えることができる。
これは、オーゴンの基本的な特性と表裏一体のプロセスです。

各々の雲は、オーゴンがチャージされ溶けた水粒子でうまれ、**organotic** なシステムを作る。
雲は、連合し、一緒に流れ、結合する。

オーゴン・チャージのプロセスで、集中する。

一旦 2 つ以上の雲が結合するならば、密度と大きさの違いは失われ同様なブルーグレーの
大きいか小さいかが違うだけの質量になります。

flashes of light.— 個々の雲のシステムが結合して、稲妻が発されるならば、
雲の海が均一な質量になって、稲妻は徐々に終わる、
すなわち、

光のきらめきが発生する間、互いと結合することができる個々の **organotic** なシステムはも
はや少しも、ない。

厚い、重い暗雲は、空の青さではなく、濃いブルーグレーを持つ。

雲の背後の青い空は実際見えなくされ、我々がそれを見るには雲はあまりに濃い。

雷雲のブルーグレーは、したがって、これらのオーゴン・チャージによらなければなりません。

我々は、現在、理解困難なことは何もなく、幕電光の現象だけでなく 2 つの雲のシステム
の間に起こる稲妻の閃光も理解可能な位置にいる。

雲の水の含有物を地面の上へ空にするならば、オーゴン・チャージは放散される。

オーゴン・エネルギーが空気を通して一様に分配されて、よい気象状況が回復する前に、
強い稲妻フラッシュの放散によって差が均等化されねばならないフリーのオーゴンの集中
が、あちこちに存在しなければならない。

幕電光は、基本的に晴れた夜の暗い空で見える普通のオーゴン・エネルギーの閃光の、と
ても激しい顕れ以外の何物でもない。

特別な状況下だけで起こる、このように独特な別々の現象ではない。

実際、我々は我々がシート稲妻と呼ぶ現象は常に起こっており、しかし、日中と、夜の、
肉眼で識別できないような強度の放散は、それを見るために **organoscope** を使う必要があ
る。

、2 つの雲の間での嵐と稲妻の閃光は、2 つの **organotic** なシステムの間での、互いの接触
での、エネルギーの移動、簡易な均等化として説明できる。

空中に広がる幕電光と違い、雷雨で起こる稲妻の閃光は、オーゴンが空間の単位ボリュー
ムに集中した範囲だけで、シンプルに起きる。

稲妻フラッシュは、非常に小さいスペースの中でオーゴンのとても大きな量の放散と一致
する。

幕電光は、空気の広い領域上でオーゴン集中の違いを均等化することに一致する。

雲と地球の間の稲妻の閃光は、同じ法則に従う：

地球は 1 つのオーゴン・システムで、雲はもっと小さな別のシステムである。

もはや 2 つのシステムが反対の位置にチャージされると仮定することは必要ない。

我々はオーゴンが特性を持っているということをすでに知っている。そして、少量のオーゴンを引きつけることによって大きな集中をつくり、それは他のエネルギーのどのような形態にも見られない。

大きい雲が小さい雲を引きつけると同様に、地球のオーゴン・エネルギーはこのように雲のオーゴン・エネルギーを引きつける。

このように雲と地球の間の稲妻の閃光は2つの雲の間と同様に起こる。

関係するエネルギーの量は、莫大です。

可能な計算によれば、各々の稲妻フラッシュは、何百万ボルトにもなる。

これは、静的検電器で同レベルチャージするのに数百ボルト必要とする量を髪の毛の一回のストロークで、簡単にチャージすることができることを我々に思い出させる。

これは、我々の静的検電器（我々は簡単にそれに我々の髪の毛の一回のストロークを課すことができます）が電氣的な数百ボルト同じレベルをチャージすることを必要とすることを我々に思い出させる。

これらの2つの事実の集合の間に合意が、ある。

雷雨で動いているのはオーゴンで、電気であるはずはない。

雲形成のプロセスは、著しい対照的状态と呼べるような2つの反対方向に機能するオーゴン機能を認めることを教えた。

オーゴンの濃縮、または集中は、オーゴンの希薄化または分離と対比される。

我々は、生命の球で再びこれらの2つのオーゴン機能に出くわす。

THE FORMATION OF THE GAP IN THE ORGONE ENVELOPE OF THE EARTH

地球のオーゴン膜の中の隙間の形成

すなわち、惑星地球のオーゴンの膜と大気のオーゴンの動きは、雲の形成に関係する。

物理的オーゴン現象のデモンストレーションに関する私の暫定的なレポート3で、とりわけ、私は大気のオーゴンの西から東方向への動きを解説した。

この波打つ運動は60から、180倍までを拡大することができる良い望遠鏡で簡単に、観察できる。

雲が西にでき始めるとき、通常西から東への運動は逆になり、東から西まで走って出て行く。Presented in the spring of 1946. 『1946年の春に現れた

この反転でいくつか異なった相がある

50

最初、西から東への運動は減速し、ついに中止し、その位置では、オーゴン運動はもはや見えない。

その後すぐに動きの方向が東から西へと逆になる。

雨が終わって、一旦天気がクリアになったならば、動きはその本来の西から東方向に戻る。

反転方向が数日続くならば、悪天候は常に勝っている、それから、チャージされた相の後、時々西から東に吹きつける強風が続く。

以下の仮説は、最もこの風を説明できるようだ。

明らかに、東に動く部分が西へ動く部分から切り離された点に、「穴」または「隙間」が運動方向の反転によってつくられる。

51

したがって、雨を形成するのに必要な主な機能に4つの事が付随するのがわかる：

1. To T の、温度差の低下；
2. 1セカンドオルグレレベルまでの **electroscopic** な放出の加速；
3. 大気の中のオーゴンの東の方への雲の形成運動方向の反転；
4. 振り子の自然振動の停止；

ガイガー-Miiller の妨害とそれまでの反応の完全消失。

これらの現象は、機能的に関係し、雲の塊で大気のオーゴンを密集化させること結果としてオーゴンの隙間の形成を示す。

私には、現在、問題についてこれ以上言うことは何もない。

しかし、ずっと詳細な研究が気象状況の形成に関して実行されれば、今はドアが開けられていたことが完全にはっきりする。

Cf.

ライヒ *Cancer Biopathy* と *Oranur* 実験。

[Eds.]

E = 東

OE = オーゴン膜

O = オブザーバー

ES = 地球の球

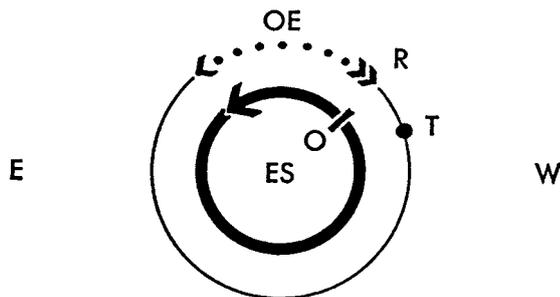
W = 西

R = Reversal to E ~ W

東 ~ 西への R = 反転

T = 雷雲

C このように、オーゴン膜は、西から東へと東から西への方向に分離の間際、オーゴン膜は「薄くなり」減少する。方向の反転は、理解するのが簡単だ。



E = East

OE = Orgone envelope

O = Observer

ES = Earth's sphere

W = West

R = Reversal to E → W

T = Thunderclouds

«.....» “Thinning” of orgone envelope

より強いオーゴン・システムが常により弱いシステムを引きつけるので、雲は周囲の地域からオーゴンを引きつける。そして、より多くの水蒸気が集中し、それによって大きさが

増加する。

「隙間」は、electroscopic な反応によって明かされる。

検電器の放出は 2、3 のセカンドオルグ単位速まる。そして、それはオーゴンの低い集中と一致する。

あなたは、この前夜のシート稲妻が暗室の現象のようだったのを見たか？

突然の光のスパークをともなって交互に長く柔らかい閃光を光らせたこと？

あなたが同じ自然現象を自然の外の研究所で見、観察することは、非常に重要です。

ウィルヘルム・ライヒ

BIOLOGICAL EXCITATION, ATTRACTION, AND LUMINATION DEMONSTRATED
USING THE "DIVINING ROD" AS AN INSTRUMENT OF SCIENTIFIC RESEARCH

生物学的励起（引力）と、LUMINATION は、科学的な調
査器具として「ダウジングロッド」を使用可能であることを
明らかにした

多世紀の間、地面の隠された帯水層または水源の発見は、自然科学の分野で特別な位置を占めてきた。

一方、「ダウジングロッド」の使用は、あざけられ、「物理現象の厳しい客観的な研究者」によってナンセンスで神秘的なもの、または大ぼらとして軽蔑された。

まじめな科学者はダウジングロッドについて、主張したことを、おとぎ話として信じなかった。

他方、農民と鉱夫が水の泉を「不思議な」ダウジングロッドを使って発見してきたのは、広く既知の事実だ。

占い棒は実際問題として「物理学の精密科学」がこれまで達成できなかったことができる、すなわち、それは地面で水を発見することができる。

この事実に対して疑問はない。

それは必要になった時の、実践的な測定結果です（漠然とした理論ではない）。

第一次世界大戦の間、ダウジングロッドは乾いたカルスト台地でよく使用されていた。

第二次世界大戦の間、英国英国空軍は、ダウジングロッドを使って大成功したと言われている。

しかし、ダウジングロッドで泉が見つかる背後に存在する原理とメカニズムはミステリーのまま、大ぼらと神秘的なペテンが含まれると常に思われてきた。

しばらく前に、オーゴン物理学はダウジングロッドの機能を理解する方へ重要な貢献をすることに成功した、そして、今この達成を解説しよう。

私は、ダウザーに Orgononz に来るよう依頼した。

この人には、神秘主義者を示す特別な特徴は少しもなかった。

彼は、ずいぶん昔に農民の妻から技能を身につけた、そして、彼が地下の泉を見つけるために長年の間これを使用してきたと私に話した。

彼は、このサービスのために決してお金を徴収しなかった。

彼は、表面から下、15 フィートより浅いどんな帯水層も見つけることができると主張した。私は彼にテクニックを見せてくれるよう頼んだ、そして、古い井戸のそばの近くに、彼を連れて行った。それは現在は覆い隠されていた。

彼はリンゴの木からのV字形の枝を切って、V字型の先端を上へ示して、手でそれをほぼ胃と同じ高さに持った。

井戸に接近したとき、持ったまま自由に動く先端は体の方へ大きな力で回った。

男が枝を握り保持するのに苦心しているのは、明らかだった。

私は神秘的な何かが起こっているのを感じたと認めなければならず、それが何か、私には理解できなかった。

(メイン)の Rangeley のライヒの家と研究所の領域でどのようにダウジングロッドの枝は曲がったのだろうか。

水に原因するのだろうか？

私の質問に答えて、男は良い結果を得るには木から新しい枝を切らなければならないと述べた。

枯れたような古い枝では、機能しない。

最初、私は枝が水の近くの地面の方から引きつけられたと思った。

これは、後で誤っていることがわかった。

木の枝によって水が見つかる様に見えるがこの間違っただけは現象の神秘的な特徴を、際立たせる。

ここメインで、農民が水を見つけたダウジングの方法を説明すれば、この技術の、宗教的神秘主義的な解釈をより明確なものにする。

研究所の給水パイプが地面に深く埋められた 5 フィートの地域の上を、私はダウザーに歩いてもらった。

パイプが走っている正確な点で、この時、力強くはないけれども、枝は地面の方へ曲がった。

男は、トランスまたはこれに似た状態の兆候を少しも示してはいなかった。

彼は、非常に慎重に枝に集中しているだけだった。

そして、彼は手に占い棒を持って、研究所の近くの土地の上の一部をあちこち歩いた。

特定の点で、枝は地面の方へ曲がった、そして、枝が示す方向に、男は続いて歩いた。

男が持つことがほとんど不可能になるまで、ますます活発に枝は動き始めた。

それから、彼は明るく、言った：

「この地点の 15 フィートの深さ以内に、水がある。確認できるはずだ。」

占い棒はすでに二回も水の存在を示していたので、

私には、今度も同じ様にこの人が正解を出したことを疑う理由はなかった

その時、私は言われたように正確に、私の手に占い棒を持った。

それからアップダウンしている同じ地形部分を歩いたが、私のアカデミックな懐疑論はす

ぐに消えていった。

私の手の中の枝が地面の方へいつもより大きな力でゆっくり回ったことに、疑念は、全くなかった。

私が地面に埋められた水道管を渡って歩いたとき、井戸に近づいたときに、同じことが起こった、ただ、パイプの上のほうが、古い井戸に接近したときの力よりも弱かった。

私は、これがどうして可能か、理解できなかった。

しかし、30分後に、謎は解決した。

私は何度か手順を繰り返し、また、枝の位置を変えてみた。

ダウジングロッドを本来の位置に持ったとき、活発に動いた同じ地点でも、ダウジングロッドを体の側に持つと、反応しなかった。

枝の動きは、したがって、ダウザーの身体の位置と関係があった。

体の側面に保持された時のように、体からあまりに遠い状態で持った時、枝は弱く反応し、あるいは、全く反応しなかった。

胃と同じ高さで持つと、枝の先端の最も強い動きが、私の身に起こった。

この唯一可能な説明は、体の中心自体が枝を引きつけたということだ。

このようにダウザーの水の発見の原因は、枝の動きとは関係がない。

枝は、単にインジケーターとして用いられるだけだ。

問題は、地面で水に反応するダウザーの有機体にある。

この反応によるならば、枝の動く先端が体の方へ、つまり水以外の方へ引きつけられるという事実を、説明する。

これでなぜ枝が地面を示すとき、常に体の内側の方へいき、決して体から離れて外へ回らないか、理解できるようになった。

私は、他の数人のテスター（研究所の研究者）に手順を繰り返させた。

1人のアシスタントは、完全に失敗した。

他の1人は枝を体から外に向かって回転させようとしたとき、手に弱い引く力と、外へ回転することへの抵抗を枝に感じた。

3番目と第4番目の人は枝が引きつけられたとき、両方とも太陽神経叢に変な感覚を経験した。

次の段階で、以下の結論に達することになった。

有機体と水は非常に **orgonotic** であり、2つの **orgonotic** なシステムで、有機体は地中の水の **orgonotic** な刺激に反応する。

orgonotic な刺激は、神経系の **lumination** の特性と同一である。

しかし、**lumination** は引きつける力の機能の発生に伴う。それは、放射している **bions** とオーゴン・アキュムレーターで非常によく知られている。

それは、なぜ枝が引きつけられるかという謎を解決する。

Diviner ダウザー

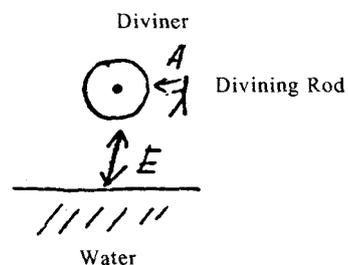


Diagram of how a divining rod functions

Divining Rod ダウジングロッド

Water 水

ダウジングロッドは、どのように機能するかの説明図

A 引きつける力

E 有機体と水との間の刺激

(参照 2 つの手の間を一緒にこすったときの、刺激とか、泉は、犬、馬、その他によって「感知される」)

まとめると：

1.

ダウジングロッドは、水の方へ進まず、ダウザーの身体に引きつけられる。

2. それは、ダウジングロッドでなく水に反応するダウザーの生命有機体に原因がある。

3. ダウザーの反応は生命有機体の身体フィールドの引きつける力の増幅と共に発生する **lumination** に基づく。

4. 有機体と水は、互いに **lumination** に反応する 2 つの **orgonotic** なシステムである。

5. ダウジングロッドを引きつけて、反応する、探査する有機体は、**orgonotically** に非常に強くなければならない。

非オルゴンティックな武装した有機体は、オーゴン・フィールドがあまりに低下しているので、枝を引きつけることができない。

6. ダウジングロッドは、**orgonotically** に強くなければならず、引きつけるためには、生きたものでなければならない。

枯れた枝は、反応を起さない。

私のダウジングロッドの機能の仮説を検証するには、水のないところで、機能が再現できなければならない。

すなわち、私の説明が正しいならば、有機体が強いオーゴンアキュムレーターに接近するか、アキュムレーター内部に座るかして、2 つの **orgonotic** なシステムが互いに接触したとき、**lumination** に基づいてダウジングロッドの動作が生じて、同じ効果が発生する可能性があるはずだ。

私の予想は、確かめられた。

金属オーゴンの部屋に私が入ったとき、枝は私の体に引きつけられた。私がそれに座っていた時、または私が 20 倍のオーゴンアキュムレーターの外部から接近したとき、影響は疑う余地もなく、かなり強まった。

これは、私が既に知っていた **lumination** の主観的な感覚である暖かい波を経験したときはいつも、アキュムレーターの中の引きつける力の効果が特定の強度で現れ、私の解釈の正しさを更に証明した。

有機体の **orgonotic** な力は、オーゴン・エネルギー・フィールド・メーターの電球の **lumination** を使って測ることができる。

白熱フィラメントからの **lumination** は、有機体の **orgonicity** 度に比例する。

ダウジングロッドをもった我々の部下は、手の中のダウジングロッドの引きつける力の強度に完全に一致してオーゴン・エネルギー・フィールド・メーターに最も強い **lumination** が生じた。

私の反応はいくぶん弱かった、そして、ダウジングロッドに反応が起きなかった人は装置に最も弱い **lumination** を発生した。これらの事実自身が正しさを明確に語っている。

ダウジングロッドの現象は、もはやミステリーではない。

その機能は、オーゴン生物物理学の理論と矛盾せず、完全に一致する。

ダウジングロッドによって地下水を見つけることは、自然調査の道具として有機体と器官感覚に、最も明るい光を投じる。

機能を科学用語で定め、説明することは、二番目に重要なことだ。

主なことは、生命体の中の「**orgonotic** な接触」の特性にある。

私は、これで、オーゴン生物物理学が科学的にダウジングロッドの機能を向上させることに成功すると思う。

例えば、**orgonicity** な効果と引きつける力を強めるために、まだ生きている枝をオーゴン水につけるといふ考えが浮かんだ。

結果は、有効だった。

多分オーゴン・エネルギー・フィールド・メーターでダウザーの **orgonicity** を決定し、より反応させるのに用いることが可能だろう。

ライヒは **Orgonon**、の研究所の部屋に造られた『大きなオーゴン・エネルギー・アキュムレーターについて』を言っている。

[Eds.J 『金属的なものと非金属の材料の 20 枚の層で造られたアキュムレーター。

『Cf. オーゴンの発見 (癌 **Biopathy**. 第 1 1 巻) 物理的なオーゴンの物質的な意味。

占いは、もはや神秘的な物ではない。

その機能は、現在ちょうど手の掌のオーゴン・エネルギーフィールドを使用して、**orgonotically** に強い有機体が自由に上に成長している屋内の植物の枝を引きつけることができるという事実とか、大気のオーゴンが湖と海から 1 年に何億トンもの水を引き上げることと、同じくらいよく理解できる。**lumination** と引きつける力の機能関係は、光の問題へ移行する。